PL
833
I5
1931
v.8

Minakami, Takitarō (pseud.)
Minakami Takitarō zenshū

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



水上瀧太郎全集

八巻

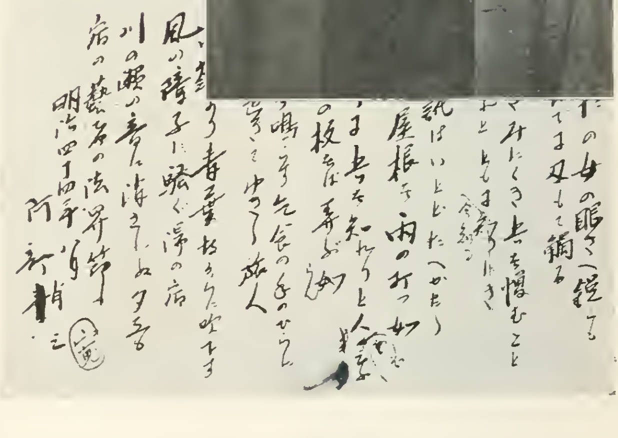
PL
133
E5
1931
V. 8

LIBRARY
SEP 24 1966
UNIVERSITY OF TORONTO

1128138



大正九年九月十九日撮影



「新詩社」時代の筆蹟
（朱筆は故與謝野寛氏）

戲曲·短歌·其他

目次

戯曲

遺稿

戲曲

嵐

人物

主人
妻
主人の母
息子兄
弟
娘姉
妹
別荘番
女中二人

海に近き別莊の一室、西洋間。

中央に圓卓、卓上に洋燈、電燈消えたる心。卓を圍みて椅子三脚、籐の寢椅子一脚。舞臺後方に玻璃雨開きの戸、其兩側に玻璃窓、戸の外、窓の外は廣緣の心。右手に木造の戸。

卓を圍む椅子に母、妻、妹、腰かけ、壁に近き寢椅子に毛布をかぶれる兄橫たはる。弟は母の膝にもたれて立つ。一同寢衣に細帶の姿、弟のみ白き改良寢衣。

窓外激しき暴風雨。不安。長き沈默。

妹「お母さん、海嘯(つなみ)ぢやあないの。あら、浪の音が段段近くなつて來るやうだわ」(立上り窓外を注意す)

妻(同じく窓をふりかへりつつ)「大丈夫ですよ。默つてゐらつしやい。海嘯なんか來るものかね」

妹「だつて來た事もあるんでせう、(突然聲高く)ねえおばあさん、あの大佛樣の御堂が流れたつて云ふのは何年(いつ)頃の事なの」(母無言、聞えざるものの如く動かず)「おばあさんたら」

妻「默つていらつしやい、昔の事ですよ」

妹「今だつて海嘯に變りはないわ」

妻「うるさい人ですねえ、靜になさいな」

一際烈しき風雨窓ガラスに當る。無言。無言は恐怖を誘ふ。姉を先きに女中二人同じく寢衣に細帶。

右手の戸より夜具を運ぶ。

女中「奥樣こちらにお敷きになりますので御座いますか」

妻「まあ其處に置いて行けばいいよ。(女中去る)お父樣は如何なさつたのだらう」

姉「まだお二階にゐらつしやるでせう、ぢいやに盥を持つて來いつて云つていらつしやつたわ」

妹「姉さん、盥を如何するの」(言葉終らざる中、右手より主人)「お父さん」

主人「どうもひどいね、まるで吹拔けのやうに雨が落ちて來たには驚いたよ、しかたがないから盥でそれを受けようといふのだがね、なかなかうまくいかん、方々から漏るのだから」

妻「どうしてそんなに漏るのでせう」

主人「もう屋臺が古くなつたからな。家中で無事なのは新築の此室ばかりだ」

妹、立上り、父そのあとに坐す。姉と妹肩と肩をくつつけて父と母の間に立つ。主人、卓上の煙草を取りて火をつける。

姉「お父さん、大丈夫。海嘯ぢやあなくつて」

妻「大丈夫だつて先刻から云つてるぢやありませんか」

姉「けれども随分ひどい嵐だわねえ」

主人「ひどいとも、風ばかりか、何分この雨だからな。早くをさまつてくれればいいが」

姉「宅は流されちまやあしないでせうか」

妹「心配だわね。お父さん、宅は流されやあしないでせうか」

妻「うるさいねえ、黙つていらつしやいつたら」

稍長き間。風雨烈しく家をゆする。

妹「姉さん。鶏が鳴いてやしなくつて」(間)「あら又鳴いてるわ、如何したんだらう」(間)「姉さん鶏は小舎に入れてあるんでせうか」

妻「鶏なんか如何なつたつていいぢやありませんか」

妹「だつて心配だわ、可哀さうだもの」

妻「騒いでもしかたがないからお休みなさい」

妹「あら次郎さんは居眠りしてるわ」

妻「ほんとにねえ」(姉にむかひ)「美代さん、床を敷いておくれ。おばあさんもお休みなさいな」

姉、室の隅、床の上にふとんを敷き、妻、其上に弟を寢かす。

妻「さあさあ、お前方もお休みなさい」（母の傍に行き耳の邊りにて）「おばあさんもおよつたらいいでせう」

母「いいえ私は眠くない」

妻「でも横におなりなさつた方が」

主人「いや、此の物音では寢られるものではない、早く夜明けになればいいが」（いひながら卓上の懷中時計を見る）「まだ一時少し廻つたばかりだ、女中達は如何したらう、あの雨漏りのする室ではたまるまい。美代。皆此方に來いと呼んでおやり」（姉妹、とうなづきあひ手を取りあつて出てゆく。後から）「おいおい、ついでにウイスキイの瓶を持つて來ておくれ、戸棚にある筈だ」（一際烈しい風の音、ガラス戸の音高く鳴る）

妻「なんてひどい嵐でせう、海嘯にでもなりやしませんか」

主人「そんな事もあるまい」

妻「でも波の音が段段近くなつて來ますよ」

主人「それは耳についたからだ。だがひどい嵐だよ、今朝はあんなにいい天氣だつたのに、見

てる間に曇つてしまつて、夕方俺が散歩に出た時は、もう濱中波が打上げてゐた。海岸の家は危ないな、これでも宅なぞは一丁でも離れて居る丈ましなのだ」

妹、ウイスキイの瓶を持ち、姉、盆に高杯をのせて來り卓上に置く。

妹「お父さん、女中達は皆寢てますよ。盥や桶で、雨漏りを受けながら室の隅つこに床を敷いて」

妻「呑氣ですねえ、よくもそんな中で寢られるぢやありませんか」

主人「晝間の仕事が烈しいからだ」(ウイスキイを手酌で飲む)「一郎を御覽、一日濱邊を駈廻つて疲れてゐるからよく寢てゐる。次郎だつてさうだ。何もしないでぼんやり暮してゐるお前達ばかりだよ、眠れないのは」(ウイスキイを飲む)

妹「だつてお父さんも眠れないつて云つたぢやありませんか」

主人「左様かハ、、、、、」(又酒、間)

姉「暗い洋燈ねえ」(心を出す)「電氣は如何してつかないんでせう」

主人「電線に故障があるからさ、電信柱でも倒れたのだらう」(間)

姉「あら、私忘れて居たわ、お二階に琴を出しつ放しにして置いて、雨が漏るつていふのに如

何しませう。(泣聲)眞暗で私一人ぢやあ行かれやあしない」
妻「琴なんか如何なつたつていいやね、靜になさいな」
主人「ひどく家鳴りがするぢやあないか」
妹「お父さん、大丈夫?」
妻「大丈夫ですつたら」
主人「大丈夫とも、安心しておいで」
妹「でも海嘯が來さうだわ」
妻「海嘯なんか來るものですか、くどいねえ」
妹「だつて浪の音があんなにひどく聞えるんですもの。ねえ姉さん」
姉「ほんとに私も心配よ。もしか浪が宅迄來たら私、如何しよう、私なんか……」
妹「叱ツ、默つて」(耳を傾け)「何か聞えてよ。法螺の貝かしら」
姉「法螺の貝? ほんとに?」
妻「空耳でせう、あんまり臆病だからですよ」
妹「いいえ確かに聞えたわ。叱ツ(窓の方を見る)聞えたでせう、法螺の貝だわ」

妹、姉と共に窓に走る。一同注視す。不安。長き沈黙。かすかに、風雨の間に貝の音聞ゆ。

妹「又聞えるわ。(室内をふりむき)聞えたでせう」

妻「まあ、どうしたんでせう。(立上る)貴夫(あなた)、如何かしたんぢやないんですか」

妹「お父さん」(突然父にすがりつく)

主人、立上り、窓に近寄る。妻従ふ。物音に一郎目覚む。

母「如何かしたのかい」(椅子の肱かけに手をかけて立上らうとする)

主人「なあに、なんでもないんです」

兄「ああ、まだ荒れてゐやあがる」

姉「兄さん」

兄「おや、皆其處に居るのか、如何したんだ」(椅子の上に起上る)「如何したんです、お母さん」

妻「如何したつてお前、此の嵐で寝られるものかね。御らん、宅(うち)はこんなに揺れてるぢやないか」

姉「あら、あれは波ぢやなくつて、ほら、お庭の松の上に白く光つてるでせう」(恐怖)

妹「姉さん、波?」

主人「成程浪だ、海は恐ろしく荒れて居るな。しかし大丈夫だよ、沖が荒れたからつて此處迄浪が來る事はない」

妻「左様でせうねえ、大丈夫でせうとも」(主人、妻椅子に戻る。一郎再び横になる)「一郎さんは氣樂だね、又寢るのですか」

兄「起きて居たつてしかたがない」

母「如何かしたのかい」

主人「なあに、なんともないのです」(思ひ出したやうに酒を飮む)

姉、妹、窓に立つて戸外の闇を見て居る、小聲に何か語る。稍長き沈默。法螺貝近く聞ゆ。

妹「お父さん、又法螺の貝が鳴つてよ、如何したんでせう」(一同或物を期待する如き恐怖)「姉さん、鷄が啼いてるわ、可哀さうだわねえ」

姉「(叱るやうに)靜に。千枝ちやん、何だか變な音がするわ」

妹「あら、水ぢやないかしら」(耳をすます)

妻「何、水ですつて」(立上る。思ひかへして)「先刻から聞えてるぢやないか、雨がこんなに降るのですもの、川のやうに流れる筈さ」

姉　「いいえお母さん、雨とは違ふやうだわ、何だか私、胸騒ぎがしてしかたがない、波ぢやないかしら」

妻　「(高く)波だつて。そんな事はないでせう」

姉　「お父さん雨ばかしぢやないやうですよ」

主人　「よしよし俺が見てやらう」(卓上の洋燈を持ち窓際にゆく)「(突然高く)水だ。波が來た。一郎、水だぞ」(狼狽して漸く洋燈を卓上に置く)

姉妹　「お父さん」(左右より取りすがる)

妻　「貴夫(あなた)。一郎。海嘯だよ」(うろうろして次郎の手をとりて起す)

兄　「(勢よく起上り)何。海嘯だ？」

兄、烈しき力を以て兩開きの戸を風に抗して押開き緣に出る。同時に風の爲め洋燈消ゆ。誰の聲ともわからず立騷ぐ音と共に聞ゆ。

「お父さん」

「お父さん」

「大丈夫だ」

「お父さん」

「早くお逃げ、お逃げ」

「お母さん」

「海嘯」（烈しき風聲）

主人　「（一際高く）靜にしろ、落着いて。暗闇（くらやみ）ではしかたがない。うつかり行くと危いぞ」（椅子の倒れる音、コップの割れる音）

妻　「（引きつりたる聲鋭く）あかり、誰か、あかりをおつけ」

姉妹　「お父さん」

人人闇の中に靜に。風の聲。法螺貝高く近く聞ゆ。

主人　「燐寸（マッチ）は無いのか」（無言）「燐寸は無いのか」（無言）

長き間、物音なく闇のままなり。

窓外に燈火、緣に上る人の足音。やがて玻璃戸烈しく鳴りて風雨と共に別莊番と一郎。番人は手に角燈、雨合羽に頭巾、づぶ濡れ。

室内角燈にて稍あかるし。一同立ちすくめる狀。母一人椅子に坐して合掌して何をか口の中にてつ

ぶやく。姉妹抱きあひて泣いて居る。

兄「お父さん」

主人「大丈夫か、一郎」

兄「大丈夫です。ねえぢいや」（番人頭巾をぬぐ）

番人「旦那様、大丈夫で御座います、もうこれつきり水は來つこはありません」

主人「でも何とも云へんぞ、今の中に山手へ逃げた方がよかあないのか」

妻「貴夫、早くなさらないといけませんよ。一郎はおばあさんを……」

番人「奥様、御心配には及びません、大丈夫で御座います。この風ぢや戸外は反つて危ねえで御座います、水は腰迄あるし」

妻「ぢいや、水が腰迄？（泣聲）貴夫、どうしませう」（姉妹烈しくすすり泣く、次郎母にすがりて聲を張つて泣く）「ぢいや、大丈夫かい」

母「（靜に合掌を解き）大丈夫かい」（誰に云ふともなし）

番人「奥様大丈夫で御座います。此處にゐらつしやる方がいい。何しろ瓦が飛ぶ、木は倒れる、外へ出ると反つて危ねえで御座います」

兄「お父さん、大丈夫ですよ、此處に居た方がいいでせう、とても外は危(あぶな)くつて歩けませんよ」

主人「しかし」

妻「貴夫(あなた)、ぐづぐづなさつてる時ぢやありませんよ」

兄「お母さん、大丈夫ですつたら」

番人「奥樣、大丈夫で御座います、もう風も先刻(さつき)から見れば弱つたし、丁度引潮だからあけ方迄には引きませう、こちらなんか地盛(ちもり)がしてあるから大丈夫なもので御座います」

主人「だが、大丈夫かなあ、どら俺が一つ見て來よう」(番人の手の角燈を取る)

妻「(夫の袖をとり)貴夫(あなた)、危なう御座いますよ」

主人「なあに縁側に出るばかりだ」(兩開きの戸を押して出る。長き間。)

主人「(再び現はれ)大丈夫だ。まだ床(ゆか)には二尺もある」(卓に角燈を置く。)「兎に角洋燈(ランプ)をつけないか」(倒れたる椅子を起して坐す)

番人懐中を探り燐寸を出し火を點ず。法螺の音風聲の中に聞ゆ。

主人「又法螺が聞える、如何したのだらう」

妻「ぢいや大丈夫かい」

番人「あれは消防を集めて居るので御座います。濱の別莊に浪がかぶるのでそれを防がうといふので御座います」

妻「まあ浪をかぶつたの」

番人「はい、先刻方の事で、海岸の方から『助けてくれえ』と云ふ聲が聞えました」

妻「人が死んだのかい」

番人「どうで御座いますか、多分左様ぢや御座いますまい。兎に角『助けてくれえ』と聞えました。それと云ふので、ぢいも出かけたで御座いますが、其時はもう消防が貝を吹いて人を集めて居りました。腰迄水につかつて、あの海口の狹い路に土俵を積んでゐましたが、何分相手が浪だからザブリと一つ大いのが來ると一たまりもないで御座います。ゴオツといふ音と一緒に漁船が浪頭に乘つて打上げられる、とつくに此處らまでも浪の裾は來て居りました」

妻「まあ恐いねえ、だがぢいや大丈夫かい」

番人「先刻からみればもう風も弱りました。潮は引くばかりで御座います」

妻「でもわからないよ」

主人「大丈夫だらう、かへつて戸外は危いよ」

番人「大丈夫、ぢいが受合ひました、どら、もう一遍見廻つて來よう」（開き戸より出で去る）
主人「氣をつけて行け」
妻「洋燈(ランプ)が暗いぢやありませんか」（主人心(しん)を捻る）
主人「まあ皆、此方(こつち)に來るがいい」
妻、不安らしく椅子に腰かけ、姉妹、父母の間に立つ。
主人「一郎一杯飲まないか」
兄「いえ僕は飲みません」
主人「左様(さう)か。それぢや俺が飲まう。おや、高杯(コツプ)が割れたのか」（床の上のガラスの破片を見る。喇叭飲み）「お前は如何したのだ」
兄「僕ですか、僕は誰だか知らないが海嘯(つなみ)だつて云ふから夢中で戸外(そと)に飛出したんです、驚いたのは庭中水になつてるぢやありませんか、眞暗で見當がつかないけれど門の方に渉(わた)つて行つたら丁度ぢいやに合つたんです。『ぢいや』つて云ふと『若旦那如何したんです』つてぢいやが云ふから、僕は『海嘯だ』つて怒鳴つたんです。ぢいやは笑ひながら『大丈夫、大丈夫』つて僕を引張つて家に歸つて來たんです。海嘯だなんて怒鳴つたのは誰だらう」

妻「でもお前、宅まで水が來て居るのだもの、誰だつて驚かうぢやないか」

兄「實際僕も驚きましたよ。しかしもう大丈夫だ。どらもう一寢入りやらう」(衣服を脫ぎシャツ一枚にて窓の隅に積みある夜着をとりて再び寢椅子の上に橫になる)

風勢少しく以前より次第に弱りゆく。

主人「何時だらう」(卓上の時計を見る)「三時少し過ぎた、夜明けにももう間もない」

妻「早くあければよござんすねえ」

姉「お父さん、もう大丈夫なの」

主人「うん、安心しておいで。風も大分弱つたぢやないか」

姉「でも未だ隨分吹いてるわ。浪の音がひどい事、お父さんほんとに大丈夫？」

妻「大丈夫ですつたら、くどい人ですねえ」

主人「皆寢ては如何だ、起きてゐてもしかたがない」

妻「でももう直き夜があけるでせう。」

妹「あら、次郎さんは又寢ちやつたわ」(次郎母の膝にすがりて眠る)

姉「お母さん、大變風の音が靜になつてね、もう大丈夫でせうね」

妹「けれども浪の音は矢張りひどいわ」
妻「大丈夫ですよ、波の音が高く聞えるのは風が静になつたからですよ」
妹「あらおばあさんも居眠りして居る」
妻「静になさい、おばあさんも疲れていらつしやるんだよ、お風邪（かぜ）をめすといけないから美代（みよ）さん、何かかけておあげ」
姉、うすき夜着をかける。突然、開き戸より別荘番出づ。卓上の燈火再び消ゆ。曉方のうすあかり。
番人は手に既に消したる角燈をさぐ。
妹「ぢいや」
番人「旦那様、水も大概（あらかた）引きました。海岸の別荘なんざ、ひどいもので御座いますが、こちらは屋根と廂が少し損じましたばかりで御座います。お庭の松は五六本やられましたが……」
主人「左様か、庭なんかどうでもいい、まあ皆無事だからな。もうそろそろあけるやうだな、お前達もゆつくり休んだらよからう」
番人去る。主人妻、ぐつたりと椅子にかく。
窓外次第に明るくなる。風の音なほ聞ゆ。姉妹、窓近く走りよる。

妹「お父さん、もう雨は晴れたわ、水も引いてしまつたわ、お庭の芝が見えますもの。あら垣根が滅茶滅茶よ」

姉「海は矢張り荒れてるのねえ、あんなに白く浪が光つて」

妹「けれども風は餘程凪いだやうねえ」

妻「(大人の聲は疲勞を帶ぶ)だから私が大丈夫だと云つたのです、若しか、あの時、うつかり戸外に出て御覽な、とんだけがでもして居るんだよ」

妹「けれどもほんとに恐かつたわねえ」

姉「私、もう助からないと思つたわ。あらあんなに人が海の方に行く」

妹「海はどんなでせう、私行つて見たいわ」

妻「氣樂な事を云つてるのねえ、昨夜の事を忘れたの。いくら私が大夫丈だと云つても海嘯だ海嘯だつて騷いだくせに」(主人靜に煙草を吹く)

兄「ああもう夜あけか」(起上る。夜着をきたるまま)

妹「兄さん雨が晴れてよ、水も引いてしまつたわ」

兄「(窓際にゆく)もうおしまひか、濱邊にでも行つて見よう」(一度脫ぎたる濡れし寢衣を着て開き戸

より出で行く)

妻 「一郎さん氣をつけたいとあぶないよ」

妹 「兄さん私もつれて行つて頂戴な」(開き戸をあけ縁に出で叫ぶ)

妻 「いけませんお枝ちやん、女の癖に行かれるものですか」

妹 「(家内に戻り)ぢやあ、お二階に行つて見よう。姉さん一緒に行かなくつて。私一人ぢやあ何だか恐いわ」

姉妹つれ立ちて右手の戸より去る。風益靜になりゆき、戸外殆んどあけはなれたる光り。

妻 「ほんとによう御座いましたね、一時は私、どうなる事かと思ひました。宅の庭まで水が來るなんて初めてですね、ほんとに海嘯かと思ひました」

主人 「俺も心配したよ、何分この人數ぢやうつかり逃げる事も出來んからな。だがもういいさ、人間さへ無事なら安心だ」

妻 「左樣ですねえ、おばあさんもいらつしやるし、女の子もゐるんですし、私は宅や道具なんか如何なつたつていいと思ひました」

あわただしき足音、右手より妹、つづいて姉、戸、開きたるまま。

妹「お母さん。（泣聲にて）鷄は皆死にましたつて。ひよつこも何處に流されたか、わからないんですつて」（すすり泣きて母にすがる。）

妻「鷄なんか如何でもいいぢやありませんか。可哀さうだけれどあの嵐ぢやしかたがない」

妹「だつて、私、可哀さうだわ」（泣く）

姉「お母さん、お二階は隨分ひどござんすよ。雨戸が飛んでガラス戸は割れてゐますし、お琴は紘が切れてゐますし、雨が吹込んだので掛物も屏風もビショ濡れですよ」

妻「しかたがないやね道具なんか。けれども一昨日掛物を取かへさせてよかつたねえ。あのお父樣の大事にしてゐらつしやる蕭白の山水をかけて置いたらとんだ事でしたよ」

姉「お母さん、お二階にはあの山水がかかつてゐますよ」

妻「蕭白の？　そんな事があるものですか、一昨日あんまり風であふるから私が喜代にかけかへるやうに云つたのですもの」

姉「でも私見て來たのですもの。ねえ千枝ちやんあの山水だつたわね」

妹「ええ」

妻「ほんとにあの山水がかかつてゐたかい」

主人「ほんとにか、俺も氣がつかなかつたが困つた事をしてくれたな。（立上り、突然大きく）如何したと云ふんだ」（右手より去る。）

妻「（稍上づりたる調子）私があれ程云つて置いたのに、又忘れたんだね（鋭く）喜代をお呼び」（手をうちならし）「喜代や（疳癪聲にて）喜代や、喜代や」（幕。）

（明治四十四年七月二十六日—二十八日）

夢がたり 評議員會

――明治四十四年十一月三日の夢――

まさ夢か否か知らねど夢なればさはなとがめそ愚しきこと

或學校の出身者の集る倶樂部淸遊社の一室。長方形の卓を圍みて其の學校の校主、評議員、幹事、着席。何れも立派にして不體裁なる洋裝。頭數は十。空椅子あるは用事あり、若くは用事ありと稱して素早く立去りたる者あることを示す。

評議員の言葉は壯士芝居の如くもののし。

○印は皆評議員と知るべし。之は評議員は各自の頭腦より出でたる考へを有せざるがために特に個々の特性を現はす要なしとせしにはあらず、夢のならひとして甲の問なりしや乙の答なりしや目覺めし後、思ひ出でざるが故なり。

○「相變らず用事のある人が多いではないか、吾々も用事の無い身體でもないが」

○「實際ですな。然し元老連に殘つて居られても困るですよ。譯のわからないお談義を長々と拜聽させられるよりは吾々ばかりで迅速に問題を解決した方がいいですからなハ、、、、」

一同、わざとらしく、又他を貶しめ自ら高くしたる快感を得たるらしく笑ふ。

○「時に、中谷は來ますか、大分暇取るが來ないのではありませんか」

幹「いえ、確に參ります、先刻程電話で申付けて置きましたから。然し念の爲め一度掛けて見ませう」

○「君自身行くには及ばんでせう」

幹「しかし兎に角」

無闇にソワソワして室を出て行く。

○「君はあれを讀んだか、『暴風』を」

○「實は未だ讀まないのだが大分非道いさうだね、矢張り自然主義かな」

○「大分どころではない、先づ春畫だね」

○「春畫以上でせう」

○「全體どんな筋なのです、ザット云へば」

○「ザットと云つてなかなか長いから困るが」

○「『××文學』なら此處にありますよ」

○「イヤそれには及ばんです。まあ君ほんのザットだがね、つまり要領は、その、二十四になる迄女を知らなかつた繪かきが宴會の歸りに惡友に誘はれて吉原へ行つたと云ふのだ、ところが

だね、そんな初心な男だから反つてそれが病付きで女郎にはまり込んだと云ふのだ」
○「よくある奴さ」
○「まあ聽き給へ。ところが男は段々身體が衰弱して行くんだ、つまり女の方が強かつたのだね、其處で男は元氣囘復の爲に暫時女から遠ざかつて旅行して來る決心をして北國に向けて出發しようと云ふのだが此處らは一寸不自然だと僕は思ふね」
○「女に負けて高飛びと云ふ段取りですかハヽヽヽ」
○「怪しからん事を書く奴だ」
○「實に怪しからんですな。それから如何するのだ」
○「それから愈々出發する前に男は女に誓つて曰くさ、旅行から歸つて來て又お前に逢ふ迄、必ず貞操を守ると云ふのだ」
○「男がか。苦しい誓言だな」
○「扨て旅に出て追々健康が囘復されると又 Desire が起つて來る、けれども約束の六ヶ月の旅を如何してもやり通すと云ふので寒い冬だと云ふのに靑森迄も歩き廻る、其間に種々の事件があつて、癩病の兄妹とちかづきになり、同じ宿に泊ると云ふやうな事もあるのだ」

幹事ソワソワ戻り來る。

幹「只今再度の電話を掛けましたがもう餘程前に宅を出ましたと云ふ事で、間もなく見えるかと存じます」

○「ヤ御苦勞でした。今『暴風』の梗概を聞かせて貰つとるのですが、なかなか奇抜なものですな」

幹「ハ、、、。奇抜ですか。ハ、、、」

○「結局約束の六ケ月の長旅も終つて東京に歸ると直ぐ吉原に馳けつけて女に逢ふのだ。ところがだね。あまり興奮したものだから其晩、腦卒中で死んでしまつたと云ふオチさ。どうも少し不自然に思はれる」

○「成程奇抜だ、腦卒中で死んでしまふのは面白い。そいつは是非讀んで見よう」

○「面白がつては困るね、怪しからんものではないか」

○「勿論怪しからんさ、しかし奇抜だなハ、、、」

○「兎に角讀んで見る必要はあるねえ」

○「だが一體如何してそんな淫猥なものを雜誌に出したのですか」

幹「それが私の手落で御座いました、まさかそれ程非道いものを採用しようとは存じませんで雜

誌の方の事は一切中谷に任せて置きましたので。それに中谷なぞに云はせますと『暴風』は殆んど論文のやうな書方であるから挑發的ではない、あれで挑發されるやうでは餘程其道に思ひやりのある人にちがひないなぞと申します」

正座にボンヤリ默しるたる校主鈍き聲を鋭くして、

校「淫猥な事を書いて挑發的でないと云ふ事はないではないか」

幹「左様です、實際左樣です。つまりその中谷なぞは……」

校「第一中谷と云ふ男が怪しからん。私はよく知らんでしたが彼の男自身の書いたもので發賣禁止になつたのが二三に止まらんと云ふではありませんか、怪しからん」

○「そんな男を何故學校で傭つたのですかな」

校「何故と云つて。私は始めから不賛成だつたが兎に角文科の隆盛をはかると云ふ諸君の御説でしたので」

○「ですが吾々とてもそんな男とは知りませんでしたが前幹事朝田君の話では餘程しつかりした男のやうに聞きましたし、且又×××に對抗して文科の發展をはからうと云ふ際でしたから」

○「中谷と云ふのは彼の中谷彌一郎さんの息子さんだと云ふではありませんか」

○「親父さんも困つて居られるさうですな」
○「所謂不肖の子でせうな。だが小説の方では大分うまいのではないですか」
幹「その方では第一流ださうです。現にあの東小路侯の風聲會にも出席する程で」
校「私は日本の小説は讀んだ事も無いからうまいかまづいかは知らないが、一體彼の男などは文學に對する考へが頭から間違つて居ます、元來文學は人の品性を高くし精神を娯ましめ之を大にしては社會の平和を助け人生の幸福を增すものだと亡父の『修身訓話』の中にも書いてある通り、亦人間要務の一なのであります。で私なども西洋の文學者の名篇傑作は大分熟讀しまして、大に得るところがありました。然るに現代の日本の文學者などは高遠なる理想を有してゐる者が一人も無い、從つて其の作るものが卑俗です、つまり作者の人格が低いから作品も下等だと云ふ事になるのですな」
○「御說の通りです。大先生の『修身訓話』の如きものが出なくては噓ですな。大先生のお書きになつたものは今日拜見しましても非常に修養になりますです」
○「つまり大先生のやられたやうな文學でなくてはいかんですよ」
校「私は始めからその考へでした。『××文學』なども私はもつと世を益し人を導くものであり度

い。それが發刊後未だ一年にしかならんのに二度迄も發賣禁止の汚名を蒙るとは遺憾此上もありません。三文文士の爲に堂々たる學校の名譽を傷けては默つて居られません」

（校主の談話中案内の少年を先きに「××文學」の編輯人中谷紅雨入來る、日本人には珍しき迄身に適ひたる洋裝。ものごし上品に叮重なり、音聲は低くしてしとやかなれども強し、末席に着く。）

幹「ヤア中谷君」

中「只今。遲なはりまして」

幹「イヤお忙しい處をわざわざ來て頂きまして……。實は、その『××文學』の事で評議員の方々にも種々御說がありまして貴方とも御相談の上今後の方針を定めようと云ふので卽ち先刻程の電話でしたのです」

型の如く立上り

幹「私から御紹介致します。此方が現文壇の重鎭中谷紅雨君で御座います」

○「今晚は御苦勞です」

○「御高名はかねて承つて居ます、誌上に發表なさる御高作にも大層敬服して居ます」

○「いつも御盛んですな、『朝飯前』の氣焰は痛快ですなハヽヽヽ」

中「おはづかしいもので御座います」

○「イヤ、實に感服して居るです、吾々俗務に追はれる者は寸暇を利用して拜見するですが快刀亂痲を絕つが如き筆力雄健なる御文章には俗腸を洗ふ思ひがしますです」

中「なかなかもちまして」

○「實際ですよ、ねえ諸君。中谷君の文章の如きを云ふのだね、人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬ると云ふのはアハ、、、、」

幹「これはうまい比喩(たとへ)ですなハ、、、、」

苦り切つたる校主の顏を見て

幹「ヤ、しかし兎に角、その、中谷君も來られた事ですから校主始め皆樣の御高說を承る事に致しませう」

○「つまり『××文學』が初號以來未だ一年にならないに二度迄も發賣禁止の汚名を受けたに就いて今後如何にすべきかと云ふのですな、先づ校主の御說から伺ひませう」

幹「では校主の御考へを。ねえ、中谷君」

中「拜聽致し度いもので御座います」

校「では私から平生些か考へて居る事を申述べる事にしませう」

待つてゐた如く椅子より立上り、生徒に對する訓示演說の態度を保たんとすれど心中の憤りに心亂るるに似たり。聲震ふ。

校「私は怪しからんと思ふ、不埒だと思ふ、苟くも人を導く可き文筆の士が猥褻なる小說を書き、あまつさへ發賣禁止の不名譽を蒙るとは。殊に由緒ある我校、單に一個の學塾として甘んぜず社會に對し知識の源泉智德の模範を以つて任ずる我校の雜誌として一度ならず二度迄もかかる辱を受けようとは思ひも及ばざりしところで私、ひそかに自己の不明を恥ぢて居る次第です。私は我校を創立した亡父に對し申譯がありません。今にして悔いても及ばぬ事ではありますが『××文學』の初號の裡表紙に亡父の『修身訓話』の中、文藝に關する一節を掲げた事がかへすがへすも殘念です。私は何故最初の發賣禁止の折に雜誌を廢刊しなかつたか、若し當時に於て斷然やめてしまつたならば再び恥を繰返す事はなかつたのでした。それは今日に至つて悔ゆるも及ばん事です、しかし今度こそは斷然廢刊すべきであつて三度かかる汚辱を蒙る事は私の忍び得ざるところであります」

一座を見廻して腰を下す。評議員一同、子供の喧嘩に親が出た如く突然非常なる權幕を以つて論ぜ

られしため思はず呆然として顔を見合す。

○「イヤ、一々校主の御說の通りです、實際我校は由緒ある學校ですからな。汚名を受けたと云ふ事は吾々評議員一同も責を負ふべきです」

○「吾々一同の不明の致すところです」

幹「私が常に最も親しく學校に在りながら、かかる結果を招きましたのは一に私の落度です、」

○「今更それを云つても詮方ないが、校主の御說の如く愈々雜誌は廢刊しますか」

○「左樣ですなあ。校主の御說の通り學校の名譽にはかへられませんから廢刊もやむを得んが然し又一方から考へると折角始めたものをやめるのも殘念ではありませんか。創刊の際には吾々も及ばずながら多少の出金もしてゐるのだし、且×××に對しても失敗してやめるやうでいかにも面白くないではないですか、如何でせう中谷君」

中「御說の通りです、が校主の仰せの如く斷然と廢刊致しますのも結構かと存じます」

○「だが君も大變盡力された雜誌ではありませんか」

中「卑賤の身をもちまして編輯並びに發行人として及ばずながら盡したつもりで御座いましたが、私の不明の爲學校の御名譽を毀損致しましては相濟みませんです」

幹「そんな事はないですよ。專門家と然らざる者とは各々見方も違ふものですから、つまり貴方は健全だと思はれたものでも……」

校「誰があんな小説を健全だと思ふものか」

幹「ハ、、、それもさうですなハ、、、、」

○「中谷君もお忙しい所でツイ精讀のひまもなかつたでせう。過ぎた事はしかたがない、ただ今後大に注意して頂けばいい」

○「だが廢刊すれば其の必要もなからう」

○「イヤ未だ廢刊とは決しないよ。屢々云ふやうでありますが我校は商、法、政治科すべて×××に勝つてゐるのに獨り文科のみが振はないのは遺憾である。『××文學』創刊もつまり文科の隆盛を來さん目的だつたのですから此際斷然廢刊する時は折角起らんとした氣運を挫くやうなものかと思ひますです」

幹「同感々々」

○「であるから『××文學』は其の目的を達せんが爲に缺く可からざるものでありませう、まして『××文學』其ものが悪いのではなく單に其内容の一部をなす小説例へば『暴風』の如きが許す可

からざるものなのでありますから今後其の內容體裁共に大に高尙有益ならしめたならば我校の發展の爲にも大に資する所があらうかと考へますが如何でせう。諸君」
○「つまり面目を一新して大に社會を益すると共に我校の爲にも働かせようと云ふのですな、それはいい兎に角廢刊は×××に對する我校の立場としても面白くない事だからな」
○「校主とてもあながち『××文學』が惡いと云はれるのではないですから有益なものであるならば勿論續けて行く事に御贊成でせう」
校「勿論です。私とても何も文學を解さない男ではない、否寧ろ文學の社會に缺く可からざるものなる事は夙に認め且確く信じて疑はないですが、今迄の如き野卑俗惡猥褻なのでは困ると云ふ丈なのです」
○「御尤もです。それで『××文學』も以後名譽回復の爲に大に活動するのですな」
幹「それは愉快だ。中谷君にも更に大に振(ふる)つて頂くんですね」
中「スルト矢張り雜誌は續けてやりますので」
○「ええ左樣です。要するに內容を健全に有益にする丈の事で發行其他は以前の通りお願ひするのです」

中「健全有益と申しますと如何云ふやうに致しますのでせうか」
○「つまり高尙で讀んで害にならない物にし度いのですね」
中「ですが害にならないで又有益でないものもありませうかと存じますが」
○「さう云へばさうですがね。なあに大體に於いて健全ならいいんですよ」
中「その健全と申しますのが」
○「サア、一口に何んと云つていいか。マアその硬いものを歡迎するんですな」
○「吾々の希望としては論文もあつて欲しいですね、小說は要するになぐさみですが論文となるとなかなか益しますからな」
○「三宅雪嶺の論文は如何でせう」
中「私はツイまだ拜見しませんが結構でせう」
○「新渡戶博士井上博士なぞもいいでせう。福澤桃介君の哲學も面白いぢやないか」
中「すると小說戲曲の類は全くはぶきますのですか」
○「イヤ左樣ではないさ、小說も大に健全なものを選ぶんだね。吾々は門外漢で知らんが誰か居るでせう書ける人は」

○「澁柿園と云ふのが居るさ。愚妻が頻りに愛讀しとるがあれなぞは誰に讀ませても差支へないものだ、たしか作者は文藝院の委員でしたな」

中「左樣です」

○「それぢやあ立派なものだ。芝居なら益田の太郎さんがなかなかうまい、歌舞伎座帝國座なぞで僕も見たが腹をよらされたよ。兎に角小說もいいが自然主義は困るよ、『暴風』のやうな」

○「興奮の極卒中で死ぬのが奇拔過ぎますなアハ、、、、」

○「自然主義つて奴は、一體人に祕す可き事をさらけ出すのが主義なのだから亂暴だね、永々續いてる町田の『侮辱』と云ふのも大分自然主義ぢやないか」

○「自然主義です、ツイ忙しいので拾ひ讀みだが聞けば皆生きたモデルが居て大井と云ふのが町田自身だといふから驚きます」

○「それは非道いね。町田は兎に角人の子をあづかつて教鞭を取る身で居ながら自分のふしだらを小說に爲組んで天下に公表するのは極端だ」

○「町田つて我校の教員ですか」

幹「ハア、文科の講師です」

○「『侮辱』つて云ふのはどんな筋です」
○「なあに單に藝者の張合ひで負けたのが『侮辱』だと云ふんでせう」
○「そんなものかね、一寸見た所では何かしきりに理窟を云つてるやうだが」
○「なあに左樣ですよ、至極愚なものです」
○「だが教師として藝者買の話を書くとは怪しからんぢやないか」
幹「勿論不埒です、斷然今後の掲載は止めませう」
中「けれどももう一月で終る筈です既に原稿も出來て居ますのですが」
校「そんな事に斟酌するには及ばん、かりにも教育家たるものが賤業婦に戯れると云ふ許す可からざる事を、しかも自ら小說に書いて恥ないとはあまり無神經ではありませんか」
○「お說の通りですな、既に內容を選ぶからは一言たりとも醜業婦の事などを書いたものはいけませんでせう」
○「無論さ。學生に讀ませる事が出來んからね、自然主義は全廢々々」
○「一言にして云へば惚れたはれたは一切拔きにするのですな」
中「では戀愛は書けない事になりますが」

○「イヤ戀愛もいいさ、唯神聖な奴でなくてはいけない。汚しいのは斷然排斥する。尤も『暴風』のやうなのは自然主義にも珍しいのでせう」

中「私にはよく解りませんですが『暴風』の作者は自然主義では無いやうに聞いて居ります」

○「然し事實上作品は自然主義ぢやないか」

中「私共は自然派の小說とは思つて居ませんです。自然主義と申しますと……」

校「解つて居ます、自然主義の說明なんか聞き度くないです。兎に角彼等の考へは間違つて居ます、人生の目的は吾人が生息する社會を文明にし開化せしむる事にあるのであつて文學もその目的の爲にのみ存す可きものなのであるから人心を高尙ならしむる事に努めねばならない事は敢て私が繰返すにも及ばんでせう。其點がお解りでしたら『××文學』も今後は有益に、後進子弟の智育德育に資する所があるやう心掛けて貰ひませう。イヤ其の原稿は又適當な人を選んで檢閱する事にしてもいいです。唯貴方は貴方の筆の力で大に天下國家を啓發する文章を發表し、又廣く志ある靑年の手に成つた物を集めて之を世に紹介するの勞を取つて下されば宜しい」

中「では何人かが原稿を御閱讀下さいますので」

○「それは幹事に一任したらいいでせう、それで藝娼妓の事を仕組んだり若い男女のイチヤツキを骨子にしたやうなものはドシドシはねる事にするのですね」
○「子が親の前で讀めず親が子の前で讀めないやうなものは困るからな」
中「ですが世の中の種々の出來事を忠實に寫しますれば汚ない事も實際存在して居ますのですから……」
○「それがいけない。臭い物には蓋と云ふ通り不潔な事はかくす可きものなのは當然です」
○「そして何も知らない年少子弟に惡影響を與へないやうにするのが年長者殊に貴方方文學者の義務でせう」
中「一々御尤もです」
校「では只今私も申したやうな方針で兎に角『××文學』は續刊する事にしまして舊倍の御助力を諸君に願ふ事にしませう」
○「及ばずながら吾々も學校の爲社會の爲盡力致す覺悟で御座います」
幹「ヤ、これですべて圓滑に問題も解決されまして實に愉快ですな」
校「では今晩は散會する事に致しませう。諸君。お忙しい所を御苦勞でした」

幹「御苦勞でした」

○「なに、吾々も一旦肩を入れた事ですから飽迄初志を貫いて雜誌を續刊するやうになつたのは愉快です」

校「それでは御隨意に御引取下さい、私は御先きに失禮」

幹「では私も御一緒に、中谷君、君は」

中「御用が御座いませんでしたら私も參りませう」

○「吾々も行きませう」

○「今日は御苦勞でした」

○「中谷君、わざわざ御呼立しまして」

中「イエどう致しまして私こそ校主始め先輩の方々の有益な御話を承りまして難有存じました」

校主、幹事、中谷及び評議員二三人去る。

○「アア疲れた大分長かつたぢやありませんか」

○「お互に惱まされますな」

○「吾々激務にある者は會議に出て堅苦しい議論を聞かされるのは苦痛だ、すつかり頭が變にな

ってしまつた」

○「殊に文學は門外漢だから困るですね」

○「實を云ふと『××文學』なんか一度も讀んだ事が無いのだからなアハ、、、、」

○「お互様さ、どうだ一杯氣つけをやつては」

○「悪くないね、久しぶりだ是非一緒にやらう。諸君如何です」

○「勿論雙手を擧げますが此處で飮んだ所で始まらないぢやありませんか、何處かできれいなのを前にして厄拂をやらうぢやありませんか」

○「贊成贊成。眼の養生も望む所ださう云ふ事は早い方がいい。どうです諸君」

○「異議なし。異議なし」

同音に贊成の聲を高くし、旣に威嚴を失ひ旣に平民の顏つきになりたる一同、入口の扉をあけ後進子弟は未だ知らざるきれいなのを見んが爲に足取も若々しく勇しく出去る。

(明治四十四年十一月五日)

いたづら

人

子　　　供

黑い袴の女の先生

小使の老人

女生徒多勢（便宜の爲め一、二、三、四、五、六の數字を以て區別す）

場　所

岡の上に建てる宗教女學校の會堂

舞臺の上手に集りの日には說敎などをする爲の壇がある。それにむかつて粗末な腰掛が列をつくつて並んでゐる。壇の側にはオルガンが置いてある。壁は白壁で、その面上にキリストがいぢめられたり苦しんだりしてゐるいろんな繪の額が掛けてある。床は板敷。

正面に壁を四角に切開いたやうな入口がある。その兩方に開く木造の扉は大きく外に開かれてゐる

心。入口の外は左右に通ずる廊下。廊下を距てゝ別の室の外の壁が見える。室内の壁にはガラス窓がある。上手にも、下手にも、入口の左右の壁にも。窓は上手と下手のが高く大きい。上手の窓の外は空地で、やがてその空地の盡きる所がこの學校の建つてゐる岡の盡きる所である。而してその崖の下には町があるのである。下手の窓の外は少しばかりの植込みがあるばかりで直ぐ塀になる。塀の外は往來。この下手の窓丈はガラス戸がすつかり閉ざされてゐなくてはこまる。時刻は夕方に近き時なり。

暮のあかんとする時、既にオルガンの音と讃美歌の聲と聞え初める。その間に靜に舞臺が現はれてくれなくてはいけない。

再び主エスのくだります日
めさるる幼子みくににて
みそらの星とかがやきつつ
主のみかむりのたまとならん
いやしき心のなき幼子
みくらのたからにかぞへられ

みそらの星とかがやきつつ
主のみかむりのたまとならん

女生徒二人。一はオルガンをひきつゝ、二はその側に寄添つて立ち、このうたをうたつてゐる。うたひ終るとオルガンをひいてゐたのは立上つて、二人無言で暫時手を取り合ふ。廊下より女生徒。

女生徒三。杉中さん、私、お邪魔したんぢやなくつて。(笑ひながら)
女生徒一。あら如何してでせう。
女生徒三。だつて折角お二人ツきりで、しんみりお話をしてゐらつしやつた處ぢやありませんか。
女生徒一。いやな山本さん――ねえ吉川さん。(女生徒二。默つてうなづく)
女生徒三。駄目よ、駄目よ。何んてつても駄目よ。私、ちやアんと知つてるわ。
女生徒一。何を知つてらつしやるの。御自分一人で勝手にきめてらつしやるんだわ。
女生徒三。杉中さん、そんなに怒らなくたつていゝぢやありませんか。――たゞ私ね、此頃貴方と吉川さんのリボンが何時でもお揃ひでうらやましいつて云ふだけなのよ。(云ひつゝ女生徒一、の背中を叩いて笑ひながら逃げてゆく)

女生徒一。いやな人。自分こそミス・ルースに大熱のくせに。――(女生徒二、にむかつて)だけどもお千代さん、貴方、私の爲めにいろんな事云はれていやでしよ。(相手の肩を抱いて一緒に腰かけに並んでかける)

女生徒二。エヽ、だつて皆さんがからかふんですもの。

女生徒一。ソウ、お氣の毒ね。私は貴方の爲めになら、誰になんといはれても構はないと思つてるんですけれど、貴方はもう私が厭になつたのね。

女生徒二。アラ、私、左様ぢやないわ。でも……。

女生徒一。でも如何したの。皆にからかはれるから厭だつて云ふんでせう。

女生徒二。左様ぢやないのよ。それやアからかはれるのは厭には違ひないけれど……。

女生徒一。だから厭になつたんでせう。

女生徒二。(暫時答にこまつて)でも私、何んともないの。貴方さへ私を――アノ――何時迄も變らないなら。――氣を悪くしないで頂戴な、ね、杉中さん。

女生徒一。(微笑しながら)ホラ又杉中さんて云ふのね。私、知らないわ。

女生徒二。御免なさい。皆さんの前で云ふ時の癖が出て了ふんだわ。御免なさい――姉さん。

女生徒一。（大げさに嬉しさうに）お千代さん。（云ひながら抱合つて接吻する）

　運動場の方に聲を揃へてうたふ唱歌が聞える。

女生徒一。お千代さん、又誰か來ると惡いから彼方に行きませう。いやだけれど、皆と一緒に遊びませう。（女生徒二、うなづく）

　二人手をつないで出て行く。暫時舞臺に人無し。たゞ若き女の入りまじりたる叫び聲遠く聞ゆ。

　廊下の奥の方から二三人の聲で呼ぶ。

杉中さん。

　女生徒三、を先きに四、五、六、入來る。

女生徒四。オヤ、誰もゐないぢやありませんか。

女生徒三。如何したんでせう、今迄二人とも此處に居たのに。（あてもなく室内を見廻す）

女生徒五。ゐなくちやア、つまらないわ。山本さんが、皆でからかつてやるからいらつしやいつて云ふんでせう。私、折角讀みかけてた小說をうつちやつといて來たのに。

女生徒六。ほんとにつまらないのねえ。

女生徒三。如何したんですよ。確に此處に居たんですよ。二人つきりで。斯ういふ風にして。

（女生徒五、の側に寄添つて手を取る）

女生徒四。隨分だわねえ。

女生徒五。（女生徒三、の手を振放して）私、杉中さんが居ないのなら彼方に行つてよ、こんな事しちやゐられないんだわ。机の上の小說を、又先生に見つかつて叱られると大變だわ。（云ひ捨てゝバタバタ足音を立てゝ廊下を走つて行く）

女生徒三。お待ちなさいつてば。いゝぢやありませんか。（一寸戸口迄追ひかけたが、見送つて又戻る）――島野さんは隨分小說が好きね。行李の底に澤山かくしてあつてよ。先生に知れないやうに讀んぢやアしまつて了ふんですつて。私も借りて讀んだの。「琵琶歌」「己が罪」なんて隨分可哀さうだつたわ。私、其の時島野さんと一緒に泣いちやつたの。だけども、後で考へたら可笑しくなつて笑つてしまつたわ。

女生徒六。私も先の頃は隨分好きだつたの。うちの兄さんが文科に通つてゐて、それは大きな本箱に小說ばつかり。――お友達の中には、もう、かなり有名な小說家になつた人も居るのよ。だけど私は小說家は嫌ひ。だつて小說家は皆品行が惡いんですつてね。

女生徒四。如何してでせう。

女生徒六。如何してだか知らないけど、兄さんなんか「文學者はあれでいゝんだよ」つて云つてるんですよ。

女生徒三。ぢやア貴方のお兄さんも品行が悪いの。

女生徒六。アラ隨分だわ。うちの兄さんなんかそんな事はなくつてよ。だけどお友達の中には、女の人とばつかり交際してるやうな人もゐるし、お女郎買ひに行つたり、方々でお酒を飲んで借金したりする人もあるのよ。うちのお母さんなんか始終兄さんに云つてるの。「あんな人達と交際つてゐると、お前も今に碌な者にならない」つて。

女生徒四。隨分ねえ。それなのに島野さんは小説家か理想なんですつて。オオ厭だ。(故意に身震ひして見せる)

女生徒三。だから先生が小説を讀んぢやアいけないつて云ふのも無理はないわねえ。此間も島野さんは舎監室に呼ばれて叱られてよ。

女生徒四。どうして。

女生徒三。どうしてつて、矢張り小説を讀んでゐる處を見つかつたんだわ。「破戒」つて、それやア可哀さうなんですつて。島野さんは讀みながら泣いてゐたわ。すると不意に高木先生がお室

に見廻りに來たんでせう。島野さんがあわてゝ机の下にかくさうとするのを、取上げて「島野さん、貴方はいくら云つてもわからないんですね」つておつしやつた時は高木先生のお聲も震へてゐたことよ。それから無理に机の曳出をあけて探すと、又一冊別の小説本が出て來たんでせう。島野さんは泣出してしまつたの。その本と云ふのがいけないものなんですつて。發賣禁止の本なんですつて。

女生徒四。發賣禁止？　何んていふ本？

女生徒三。何んて云ふんだつたかしら。私も忘れちやつたわ。だけど惡い事が書いてあるんですとさ。

女生徒六。どんな惡い事。

女生徒三。どんなつて。私も後で島野さんに聞いたんだけれど——それやア非道いのよ。私だつて、そんなもの讀んぢやア惡いと思つたんですもの。

女生徒六。そんなに惡い事が書いてあつて。

女生徒三。エヽ、だけど私にはいはれないわ。たつてあんまりひどいんですもの。

女生徒四。ひどいつて？　お聞かせなさいな。いいぢやありませんか。（女生徒六、にむかひ）ね

え。

女生徒六。エ、ほんとにお聞かせなさいよ。

女生徒三。でも私(あたし)には差(はづ)かしくつて云はれないわ。

女生徒六。どんな事が書いてあるんでせう。――戀(ラブ)の事？

女生徒三。エ、。まあ左様(さう)だわ。

女生徒六。だつて小説は大概戀愛事件(ラブアフエア)ぢやアなくつて。

女生徒三。でもそれが一通りのぢやないんですもの。

女生徒四。一通りでないつてどんなゝの。

女生徒三。どんなつて……(顔を赤くして笑ふ)

女生徒四。厭な山本さん。御自分一人で喜んでゐらつしやるわ。

女生徒三。アラ然うぢやないのよ。だけど。

女生徒六。だけど、如何したの。――おつしやいよ。

女生徒三。それやア非道いのよ。だつて――一人の人が多勢の人とあれなんでせう。それでその人は良人(をつと)のある身體(からだ)なんですつて。

女生徒六。それ丈？

女生徒三。それ丈つて、隨分ぢやありませんか、ねえ眞木さん。

女生徒四。エヽ、島野さんはどうしてそんな本を持つてゐたんでせう。

女生徒三。どうしてつて。矢張りお買ひになつたんでせう。だけど高木先生に見つかつた時は眞青になつてしまつてよ。「貴方は如何してこんな本を持つてゐます」つて。先生も惡い本だつて事は御存じだつたらしいのよ。「貴方は神樣に對して恥かしいとは思ひませんか」つて。とうとう島野さんを舍監室に連れて行つてしまつたの。

女生徒四。それから如何したでせう。

女生徒三。餘程經つてから島野さんは、泣きながらお室に歸つて來て、夜迄机の上に突伏してゐたわ。（暫時三人顏を見合す。この少々前から遠く寄宿舍の方からかすかにピアノの音が連續して聞えて來る）

女生徒六。さうして其の本は如何したでせう。

女生徒三。高木先生が燒捨てるつておつしやつたんですつて。

女生徒六。あら燒いてしまつたの。

女生徒三。エヽ、けれども島野さんは然ういつてゝよ。「高木先生は燒捨てるつておつしやつたけれども、此間舍監室の前を通る時、何の氣なしに戸のすき間から内を覗いたら机にむかつて讀んでるのが、彼の本らしかつた」つて。

女生徒四。まさかねえ。

女生徒六。けれど、どうだかわからなくつてよ。私高木先生は嫌ひだわ。眞木さんの前だけれど。

女生徒四。いゝことよ。私、なんでもありやアしないわ。(怒つた顏をして横を向く)

女生徒六。(笑ひながら)貴方は何んでもなくつても、高木先生の方で大熱なのよ。

女生徒四。私、知らないことよ。(云ひ捨てゝ出て行く)

女生徒六。(見送つて女生徒三、と目を見合せて互にうなづく)アラ、ほんとに怒らしてしまつたわ。

女生徒三。かまふもんですか。だつてほんとに眞木さんは高木先生のオメなんですもの。此間なんか運動場の隅の藤棚の下で、先生が眞木さんを(一寸相手を抱いて)斯うしてお話してるところをチヤアンと見屆けてしまつたんですもの。

女生徒六。マアほんと。隨分ねえ。(二人とも無言で腰掛けに並んで居る。稍長き沈默。たゞ先程よりのピアノの音のみうちつゞく)

女生徒三。（立上つて）アラ、ピアノが聞えてよ。ミス・ルースが弾いてゐらつしやるのよ。毎日、今時分になると、きつと彼のお室から聞えて來るわねえ。私は窓の下に行つて默つて聽いてゐるの。けれどもミス・ルースは私が聽いてる事は御存じないんだと思ふと、私何時も悲しくなつて來るのよ……。

女生徒六。い丶加減になさいよ。山本さん。

女生徒三。（輕く笑つてからかひ調子になり）あ丶、ルース樣、ルース樣。私のルース樣。（云ひつ丶女生徒六、に近寄つて笑ひ崩れながら抱きついて相手の胸に顏を埋める。再び沈默。ピアノの音のみなほ遥かにゆるく聞ゆ）

突然下手の窓の外の壁と塀とにバラバラと石つぶての音。二人抱き合つたまま立上る。不安。再びつぶての音。同時に聲をあげていたづらつ子の逃げて行く騷ぎ聞ゆ。遠ざかりつつはやす聲、二三度くりかへし。

耶蘇味噌てつかみそ

廊下に足音して眼鏡をかけた、黒い袴の女の先生。子供の腕をつかんで引擦るやうに連れて來る。後からついて來る詰襟の古ぼけた服を着た小使の老人に、怒りに震ふ聲で話ながら室内に入り來る。

先生。……私(わたし)が町から歸つて來て、恰度あの坂を上り切ると、子供が五六人で塀の外から、此の窓に石を投げてゐるのです。私(わたし)が驚いて「お前達は何をするのです」と云ふと、先を爭つて逃げ出したのです。其時逃遲れたのが此の子ですよ――わるいいたづらをして……。

　息切れがして、うまく物を云ふ事が出來ない樣子で、しつかりつかんでゐた子供の腕を放す。子供は物の恐れに泣き度いのをこらへる樣子で、うなだれて立つ。人々の話の間に時々顏をあげて睨むやうに見廻す。

小使。それでも幸ひとガラスもこはれないで宜う御座いました。

先生。然うですよ。ですが若し私の來やうが、もう一寸でも遲かつたら、きつとぶつけられたに違ひないんだよ。なんぼ子供だからと云つてあんまりです。

女生徒三。先生、石をぶつけに來たのは、その子ばかりぢやないんですか。

先生。エ、ほかにもう四五人居ました。もつと大きい子供もゐたのですが眞先きに逃げてしまつたのです。――(子供にむかつて)お前は他所(よそ)の家(うち)に石をぶつけたりして、惡い事だとは思はないのですか。惡いとは知つてるでせう。知らないのかい。――それでは如何云ふわけでお前達は石を投げに來たのです。默つてゐてはわからないぢやないか――お前は早く自宅(うち)に歸して貰ひ

度くはないのかい。早く歸して貰ひ度くつても、何故いたづらをしたのだか、はつきり云はなければ何時迄經つても歸しては上げないよ。(子供答へず)

小使。先生樣がおつしやる通り、何故石なんか投げたんだか云つておしまひ。それからお許しを願つて、これからは二度と惡いたづらをするんぢやない。——お前は何處の子だい。お前の家は何處だい。

小使の老人の言葉の間に先生は手に持つてゐた本包みを腰かけに置く。

先生。然う默つてゐてはわからないぢやないか。私は決してお前を叱らうとするのではないのだからね。(強ひてやさしい聲になつて)ね。何故石をなげたのです。

子供。(稍ためらひたれど意外に決然として)耶蘇だから。

先生。何ですつて。耶蘇だから?——耶蘇なら何故石を投げるのだい。云つて御覽。——誰かにすゝめられたのかい。

小使。もつたいない事を。神樣にむかつて石を投げるなんて。

先生。神樣、——あの耶蘇に石をぶつけようと、お前自分で考へたのかい。

子供。ウヽン、皆でぶつけに行かうつて……。

先生。では皆で相談したのだね。

小使。皆たア誰だ。何處の子供達だい。――お前の家は何處だい。(子供はかたく脣を結んで開かぬ)

先生。おぢいさんそんな事は聞かない方がいいでせう。(子供にむかつて)けれども、何故石なんぞ投げるの。

子供。耶蘇だから。

先生。だから何故耶蘇なら石を投げるのですかつて云ふのぢやないか。

子供。皆がぶつけようつて云ふんだもの。

先生。いゝえ然うぢやないの。皆が、耶蘇に石をぶつけに行かうつて云つたんでせう。それが何故耶蘇なら石をぶつけるのか、私にはわからないの。そのわけを聞かしておくれ。

子供。だつて耶蘇なんだもの。

先生。まだわからないんだねえ。

ピアノの音は既にやみて、夕方に近き日ざしはあかるく室内に射し入る。この問答の間に女生徒、一人づつ或は二三人づつ何氣なく來ては不思議さうに取巻く。その數次第にふえる。皆小聲にささやいたりうなづいたりしてゐる。讃美歌をうたひながら來たのもある。

西日は次第に赤き落日の色を添へて壁にかゝるキリストの額に血潮をそゝぐ。そのうちに寄宿舎の夕餉の鐘鳴る。

先生。（女生徒達にむかつて）サア、皆さん。直ぐ食堂に行かなければいけませんよ、監督さんが待つてゐらつしやるでせうから。――私も直き参ります。（女生徒數人次第に去る）――（子供にむかつて）お前は耶蘇だから石をぶつけたと云ふけれど、何故そんなに耶蘇はいけないの。耶蘇耶蘇つていふけれど、お前は耶蘇が何んだか知つてるのかい。耶蘇、エス・キリストは神様ですよ。私達の爲めに犧牲になつて下さつた、私達に幸福を與へて下さる、ありがたい神様ですよ。――（殘れる女生徒にむかつて）貴方方もお食事に行かなければなりません。（女生徒すべて立去る。それにまじつて小使の老人も立去る）

遠くの町で子供の聲。

夕燒小燒あした天氣になアれ
夕燒小燒あした天氣になアれ

稍長き沈默のうちに夕日は次第にうすれゆくべし。

先生。お前は神様に石を投げたのは、惡かつたと悔んではゐないのかい。若しも誰かゞお前の家

に、石をぶつけたとしたら如何思ひます。――何んとも思はないかい。（腰かけにかける）

子供。まだ家ぢやア石なんかぶつけられた事はないもの。

先生。いゝえ、若しぶつけた人があつたとしたら。

子供。だつてないんだもの。

先生。サウ、然うでせう。それ御覧。石なんかぶつける人は一人もないでせう。（頗る滿足して）何故ないか、お前にもわかるだらう。それは惡い事だからです。（子供うなづく）他人に迷惑を掛ける事だからです。――人には爲ていゝ事と、惡い事とがあつて、他所の家に石をぶつけたりするのは、その爲てはいけない事なのです。ね。然うでせう。それなのに、お前は何故そんな惡い事をしたのです。

子供。だつて耶蘇だから。

先生。又そんな事を。あゝ如何して此の子は斯うわからないんだらう。（暗くなりゆく窓外を見てゐる）

女生徒二人手をつなぎつつ。

女生徒の一人。先生、監督さんが呼んでゐらつしやいます。一寸來て頂き度いつて。

先生。ハア、只今參りますと申上げて下さい。(女生徒去る)お前は自分の爲した事を惡かつたと思はなければいけませんよ。然うして、今日迄は惡い事をしましたが、これからは決して致しません、心を入れかへて善い子になります、と神樣の前であやまらなければなりません。それから……。(女生徒一人)

女生徒。先生、監督さんが直ぐ來て頂き度いとおつしやつてです。

先生。何の御用かしら。(さきにゆく女生徒の後から)只今參ります。――(子供にむかつて)一寸待つてお出で、直き戻つて來るから。(去る)

たそがれは室の内にも忍び入りて一人殘されたる子供のいたつらの後の心に沁み入る。窓の彼方、空地の下の町には此の子供の家がある。その町には灯がともり、夕餉も終る頃である。

脣を嚙んでこらへたる悔と口惜しさの涙は、強情を張る悲しさ寂しさもまじり、殊に耶蘇に對する不可思議なるものゝ恐れは廣き室に一人たゝずむ子供を全くとらへてしまつた。而してすべてこの靜かなる舞臺に靜に心うつりゆく子供は、はなやかなりし夕榮の後の薄明りの中に立つてゐるのである。更に又壁にかゝれるキリストの額は恐怖を與ふるにあづかつて力があつた。

子供は遂に入口から廊下に出て、ひそかに逃げようと戸口迄走りゆく。出あひがしらに小使の老人。

小使。オヤオヤ、お前は未だ此室にゐたのか。こんなにうす暗いところへ、お前一人うつちやつといて先生は如何なさつたんだ。——お前は未だあやまらないんだな。何故然う強情を張るんだ。そんな事をしないで、先生がいらつしやつたら、早くあやまつて許して頂くがいゝ。お前の家は何處だい。家ぢやア、お父さんやお母さんが待つてゐるだらう。もう二度と悪いたづらをするんぢやアないぞ、いゝか、わかつたかい。まだお前はわからないんだな。お前の家は何處だ。お前のお父さんに然う云つてやらう——お前のお父さんは何をしてゐるんだ。

子供。お父さんはゐないの。

小使。お父さんはゐない？　何處かに行つてるのかい。(子供首を振る)それぢやア死んぢやつたのか。(子供うなづく)然うか。それぢやアおふくろがなほさら心配してゐるだらう。おふくろはお前がいたづらして、こんな所に止められてるとは知るまいから、さぞ待つてゐるだらう。(子供何時しかシクシク泣き出す)——ヨシヨシ、俺が先生様にあやまつて、今日のところはもう歸してやらう。泣くんぢやないよ。一寸先生を呼びに行くから。待つといで。(出てゆく)

子供はすゝりあげすゝりあげて泣いてゐる。その泣聲の外に聞えるものもない。暫時後。女の先生をさきに小使の老人從ひて足早に入來る。

先生。（子供の肩に手をかけて）一寸用事があつたのでツイ遲くなつていけなかつたねえ。さあもう泣かないでね。お前の爲た事が、惡かつたと氣がつけばいゝんだから、これからは善い子になるのですよ。――人は誰だつてあやまちはあります。けれども神樣にお縋りして、そのあやまちを悔い改めれば、淸い人になれるのだからね。いゝかい、わかつたでせうね。（子供うなづく）

小使。先生。だいぶ暗くなりましたし、それに、きけばこの子には父親もないさうですし、おふくろが一人で待つてゐませうから、今日は叱らずに歸しておやりなすつて下さい。（自分の事のやうに頭を下げて云ふ）

先生。エ、私は決して叱りはしません。たゞ耶蘇耶蘇つて、いかにも惡い事のやうに思つてゐるのが、いくら子供だといつても敎へ導いてやらなくてはならないと思ふのです。――この子にはお父さんはないのですか。

小使。へエ、死んだのださうで。

先生。マア可哀さうに。――お前のお父さんは亡くなつたのかい。（子供うなづく）お前には兄弟があるの？　兄さんか姉さんか。（子供首をふる）それぢやアお母さんと二人ツきりなんだね。――お前は幾歳？。

子供。九歳。

先生。家に歸つたらお母さんにも、ようく云ふのですよ。お前のお父さんは、きつと天國に行つて神様のお側にゐるに違ひない。お前もお前のお母さんも神様にお縋り申して、清い生涯を送つて天國に行くやうにしなければなりません。

小使。先生。この子も悪い事をしたとわかつたやうですから、歸しておやり下さいまし。

先生。エヽ、――(子供にむかつて)お前も悪かつたとわかつたらうね。(子供うなづく)これからは決してあんな悪い事をするのではないよ。(うなづく)それでは歸して上げるから、その前に私共と一緒に神様の前でお祈禱をなさい。(先生と小使と、姿勢を正して壇の方にむかつて何かつぶやく)サア、もういゝから涙を拭いてお歸り。(袂からハンケチを取出して子供の濡れた顔を拭いてやりつゝ)けれども今日私の云つた事は忘れてはいけないよ。それからお前も心を改めたのだから、これからは神様の御教へを覺えなくてはならない。何時でも日曜のお晝前には、此處でお前のやうな子供ばかりの集合があるから今度からおいで。(子供うなづく)あゝ、それ丈わかればお前も善い子になつたのです。(一寸抱いて顔に接吻する)――(小使にむかつて)おぢいさんは窓をしめたり、いろんな用事があるでせうから、私が門の所迄送つてやりませう。

小使。ヘエどうも濟みません。

先生。（子供の手を取つて引きながら）サア行きませう。（出て行かうとする）

小使。先生、包みをお忘れぢやア御座いませんか。

先生。イエ、直き戻つて來ますから其處に置いて下さい。（二人出てゆく）

小使の老人はあけてあつたガラス窓を閉して二人とは反對の方に去る。舞臺人無く、殆んど暗くしてキリストの額も壁の色もわづかにわかち得るに過ぎない。

女の先生、再び戻り來りて腰掛けの上の包みを取りあげて室を去らんとする時下手の窓の外に小砂利をつかんで投げつけたる音。ハットしてその物音に目をやる時、第二のつぶては窓ガラスに命中して、うす暗き室內にほの白く碎けて床に落ちる。落ちて更に又こなごなに碎くる音。

先生。畜生。――あの子供に違ひない。

云ひながら又室を出て廊下を門のある方へとかけてゆく。その亂れたる足音。幕。

（明治四十五年五月九日）

良縁

人

愼次
母
姉
妹
叔母
勉
原田夫人
花子
妙子
乳母
小間使

松子
太郎

第一幕

時は或日の午後なり。
洋風の一室。室内の器具裝飾はあかるくして落着きたる色調を好む。

注意。
作者は都合よき會話のみを勝手に記すものにして必ずしもそれらの會話のみが人々の間にとりかはされしにはあらず、多くの人一室に集れるなれば、主たる會話の間に他の人々は適宜に動いたり、いゝ加減にしやべつたり笑つたりするものと知るべし。但し此の自由を惡用して見物に媚びんとする者あらば作者これを憎むべし。

又會話は單調に過ると思はれる程自然ならざる可らず。せりふにをかしみを含む場合にも笑を誘はざるやう心掛けざる可らず。

會話は以前より續き居る心にて幕あく。母、姉、妹、叔母、原田夫人、花子、子供二人。

母。(主として夫人にむかひながら)それがをかしいのでございますよ。良人が申しますには、愼次は長年外國にゐてキツト坐る事が出來なくなるに違ひない、それにもう洋服の方が身體にも合ふのだらうし、何かにつけて今迄の部屋では不便だらうと申しまして、あれの部屋は總體西洋間に致しましたでせう。それ程考へ過して居りますのですから、先日も歸つて參りました時に、兎に角宅の者出入りの者などにも一時に挨拶をさせてしまふ方がよからうと存じまして、座敷の正面に椅子を据ゑたのでございます。しまするど愼次が、これはなんです、一休樣のお說敎でもあるのですかつて申しましてね、みかへりも致しませんで平氣で疊の上に坐つてしまつたのでございますよ。

一同さもたまらなさうに笑ふ。

夫人。(頗る器用に笑つてのけて)御無理はございません、隨分外國にゐらつしやるのがお長うござ

いましたから――四年でゐらつしやいますか。

叔母。(引取つて)イ、エ足掛け五年でございませう。

母。エ、丁度五年になります。

夫人。それでございますもの、奥樣の御心にしてみますれば、何から何までお心がゝりでございましてせうから。

姉。でも座敷に椅子を据ゑましたのはなんぼなんでもあんまりで、もう一同(みんな)涙を流して笑ひ倒れましてね。又涙の出るのがをかしいと云つて妹などは自分もホロホロこぼしながら笑ふのでございます。

禮儀として起る笑聲。

妹。だつてあんまりなんですもの。

又笑聲。

姉。ほんとに母はよくそんな頓珍漢(とんちんかん)な事を致しますんですよ。

夫人。御無理はございませんとも。新橋へお着きになりました時、あんまりお立派におなりになつたので、失禮ですが、オヤこれが愼次さんかしらと思ひました程で。それを奥樣はよく五年

も御辛棒なさいました。

母。私はあまり長く外國に居られては樂しみもございませんし、兄が亡くなりましてからはあれ一人が賴みでございますから、若しもの事がありでもしてはとそれも心配なり、又ヒヨツトして貴方、異人の女でも連れて歸るやうな事が……。

姉。(あわてゝ引取つて)お母さん何を云つてらつしやるの――(夫人の方に)ほんとに母はいろんな心配を致しましてをかしいんでございますよ。

小間使扉口に現はる。

小間使。(妹に)秋山樣のお孃樣がいらつしやいました。

妹。妙子さん?

立上り嬉しさうに小間使と共に出て行く。

夫人。お母樣のお心では、おちいさい時はおちいさい時、おみおほきくおなりになつては又それ丈の御心配がございますのですから。

叔母。左樣でございますとも、私どもは此方とは違ひまして早く良人も亡くなり、子供と申しましてはたつた幸太郎一人の事で、それに良人の亡くなりました時が彼がヤツト十四で、まだ中

學に通ひ初めましたばかりでございませう、マアこれから將來は如何なるのかと思ひますと、もう泣いてなどは居られません、母親一人の手で甘やかして育てゝもと存じますし、又あまり嚴しく致しましてもいけませんし、その心配と申しますものは、とても申し上げる事も出來ません位で……。

妹、その友と手を引き合ひて出で來る。妙子一同に會釋。

妙子。小母樣、今日は、お迎ひまで頂きましてありがたうございます。母からもよろしく申上るやうに。

母。突然でしたからお出で下されるかどうかと思ひましたけれど、此娘が是非お呼びしたいと申しましてね、それでお迎ひを上げました。

姉。(妙子に)こちらは原田さんの奥さん。(花子を引合せるため)中村さんのお嬢さん。(右兩人に)秋山さんのお嬢さん。

夫人。お噂は度々弓子さんからうかゞつて居ります、どうぞお心安く。

挨拶終りて妹及びその友壁に近き長椅子にゆきて掛ける。此二人はさも仲よしと云ふ風で絶えず小聲でさゝやきかはしてゐる。

叔母。（挨拶の終るを待ち兼ねて）それでも貴方よくしましたもので、親はなくとも子は育つと申しますす通りで、おかげさまで彼も學校を卒業しましたし、嫁も來て呉れまして、初孫の顏を見ました時は、ア、もうこれで何時死んでも冥途へ參つて良人に逢つて自慢が出來ると思ひますと、もう張も我慢も一度になくなつてしまふやうでございました。

夫人。左樣でございませうとも。でも御心配なさいましただけ、又今後のお樂しみも深うございますわ、それも悉皆貴方樣のお力でございますから。

叔母。イ、エどう致しまして、悉皆皆樣のおかげでございます。私は常々幸太郎にも申しますのです。今日お前が兎に角人樣の前に出られるやうになつたのは、お前自身の力と思ふと間違ひです。悉皆世間樣のおかげですつて。

母。又幸さんは子供の時から溫和しくて親思ひで、親類内でのほめられ者でしたからねえ。（夫人にむかひ）あちらが三月の愼次が十一月ではございますが、年齡から云へばおないどしでございませう。それなのにどうしてかうも違ふかと思ふ程一人は溫和しく、片方は荒ん坊でございましてねえ。幸さんは勉強してサッサと中學も卒業してしまひますのに彼は又落第なんぞ致しまして……。

姉。お母さん――（話を轉じるつもりで）愼さんはまだ歸らないでせうか。

母。イ、エもうぢき戻るでせう。（妹に）ねえ、今日は何處と何處とかへ廻るとか云ひましたつけねえ。貴方聞かなかつたかえ。

妹。私知りません。けれどももうぢきお歸りでせう。皆さんのゐらつしやる事は知つてらつしやるんですから。

夫人。それはもう方々へ御挨拶にお廻りではお大抵ではございませんでせう。

叔母。左樣でございますよ、廻り初めますと東京も廣うございますからねえ。

夫人。左樣でございます。

妹。それでも兄さんがよく毎日々々方々御挨拶に行くと思ふと、私なんだかをかしくて……。

姉。あたりまへぢやありませんか。

妹。だつて兄さんは先の頃は隨分不性でそんな事はちつともしなかつたぢやありませんか。

姉。何時迄もそんな氣でゐられるものですか。

これ等の會話中室の一隅で遊んでゐた子供二人もの爭ひを始めて次第に聲高になる。

姉。太郎。靜にしなくてはいけませんよ。如何したんです。

太郎。だつて松ちやんが意地惡するんだもの。

松子。噓ばつかり、自分ぢやありませんか。

太郎。なんだい自分が先きに……。

姉。いけません。手出しなんぞして。もう騷々しくするんなら彼方にいらつしやい。(夫人に)どうも二人ともヤンチヤで困ります。

夫人。お可愛らしいぢやございませんか。(花子に)ねえ。

花子。ほんとにお可愛らしうございますねえ。

姉。イ、エもう宅に居りましても始終喧嘩ばかりして居りましてしかたがございません。

叔母。貴方方もツイ此間迄此通りでしたよ。

母。エ、ニ、此娘と愼次なんぞはもつとひどござんしたからねえ。

姉。お母さん、そんな古い事はもう結構。

一同愛想に笑ふ。

姉。どうしたんでせう、もう歸りさうなものですのに。

母。愼次ですか。方々樣で何彼と引止められたりしてゐるんでせうよ。これで一寸お玄關丈では

濟まないものでしてねえ。

叔母。さうですとも、これで御挨拶廻りも一仕事ですからね。(夫人にむかひ)私共はほんとに感心してゐるんでございますよ。かう申してはなんでございますけれど、よく世間で洋行歸りと申しますと、何か斯うハイカラさんで生意氣らしく思ひますが、彼の人はそんな氣ぶりはこれつぱかしもございません。實は私共も長年外國に居りました事でさぞ變つて來るだらうと心配して居りましたが、(母にむかひ)なんですねえ、ちつとも變りませんでしたねえ。

母。それですよ、私も心配してゐましたのは。もともと私は西洋になんぞ手放してやり度くはなかつたのでございます。西洋になんぞやつてとんだ生意氣になられても困り者でございますからねえ。けれども幸福と彼はハイカラとかにはなりませんでねえ。

夫人。ほんとにしつかりしてゐらつしやいますから。

母。先日もなんでございました、私が愼次やお前は永い間西洋にゐたから今では外國の方がいいのぢやアないかへと申しますと、イヽエお母さん生れた國程いゝ處があるものですかと申しましてね。

夫人。左樣でございますとも。又日本は日本でございますから。

叔母。私(わたくし)どもゝ舊弊の方でございまして……。

扉あきて話絶ゆ。

小間使。あの、大鳥様の若旦那様がいらつしやいました。若旦那様をお尋ねでございましたが、まだお歸りになりませんと申し上げましたらお待ち遊ばすとおつしやいました。

姉。勉(つとむ)さん？　(妹の方をむき)又いぢめてやりませうか。

母。勉さんなら此方へおつれ申しておいで。

小間使退場。

子供又いつか爭ひ始む。

姉。ねえ、貴方がた二人ともあちらで遊んでゐらつしやい。何故お庭に出て遊ばないの。

太郎。つまらないんだもの。

姉。でも此處で騷いではいけません。お話の邪魔になります。

太郎。だつて――ねえ松ちやん。

松子。エヽ。

夫人。マアおよろしいではございませんか。(子供に)ほんとに溫和(おとな)でゐらつしやいますねえ。

姉。ね、あつちにいつてらつしやい。

母。ではね、二人ともいゝ子だから彼方(あちら)でね。

太郎。ぢやアね（云ひながら母――彼等から見れば祖母――の耳に口を寄せてさゝやく）ね、いゝでせう。

母。（可愛らしくてたまらない様子で）エ、エ、よござんすとも。だからあちらで喧嘩をしないでね。

松子。なあに、太郎さん。――おばあ様私(わたし)にも。

姉。マア此の人は。太郎が何をおねだりしたか知りもしないで。――（松子に）慾張りさんねえ。

　　太郎松子にさゝやく。二人いそいそと出て行く。

姉。何をおねだりしたんです。

母。イヽエ風船(ふうせん)が欲しいんですつて。

叔母。子供は無邪氣でございますねえ。

花子。（お愛想に）ほんとにお可愛らしい。

　　子供のあけはなして行つた扉口から勉登場。

母。マア勉さん、よくいらつしやいました。先日は御苦勞様でした。

勉。どう致しまして。

叔母。サア此方へお掛けなさい。
勉。ハアありが度う。
姉。勉さんは原田さんの奥さんお始めてゞせう。
夫人。ハイお名前は伺つて居りましたがついぞお目にかゝりません。どうぞお心安く宅へもチト
　お遊びにいらつしやつて下さいまし。
勉。ありが度うございます。
姉。こちらは中村さんのお嬢さん。
花子。私存じあげて居ります。田川さんのお宅で度々お目にかゝりました。
姉。マア左様ですか、どうもそゝつかしくて、（一寸愛嬌笑ひをし）勉さん御存じなの。
勉。エ、田川さんでお目にかゝりました。
母。マア左様ですか、私どもゝこれから御懇意に願ふのですから――ほんとに不思議な御縁です
　ねえ。
　　　勉漸く落着く。此の男は烟草を嗜む。
勉。愼さんは。

母。あれは今日も御挨拶廻りです。もう戻る頃ですが。
勉。小父さんは。
母。今日は社から倶樂部へ廻るから遲くなる、私なんか居ても居なくても同じだからなんて冗談を云つて出て行きました。
夫人。東海倶樂部でございますか。では良夫も御一緒でございませう。トムソン博士の歡迎會でございませう。
母。なんですか私は異人の名は覺えられませんでしてねえ。
夫人。イ、エ、トムソン博士でございますよ。(姉に)亞米利加では有名な社會學者だと申しますねえ。
姉。左様ださうで。
夫人。(花子に)お父様もいらつしやいますでせう。
花子。ハイ參るやうに申して居りました。
叔母。此頃はあちらからもいろんな人が參りますやうでございますねえ。
夫人。ハア矢張り日本も一等國になりましたから追々外國との交際もしげくなりませう。

母。左様でございますかねえ。西洋とのおつきあひもむづかしい事でございませう。
夫人。(交際家として話を轉ず)失禮でございますがあの「禁園」にお書きになりますのは貴方でいらつしやいませう。——(花子に)左様でいらつしやるでせう。
花子。ハア。
姉。エヽ、勉さんは新進作家の錚々たるものなんでございますよ。ねえ勉さん。
勉。又始まつた。
姉。だつてほんとぢやありませんか。皆さん御存じなんですもの。なんでしたつけねえ、ソウソウ「その夜の別れと其の後の日と」、あれはもう完結しましたか。私ツイ閑がないのではじめの方つきり拜見しなかつたの。
妹。あれはもうとつくにおしまひになつたのよ。ねえ。(友人とうなづきあふ)
叔母。なんです、その夜のなんとか云ふのは。
姉。勉さんの小說の標題なんですよ。
叔母。マア隨分長くてむづかしいんですねえ。
母。エ、エ、もう此の人達のはなんですかむづかしくて、弓があんなものが好きで始終讀んで居

りますから時々私もどんなものかと思つてあけて見ますけれど横文字ははいつてゐるし、とてもわかりませんよ。小說本も變りましたからね。私共は「田舍源氏」や「白縫物語」でしたから――それでも新しい小說でも「公爵夫人」や「我が子の罪」はほんとによく出來てゐて泣かされますがねえ。

勉。どうも亂暴だなア。あんなものは新しい小說ぢやありませんよ。

母。オヤオヤあれも古いんですか。

姉。そりやアもう勉さんのと比べちやア何だつて悉皆古いんですよ。どうせなんとか主義の新進作家なんですから。

勉。困るなア、どうも。何時かも自然主義の攻擊でひどくいぢめられましたつけ。

姉。だつて自然主義なんて。（さもさもけがらはしさう）

勉。貴方は自然主義を誤解してるんだつてあれ程說明したぢやありませんか。（夫人に）實際自然主義は行詰つてしまつたんですけれど、それより日本では一般に誤つた解釋をされたんで文壇の人は氣の毒でした。

夫人。（自然主義と云ふ言葉に對しては矢張りいやな感じあり）左樣でございますねえ。私　自然主義に

就ては存じませんけれど、まだ日本では文學は廣く認められて居りませんので御座いますから。

勉。（生來のオッチョコチョイなれば、急ち圖にのつて）それなんです、吾々の困るのは。前代の人には全く新しい時代の來た事がわからないんですから。

夫人。ほんとに左樣でございますねえ。英吉利などではその時代々々のすぐれた詩人を選んで宮廷詩人にするとか申しますもの。日本でもそれ程迄に進みませんでは第一外國に對しても恥かしうございますわ。

勉。（少し見當のそれた氣味があるので苦笑しながら）それも何んですが、文藝院とか文部省美術展覽會とか云ふ外部的の保護奬勵よりも、吾々の立場から云ふと先づ第一に眞に藝術を理解してくれなくては困るんです。實際小母さんが「我が子の罪」なんてのを新しいと思つてるのは無理もないんです。一般がそれなんですから。

夫人。けれども亦私共門外漢から申しますと、偉大な作者が出まして世間一般に感動を與へ文學の力を作品によつて認めさせなくては駄目かと存じます。矢張りまだ日本にはテニソンやロングフェローのやうな詩人は出ませんのですから。

勉。テニソンですか。（急に思ひかへして社交的な心になり花子の方にむいて）何時かテニソンの諳誦を

うかゞひましたつけ。あれは貴方の方のバザーのあつた時でした。

花子。不出來でお恥かしうございました。

夫人。私もうかがひました。ほんとにお美事な出來で(母や妹に聞けがしに)私の側に居りました外人が大層感心して居りましてねえ。あの方の發音なら吾々と違はないなどゝ申して居りました。

姉。(母には話が少し通じないらしいので)マア左樣でいらつしやいますか、私ツイうかゞひそこなつてほんとに殘念でございました。(母に)花子さんが學校の會で西洋の詩を諳誦なさつたんですよ。

母。それを異人迄感心しましたんですか。(花子の方に)御名譽な事で。(妹の方に)花子さんは西洋の詩をねえ。(感心したと云つた風)

勉。(夫人に)矢張りテニソンが一番廣く讀まれて居るやうですねえ。あれは女學校の教科書に迄用ゐられるんですから。

夫人。私共も初めは學校でならひましたので。(妹及びその友の方に)貴方方も學校でお讀みになりませんでしたか。

妹。ハイ私共はエノツク・アーデンをならひました。妙子さんもお好きでしたわねえ。

妙子。エノツク・アーデン？　エヽ。

花子。私も大好きでございます。讀んで居りますと知らず識らず涙がこぼれて參りましてねえ。

夫人。(勉に)矢張りそれが偉大な文學の力でございませうねえ。

勉。サアどうでせうか。――しかし涙を誘ふのが必ずしも傑作とも云へますまい。今だに忠臣藏で泣く人が澤山あるんですから。

叔母。(若手に話を取られてゐたのを囘復したよろこびもあつて)ほんとに忠臣藏はなんてつても面白うございますね。實錄とかなんとか申しましても矢張り五段目にお猪の出ますのにはかなひませんもの。

一同笑ふ。

母。さうですねえ。(叔母に)先日も帝國座に愼次がつれて行つてくれましてね、なんとか云ふ芝居でしたよ、名高い人がこしらへたんですつて――ねえ、なんとか云ひましたねえ。

妹。シエークスピーア。お母さん何度教へてあげても覺えてゐらつしやらないのねえ。

母。それそれ、それなんですがね、面白くありませんでね、それを丁度あちらでお目にかゝつた原田さんの奥さんも花子さんも、實があつて面白いとおつしやる、愼次や此姉妹達も面白いと

云ふのですが、私にはなんですか間が抜けたやうに見えましてね。（一同笑ふ）それにその役者が又たゞの役者ではありませんで、皆書生さんださうですし、中には先生方迄まじつてゐらつしやるんださうで。――マアどう云ふおぼしめしで役者の眞似なんぞなさるのかと思ふと親御さん達のお心が思ひやられましてねえ。

一同巧みに笑ふ。

勉。親ごさんのお心が思ひやられるのはよかつた。――ではなんですか（夫人花子の方に）皆さん御一緒だつたのですか。

夫人。ハア丁度私共も中村さんのお誘ひを頂きまして。それが此方の皆樣とお目にかゝりましたので大層面白うございました。矢張りシエクスピアなどを見ますと日本の劇は幼稚でございますねえ。

花子。貴方も御覽になりましたか。

勉。エヽ、初日に行きました。

花子。如何でございます。

勉。サア實を云ふと、シエクスピアを今時持ち出さないでもと思ひますが。それもあれです。新

しい解釋をしてやるとか云ふなら別ですけれど――(母に)で愼さんはなんて云つてました。(期待するところあり)

母。あれも大變感心してゐましたよ。あちらで異人のするのも見たさうですがチツトモ見劣りがしませんてね。

勉。へエそんな事を云つてましたか。私にはどうもあの連中のいゝ氣なのには驚いたなんて。もつとも一寸電話の話のついでなんですが。

母。(無頓着で)それに又帝國座程立派な芝居はあちらにも少ないさうですねえ。さう聞くと、私共迄なんとなく肩身が廣くなりますよ。今度はほんとの役者の出る芝居を愼次にも見せようと思ひます。

叔母。ですが私は彼座は嫌ひですよ。なんかつて云ふとオペラとか云ふわからないものがありますし、それに女優もどうも鼻は低うございますし、お尻ばかり大きくて。

勉。しかし皆時代の要求ですからね。オペラなんかもあゝ同情なしにけなすべきものではないと思ひます。女優だつて今にごらんなさい、男の化けた女なんか見られないつて時代になりますから。

姉。でも女優の芝居は見られませんよ。(女のならひとして女優に對する妬もある口調なんて云つても。

夫人。(同じく)左様ですねえ、矢張り舞臺では男の方が大きくて立派でございますから。(叔母の方に)ですが來月は硬十郎が何か新作を致しますさうですからよろしうございませう。

妹。私も兄さんと約束しました、つれて行つて頂く。(誰にともなく樂しさうに云ふ)

勉。今ぢやアどうか知りませんが愼さんと來たら先の頃は硬十郎が大嫌ひでしたよ。大根會と云ふ連中をこしらへて一人々々順々に下手な役者の總見をしようなんてよく冗談に云ひましたつけ。

夫人。マア左様でございますか。でも硬十郎の藝は上品でよろしいと皆さんおつしやつてゞすが。それに勸進帳でもさせますと眞似手はないと存じます。

叔母。硬十郎は踊りは達者でございますねえ。

勉。實は私も初めはそんなに嫌ひぢやなかつたんですが、愼さんと來たら恐らく誰よりも先きにあの役者の大根の大根たるところを認めたらうと思ふ程昔から嫌ひでした。愼さんに云はせると踊も、官立學校の優等生のやうなものでよく出來るかしらないが味もそつけもありやアしな

いと云ふんです。
夫人。マアひどい。
妹。兄さんがそんな事云つて。
勉。(少し思ひかへして)勿論こりやア洋行前の話ですよ。しかし今だつて變りはないでせう。
夫人。でも先日私がうかゞひましたら硬十郎は新作物が得意ださうですから是非御一緒に拜見しませうなんておつしやつてゞした。(花子に)ねえ。
花子。ハア。
妹。(突然氣がついたやうに)アラ今人力車の音がしてよ。兄さんのお歸りかしら。(立上る)
母。キツトさうでせう。(同じく立上る)直ぐこちらに來るやうに云つて來ませう。
姉。(たしなめるやうに)マアお母さん御自分でいらつしやらないでもいゝぢやありませんか。
母。(もう歩き出して)イヽエ私はあちらに一寸用事もありますから。(云ひつゝ出で去る)
姉。ほんとに母はもう弟の事で夢中でございましてねえ。
勉。あんなに大きくなつてそんなに可愛いものでせうか。
夫人。御無理はございませんとも。

叔母。この情愛は又別でございますからねえ。

扉あく。母先きに愼次、短き頭髮を手輕に分けてゐる、今歸つて來たばかりの洋裝。一切の態度、口のきゝ方等稍努力と技巧の痕跡を止むる程度に於て落着きと叮嚀さとを保つ。時々強ひてお愛想を云へども生來愛嬌無き男なるに似たり。

母。矢張り愼次でしたよ。

叔母。お歸りなさい。

愼次。(一同に會釋しつゝ)只今。方々廻りましたので遲くなりました。(夫人と花子に)先日は失禮致しました。

夫人。どう致しまして私共こそいろ／＼お世話さまになりました。——只今も先日のお芝居のお話を致して居りましたのでございますよ。

愼次。おかげ樣でまことに面白うございました。(勉の近くに坐る)

勉。(無邪氣に)どうだい、毎日毎日お低頭ばかりして廻つてる氣持は。

愼次。(厄介者めと云ふ心地で)何を云つてるんです。(冗談にして笑ふ)

勉。今日は此方に來る筈ぢやアなかつたんだが急に氣がむいて。それに後で一寸話し度い事があ

つてね。

愼次。（うなづいたのみで叔母にむかひ）叔母さん、幸さんは今日（けふ）は來られないんですか。

叔母。エ、折角ですが何か特別の御用があるさうで、忙しいから失禮しますつて。

愼次。それぢやアお歸りになつたらさう云つて下さい。先日の「商業簿記法」はもう暫時（しばらく）拜借して置きますつて。どうも閑（ひま）が無いものですからツイまだ勉強しませんでね。（一同の方に）これから奉公口を探しますのですが、その前に帳面つけだけでも覺えて置き度いと思ひます。

夫人。貴方がたに帳面つけでもございますまい。それに學校に居らつしやる頃一通りは簿記もおやりになりましたのでせうから。

愼次。どう致しまして、すつかり忘れてしまひました。幸太郎さんに敎へて貰はうと思つて居りますのです。

叔母。（得意さうに夫人に）幸太郎も初めは帳面の方に居りましたのでございますよ。

夫人。ハア皆さん初めホンノ一寸の間お小僧さんのお仕事をなさいますやうで。

愼次。一寸の間ならよろしうございますが私共（わたくしども）はどうも一生帳面つけぢやアないかと思ひますと心細くなります。

勉。よくコツコツそろばんをはじいたり帳面をつけたりして居られるもんだねえ。
愼次。それが出來なければ御飯が頂けません。
叔母。なんですか、矢張お父さんの會社につとめる事になりましたか。
愼次。イ、エまだ口がありません。仕事はなんでもよろしうございますが、なるべく月給の多い所がございましたら、どうぞ皆さんにもよろしく。

輕き笑聲。

母。矢張りあれでしてね、良人の會社は他の方が我儘をさせて下さつたりなんかしてはと申しましてね、それよりも他所様で當分使つて頂いた方がと良人も申しますし、當人もその方が將來の爲だと云ひますので。
夫人。左様でございますとも。――(愼次に)いかゞでございます、方々お廻りになりまして。東京も大分變りましたでせう。もつとも外國に長く居らつしやつた方は別段進歩したともお思ひになりますまいが。
愼次。イ、エ何から何まで進歩の著しいのには驚いて居ります。市中何處へ參りましても立派な西洋造りの建築になりました、第一先日の帝國劇場ですつかり感服してしまひました。

姉。でも今勉さんにうかゞつたら貴方はロメオ、ジユリヱツトの悪口を云つてらつしやるつて云ふんぢやないの。
愼次。(平然と)勉さんが？　(押つけるやうに勉を見て)冗談云つちやアいけません。實際あのロメオには敬服しました。(夫人に)それに萬事帝國劇場は設備がよろしうございますし、行儀の悪い出方などがお辨當の上をまたいで行くやうな事はございませんですから。此の次の芝居には是非おとも致し度うございます。
妹。兄さん、兄さんは硬十郎お嫌ひ？
愼次。如何して？　私は久しく見ないから何にも知りやアしない。(皆の方に)まだ私が此方に居りました頃は唐藏の時代ですから。(唐藏は硬十郎の前名と知るべし)
妹。だつて勉さんが兄さんは硬十郎は大根の中の大根だつておつしやつたつて。
愼次。(勉の方を又も押つけるやうに見てから)そりやアずつと昔の話ですよ、まだ富五郎と云つた頃の。――(夫人に)その後メキメキと上手になりましたのですから、近頃はさぞよろしからうと存じます。
夫人。左様でございますよ、駄左衛門も評判がよろしうございますが、品が違ひますから。

愼次。ハア。

夫人。それに硬十郎は柄は大きうございますし、こうせきも立派でございますから。

他。(愼次に對し少しく反抗的に)君は駄左衛門組ぢやないのかい。

愼次。私? 私はほんとに何にも知らない。久しく日本の芝居も見ないから。――いづれそのうち駄左衛門も拜見しませう。

妹。兄さん、私連れてつて下さいな。

姉。又始まつた。此の人は何處へでも行き度がるんですから。

愼次。(妹に)何んでもかんでもお望み通り引受けます。いづれ三越にも御一緒に參ります。

笑ひ。

妹。兄さんはいや。なんでもフンフンて云ひながら悉皆忘れてしまふんですもの。

愼次。だつてまだ歸つてから幾日にもならないのに、さうさう芝居や音樂會にばかりも行かれやしません。實行は追々の事にして皆承つて置けば間違ひはないでせう。――どうでせう叔母さん。

叔母。(眞面目に取つて)貴方には感心してますよ、よく皆にやさしくなさるつて。けれども先刻も

お母さんのおつしやつた通り、貴方はちひさい時は亂暴でしたからね。亡くなつた肇さんと喧嘩をしても、なかなか兄さんに負けてはゐませんでしたからねえ、尤も肇さんは病身だつたゞけ溫和し過ぎる位でしたけれど。

愼次。どうぞお手やはらかに願ひます。

叔母。(夫人の方に)イヽエほんとなんでございますよ。(母の方に)子供の時分の事はわからないものですねえ。

母。全くですよ。肇ともやりましたが此姉ともいゝ相方でしてね。又此の人がなかなか負けてはゐませんでしたから。

姉。お母さん、よして頂戴。(夫人に)でも私は子供の時から矢張りお轉婆だつたんでございますよ。

笑ふ。

夫人。イヽエ。私も宅に居りました頃は多勢兄弟でございましたから、よく泣いたり泣かされたり致しました。皆さんおちひさい時は御成人の後とは違ひますのですから。――(花子に)貴方も御兄弟と喧嘩をなさつた經驗がおありですか。

花子。ハイ只今でも致しましては母に叱られます。

むやみといゝ女ぶつた笑ひ方。

妹。貴方もなさつて。

妙子。エヽ、うちの弟は腕白でしかたがないんですもの。

愼次。さうして見ると誰でも兄弟喧嘩の味は知つてるものと見えますねえ。叔母さんだつて昔はうちのお父さんと喧嘩したものなんでせう。

叔母。イヽエ、お兄さんは眞面目で御本ばかり讀んでゐらつしやつたので怖くてね、喧嘩どころではありませんでした。――矢張り喧嘩は仲がよくないと出來ませんですからねえ。

姉。さうして見ると私共は仲が善過ぎたのでございませうか。毎日絶間なしでしたもの。

愼次。でも兄弟喧嘩をしてゐた頃が一番面白かつたやうです。お互にもうつかみあひも出來ないでせう。

叔母。それでも愼さんのは掛値なしにひどござんしたよ。今でもありますかしら、よくあの縁側のうすべりのおもしにしてあつた鐵の棒を振り廻して、兄さんや姉さんを追掛け廻してゐたのを私は今だに忘れませんよ。

母。兄さんや姉さんだけならいゝんですが、お父さんにも手むかひしましたからねえ。（つくづくうれしさうに）それでもあなた、なるやうになつて行きますから、よくしたものでございますねえ。

夫人。それはもうおちひさい時のおいたなんか、ホンノ一時の事でございますもの。

愼次。でも私はかう思ふんです。兄弟喧嘩の時代が濟むと親子喧嘩が始まるのです。親子喧嘩がおしまひになると夫婦喧嘩の時代が來ます。

一同さもたまらなさうに笑ふ。

勉。（一人、つまらない事にも眞面目がりたがる文士としてもつともらしく）それは實際らしいね。イエ冗談ぢやありませんよ。意味のある事だ。

一同合點のゆかぬ顏で勉を見る。

愼次。（面倒くささうに）別に意味もなんにもないさ。（姉に）姉さんなんか第二の時代がなくて直ぐ第三に移つたんぢやありませんか。

姉。（わざととぼけて）どうでせう。――だけど女には第二の時代はないんぢやないでせうか。そのかはり自分が母親になつてから子供と始めるのかもしれません。

笑聲。

勉。これは面白い問題だ。すると男の方は第四の時代がなくちやアなりませんね。子として親と爭ふばかりでなく、親子になつた時に又子と爭はなくちやなりませんもの。

夫人。さうしますとおぢいさんおばあさんと孫との爭ひが第五の時代でございませうか。

笑聲。

叔母。孫は別でございますよ。誰だつて孫を相手に喧嘩でもございますまいもの。

笑聲。

愼次。そりやア叔母さんのおつしやる通りですね。兄弟のだつて親子のだつてつまり喧嘩は廣い意味での利害關係から起るのでせうから、孫に對して直接責任のない年寄は、たゞ可愛がる丈の事で求めるところは何もないでせう、從つて偉い人にしようとか自分の後繼(あとつぎ)にしたいとか思ふのは親の心で、おぢいさんの心ではありませんでせうから。

母。そんなものですよ。孫の可愛さは子の可愛さとは情愛が違ひますからねえ。

花子。でも宅の年寄は私共とよく喧嘩を致しますわ。

笑聲。

愼次。そりや本卦歸(ほんけがへ)りなさつたので子供同志の喧嘩と同じでせう。

笑聲。室內の電燈いつか自然にあかるくなる。

勉。(主として愼次に)しかし人間はそんなに絶えず喧嘩しなくちやアならないのかしら。

夫人。(引取つて頗る常識的に)それは絶えずと云ふのではございませんよ、絶えず喧嘩をしてゐてはたまりません。たとへば親子にしましても夫婦にしましても愛があればこそお互に思ひ過しなどもございまして爭ひの原因にもなりますのですから……。

勉。(さへぎりて)イ、エさう云ふ意味ぢやアないんです……。

愼次。(さへぎり夫人にむかひ)左樣でございませう、親は子を思ふからこそいろいろと叱りもしお小言も出ますやうなわけで。――考へてみますと兄や姉と喧嘩しました頃がなつかしい事もございます。

花子。(稍云ひ憎さうに)私何時ぞやお歌を拜見致しましたわ。――いさかひの(一寸考へるふりをして)その思ひ出もなつかしく(又ためらひて)思はるゝ身もはかなかりけり――(愼次に)左樣ではございませんか。

愼次。(不快なる心をまぎらしつゝ)どうでございますか當人とんと覺えません。けれども思ひ出の思はるゝは少々まづいやうに存じますが。

花子。私思ひ違ひかもしれません。

勉。イ、エそんなのがありましたよ。

妹。私も覺えてゐてよ。（友だちに）貴方御存じぢやアなくつて。

妙子。（ためらひて）イ、エ。

夫人。愼次さんも大層文學の方に趣味を持つてゐらつしやいますさうで。花子さんがよく御存じでしてね、匿名でお書きに爲りましたので私ツイ拜見致しませんでしたが、先日此方から愼次さんは大層小說がお上手だと伺ひまして、私も是非拜見させて頂かうと存じて居りました。

（花子に）なんてお名前でしたつけ。

花子。（ちひさい聲で）松木喬太郎――とおつしやるので。

夫人。ほんとに花子さんは文學の趣味がおありですから……（フト母や姉の樣子に氣がついて口をつぐむ。しかし誰も話を引取つてくれないバツの惡さに）――近頃はお書きになりませんさうで。

愼次。イエ出來ますればでございますが何分不器用でして。

花子。私以前お書きになりましたものは大概拜見致しまして大層面白く存じて居りました。何故此頃はお書き遊ばさないのかと殘念に存じて居りました。（大膽になつて來て男の顏をしげしげと見

る）

愼次答ふべきに答へざるため一寸お座が白ける。

妹。（突然）妙子さんも兄さんのお書きのものをお讀みになつて私なんかよりも反つてよく覺えてゐらつしやつてよ。（花子は妹及びその友を、妹は花子を見る。扨て雙方とも一度に視線をそらす）

姉。（妹を見て餘計な事をと云ふ心）私はついぞ愼さんのお書きのものなんか面白いと思つた事がありませんよ——（夫人に）どうも文學もよろしうございますが此の頃の人は學問をした人にも似合はない卑しいのがございましてねえ。

夫人。左樣でございますねえ、矢張り昔の物には上品な優美な趣味が多うございますやうで。

姉。私など實は弟が小說なんか書くと聞きました時は肩身が狹いやうな氣が致しました。その頃はもう第三の時代でございましたのに又第一の時代に戻りました位でございます。それですから其の後やめてくれました時はほんとに安心致しましてねえ。

誰も返事が出來ないので無言。

勉。何故でせう、何故肩身が狹いやうな氣がしたんです。

姉。何故つてたゞ私共さう感じましたの。

勉。吾々の仲間ぢやア愼さんが急に何も書いてくれなくなつたので、如何したんだらうとかはるがはる手紙で質問したものです。ところが先生何も云つてよこさないんです、たゞいやになつたからやめたつて云ふ丈なんでせう、何分遠く離れた外國にゐるんだから始末が惡いんです。

愼次。稍困つた顏をして）いゝぢやアないか、なんだつて。

——（愼次に）實際今でも吾々は疑つてるんだよ。是非君の心持を聞き度いつて。

勉。しかし……。

姉。（奪ふやうに）勉さん氣を惡くしないで頂だい。私貴方の事を云つたんぢやないんですから。貴方のやうな專門家は又別ですわ。私達にはむづかしい議論はわからないんですから。

勉。何もそんな……。

愼次。マアいゝやね。當人がいやになつてやめればそれでおしまひさ。

叔母。（とりなすつもりで）私もなんですよ、愼さんが小說家になんぞおなりぢやあるまいとは思つてゐましたが、又若しかしてそんな氣でおゐでかとも思つたりしましてね。お母さんだつて御心配でしたらうから。

母。（始めて安心したらしく）私はなんでも當人の好きな事ならと思ひましたけれども、父は斷じて

いけないと云ひますし、此姉(これ)が又ヤツキになつて何かと申しますので、それに眞面目に學校の方を卒業して會社にでも出てくれますれば、これに越した事はないのですから――(調子をかへて妹に)誰かにね、まだおしたくは出來ないかどうか聞いて來ておくれ。

妹、話の場合が場合なのであまりうれしくなく立上る。

愼次。(明かにわざとらしき努力を以て)此の人は芝居三越なんて云ふと自分が眞先きに馳け出しますけれど、御用つて云ふとなかなか立上りません。御覽の通りです。

妹。アラいゝ加減な事ばつかり。

云ひつゝ椅子を離れて扉に行く時恰も外部より開かる。小間使登場。

小間使。奥樣、おしたくがよろしうございます。

妹。(仰山に胸を叩き)アヽ助かつた。(小間使に)富(とみ)、ありが度う。

小間使。なんでございます。

妹。(椅子に戻りながら)なんでもいゝの、ありが度う。

一同笑ふので若い小間使はヘドモドしてゐる。

母。富、わかりましたよ、今直き行くからね。

小間使退場。

母。可哀さうにからかはれたと思つてるぢやありませんか。

姉。(母に小聲にて)ではあちらの方が――(一同に)失禮でございますが皆さんどうぞあちらに、(自ら先づ立上る)――又ゆつくり面白いお話をうかゞひませう。

母。何もございませんが愼次の歸つて參りました心祝ひで。(立上る)

姉。サア奥さん――どうぞ。

夫人。どうも度々うかゞひましてはお世話様になります。

姉。皆さんどうぞ。

皆々禮儀を保ちつゝ稍騷然と口々に短き言葉をかはしながら立上る。勉一人腰かけてゐる。

姉。勉さんもいらつしやつて下さい。

勉。一寸待つて下さい。私はもう一服頂戴して行きます。いゝでせう、直きあとから行きますから。

姉。早くいらつしやい、キツトですよ。

一同その間に母を先きに出て行く。愼次あけた扉口に立つて皆の立去る後からつゞいて行く心がま

へ。

愼次。（一同の出で去つたのを見送つて）オイ行かないか。（自分も行かうとしながら急にシルクハットをうつちやつた調子）

勉。マア一寸待つてくれ。話があるんだ。

愼次。話？　話なんか何時でもいゝや。行かう。

勉。マア其處をしめて來給へ。長い話は別としても一寸聞き度い事があるんだから。

愼次。（扉をしめて）なんだい、もうやかましい文學論は御免だ。ほんとにいゝ加減人を困らせたぜ。

勉。實は雜誌の計畫に就いて是非相談に乘つて貰はうと思つて來たんだけれど、お客來だからそれは後日にゆづらう――（煙草を味ひ）もう結婚談が持上つたのかい。

愼次。アヽ、まだ彼地（あつち）にゐる頃からだ。皆待（みんなエ）ちかまへてゐるんだからまるで結婚の道具だよ。

勉。であれが候補者なのかい。

愼次。あれツて、中村男爵令孃かい。（うなづくを見て）勿論（もちろん）。

勉。驚いたねえ。――しかしありやアよせよ。

愼次。なにもまだきまつたわけぢやアないんだ。その他（ほか）にあつちからも此方（こつち）からも候補者が現はれて來る。なかなか樂しみなもんだよ。

勉。冗談ぢやない。しかし驚いた、此處で出つくはさうとは思ひがけなかつたからね。あいつ馬鹿に初心（しよしん）がつてるけど、なか〳〵たゞ者ぢやないんだぜ。

愼次。そんな事はどうでもいゝ、まだどうともわからないんだから、あの原田夫人てのが子供はないし、相應に金はあるし、閑（ひま）なもんだから世話好きでね、無理にも押つけようとしてるんだ。

勉。あの夫人は大分變つてるね。

愼次。ナーニあの連中はみんなあの調子さ。物識（ものし）りで交際家で、婦人會の役員で硬十郎が贔負と來りやア申分がない。

勉。そこへもつて來て中村のが又英語の芝居もやるしテニソンも讀みます、縹緻（きりやう）はよくないが押が強いから相應に賣れてるんだぜ。

愼次。結構だねえ。

勉。しかし貰ふのはよせよ。

愼次。何故？

勉。だつて手つ取り早く云やア吾々の遠中の中にも御親類がゐるんだからひどいよ。
愼次。誰だい。
勉。田川さ。勿論今ぢやア何でもないらしいが。
愼次。フム、しかし別段故障さへ出なけりやアいゝのさ。前科を云々すりや此方の方が引きさがらなくちやアならない。
勉。だけど――それに面だつてまづいぢやアないか。
愼次。勿論。しかし體格が第一の條件なんだから、此の方から云やア申分がない。僕はどうなりゆくんだかしらないが、おやぢや母はもう夢中なんだから、默つてゐても寄つてたかつてうつちやつては置かないよ。
勉。だつて亂暴ぢやアないか。ソウソウ手輕にとりかへる事も出來ないんだから。
愼次。そりやア覺悟はきめてるよ。一旦貰つたら友白髪さ。

突然勢よく扉あきて松子と太郎かけ込む。松子は手に紅いゴム風船を持ちて逃げ廻るを太郎奪はんとて追ひかく。暫時家具の間を騒ぎ廻りしが遂に捕へられて爭ふ中、松子の手の絲切れて風船天井にのぼりゆく。それを見上げて松子ワツト泣き出せば、泣いたのを見て太郎はやしながら逃げ去

る。と泣きながら松子も追ひかけて退場。

愼次は漂へる風船を見上げ、勉は煙草を吸ひながら愼次を見て立つてゐる。無言。

小間使登場。

小間使。若旦那様。皆様お待ちかねでございます。

愼次。今行くよ。(小間使の去るを見て、勉の肩を叩き)行かう。皆さんお待ちかねだ。

二人苦笑しながら輕く肩に手を掛け合ふやうにして室外に去る。

稍間を置きて――幕。

第二幕

前幕より一週間ばかり後の日曜の午後。

愼次の室。洋風。室内の器具裝飾は前幕の室に比して稍暗く寒き色を好む。

注意。
會話は平凡に過ると思はれる程自然ならざる可らず。殊に愼次のせりふは誇張したる調子を避くる事。又愼次には常に自責の苦痛ある事を忘る可らず。

幕あく。あきたる後暫くして愼次登場。
今外出先きから歸つて來た心。洋裝。手に留守中に來りし手紙二三通を持ち、椅子に倚りてそれを讀まんとする時小間使登場。

小間使。直ぐにお召か へ遊ばしますか、それともお風呂に遊ばしますか。
愼次。湯は晩にしよう。一寸顏だけ洗へばいゝ。——皆さんお留守かい。
小間使。旦那樣は番町の本多樣へ碁のお集りでいらつしやいました。奥樣はお孃樣とお買物にお出になりました。
そのまゝ立去らうとするのを呼止め。
愼次。富。
小間使。ハイ、なんぞ御用でゐらつしやいますか。

愼次。又お酒を飮ましておくれ。

小間使。御酒でございますか。

愼次。ア、、日本酒ぢやないよ、何か洋酒があるだらう。

小間使。先日の葡萄酒でございますか、——ヴェルモットでも持つて參りませうか。

愼次。甘いのはいやだ、ウイスキイでもコニヤツクでもい丶。早くだ、お歸りにならないうちに。

小間使。笑ひながら)かしこまりました。(去る)

愼次手紙を開きて一ツづ丶讀む。讀み終りたるを裂きて机の下の屑籠に投入れたる後自も退場。舞臺再び人なく暫くして小間使盆に二三種の酒の瓶とグラスをのせて持ち運び卓の上に置きたる後屑籠を持ちて去る。

間もなく愼次入來る。和服。シヤツ股引のたぐひは絕對にこれを嫌ふ。一ツ一ツの酒の瓶を取上げて見てから立ちたるま丶グラスで無雜作に二三杯飮む。

小間使からの屑籠を置きに來る。

小間使。それでよろしうございますか。何か別のを。

愼次。(机に近き椅子にかけながら)ナニこれで結構だ。

小間使。果物でも召上りますか。
愼次。いらない。

　　小間使待つてゐても用がないので行かうとする。

愼次。オイ。
小間使。御用でございますか。
愼次。あの――婆やはもう歸つたかい。
小間使。イエお次に居ります。今晩はこちらに泊めて頂くと申して居ります。
愼次。泊るのか。（獨語のやうにも、反問のやうにも）
小間使。ハイ。
愼次。一寸來いつてさう云つてくれ。
小間使。婆やさんにでございますか。
愼次。ア、、あれは私の乳母やなんだ。
小間使。（笑ひながら）かしこまりました。（去る）

　　愼次又二三杯飲む。立上り室内を歩み居るところへ乳母登場。

乳母。（愼次氣づかずして歩めるうしろより）若旦那樣。
愼次。オヽ、婆（ばあ）や。
乳母。何か御用でございますか。
愼次。ナニ用事ぢやアないんだよ。もつと此方（こつち）においで。（椅子を指しながら自先づ腰かける）――お前今日は泊つて行けるのかい。
乳母。ハイ奧樣にお願ひ致しまして一晩御厄介になります。
愼次。婆や、そんなとこぢやア話が出來ないぢやアないか。此處（こゝ）にお掛け――お前と昔の話でもしようと思つて。（乳母なほ扉口にもぢもぢしてゐるため）――（命令的に）おかけつたら。
愼次は少しは自を強ゆる心地且は又酒に近つきたる心地にて稍我儘なる調子。且著しく冷嘲的である。
乳母。ありが度うございます。婆やは此方（こちら）で結構でございます。（とは云ひながら指された椅子の側に來て、しかしまだ立つて居る）
愼次。お前が掛けてくれなくちやア話が出來ないぢやないか。――おかけつたら。
乳母。ありが度うございます。では掛けさして頂きます。（おづおづ腰かける）

愼次。（乳母の顔をしげしげ見ながら）婆やにも久しぶりだねえ。私は變つたかい。

乳母。（これもしげしげ見ながら）ほんとにお立派にお爲り遊ばして。――先刻程お目にかゝりました時私はうれしくて涙がこぼれました。

愼次。（なほも乳母を見ながら、私もお前にあつてうれしかつたよ。

乳母。ありが度うございます。お留守中にうかゞひましても、奥様に若旦那様からのお手紙を讀んで頂きまして、婆やは一日も早くお立派になつてお歸りになるのを待つて居りました。

愼次。お前何故私を若旦那様なんて云ふんだい。

乳母。でも只今ではお次ぎの方がみんな若旦那様つて申しますもの。私ばかり愼様とは申上げられません。

愼次。兄さんが生きてゐりやア兄さんが若旦那様だがねえ。

乳母。貴方様もお兄様によく似てゐらつしやいましたよ。

愼次。ナーニ似てゐるもんか。私は強つくばりで兄さんのやうに若死なんか出來やアしない。

乳母。めつさうな。若死なんぞなさつては大變でございますよ。

二人無言。別々の互にかけはなれたおもひ。

愼次。(壁上の額の一を指して)ごらん、兄さんの肖像だよ、似てるだらう。佛蘭西で友達の畫工に書いて貰つたんだ。

乳母。ハイ先刻程お孃樣がこちらのお部屋を見せて下さいました時拜見致しました。婆やは暫時御無沙汰致して居りましたから此のお部屋の出來上りましたのも存じません位で(改めて室内を見廻し)ほんとにお立派でございます。

愼次。さうかい。私は先の部屋がこはされて新しい部屋が出來ると聞いた時、なんだか殘念な氣がしたよ。

乳母。どうしてゞございます。

愼次。どうしてつて――矢張り長い間自分の部屋だつたんだもの。

酒を飮む。

乳母。此の頃はあがりますんですか。

愼次。ア、飮むよ。内緒で。内緒ならいゝだらう、誰も心配しやアしないから。

乳母。いけません、お大事なおからだに障りでも致しますと。

愼次。だけどね、酒でも飮まなくちやアつまらないや。

乳母。マア何故でございます。

愼次。何故つて。あんまりいゝ子になつてるとくたびれちまふんだ。――(乳母にはわからないらしいので)親孝行に厭きが來るといけないから息つぎをするんだよ。

乳母。なにをおつしやるんでございます。――婆やは自分のお乳を差上げた愼樣が西洋で異人よりもよくお出來になつて、立派になつてお歸りになつたのを見上げて、おちひさい時の腕白なお坊ちやまとは思はれませんでしたが、そんな我儘をおつしやると、よく婆やをぶつたりたゝいたりなさつた頃が思ひ出されます。

愼次。さうだねえ、私は癇癪持ちだつたんだねえ。自分でも虫が起つちやアわからずを云つて婆やをいぢめたのを覺えてゐるよ。(又飮む)

乳母。いゝ加減に遊ばさないといけません。

愼次。アヽ大丈夫だ。

再びグラスを手にしたのを氣付いてやめる。暫時無言。

愼次。婆や。――お前私を憎んでやアしないのかい。

乳母。(間)何をおつしやるんでございますねえ。私は自分の懷でお泣きになつたりあばれたりな

さつた愼樣がお成人なさつたのを見ておなつかしくは思へ、どうしてそんな事を考へませう。今でもお望みならいくらでもぶつなりたゝくなり遊ばしてもよろしうございますよ。

愼次。さうぢやアない。私の云ふのはそんな事ぢやアないんだ。（又無意識に飮みて）婆や――千代は如何したい。（グット眞面目になつたが亂暴に飮んだ酒は旣にもう利いてゐる）

乳母。マア。

愼次。達者かい。

乳母。（間、押へるやうに）愼樣。

二人互に見合ふが乳母はかへつてうつむいてしまふ。

愼次。私は今でもお前達に濟まないと思つてゐるよ。お前達が閑暇をとつて田舍に歸つてから間も無く、千代に養子が來たと聞いた時は實のところ私は安心した。それで全く自分の責任はなくなつたやうな氣がしたんだ。けれど自分のした事は忘れようたつて忘れられるものぢやアない。それにどんな人だか知らないが、その養子の人は私と云ふ者のあつた事はこれんばかしも知らないんぢやアないか。

乳母。そんな事――昔の事でございます。

愼次。昔は昔に違ひないが、だつておんなじ事だ。――養子との間に子供の生れた事も知つてるが今ぢやア幾人だい。
乳母。三人のお母さんでございます。
愼次。三人？　子供は養子に似てゐるかい。
乳母。末の二人はおやぢ似でございますが、上の女の子はおふくろ似でございます。
愼次。私には似てゐないかい。
乳母。お冗談もいゝ加減に遊ばせ。
愼次。だけど婆や、考へてごらん。幸ひ私との間に子供が出來なかつたからいゝやうなもの丶、若しあつたら如何するんだ。――私の子供があつたとしたら。
乳母。御冗談ばつかり――愼樣、過ぎた事ではございませんか。
愼次。しかし――一體お前達は私をどう思つてるんだ。少なくともあの當時は隨分恨んでゐたんだらう。
乳母。何もお恨み申す事はないぢやアございませんか。
愼次。ない事があるものか。私だつてまだホンノ子供だつたから別に惡氣もなかつたには違ひな

いが、それでも他人の娘を——なんぢやアないか。

乳母。イ、エ悉皆彼娘が悪いのでございます。愼樣は何も御存じないのに、あれが——彼娘が惡いのでございます。

愼次。何も御存じない事があるもんか、立派に罪を犯してゐるんだ。さうぢやアないか婆や。

乳母。イ、エ彼娘も手元に引取りまして此方樣に親子でつとめます迄は里子になんぞやつてございましたのですから、しつけが惡かつたのでございます。

愼次。婆や、お前正直に云つておくれ、私の云ふのは此處なんだよ。マアどつちがいゝも惡いもないが、兎に角出來てしまつたのを、それをお前片方は主人の息子だからつて云ふんで權柄づくで追拂ふなんて——。

乳母。マア權柄づくなんて、——イ、エもう奥樣が御心配遊ばしまして、もつたいない私共に迄お手をついてのお言葉——その上に充分のお心づけを頂きまして、私共が今日兎に角その日に困らずに安樂に暮して居りますのも、みんなお屋敷のおかげでございますから——ありがたいとは思へ、なんでお恨みなぞ致しませう。もうそんな事はお考へなさいますな。

愼次。フム。（不快な顔して無意識に酌いでのむ）

乳母。もう決してそんな事はおつしやいませんやうに。

無言稍長き間。

愼次。婆や――(間)私を千代に逢はしてくれないか。

乳母。そんな事が――御冗談をおつしやいまし。

愼次。なんだか一度逢つて見度い氣もするよ。

乳母。でももう野良仕事で眞黑なお百姓のおかみさんでございますよ。(二人無言)

小間使稍あわてゝ登場

小間使。若旦那樣奥樣のお歸りでございます。

愼次。(立上り)さうか、こいつをかたづけてくれ。

小間使手早く酒の道具を盆にのせて運び去る。乳母手傳ひ、小間使の殘し行きし拭巾で卓の上机の上の溢れを拭ふ。

妹。兄さん(聲と共に扉をあけて入來る。外から歸つて來た姿)――オヤ婆や。

乳母。お歸り遊ばせ。――今若旦那樣からいろ／＼お話を伺つて居りました。

妹。婆や、お前にもお土産があつてよ。

乳母。マアノ＼何時も婆やは頂き役で。
妹。今ね、あつちに置いて來たの。(云ひながら自分の持ち來りし紙包みをとく)これは私のお買物なの。(獨言のやうにしやべりながら半襟その他こまごました物を取出す)
乳母。マアおきれいですこと。
妹。兄さん見て頂戴。妙子さんにあげるの。(乳母に)これはね、お友達にあげるの。
乳母。おそろひでございますか。
妹。エ、私の仲よしの方でね、何んでもなるたけおそろひにするの。
乳母。結構でございますねえ。
妹。兄さん。(氣がついて)兄さん、どうなすつたの。御氣分が悪いの。
愼次。イ、エなんともない。
妹。アラあんな赤い顏して。――又お酒をめしあがつたんでせう。
愼次。イ、エ。
妹。嘘ばつかり、私富に聞いてチヤント知つてるわ。此間富が兄さんのお部屋からお酒の瓶を持つて行くのを見つけたんですもの。富は私が呼んでもサツサと行つてしまはうとするんでせう、

憎らしいから追掛けてとう〳〵白状させてしまつたの――時々召上りますつて。
愼次。さうか、かくしても矢張り知れるものだね。
妹。づう〳〵しいのね。それでも私お母さんにはなんとも云はなかつたわ。云つちやアいけないんでせう。
愼次。云つたつていゝさ。たゞ云はない方がなほいゝだけだ。
妹。だけどお酒はあがらない方がいゝのねえ婆や。なんだかお酒のみはきたならしくつて。
乳母。お嬢様のおつしやる通りでございます。めしあがらないに越した事はございません。

扉靜にあきて母入り來る。

母。オヤ婆やもこちらかい。
乳母。おかへり遊ばせ。ツイお出迎ひも致しませんで――ハイこちらにお邪魔して居ります。いろ〳〵お話を伺ひまして。
母。婆やにお土産を買つて來ましたよ。
乳母。左様ださうで、どうも何時でも頂きますばかりで。
母。今日のは私達のお土産ではなくて愼次のお土産だよ。

乳母。ありがたうございます。

妹。ア、私婆やのお土産を持つて來ませう。

母。イ、エ此處よりもあちらの方がいゝから――婆や、お前も一緒に行つて見ておいで。中の間のお棚の上にあるから。

乳母。ありがたうございます。ではお孃樣（二人扉口に行く）――奧樣も若旦那樣も御免下さいまし。

二人出で去る。間。

母。今日は大變早くお歸りだつたねえ。山内さんにもうかゞひましたか。

愼次。エヽ丁度お出かけのところでしたがお目にかゝりまして、先日お願ひして置きました事もお聞濟みで、萬事都合よく行きました。

母。それぢやア山内さんの銀行の方で使つて頂けるのかい。

愼次。エヽ來月から出る事にしました。今月はもう半分もありませんし、一先づ落ついてからにしたいと思ひまして。

母。何も急ぐことはありませんとも――貴方氣分でも惡いのかい。なんだか熱でもあるやうな顏をして。

愼次。イヽエなんともありません。
母。さう、それならいゝけれど――何處かでお酒でも頂いたの。
愼次。エヽ歸途に一寸友達の家によりましたら無理にすゝめられまして、ホンノ少しでしたが、ふだん飮まないものですから――顏でも赤ござんすか。
母。イヽエそれ程でもないけれど。――なんですか、山內さんでは今日も奧さんやお孃さんも出てゐらつしやつて。
愼次。エヽほんとに一寸きり居りませんでしたけれどお目にはかゝりました。
母。どうですあのお娘は。
愼次。どうつて事もありませんね。子供の頃は隨分お轉婆だつたが今ぢやアどうですかしら。
母。きりやうはそんなに惡くはないけれど、あの家は家庭が惡いし、それにあの子も學校の出來なんかおもはしくなかつたさうだし――山內さんぢやア貴方に貰つて貰ひ度いらしい樣子ぢやアないの。
愼次。どうですか。さうでもないでせう。
母。イヽエさうなんですよ。まだ貴方があつちにゐる頃からそんな話をチョイ〳〵なさつたもの

――あなたのとこのは何時おかへりですなんて度々おつしやつてね――ソウ〳〵今朝丁度貴方が出て間もなくでしたよ。又原田さんから電話でね、あの方はどうだらうつて事でしたがねえ――お父様も大變お氣に召してゐらつしやるし、艶(妹の名)はあの通り原田さんから始めにお話を伺つて自分の事のやうに乘氣になつてるのですし、私もいゝ御縁だと思つてね――マアきりやうはそんなにいゝとも云へないけれど、愛嬌があつて、それに英語や佛蘭西語もお出來たさうだし、お家の方は申分もないし、あちらでも大層望んでゐらつしやるのだから、(愼次の樣子を見て)――貴方ほんとに加減が惡いのぢやないの。

愼次。イヽエ別になんともありません。

母。でも風邪でも引いたんぢやないかと思つて。氣をつけないといけませんよ、西洋とは氣候が違ふんですからね。

愼次。エヽ、私は先の頃は足袋が大嫌ひだつたんですが、今ぢやアどうしても脫ぐ事が出來ませんよ。脫ぐとそれこそ足から風邪を引きさうで。

母。(をかしさうに、うれしさうに笑ひ)足から風邪を引くなんて。――(又思ひ出して)ねえ、今のお話も、此方はあわてないでもいゝんですけれど、彼方は何分二十を越してるのだから親御さん

にして見ればソウ〳〵愚圖々々もしてゐられないやうなわけで、あの通り原田さんの奥さんがヤツキになつてゐらつしやるのですから――けれど何も私達が貰ふのではなし、貴方の心持ひとつなんですから、今の内ならお斷りしたつてもかまはないんですよ。イ、エそりやアほかにいくらでもあるんですから――(愼次が默つて聞いてるのみなので言葉自然と絕ゆ)――此の間の寫眞はみんなまだ貴方の手元にあつたでせう。

愼次。エ、あります。(云ひつゝ机の曳出より數枚の寫眞、或はふくさに包み或は奉書に包んであるのを出して母に渡す)

母。(樂しみさうに一ッ一ッ取出して見る)ねえ、此の中でほかの事は別としてきりやうだけならどれが一番いいでせう。――此のお娘は學校でも評判の別嬪さんだつたつて云ふけれど私はハイカラ過ぎて嫌ひですよ。(他の一枚をとりあげ)それよりも此の方がかへつておつとりしてゐて可愛らしい。――(思ひ出した風で)それから弓が又何か妙子さんの事でも云ひはしませんでしたか。

愼次。イ、エ別に。

母。私も弓があんまりヤイヤイ云ふものだから一時はあの娘をとも思つたけれど――それにあの娘ならば、もつとも子供の時ではあつたけれど、あなたも見知つてゐる事だし、弓とはちひさ

い時からの仲善で、見たところはあの通りきれいだし心根も優しいから、私もツイその氣になつて度々手紙で云つてあげた通り心掛けてもゐましたが、他所から聞いた話ではあのお娘のお父さんも姉さんも、どうも惡い病でなくなつたらしく、あの娘だつて見るからが病身でそれに又陰氣でしてねえ、艶なんかはその話を聞くと大層反對しましてね、一體そんな早まつた事を貴方に聞かせたのは弓が惡いんだなんて云ひ出す、弓は又怒つて泣き出したりなんぞしてね。——それでも貴方の氣にさへ入つてるのならだけれど矢張り身體の弱いのは貰つた方でも一番ふしあはせでねえ。

母は言葉を切つて愼次を見ると、默々して聞いてゐるのみなので稍暫時つぎ穩なく見守る。

母。さうして見ると私は矢張り中村さんのが一番いゝやうな氣がするけれど、マアよく貴方の心持を聞いた上でなければと思つて、原田さんの方にも兎に角此のまゝもう少し待つて頂き度いつて御返事して置いたのですが——貴方は一體どうなんです。

愼次。私はもう度々申上げた通り、お父さんやお母さんのおめがねで家の爲にも私の爲にもいゝと思召したのがあれば、自分には決して異存はありませんから。

母。けれどね、それはいけませんよ。昔は息子の嫁でも親々が勝手にきめたものだけれど、それ

は矢張り今の時勢には合はないし、當人の貰ふのに親が兎や角云ふ事はマア物の理としてもないのですから、第一は貴方の心まかせ、貴方が欲しいと思ふのがあつたら私達に何も異存のあるわけはありませんやね。(長き間)お父さんだつて舊弊な事はお嫌ひで、マア貴方の爲にならない事は別として、なんでも貴方の望み通りにさせるとおつしやるんだから、此の事はよくよく考へて……。

扉あきて妹顔を出して覗き、又引込まうとする。

母。何か御用?

妹。(又顔を出して)イヽエ私お買物を其處に忘れて置いたから。

母。そんなら取りにいらつしやいな。(云ひながら寫眞をひとまとめにして妹の視線をよけようとする)

妹それを見てとり且母と兄との樣子に心しつゝ自分の買物をまとめ無言で出でゆく。

母。(見送りて)で、まあ急ぐ事はないにしても良緣と云ふものはさう澤山あるものではないのですから——中村さんのなら何處と云つて惡い處はないと思ひますがねえ——そりやア少しふけ過ぎてるかとも思ふけれど此の頃はどちらでも皆おそくお片附になるのだから、私共のやうに十四や十五で貰はれて行くなんて事はなくなりましたよ。それに貴方だつて長い間彼地にゐた

のだから、あんまり年が違つてもかへつてなんですし、丁度頃合ひだと思ふけれど――お父さんもお前からよく愼次の考へを聞いて置けとおつしやつてね――どうだらうねえ中村さんのでは。

愼次。私はもうお父さんやお母さんのお氣に入りさへすれば結構です、決して異存はありません。

母。ほんとに？　ほんとにさうだと私達も大變安心しますがねえ。なほ貴方もよく考へて……。

扉あきて妹。後から勉。

妹。兄さん、勉さんがいらつしやつてよ。私こちらにお連れして來たの。

母。マア勉さん、よくねえ。

勉。又お邪魔に上りました。先日は久しぶりで大變愉快でした。（愼次に）今日は天氣もいゝから又お低頭廻りかとも思つたが、かまはずに押掛けて見た。どうだい、ちつとはおちついたかい。

愼次。マア掛け給へ。おじぎももう濟んだよ。今日は奉公口のきまつたお祝ひだからゆつくりして行つてもいゝだらう。

勉。イヤ今日はこれから岡部の宅に寄合ひがあつて行かなくちやアならないんだ。實は君を誘ひに來たんだが、一緒に行つて見ないか。

愼次。ありが度う。

母。折角御馳走してあげようと思ひましたがお約束があつてはねえ。では御馳走はおあづけにしてお茶でも差上げませう。(妹に)貴方もチツト働いておあげ。

云ひつゝ立上りて出で去る。妹之に從ふ。

勉。なんだいお母さんの持つてたのは。寫眞だらう。

愼次。アヽ。

勉。矢張り候補者かい。

愼次。みんな勸工場物だよ。

勉。中村のはどうしたんだ。やめたのか。

愼次。やめるもなにもありやアしない、まだきまつたわけでもなんでもないもの。

勉。此間も云つた通り、あれはよした方がいゝよ。

愼次。ありがたう。しかしその話はやめよう、僕の知つた事ぢやアないんだから。

勉。(時計を出して見て)これから岡部のところへ一緒に行かないか。

愼次。御免かうむらう、少し氣分も惡いから。

勉。でもいゝ色をしてるぢやないか。晝間からやつてるのかい。

愼次。先刻みんなが留守だつたもんだから一寸引掛けたんだが、どうしたんだか大變よく利いてね。

勉。でも此間は原田夫人に聞かれた時白ばつくれて、イヽエ御酒は頂きませんなんて云つてたぢやないか。

愼次。面倒だからさ。うちでもなるべくは誰もゐない時ときめてゐる。母だつて知つて知らないふりをしてゐるんだらうが、兄貴の病身だつたのはおやぢの酒の最も旺んだつた頃に生れたゝめだと云つてるんだから、以前から僕なんかゞ飲むと嫌つたもんだよ。

勉。それでも飲むんだから始末がつかない――そりやアさうと、ほんとに行かないかい。

愼次。岡部んとこか。やめよう。

勉。でも一同此間出迎への時逢つたばかりで、何れ歡迎會をやらうつて云つてたんだが君が忙しくて日がとれないつて云ふからのびのびになつてるんだらう、一同兎も角も寄合つて新しい話でも聞き度い、それに又雜誌の方の新しい計畫もあるんだから是非もう一度君に娑婆ツ氣を出させたいつて云つてるんだから。

愼次。それにしても今頃から集つてどうするんだ。相變らずなんだかんだつて云つちやア寄合つて、あげくが何處かで飮まうといふ……。

扉あく。弓子自分で菓子器を持ち、小間使に茶盆を持たせて入來る。

勉。これははゞかりさま。（愼次に）珍しい事があればあるものだね。

愼次。それでも時々は働くよ、まゝごとの氣かなんかで。

妹。なんとでもおつしやい。

妹出て行きかける。

勉。ア、一寸々々。煙草がきれたからよろしく。

妹うなづいて去る。

勉。弓ちやんも馬鹿にきれいになつたねえ。

愼次。いかゞです。

勉。結構。――だがマア冗談は別としてだね。吾々の雜誌のそもそもの初めからかゝりあつた君が、フイと何にも書かなくなつてしまつたもんだから連中にして見れば意外でもあり殘念でもあり、それに筆を捨てた理由がわからないから何か吾々のやり口にあきたらないんぢやアない

かなんて考へる奴もあつてね――それも無理はないんだよ、たゞいやになつたからやめた、あきたからよしたぢやア誰も納得出來ないぢやアないか。

愼次。それで歡迎會にかこつけておびき出し、追つ取り圍んでつめ寄らうつて云ふのかい。

勉。そんなたくみもないけれど、つまり君の主張も聞いて……。

愼次。主張なんか無いつて幾度も云つたぢやないか。

勉。しかし吾々の方の立場から考へて見給へ、あゝさうかいで氣が濟むかどうか。筆を捨てた動機が若し内部から來たものなら君の思想の推移に影響した大きな力、なにかさう云つたものが其處にあると思ふ。

愼次。それは君達の方が無理だよ、僕は度々云ふ通りたゞ書き度いから書くだけで、別に何の目的もない、文藝を自分の事業だなんとも始めから思つてゐなかつた。だから書き度くなれば何時書くかわからない。たゞ今のところでは何にも書きたくないから書かないまでさ。

勉。君はいけない。頭を横にふり出すと單に頭を横にふるだけの快感を喜ばうとする。(いつか聲が少し高くなつてゐたので扉のあいたのに遲ればせに氣付く。獨語めかして)惡い癖だ。

妹シガレットケースと灰皿を持つて來る。

妹。（笑ひながら）何故私が來るとお話をやめるの。何か祕密の事？
勉。イヽエやめやアしませんよ。
妹。それでも默つてしまつたぢやありませんか。

笑ひながら出で去る。二人苦笑。

愼次。あいつはつまらない事に氣がついてしやうがない。廻り氣の強いところなんか僕にそつくりだ。
勉。しかし君のやうに引込み思案らしくはない。
愼次。フム。
勉。（煙草にとりかゝりながら）ねえ、なんでもいゝからさつぱりとやらうぢやないか。何か氣に喰はない事があつたらドシドシお互に云ひあつて改めて行けばいゝんだ。君の云ふ通りいやになつた、あきたからやめたにしても、いやになつたに就いて何か直接の原因――原因はまづいけれど、マアそんなものを聞かして貰はうぢやないか。
愼次。君は短い言葉で濟む事を長つたらしく云はせようとしてるんだ。いくら繰かへしてもいやになつたからやめたと云ふ他に答へやうがないぢやないか。僕のは何も「禁園」がいやだと云ふ

のぢやアないから、あの雜誌に就いて特にあきたらないなんて事もない。たゞひつくるめて文學及び文學にたづさはる事がいやになつた。興味がなくなつて冷汗が殘つたんだ。(次第に調子づく)

勉。それぢやア他人の書いたものを讀む興味もないのか。

愼次。そりやア別の話さ。しかし此の頃ぢやアいくら面白いと云つても、昔のやうに讀んでるとうれしいやうな悲しいやうな氣になつて涙のこぼれて來る、あんな心持は全くなくなつた、だから昔程面白くない。――他とは何の交渉もない自分一人の心持でおのれを忘れる程感激して讀み度いと思ふが駄目だ。自分は文士の一人だと思ひながら、他人と競爭するやうな氣も手傳つて、新しい物新しい物とあさつて讀む、あんな卑しい根性とは全く絶縁し度い。それよりも寧ろ「不如歸」や「小猫」に泣く無智な女の心持になれるものならなり度いと思ふ。

勉。君は矢張り涙を流して讀み度いのか。

愼次。ア、單純なものさ。初めは僕の文學に對する考へが全く誰一人とも一致しない事を知つて驚いたんだね。文學は男子一生の事業とするに足るや否や? 沈滯せる文壇、畫界、劇界を如何にして轉廻さすべきか? あゝ云ふ事を平氣で論じ合ふ心持を想像する事が出來なかつた。

それでも最初皆と一緒になつて、何か新しい旗色を鮮かにし度いなんて云ふ山氣はなかつたとは云へない。たしかにあつたに違ひない。だから雜誌の計畫のあつた時よろこんで仲間に入れて貰ひ、當座は浮調子でセツセと書いた。でも未だ單に書き度いから書く書き度くなければ書かないつもりでゐたんだ。ところが月々雜誌を出すためには是非とも各自に何かしらこしらへあげなければならない事になつたぢやアないか。若しかおやぢの命令で會社か銀行につとめる事になつたとする、朝は八時か九時から夕方は四時か五時頃迄毎日々々帳面を引くりかへしてもゐられると思ふ。初めからそんなものだと覺悟してゐるから——しかし藝術をそろばんと一緒には見度くなかつた、少なくとも上役からいひつけられる仕事とは一緒にしたくなかつた。ところが事實はそろばんとチツトモ變りがなくなつたから助からない。

勉。それでも君は全く書かなくなつてしまつたんぢやアないか。單に勞働じみた創作がいやだと云ふのなら、氣の向いた時に書けばいゝ。

愼次。だから氣が向きさへすりやア書くと云つてるぢやアないか。しかし火事場に行くと誰でも彌次馬根性になるやうに、筆を取つて書く氣になると矢張り渦卷の中に卷込まれてしまふからなさけない。卷込まれたら卷込まれたで、平氣でゐられる人は幸福だけれど僕のは年中心の中

で巻込まれ度くないともがきながら巻込まれて行くんだから苦しくてたまらない。――ヤット渦巻を脱した此の頃になつて考へて見ると、今迄人にまじつて自分のやつてゐた事が非常に不快に感じられて來た。

勉。フム。

愼次。よく吾々の連中も、自然主義が憲政擁護的に唱道された頃は二言めには人生だとか生活だとか云ひ度がつて、「僕は苦しい」なんて一人が云ふと、「僕も苦しいんだ」なんて云ひながら、わざと蒼い顏をしたがつたものだ。さうかと思ふと此の國にはもつたいない程の詩人中谷紅雨さんが眞ン中にせり出して來て、過ぎ去つた昔におもひを寄せると、急ちにして中學の制帽をかぶつた江戸の讃美者がムラムラと現はれる。吾々の仲間でも浮世繪がどうしたとか、歌澤にかぎるなんて云ひ出したぢやアないか。――又一方ではなんでもかんでも新しいものだ。イブセンが來るショオが來る、それが片端からお手輕に片付いて行く。はしりとさへ云やアなんでもかまはない、實際讀むより先きに飜譯にとりかゝるんだからねえ。勿論私自身も負けない氣になつて譯した。但し語學に餘裕がないからいゝ物を探すなんてぜいたくは云つて居られなかつた。お約束通りモーパッサンに始まつてワイルド、メーテルリンクと進んださ。原作者こそ

い丶迷惑だ。
勉。しかし君の飜譯は創作よりもかへつて評判がよかつたぢやないか。
愼次。だから益々いやになつた。一體どう云ふわけで此の頃はあんなに飜譯者をほめたてるんだらう。成程努力をしたに違ひないが、他人の車を汗みづくになつて坂の上に引上げる立ン坊の仕事ぢやアないか。僕は飜譯をほめられる時、車の持主から二三枚銅貨を手の平に受取つて、晩に飮める酒の匂ひを想つてる立ン坊のよろこびをしてゐたんだ。
勉。君は比喩の面白さで眞實を忘れてゐる。一體吾々の時代の文學が今日迄の進歩を遂げたのは皆飜譯の力ぢやアないか。
愼次。勿論飜譯のおかげは認めてゐる。しかし飜譯の效果と、飜譯をすると云ふ事は別ぢやアないか。だから僕は立ン坊の勞働に對してその效力を認めるよ、けれども立ン坊を尊敬する氣にはならない。――一撥根性をうつちやつて馬鹿々々しくてもい丶から吾々のいぢけた黄色い平べつたい顏をゆつくりと鏡にうつして眺めてゐ度い。
勉。君のはなんでも流行るものが癪に障るんだ。かへつて卑怯だよ。
愼次。さうかもしれない。――しかしつまりは此の息もつかせないかけつくらの私は落伍者だよ。

一度も先頭になつた事がなくて、もう息が切れてしまつた。だから道ばたの捨石に腰掛けて「ミツワまだベルグソンには氣がつかず」つてな事を云つてヤニ下つてしまひ度くなつた。

勉。君は駄目だ。二言めには横町に曲つて、人をやり過す事ばかり考へる。吾々はそんな事では満足しない……。

愼次。だから君達は落伍者をうつちやらかして行き度いだけ行けばいゝんだ。幸ひに皆語學が達者だから一度も見た事がなくつても未來派立體派の繪畫を論じる事も出來る。その人の作品を讀んだり味つたりする手數をかけないでも、西洋のオーソリテイーの論文を讀めば近代作家の特色を論評する事も出來る。――考へて見ると僕はちひさい時から知識慾がなかつたやうだ。知る事は僕に於てはよろこびでない、感じる事を求め度いんだ。

勉。それでも君の今の態度は何物をも求めてゐないぢやアないか。

愼次。求めないで居られゝば結構だけれど。――僕は隱居の心を求めて居るにちがひない。

扉があいたので氣がついてやめる。

妹。(勉に)岡部さんから電話よ。

勉。私に？　(立上らうとする)

妹。もう切れたの。早くいらつしやいつて、皆さん先刻から待つてらつしやるんですつて。(妹そのまゝ室内に立つて居る)

勉。ありがたう。

妹。兄さんもお出かけぢやアないの。

愼次。イヱ。

勉。行かうぢやアないか。くどいやうだけど。

愼次。今日はマア御免かうむらう。

勉。(時計を出して見て)それぢやア僕はそろそろ行かなくちやアならない。——イヽヨいづれゆつくりお談義に來るから。——(立上る)ぢやア今の處矢張り何も書いてはくれないんだね。來々月は飜譯號を出すつもりなんだが立ン坊は御免とあつちやアしかたがない。——それでも今日は大にしやべらしてやつたから愉快だつた。

愼次。酒の加減さ。

勉。それぢやア又來よう。(愼次の立上るのを見て)——お見送りには及ばないよ。左様なら。

愼次。ぢやア皆によろしく。

勉出て行く妹見送りのために從ふ。愼次おしやべりの後の不快に機嫌惡く無言にて殘る。間もなく妹室内に入り來る。

妹。勉さんは矢張り雜誌の事でいらつしやつたのね。何か兄さんにもお書きなさいつて？

愼次。ア、。

妹。お書きにならないの？

愼次。ア、。

妹。何故？

愼次。そんな事どうでもいゝぢやアないか。書き度くなりやア又書くよ。

妹。妙子さんなんか始終さう云つてらつしやるのよ。何故此の頃はお書きにならないんでせうつて。

愼次。餘計なお世話だ。

妹。あの方はほんとに文學の趣味がおありになるのよ、學校の作文なんか記事文でも候文でもそれはそれはきれいな文章をお書きになつて、私うらやましい位だわ。（横を向いて聞いてもゐない兄を見つめた後）――兄さん、（間）兄さんにお話があるの。

愼次。なんだ、音樂會か。
妹。イヽエそんな事でなしに。――兄さん、私眞面目に伺ひ度い事があるの。
愼次無言にて妹を見る。間。
妹。兄さん、何時か私のあげた長い手紙を覺えて居らつしやつて。
愼次。どの手紙さ。
妹。あの、妙子さんの事を書いたでせう。
愼次。ア、それならお前からもお母さんからも度々聞かされたものだ。
妹。さうして兄さんもお母さんへの御返事にそんなにいゝ人なら貰つてもいゝつておつしやつたでせう。
愼次。ア、。
妹。あれはほんと？　ほんとに妙子さんをお貰ひになるの。
愼次。そんな事はお前の知つた事ぢやアない、誰を貰はうとかまはないぢやアないか。
妹。イヽエさうぢやないの。ただ兄さんが貰つてもいゝつておつしやつた、あれはほんとかどうか伺ひたいだけなの。

愼次。ほんとだよ。
妹。さう、それぢやあの中村さんのをお貰ひになるんぢやないの。
愼次。どうだかしらない。
妹。だつて妙子さんを貰ふつて云つたぢやありませんか。
愼次。誰が貰ふなんて云ふものか。貰つてもいゝつて云つただけだ。
妹。ぢやア、あの中村さんのを貰ふかも知れないの。（愼次のうなづくを見て）それぢや妙子さんを
貰ふつて云つたのは嘘ぢやありませんか。
愼次。嘘ぢやない。――お父さんやお母さんのきめて下さつた方を貰ふのさ。
妹。だつて結婚て云へば一生に一度の事ぢやありませんか。兄さん御自分の事ぢやありませんか。
いくらお母さんや姉さんがあの人がいゝつて――あんな人――私あんな人義姉(ねえ)さんになんか出
來ないわ。
愼次。でも皆のおめがねにかなひ、私も貰ふと云つたらしかたがないぢやアないか。何もお前が
いやだと云つたからつてどうともなるんぢやアない。
妹。そりや兄さんは何(なん)にも御存じないからだわ。

慎次。何を？

妹。何をつて――あの人は隨分評判だつたんですもの。

慎次。評判なんかあてになるものか。

妹。けれども評判にもよりけりだわ。兄さんなんか何にも御存じないんだわ。

慎次。どんな評判だい。

妹。どんなつて。（はづかしさうに口をつぐむ）

慎次。（それを皮肉な興味で見てゐる。稍しばらくして）云つてごらん、云はなきやアわからないぢやアないか。

妹。（間）でもあんまりなんですもの、（間）私の學校の人だつて知つてる位なんですもの。

慎次。（笑ひながら妹を見てゐる。無言の後）云ひにくけりやア私の方で云つてやらう。――お前の知つてる位の事なら私だつて知つてるよ。

無言。

妹。（聲も變つて）知つてゝ何故品行の惡い人なんか貰ふんです。

慎次。評判なんか氣にしてゐてはきりがない。

妹。いくら評判だつて、誰だつて知つてるんですもの。

愼次。それでもお母さんも姉さんも知らないぢやアないか。

妹。そりやお母さんや姉さんは御存じないでせう。だけど兄さん御自分が御存知ならそんな人費へないぢやありませんか。

無言。妹うらめしさうに愼次を見詰む。

妹。(泣聲になり)兄さん、ほんとに眞面目(まじめ)になつて云つて頂戴な。

愼次。眞面目ぢやアないか。

妹。私もうい丶わ。どうしても兄さんがそんな事ばかり云つてらつしやるなら、お母さんにあの人の事すつかりお話するから。

愼次。馬鹿、餘計な世話を燒くな。

妹。でもお母さんは何(なんに)も御存じないからあんなにヤイヤイ云つてらつしやるんですもの。私どうしても教へてあげなくちやア。

愼次。そんな事をするんぢやアない。――(稍長き間)そんなら私がすつかりお前に話してやらう。

愼次暫時言葉をと丶のへ心持をと丶のへるために努む。

愼次。お前は妙子さんとは仲善なんだらう。
妹。エヽ。
愼次。それからお前は私のためを思つて、中村のは品行が悪いからいけないつて云つてくれる。
（妹うなづく）そんなら自分の仲善に不品行な亭主を持たせてもいゝのかい（妹無言で兄を見る）――
（間）不品行は不品行同志でいゝぢやアないか。
妹。兄さん。
愼次。お前は何もしらない。默つてゐりやアいゝんだ。
妹。イヽエ私知つてます。――（稍長き間。云ひにくさうに）千代の事でせう。
愼次。そればつかりぢやアない。しかし誰にそんな事を聞いたんだ。
妹。誰につて、そんな事夙くに知つてるわ。
愼次。知つてゝ何故仲善をそんな男に押付けようとする。
妹。だつて兄さん――。
愼次。兄さんなら不品行でもかまはないのか。
妹。さうぢやアないけれど――。

愼次。自分の事にして考へてごらん。自分がお嫁に行く先きの人が以前女中とくつゝいて……。
妹。(止めるやうに)兄さん。
愼次。ごらん、自分だつてそんな男はいやなんぢやアないか。しかし男なんてそんなものだ。さうして大概の人は過ぎ去つた事なんか思ひ出しもしないんだが、私にはあの事丈は心がとがめて忘れられない。これも矢張り性分だらう。(次第にしめやかになる)それに――それに此の事は誰も知らない、私の他に誰もしらない事だけれど、死んだ兄さんと私とは千代に對しての競爭者だつた。
妹。(驚いて)大きい兄さんが。
愼次。(うなづく)私は喧嘩をしても溫和しい兄さんには負けなかつたやうに、此の競爭でも出しぬいてしまつた。(間)人前は別として私と兄さんとが口もきかない仲になつてしまつたのも人の知らない事だ。間もなく事はバレて千代は出される、婆やも一緒にひまを取つてしまつたが、一方兄さんが病氣で年中藥を飮むやうになつたのも、それからあんまり後の事ぢやアない。――そりやア兄さんの病氣に關係のあつた事ぢやないけれども、私にして見ればそれから長くわづらひ通して、とうとう死んでしまふ迄仲なほりの出來なかつた事を考へると、私は誰にと

云ふよりも自分自身の氣がとがめる。あの長わづらひの間、日一日と血の氣の失せて行つた絕えず冷い笑を湛へてゐた蒼白い顏に、何時も濡れて輝いてゐた瞳でヂツト見守られると私の心はもの〻怖れに震へていぢけて行くやうだつた。——勿論千代の行つてしまつた當座はヤケの方が強かつたから、生意氣なヤツト筒袖を袂にかへたばかりの小僧が茶屋酒を飲んで步いたぢやアないか。

妹。(暫時考へて)兄さん——でも過ぎた事だわ。

愼次。過ぎた事ならい〻のかい。

妹。だけど私兄さんの心をよく知つてます。若し兄さんのそんな事が妙子さんに知れても妙子さんはキツト兄さんの罪を許すに違ひないわ、彼の人……。

愼次。何を云つてるんだ。私は許して貰ふ事なんかありやアしない。

妹。イ、エそりやア私の云ひちがひです。ただキツト妙子さんは——それでも兄さんのところによろこんで來るだらうと思ひます。

愼次。フム。

妹。兄さん後生だから彼の方貰つてあげて頂だいな。私もうキツト兄さんのとこに來るやうにな

るんだと思つて――だつて兄さんも貰つてもいゝなんておつしやつたんですもの。

愼次。それぢやお前はあの人に何かそんなやうな事迄しやべつたのかい。まさかそんな馬鹿な事はしないだらう。

妹。イヽエ私何も云やアしませんけれど、お母さんはチョイチョイそんなやうな事をおつしやつたわ。

愼次。お母さんが。

妹。エヽお母さんも一頃は妙子さんでなくちやアならなかつたんですもの。貴方のやうな方が來て下さるとなんて、よく妙子さんにおつしやつたわ。

愼次。馬鹿な。どう云ふつもりなんだ。

妹。でもお母さんにしてみれば無理もないわ、年中兄さんの事ばつかり想つてゐらつしやつたんですもの。

愼次。それにしても亂暴過ぎるよ。たゞさへ結婚とか家庭とか云ふ事を無闇にきれいな事として、美しく夢見て居る若い女にそんな事をほのめかすなんて。

妹。ねえ兄さん、私もう此の事ばつかりがお願ひなの。――妙子さんだつて兄さんのところなら

……。

愼次。でも私の身持は知らないんぢやないか。

妹。イヽエ私が殘らず打明けてお話してもキツト大丈夫よ。

愼次。でも結婚してから後の事は受合へまい。

妹。後の事つて。

愼次。私は矢張り惡いことをするかもしれない。

妹。兄さん、もうほんとに冗談はよして頂だい。そんな事ないぢやありませんか。

愼次。ないかどうかわかるもんか。

二人暫時默して在り。

妹。イヽエどんな事があつても――私妙子さんがどんな氣で兄さんのお歸朝を待つてらつしやつたかと思ふと――。

愼次。みんなお前やお母さんが勝手にそんな風に持ちかけてしまつたんだ。その責任を私にしよはせようつて云ふのか。

妹。さうぢやアないんですけれど。兄さんだつてあの人は美しくておとなしくていゝなんて度々

おつしやるぢやありませんか。

愼次。そりやア別の話さ。私だつてどうせ貰ふなら美しいに越した事はないけれど、お父さんやお母さんのお氣に入つたのがあるならそれを貰ふのに躊躇しない。

妹。だつて兄さんの奥さんぢやありませんか。兄さんのお氣に入つた人を貰ふのが當り前ぢやありませんか。

愼次。さう云ふけれど自分だつて私に友達を押つけようとして居るぢやアないか。

妹。だつて兄さんだつてほんとはお氣に入つてらつしやるくせに。

愼次。ナーニほんとの事を云へば私は當分結婚はしたくない。けれどもそんな事を敢て口に出す勇氣も私には無いやうだ。

妹。そんならお母さんや姉さんがヤイヤイおつしやるから、中村さんのを貰つてもつて云ふんでせう。(うなづくを見て)ぢやア、若しお母さんが矢張り妙子さんの方がいゝとおつしやつたら。妙子さんを貰つて?

愼次。貰ふかもしれない。

妹。そんなら私お母さんにあの人の事を殘らずお話して――それから、いくら姉さんに叱られた

つてかまはないから私姉さんにもソウ云つて、どうしてもあんな人なんかやめさせるわ。
愼次。馬鹿な事をするもんぢやアない。そんな事をしたつて誰の爲にも爲りやアしない。何も知らない人に世の中を疑ふ心を起させるばかりだ。
妹。かまひません。私どうしたつて家の爲にも兄さんの爲にも默つては居られません。
愼次。生意氣な事を云ふな。いくらそんな事をしたつてお前の仲善を貰はないとしたらどうするんだ。
妹。(又も泣きさうになる)だつて貰つてもいゝつて云つたぢやありませんか。
愼次。私は云つたさ。しかしあの人は身體が弱いからいけないつてお母さんは云つてらつしやる。
妹。そんな事、姉さんが云ひ出したんだわ。お父さんもお姉さんも早くおなくなりになつたには違ひないけれど、妙子さんを肺病だなんて姉さんもあんまりだわ。
愼次。そんならお母さんや姉さんばかりでなく、身體の弱いのは危険だから、第一私がいやだと云ひ出したらどうするんだ。お父さんやお母さんは身體の丈夫な嫁を貰つて一日も早く孫の顔を見度いと云つてらつしやる、その方から見れば私はつまり子供をこしらへる期待をしよはされてゐる事になる。だが——(云ひよどんで)私はどんな事があつても子供丈は欲しくない。

妹。（ちひさな震へ聲）どうして。

愼次。どうしてゞも。――（長き間）私は丁度外國へ行く少し前からどう云ふものか大變氣が弱くなつてしまつた。お父さんにもお母さんにも、もう私を育てようと云ふ氣は無くなつて、私を賴みにしようと云ふ心持ばかりになつてゐらつしやる。私は親よりも強者の地位に立つてる事に氣がついた。それからと云ふものは、日一日と私の目の前でみすぼらしく、老い衰へて行く、お父さんやお母さんを平氣で見てはゐられなくなつた。なんでもいゝ、曲つた事であらうとも、父母には逆らうまい、自ら自身の希望――もしそんなものがあるならばそれも捨てようと……。

扉あきて小間使。これより先き妹は涙。

小間使。お食事でございます。

愼次。よし。直ぐ行く。

小間使退場。

愼次。しかし私のやうなものはいくら努めても實際は其の境地迄行く事は出來ないらしい。本來反對に行く可きものを矯めようとする心があるから、どうしても寂しさを感じて來る。さうしてから云ふ心持から自分には親と子の情愛の切つても切れない複雜さがしみじみ感じられて來

た。親は如何に子供を愛しても時代の相違、思想感情の相違から到底自分の子供を理解する事は出來ない。私は、お父さんやお母さんがどんなに自分を可愛がつて下さつたか、賴りにしてゐらつしやるかと思ふと意氣地が無くなつてしかたがないが、それと同時に自分自身は親となつて我が子の爲に親としての苦勞はし度くないと思つてゐる。――親に對する自分を責める心から親にはなり度くない。

二人とも無言。

愼次。(氣がついて)サア食事に行かなくちやァならない、お母さんが待つてらつしやるだらう。
妹。兄さん。それぢやアどうしても妙子さんを貰つてあげないの。
愼次。私はお母さんのおつしやる通り、姉さんの骨折り通り、結婚するときめてゐるよ。
妹。兄さん。(全く泣聲)
愼次。さうして、いかにもがいても私のやうな卑怯者は臆病ないゝ子になりすましてしまふんだらう。いやだなんぞと云ひながらも、何時の間にか澤山の子供の親になるかもしれない。
妹。兄さん。
愼次。(立上らうとしながら)サアめしだ。行かう。

妹。（誘はれて立上つたがこらへきれず）兄さん。（いきなり愼次の膝にすがりて泣く）

扉の外のけはひに愼次あわてゝ妹を引起すやうにする時、扉あく。

母。御飯ですよ。（室内の樣子を見て）マアどうしたんです。

愼次答へず、母のあけたる扉の外に去る。

母。（妹に近寄りつゝ）どうしたと云ふんです。

床の上に泣き伏したる妹、立上るやいきなり母の胸に縋りてはげしくすゝり泣く。

妹。お母さん。（聲涙に消ゆ）

暫時そのまゝにて――幕。

（大正二年八月二十日）

武士と町人と狼

第一景

山の麓の休茶屋。新綠の頃。

武藝修業者が茶碗で酒を飲んでゐる。

武士　おやぢ、もう一本つけてくれ。田舍にしてはいゝ酒だ。

亭主　皆さんがほめて下さります。

町人急いで來る。

亭主　旅の衆、休んで行かつしやらぬか。

町人　さうだなあ、お茶でも貰つて行かうか。

腰かける。

町人　ありやうはいつぺいやつて行きていところだが、先刻向ふの村でいやな話を聞かされたものだから、日の高いうちに峠を越してしまひ度いと思つてね。
亭主　いやな話とはそりやあどんな話で御座いますね。
町人　お前なんざあ知つてるだらうが、つい此間この上の峠で旅の娘が狼にやられたつていふぢやあねえか。見るも無慘な死態で、眞白な手や足が草むらの中にばらばらになつてゐたつて。まだ十八九の娘だといふのに、もつたいない事をしやあがる。
亭主　そりやあこんな山の中の事だから、熊や狼も出て來ますのさ。その娘はつい其處の、お前さんの腰かけてゐる處で、辨當をつかつて行つたが、ぽつちやり肥つた可愛らしい子だつた。あれぢやあ狼だつて見逃しては置くまい。
町人　冗談いつちやあいけねえぜ、可哀さうに。だがなんだつてそんな綺麗な娘が、一人でこんなところを通つたんだらう。よしんば狼が出ねえにしても、骨迄しやぶらうつていふよくねえ奴もあるだらうぢやあねえか。
亭主　江戸へ出たつきり歸つて來ないおやぢを探しに、おふくろと二人で國を立つた途中、おふくろは病氣で死んでしまつたとか云つてはゐたが、ほんとの事か噓の事かわかりませんよ。

町人　かさねがさねふしあはせな女もあつたものだなあ。

亭主　世の中の事はみんなそんなものだ。ふしあはせな奴はどうもがいてもふしあはせ、しあはせな奴は何をしてもしあはせだ。

町人　悟つたやうな事を云つてやがら。だが、ほんとに狼が出るのかい。

亭主　出るともさ。夜になるとこゝいら迄のそのそ出て來やあがるんだから。

町人　そいつはかなはねえ。けれども晝間なら大丈夫だろ。まさか此のおてんと様のぴかぴかしてゐるさなかに、いくらみさかひのねえけだものだつて、人間様を喰はうとはいふまいぢやあないか。

亭主　それは受け合ひませんね。

町人　受け合はない。おどかしちやあいけねえぜ。話できいても、繪雙紙で見ても、氣のきいた狼は大概杉木立の向ふにお月様をしよつてらあ。

亭主　何もおどかすのではないけれど、晝間だから出ねえ、夜だから出るときまつたものでは御座いません。毎日毎日うろついて居るわけでもないけれど、畜生のあさましさで、何時なんどき出て來ねえともいはれない。お前様が晝間ならきつと出ねえかなんて云はつしやるから、出

ねえ事もねえと云つたまでさ。

町人　何もさう依怙地にならなくたつていいやな。

亭主　依怙地といふわけでもねえけれど、相手が畜生の事だから、お前様のいふやうに、晝間なら出ねえ、夜なら……

町人　わかつた、わかつた。江戸子は氣が早えんだ。さ、もういつぺいお茶を貰つて、日の暮れねえうちに峠を越しちまはう。此の難場さへ無事に通れば、晩には旅籠で風呂に入つていつぺいやつて、樂々と手足を延ばす事が出來るんだ。また狼に喰はれて死んぢやあつまらねえや。

ぐつと飲んで、勢よく立上る。

町人　とつつあん、置いたよ。

亭主　難有う御座ります。氣をつけて行かつしやれ。

武士　町人々々。

町人　わつちですかい。

武士　外には誰もゐやあせん。

町人　何か御用で御座いますか。

武士　どうだ、ゆつくり飲んで、身共といつしよに行く氣はないか。

町人　成る程。お武家様でも狼はおつかねえから、道つれをこしらへて行かうつていふんですね。

武士　たはけ者め。狼の十疋二十疋何がこはい。信濃の國を遍歴してゐる時、戸隠山で熊に出あひ、たゞひとうちに撲ち殺した身共だ。飛驒の山奥へ分入つた時は、山男と相撲をとつて、三番が三番とも勝つた身共だ。鞍馬の山では義經公の兄弟弟子の天狗と力くらべをしてみん事鼻を折つてやつた身共だ。

町人　へえゝ、豪傑だね。さういふ旦那のおともをして行けば、こつちも氣が強いや。ですが、矢張り日の高いうちに出かける方が悧巧ですぜ。第一お酒を戴いては、坂道で息が切れて爲方がありませんや。

さういひながら又緣臺に腰を下す。

武士　一升二升の酒で息が切れてどうする。日が暮れようが夜にならうが、身共が同道するからは安心してゐろ。痩狼がうろついてゐたら、旅の娘の仇をうつて妄執をはらして呉れるわ。まあ、此處へ來ていつぱい飲め。

茶碗をさしつけて酌をする。

町人　あゝ、うめえ。
武士　もう一本熱くしてくれ。
町人　實は先刻から旦那の召し上つてゐるのを横目で見ながら、羨ましくて堪らなかつたんです。狼の噂でおびえ切つた腹の中へ、きゆうつと沁み込んで行きやあがら。
武士　旅のうさはらしは酒に限る。貴樣もなかなかいける口だな。
町人　いけるいけないぢやありませんや。はゞかりながら親代々の身上を、美事に飲んでしまつたあつしでさあ。
武士　嘘を申すな。親代々の身上などのあつた風では無い。貴樣はごまの蠅だらう。
町人　冗談いつちやあいけませんよ。人ぎきの悪い。
武士　どうも堅氣の商人といふ形で無い。さりとて眞面目な職人とも見えない。第一その眼つきがよくない。
町人　旦那、そりやあ可哀さうですよ。あつしだつてれつきとした神田鍛冶町の角の乾物屋の若旦那だつたのですが、今もいふ通り身持が悪く、誰に教はるともなく飲むわ、うつわで、忽ちすつてんてんとなり下り、役者の下廻りになつたり、相撲の呼び出し奴になつたり……

武士　出鱈目はよせ。貴様はごまの蝿に違ひ無い。さあ、ごま。いつぱいつかはさう。

町人　おちぶれ話に嘘をついたつて始まりませんや。旦那のやうに熊を撲り殺したとか、山男と相撲をとつたとか、天狗の鼻を折つぺしよつたとかいふ武勇傳なら法螺の吹き榮えもするけれど……

武士　これこれ。身共が何時法螺を吹いた。嘘だと申すなら、よし、力だめしに……

　　あたりを見廻し、いきなり傍の立樹に手をかけて半分ひつこぬく。

亭主　あゝもしもし、お武家様。手荒な事はして下さるな。その柿の木は秋になると鈴なりに實がなります。めつたな事をされてはかなはんわ。

町人　大した馬鹿力だなあ。旦那は全く豪傑でいらつしやら。これなら狼が出て來たつて大丈夫だ。まるで大根を引つこぬくやうなものだ。

武士　酒だ、酒だ。

　　昂然として又飲む。

町人　宮本武藏だとか荒木又右衞門だとかいふのは講釋で聞いて居たが、目の前に斯ういふ強い方がゐようとは思はなかつた。旦那は矢張り武者修業つてやつですか。

武士　さうだ。武者修業だ。天下太平で腕を振ふ時節が無いから、諸國を廻つて武藝くらべを致すが、未だおくれをとつた事は一度も無い。此の上は天魔鬼神妖怪變化を探し出して相手を申しつける外は無い。折角磨いた武道の奥義も、寶の持ち腐れで張合ひが無い。伊吹山ではやまたの大蛇を退治し、羽黒山では荒鷲を手どりにし、大江山では渡邊綱が羅生門でうちもらした彼の片腕の鬼をいけどつたが、近頃とんと痛快な事に出あはない。何とかして今日こそは狼共に出會なし、彼奴等の生膽を喰つてやり度いものだ。

町人　成程ね。あつし達は命に別狀の無い世の中で、月雪花を眺めてうめぇ酒が飲み度いと念じて居るのだが、おさむらひさんといふものは、世の中が物騷でなくては面白くないのですかい。鎧だの兜だのつていふ子供の喜びさうな物を身につけて、ちやんちやんばらばら殺しつこしなくては氣が濟まねぇと見える。

武士　英雄豪傑の心事は町人にはわかるまい。腕節の強い者が城を取る、國を取る、天下を取る。これ程愉快な事は無いではないか。はつきりしてゐるんだ。強いものが勝つて、弱い者が負けるのだ。はつはつはつはつ。

町人　ですが、いくら強い人だつて、多勢に無勢ぢやあかなひますまい。楠公さんだつて眞田幸

村だつて、軍勢が足りなくては勝てねえんだ。旦那がなんぼ豪傑でも、たつた一人で戰に出るわけにも行かないでせう。
武士　なんの十人二十人四方からうつてかからうとも、斬つて捨てるはわけなしだ。
町人　十人や二十人ならどうにかなるかもしれませんか、百人二百人とたかつて來たらどうします。
武士　さうなる上は是非に及ばぬ。我が大刀のつゞく限り、斬つて斬つて斬りまくり、死人の山を築いた上で、いさぎよく斬死する覺悟だ。
町人　つまらねえぢやありませんか。芋を切るやうに人間を殺したあげく、自分も死んでしまふんぢやあ、誰一人儲かる奴はありやしない。どうせ自分も死ぬのなら、一人も殺さないうちに殺されてしまつた方が天下のお爲だ。
武士、貴樣は口のへらぬ奴だなあ。兎角轡虫のやうな奴はよくさへづるわい。
町人　人をがちやがちやにするのはひどいや。
武士　そんならごまの蠅か。
町人　なほ惡いや。

二人聲を揃へて笑ふ。

武士　酒だ。酒だ。

亭主　酒はすつかりになりました。此の節は日に一升と賣れる事は無いものだから、たんと置いて御座いません。それなのに旦那一人で二升も召上つたものだから、雫一たらしも殘てゐやあしない。しまひには大分水を割つて續けて見たが、もうからくりをするもとが無くなりました。

武士　怪しからんおやぢだ。水を割つたのか。

亭主　酒に水を割つても氣が附かないのだから、水に酒を割つてもわからなかつたかもしれない。

武士　むちやを申すな。

亭主　二升の酒があれば、わしらなら一月樂しむ事が出來るのに、どうしてさう無駄に飲むものか。

町人　違えねえ。英雄豪傑は無駄なものだつてね。

武士　何を申す。無禮を申すと手は見せんぞ。

町人　かんにんしておくんなさい。その見せない手といふ奴は、峠の上で狼に見せてやつて下さ

い。さ、酒の無いのがいい切上時だ。いくら豪傑をおともにつれてゐても、日が暮れては薄氣味が悪いや。そろそろ出かけようぢやありませんか。

武士　おやぢ、然らば鳥目を置くぞ。

亭主　難有う御座ります。お大事にお出かけなさいまし。

武士と町人上機嫌で連立つて行く。

第二景

峠の頂上。町人先にあらはれる。

町人　あゝくたびれた。ほんのちつとばかりだが酒をくらつたものだから、すつかり汗をかいちやつた。おゝい、おさむらひさあん。へん、えらさうな事ばかり並べやあがつて、やれ天狗を退治たの、熊襲たけるをぶつたぎつたのと、大法螺を吹きやあがる癖に、づうていがでかいも

のだから、坂道にかゝるとから意氣地がありやあしねえ。ざまあ見やがれ。えつちらおつちらやつてやあがら。おゝい、おゝい。

武士汗を拭きながらあらはれる。

町人　大將、大分參りましたね。どうです、あつしの脚の早いのには驚いたでせう。

武士　流石はごまの蠅だ。いや、どうも暑い暑い。二升の酒が五六升の汗になつた。

町人　こゝで一息入れませう。ひやつこい風がいゝ氣持に吹いて來ますぜ。

武士草の上に腰を下す。町人斷崖にのぞむ一枚岩の上に乘出して。

町人　絶景々々。どうだい、海も見えれば川も見えらあ。

武士　おいおい、あぶない眞似はよせ。

町人　なんの危ない事があるもんですか。まあ此處へ來て御覽なさい。素晴らしい見はらしだから。

武士　こゝからでもよく見える。君子はあやふきに近寄らずだ。

町人　へん、旦那も君子とは云へませんぜ。羽黑山で荒鷲をとつつかまへたり、鞍馬山で天狗と相撲をとつたり、なんでも強い奴に廻りあひ度いなんて、さういふのを何とか云ひましたつけ。

暴虎馮河の勇か。

武士　生意氣な事を申すな。山河を跋渉して妖怪變化猛獸毒蛇を退治するのは、我が武勇を磨く爲ばかりでは無い。人間に危害を與へるもの共を、此の世の外に追ひやつて、天下に事なからしめんが爲だ。諸國の武藝者と手合せをし、場合によつては眞劍勝負に及ぶのも、膽を練つて事ある時におくれをとらぬ爲だ。

町人　そんな事を云つたつて、萬一旦那の方が負けたらどうします。たつた一つの尊い命もふいになつてしまふぢやありませんか。

武士　はははは、身共は未だ負けた事がないのだ。

町人　ですがね、若し負けたとしたらさ。

武士　負けはせんといふのに。

町人　旦那も強情張りだなあ。

武士　身共のかなはぬ程の相手が此の世の中にゐてくれゝば本望だ。命一つや二つ喜んで進上するわ。

町人　人の命も澤山とつたとおつしやる丈あつて、旦那は命を無雜作に御扱ひになるんだなあ。

あつしなんざあ命が惜しくて惜しくて堪らねえや。

武士　そんなに命を惜しがる奴が、なぜ危い崖端へ出て谷底なんぞのぞくのだ。命が惜しければ引込んでゐろ。

町人　崖つぷちに出た位で命に別狀があつてたまるもんですか。旦那も存外度胸が無えなあ。あつしやあ旦那のやうに劍術も出來ねえし、力もありませんが、足腰はしつかりして居ますぜ。第一坂道を上るのなんざあ、比べものにならなかつたぢやありませんか。

武士　わかつた、わかつた。歩く事丈はかなはん。

町人　歩く事丈ですつて。外にもあつしの方がたちまさつた事がありさうだがなあ。

武士　なんの、外に貴樣などに負ける事は何も無い。

町人　さうかしら。先程は御馳走になりましたが、旦那いつたいどの位めし上るんです。あつしは何しろ神田鍛冶町の角やしきを飲みつぶした豪の者だ。なりこそこんなに細つこいが、日に一升づゝ三度戴いて、二十里の道はすつ飛びますぜ。

武士　ごまの蠅にはごまの蠅丈の強味がある。身共は歩く事は貴樣にかなはんよ。しかし酒なら負けはせんぞ。未だ曾て醉つた事が無い。九州薩摩を旅した時は、猩々と飲みあかした事があ

る。

町人　へえゝ酒でもかなはねえかしら。今夜旅籠で飲みつくらして、旦那を降参させてやらうと思つて居たんだが。

武士　貴様などに負けてたまるものか。

町人　だつて歩きつこなら……

武士　くどい。それ丈はごまの蠅にはかなはんと云つたではないか。

町人　それ丈か。何とかして旦那をぎゆうと云はせて見てえもんだなあ。

武士　無駄な事を考へるものではないぞ。

町人　あつた、あつた。これならあつしが勝ちますよ。

武士　何だ。身共を負かすといふのは。

町人　こいつあおさむらひさんのおもて藝ではありませんがね。

　立上ると美事に翻筋斗(とんぼ)を切る。

町人　どうです旦那。かういふあざやかなはなれわざは出來ねえでせう。

武士　ははは、つまらん事を思ひついたな。いゝ大人(おとな)が何の眞似だ。

町人　へつ、あつしやあ斯う見えても芝居に出て居た事もあるんですからね。
武士　とんぼがへりは捕人の役だ。貴様大部屋だな。
町人　まあ、なんでもよござんさ。斯ういふはなれわざは出來ねえでせう。
武士　馬鹿を申すな。身共は柔術の名人だ。みかけは無器用に出來て居るが、二間位の塀なら指もかけずに飛び越して見せる。天井を蹴つて宙で一廻りして立つ事も出來る。翻筋斗などは十ぺん二十ぺん水車のやうにやつて見せる。
町人　へえ、驚いたねえ。旦那のやうな豪傑は、輕業じみた眞似はしなさるまいと思つて居たんです。ほんとに出來ますかい。なんだか覺束ねえなあ。
　武士無言で立上ると美事にやつてのける。
町人　やんや、やんや。こいつあ感服。旦那も芝居に出てゐた事があるんぢやあねえかしら。
　武士氣持よさゝうに笑つて又草の上に腰を下さうとする。
町人　待つた、待つた。それぢやあ、こいつはどうです。
　いきなり鯱立をして其處いらを歩き廻る。
武士　いゝ加減にしろ。わけも無い事だがあんまり馬鹿々々しい。

町人そのまゝ崖のふち迄行く。

武士　よせよせ。萬一手がすべるか、加減を取損ふとそれつきりだぞ。命が惜しくはないのか。

町人長い間鯱立してゐる。

武士　よせと云つたらよさんか。見てゐてもはらはらする。

町人やうやくやめる。

町人　あははは、度胸だめしをお目にかけたんで。

武士　そんなに度胸を自慢する奴が、何故狼が怖いのだ。

町人　そりやあ狼は怖わござんすよ。あいつ等は腹がぺこぺこだから、人間を見れば喰らひつくに違ひ無いんだ。あつしの藝當なんか、狂ひが無いとわかつて居るから、あぶない事なんかありやしません。理窟のわからねえ狼にやあかなはないが、うでに覺えのある自分なら、安心でさあ。

武士　さういへばそんなものか。身共が妖怪變化を怖れないのも、うでに覺えがあるからだ。しかし貴樣も道中を荒し廻るごまの蠅丈あつて度胸はいゝな。

町人　度胸だかなんだか知りませんが、鯱立なら旦那には負けませんぜ。嘘だと思ふなら、あ

のとつぱなへ行つてどつちが長く逆立(さかだち)してゐられるか試して見ようぢやありませんか。

武士　匹夫(ひつぷ)の勇(ゆう)だ。馬鹿々々しい。

町人　ははは、流石の豪傑も敵にうしろを見せましたね。

武士　何を申す。生れてから敵にうしろを見せた事の無い身共だ。

町人　何と云つても駄目ですよ。歩く事ばかりぢやあない。度胸もあつしの方が上だなあ。

武士　默れ、ごまの蝿。貴樣如きに負けるものか。來い。

猛然と立上り大小をとつて地に置き、町人を促して崖端に來る。

武士　ながく續く方が勝ちだぞ。

町人　ようがす。負けた方が旅籠を持つんですよ。

二人同時に鯱立する。長く續く。町人わざとやめる。

町人　畜生、口惜しいなあ。矢張り旦那にやあかなはねえや。劍術が出來て、柔術の名人で、糞力があつて、しかも角兵衛の眞似まで出來なさるんだ。惜しい事に、ちつと智慧が足りねえやつさ。

いふかと思ふと指尖で武士の腹を突く。武士中心を失つて崖の下千仭の谷底へ落ちる。

町人　あははは、戸隱山で熊を撲り殺した身共だ。飛騨の山奥で山男と相撲をとつて三番が三番とも勝つた身共だ。鞍馬の山で義經公の兄弟々子の天狗の鼻を折つた身共だ。伊吹山でやまたの大蛇を退治した身共だ。羽黑山で荒鷲を手捕にした身共だ。大江山では渡邊綱が羅生門でうちもらした鬼をいけどつた身共だ。あははは。どうした豪傑。人をごまの蠅だなんていやあがつて、俺樣のはかりごとにはかなはねえだらう。殺生な眞似はし度くなかつたが、あんまり威張りやあがるのが癪にさはつて、ふいときざしたいたづらだ。てめえより立ちまさつた御方の手にかゝつたんだから、命の一つや二つ惜しくはねえだらう。恨まずに地獄へ行きな。あばよ。

　からかひづらで崖端へ來てもう一度鯱立して武士の落つこちた谷底をのぞく。

　突然狼あらはれる。その氣配に町人氣がつく。

町人　あゝ、助けてくれえ。

　そのまゝ谷底へ落ちる。

　狼崖つぷちへ來てその谷底をのぞく。

（大正十五年四月二十八日）

地下室

人

倉持　善藏　　小　使　　六十歳前後

倉持　清吉　　息　子　　二十三四歳

三谷　定七　　小　使　　四十五六歳

山口　かつ　　掃除婦　　五十歳前後

野方　はな　　カフェの女將　　三十歳前後

荒川吉五郎　　銀行の受附　　六十歳前後

社員甲、乙、丙、丁、及び女子事務員

その他相當の人數

場　面

或會社の地下室。小使部屋兼湯呑場。新聞閲覽室。

十二月某日、午後。

一段高い、疊の敷いてある小使部屋で、三谷定七刻煙草を樂しんでゐる。一隅の卓に兩肱つゝいて淸吉新聞を讀んでゐる。

社員甲、乙、丙、丁と女子事務員雜談をしてゐる。

甲　あゝあ、待ちに待つたものを頂戴したら尻が重くなつた。そろばんをはじく氣にはならない。

乙　げんきんな奴だなあ。頂戴する迄はさも忠勤らしくしてゐやあがつて。

甲　お互樣だよ。自分だつて何時迄も油を賣つてゐるぢやあないか。早く行かないと課長に睨まれるぞ。お前の方の大將はやかましいからなあ。

乙　ほんとだ。行かう。それぢやあ四時にはきちんと仕事をしまつて待つてゝくれよ。村上君も參加するだらう。

丙　今日は失敬する。

乙　なんだい、細君を貰つてからひどく謹直になりやあがつたなあ。舊惡をすつぱぬくぞ。

丙　をかしな事をいふなよ。舊惡も新惡もありやあしない。

乙　よをし。そんならそれでいゝさ。（女子事務員にむかつて）三輪さん、此の男はねえ……（丙に）おい、いゝのかい。カフヱ・サンフランシスコ長尺一巻の封切に及ぶぞ。

甲　村上芳太郎超力演てやつか。

丙　よせよ、つまらない事をいふない。

乙　ね、たつた一言で参つたでせう。

女　あたしうかゞひ度いわ、村上さんのロオマンス。

丙　嘘ですよ。こいつは出鱈目ですからね。

乙　へ、染めてやがるくせに。（丙の顔を指さす）何でもいゝや、愚圖々々いはずにつきあへよ。きめたよ。

丙　待てよ。社長もさういつたぞ。（社長の聲色のこゝろ）この度の記念賞與は、特に株主諸賢の賛同を求めまして、特に多額の配分を致す事になりましたのでありまするが、何卒諸君に於かれても、特に無駄づかひをせず、家運の繁昌に資せらるゝやう、老生の特に切望するところで御座ります。

乙　勝手にしろい。いやだと云つても引擦つて行くから。

甲　家運の繁昌に資せらるゝやうか。社長のやうに一人で十萬圓もせしめれば家運の繁昌にもなるだらうが、五百や千でどうなるんだ。

丁　まつたくだ。三十年のお祝にしては少な過ぎるよ。不景氣の今日だから爲方が無いといへばそれ迄だが、株主ばかりがうま過ぎるぢやあないか。一株について三株の増資なんて、時節柄穩當でないぞ。

甲　それもさ。せめて十年以上勤續の者には、功勞株位くれゝばいゝのに。

丁　金持は慾張だ。氣前のいゝのは吾々プロさ。ひとつ景氣よく飮むか。

丙の肩を叩いて笑ふ。みんな笑ふ。口ではいろ〳〵云つてゐるけれど、みんなはしやいで居るのだ。

山口かつ登場。

かつ　おやまあ、江木さんたらこんなとこにゐたんだね。さつきから二階で探してゐましたよ。

甲　誰が。

かつ　支配人室の給仕さんが廊下で呼んでゐましたつけ。

甲　さあいけねえ。

あわてゝかけ出す。

それに誘はれて社員みんな行つてしまふ。

かつ　三谷さん、お前さんどうしたんだい。會議室のあとかたづけで、みんなうん／＼云つてるのに、ぷかありぷかあり煙草なんぞふかしてさ、いゝ氣なもんだよ。

定七　僂麻質斯（レウマチス）があるもんだから、冬になると痛んで爲方がねえんだ。何しろひどい時には一人では帯をしめる事も出來ねえんだから。

かつ　こまつちやふねえ。倉持さんとあたしと二人きりぢやあ、どうにもやりきれやあしないよ。あの重たい机を運ぶのには、お前さんのやうな若い人の力を借りなくては一寸だつて動きはしないやね。

定七　すまない。すまないとは思ふが、今日は又變に肩から二の腕へかけてしみじみ痛みやあがるもんだから。

かつ　病氣なら爲方が無いけれど、青野さんがやめてしまつて、たゞさへ人手の足りないところだから……

定七　まあ、せつせと働くさ。そのかはりたんまり御褒美が出るとよ。

かつ　もう社員さんの方には渡つたんだつてねえ。あたしたちの方は月末かしら。

定七　どつちにしたつて同じこつた。俺なんざあ新米だから鐚一文にもありつけねえだらう。

かつ　そんな事はないだらう。何しろ會社が出來てから今年で三十年になるんだつていふんだもの。そのお祝に社長さんなんか、たいしたお金をとつたんだつてさ。

定七　手前のものを手前の懐に入れるんだ。いくらだつてとれらあな。

かつ　ところがね、そんなもんぢやあないんだとさ。此間の總會とかで、社長さんは自分は一文もいらないつていふのを、株主の人達が、是非これ丈は納めてくれ、會社が今日のやうに立派になつたのは全くあなたのおかげですつて、拜むやうにしてとつて貰つたんだつて。倉持さんがさう云つてたよ。

定七　へ、つまらねえお芝居さ。百萬だか千萬だか知らないが、しこたま財産をもつてゐりやあ、俺だつてその位の芝居はうてらあ。

かつ　お前さんみたいに云つてしまつちやあ値うちが無いけどね、いくら金持だつて、あるが上にも欲しいのが人情だらうぢやあないか。それを、わたくしはいりませんから社員に丈はやつて戴きたいと、社長さんは演説なすつたんだつていふからねえ。

定七　をばさん、お前もすつかり倉持にしこまれたなあ。清ちやん、どうだい、お父さんそつく

りぢやあないか。

かつ　およしよ。

清吉新聞から目を放して、好意を見せて微笑する。

定七　なあに、清ちやんは俺とうまがあふんだ。おやぢたあ出來が違ふんだから。

かつ　お前さんなんぞとうまがあつて堪るものかね。ろくな事は教はりやあしない。清ちやん氣をつけないといけないよ。折角お前さんも心を入替へて、眞人間にならうつていふ覺悟をきめたんだからね。

定七　をかしな事をいふなよ。眞人間たあなんだい。清ちやんは生れた時から今日が日迄立派な眞人間なんだぜ。おやぢの方が餘程人間らしくねえんだ。なんでえ、月給取ばかりが眞人間で、さうで無い者は畜生だとでも思つてゐるのか。カフヱのボオイさんがつとまりやあ立派に一人前の人間なんだ。女の事でしくじつたからつて、手前のやうな女にもてねえ奴が大きな口のける義理ぢやあねえや。いゝ男に生れついたふしあはせで、女の方でうつちやつて置かねえんだ。なあ清ちやん。

清吉　よして下さいよ。あたしもすつかり考へてね、今度こそはおやぢのいふ通り、堅いところ

に勤めて、眞正直に働いて見ようと思つてるんですから。

かつ　ほんとにさうなさいよ。お前さんなんざもともと悧巧な人間なんだから、早く氣がついて心を入替へりやあ、末は立派な人になつてお父さんを喜ばせる事が出來るんだからねえ。

清吉　おやぢも氣の毒な人だから、せめてあたしでも孝行してやらなくちやあ、みじめ過ぎると思つてね。

かつ　お前さんがさういふ氣持になつた丈でも、お父さんはどの位嬉しいかわかりやあしない。

清吉　以前はあれでした、なんでもおやぢのいふ事は窮屈で、理も非もなく反對してやれつていつたやうな根性だつたんだが、此の頃ふいと、親の心つてものがわかつて來たやうに思はれるんです。さうすると今迄の事が、何から何迄すまない氣持になつて來ました、少々遲まきだが。目がさめたつていふんですかねえ。

かつ　何が遲まきなもんか、若い時のしくじりは爲方が無いやね。だけどねえ、いつたん心を入替へたら、二度と間違つた事をしちやあいけないよ。

清吉　今度は大丈夫ですよ。

定七　心を入替へる入替へるつて、人間の心つてものがそんなにざらにころがつてるのか。何處

に賣つてるんだい。おいらも出來のいゝやつと取替へて貰ひ度いな。

電話の呼鈴が鳴る。

清吉　あゝ、もし／＼。はい左樣で御座います。倉持？　はあ、小使の倉持に御用なんですね。え、え、あゝあたくしです。あたくしですよ。あなたは。どうも電話が遠くつて。すみませんがもう少し高い聲で願ひます。（急に自分は低い聲になる。人をはゞかる調子。）あゝ、わかりました。え、えゝ別に變りもありません。む、そいつは一寸困るんです。日比谷？　だけどもねえ、それが一寸具合が惡いんですが。困つたなあ。いゝえ、それはいけません。それぢやあたしが困る。えゝ、えゝ、えゝ、（しばらくうけこたへばかりしてゐる）えゝ、では一寸でいゝんですね。よござんす。わかりました。えゝ直ぐ。

電話切れる。淸吉暗い樣子で、二人に顔を見られるのを避けるやうにして、壁にかけてある帽子と襟巻をとつて出かける。

定七　淸ちやん。呼び出しかい。

清吉　いゝえ、勤め口を賴んどいた友達から、話があるつていつて來たんです。

定七　かくさなくたつていゝやな。だけどカフヱのおかみさんだけはおよしよ。凄い旦那に今度

こそは（首に手をやつて）やられるぜ。

清吉　冗談いつて。

無理に笑つて、出て行く。

定七　あれぢやあ身が持てねえ。持てるわけがねえ。

かつ　何をいつてるのさ。あの人も今度といふ今度は改心して、お父さんに孝行するつて云つてるんだからね。

定七　そいつがさ、なか／＼うまくいかねえんだよ。おやぢは御覧の通りのしかめつつらだが、ありやあきつとおふくろ似なんだぜ。鳶が鷹をうむつていふけれど、それよりもつと違ひがひど過ぎらあ。一生小使でくすぶつてる奴のせがれたあ見えねえ。ぴかぴかした着物を着せてみな、新派の役者位には見えらあな。此の頃のはしつこい女の子が、どうしてうつちやつて置くものか。いくらおやぢが口やかましく小言をいつたつて、いくら本人が眞面目にならうとしたつて、さきさまが承知しねえや。みな、あいつがころがりこんで來てから、二階の女の子がいれかはりたちかはり地下室へ下りて來らあ。カフヱのおかみさんに口說かれて、いゝ夢を見てゐたのも無理はねえのさ。

かつ　あんまりいゝ夢でも無いだらう。ちゝくりあつてゐるところを旦那にめつかつて、おかみさんの方は逃げそこなつて肉切庖丁で顔だか背中だかを斬られたとかいふんぢやあないか。

定七　だからよ、いくら當人が糞眞面目にならうつたつて、女に好かれるやうに生れついた者は、一生女で身を崩すのさ。

かつ　不思議だねえ、倉持さんのやうな人の子供が、どうしてみんないけないんだらう。

定七　何の不思議があるものか。みんなあのぢゞいの心柄が惡いからさ。先代迄はれつきとした金物屋だつたのが、あいつの代になつて、柄でもねえ道樂をしやあがつたものだから、すつかりすつてしまつたんだといふ事だぜ。何時も將棋をさしに來る角の銀行の受附のぢいさんが話したよ。

かつ　へえ、あの人が道樂なんかしたのかねえ。人間は身持がよくなくてはいけない、正直に骨惜しみをしずに勉強しなくてはいけないと、あたし達にいふのならまだしもだけれど、社員さんをつかまへてお說教する人ぢやあないか。

定七　手前は面白い事をしつくしたおかげでおちぶれて、今になつて他人にお談義をしてゐやあがる。そればかりぢやあねえんだ。あいつはかゝあには逃げられる、娘は娘で自動車の運轉手

とくつついてかけおちをする、色男のせがれはまをとこをする。それがみんな手前の昔のふしだらの酬ゐさ。罪ほろぼしにお說教をしてゐやあがるんだぜ。

かつ　お前さんは口が惡いねえ。

定七　性が合はねえんだよ。變に四角張つて、眞面目だ、正直だ、勉強だと、一人で力んでゐるのはいゝが、人の顏さへ見りやあ骨惜しみをするな怠けるなと、小僧子をつかまへていひきかせる樣な口をきかれちやあ、誰だつて面白くねえや。いくら正直に働いたところで、あいつみたいに何時迄も小使ぢやあ爲方がねえ。ぢいさん、二言目には會社も偉いものになつた、大きくなつたと、我子が育つたやうに自慢してゐるが、御自分樣はどうなんだ。白髮になつて、腰が曲つた。それが三十年の御褒美さ。

かつ　それにしても三十年とは、よく辛抱したものだねえ。こゝの會社の出來た時から勤めてゐるのは、社長さんと倉持さん丈だつていふんだから。

定七　それがあいつの自慢さ。ふん、社長さんで三十年勤めてゐるのなら自慢にもなるが、三十年小使をしてゐて何が自慢なんだ。氣の利かねえ話ぢやあないか。

かつ　そりやあお前さんしかたが無いやね。人間の運だもの。

定七　運か。運ならまだしもあきらめられるが、生れつきの値うちが違ふんぢやあねえかなあ。

かつ　いくらうでのある人だつて、運が悪けりやあ爲方が無いやね。あたしなんか、亭主は露西亜のいくさの時に死んでしまふし、子供はある、どうしておまんまが喰べられるかと思つてゐた時、あたしのやうなものでも一緒になつてもいゝつていふ人があつたんだよ。けれども、もうのんだくれの亭主で男には愛想が盡きたから、斷つちやつたのさ。その男がどうだらう。本所の方の鑄物工場の職工だつたんだけれど、今ぢやあすつかりしあげて、自分が親方になつてゐるんだよ。妾なんか圍つて、大きな家に住んでるのさ。あの時あたしがうんと云つてゐれば、今頃はその人のおかみさんで、思ふまゝの事が出來たんだがねえ。矢張運が無かつたんだよ。

定七　そんなものさ。俺だつて、おやぢは相當の鐵葉屋(ブーキや)をしてゐたんだが、俺あ下らねえ職人になんかならねえ、何かいゝ商賣をしてうんと金をこしらへ、一生したいざんまいの事をしてやらなくては生れて來た甲斐がねえと思つて、金をひつさらつてずらかつた。相場(さうば)をやつて儲けた事もあらあ。だが、あいつは決して長續きのするものぢやあねえ。餘程度胸のいゝ肚の出來た偉物(えらぶつ)なら知らねえこと、こちとらみたいなやくざがかゝづらつて、いゝめのつゞくわけがねえんだ。

かつ　あたし達にはわからないけれど、相場つてのは全く運だつていふぢやあないか。

定七　なあに、運もあるにはあるが、矢張人間の出來によるんだ。かうなれば景氣がよくなる、あゝなれば不景氣だと、ちやあんと見通しのつく人間が勝つのさ。三日大盡ていふが、俺なんざ全くそれだつた。何しろ稼ぐよりは遊ぶ方が人にあるんだから、我分限で懐が溫まると、あつちにもこつちにも女をこしらへて、ひと頃はお前妾が四人もあつたものさ。

かつ　豪勢なものだねえ。

定七　その豪勢がつゞかねえや。忽ちがらを喰つて御沈落だ。それからつてものはいろんな事をやつたが、結局芽を吹いたものはひとつもなしさ。今でこそ横町の犬の糞みてえに、何處にも此處にも出來て來たが、あのカフヱつてやつだつて、一度は俺の商賣だつた。ちよつとした女を置いて、テキいつちやうてな事を云はせて居たんだが、警察に睨まれて風俗壞亂だとかなんとかいやあがつて、ひどいめに逢はされたあげくが、借金でうごきがとれなくなつた。たうとう夜逃げさ。今になつて考へてみると、俺のやり口も惡かつたが、時勢が今とは違つてたんだ。つまり、カフヱなんてものは、其の時代にはハイカラ過ぎたのさ。それからは段々いけなくなるばかりだ。宿屋の番頭にもなつた。兵隊みたいな帽子をかぶつて、おいち二、おいち二つて

いふ薬屋にもなつた。露西亜パンてやつも賣つた。あげくの果てが、職業紹介所の御厄介になつて、日給一圓なにがしの小使さんだ。

かつ　そんな事をいつたつて、お前さんなんか未だ若いんだから、これからいゝ事があるに違ひ無いよ。

定七　若い？　冗談いつちやあいけねえ。もう直き五十だ。それにさ、よしんば若いとしたところで、人間がやくざに出來てゐりやあそれつきりだ。いくらあせつたつてもがいたつて、どうにもなるんぢやあねえ。

かつ　そんな事があるものかね。運さへ向いて來れば明日が日にも、うちの社長さんみた様に大きな自動車に乗れるかもしれないやね。男の人は働き次第だからねえ。

定七　なあに俺にはそんな夢みたいな事は考へられねえ。こゝの會社の社員だつて、頭數は澤山ゐるけれど、あの中で末始終大将株になる奴は、ちやあんときまつて居るんだぜ。てんでんに出世する積りで、うんうん云つて勉強してゐるが、人間のしつかりしたのはそんなにざらにあるものぢやあ無いんだ。一人か二人が偉くなつて、あとのてあひは一生下積（したづ）みさ。だから世の中はつまらねえ。こちとらのやうな人間は、辛抱したつて、汗水たらしたつて、うだつのあが

りつこは無いんだ。いゝお手本が倉持のぢいさんさ。正直と勉強の神様みたいな事をいつてるが、三十年小使ぢやあ爲方が無い。さうわかつてゐるから、出來る丈の事をして樂しむのが得なんだが、今のざまぢやあ何の樂しみもありやあしないや。

倉持善藏登場。

善藏　どうもしやうが無いよ。又二階のはゞかりに落書した人がある。赤い鉛筆は拭いても拭いても消えやあしない。

かつ　立派な洋服なんぞ着て居ても、社員さんてしやうの無いものだねえ。落書はする、洗面器の中で筆を洗ふ、タオルで靴を拭く、櫛やブラッシは家に持つて行つてしまふ……

善藏　先のうちはこんな事は一切無かつた。入口で綺麗に靴を拭いてから入つて來たから、廊下には泥のあとも無かつた。机の上に硯箱だの筆洗だの、そろばんの置場所だつて、行儀よくきちんとして居たものだが……

かつ　矢張人が殖えたからだねえ。

善藏　なあに人が殖えたからつて、めい／＼の心掛がよければ百人ゐたつて千人ゐたつて同じことさ。人間の腸が腐つて來たからいけないのだ。此の頃の若い人の話を聞いてごらん、やれ月

給がすくないの、人づかひが荒いのと、のべつ幕無しに不平がましい事を云つてゐて、肝心のうでは働かない。雇つて戴いて、お給金を頂戴してをればこそ、三度の御飯も缺かさず喰べられるのだ。そんなら勝手にじろとつゝぱなされゝば、その日から困るんぢやあないか。自分の力量も考へないで、役にも立たない事ばかり云つて居るんだ。

かつ　そりやあ理窟はさうかもしれないけれどね、倉持さんみたいな人ばかりは居ないからね。みんな樂がしたいのさ。

善藏　樂がし度いといつて、みんなが怠けてゐたらどうなるんだ。日本國は暗闇だ。畏れ多い事だが、天子樣も皇后樣も、年中お國の事、人民の事を考へていらつしやる。おかげで吾々も枕を高く寢られるんだ。會社の事にしてみても、社長さんや支配人さんが、人一倍勉強していらつしやるから、益々繁昌して行くんだ。それをおもふと下々の者も怠けてはゐられない。さあさ、三谷さんも手傳つて二階の應接の掃除をして貰はう。

定七　ふん、下々の者もお働き遊ばさうか。

いやいや立つて行く。

善藏　何といふ口をきく奴だ。骨惜しみばかりしてゐやあがつて。

小耳にはさんで引きかへす。

定七　油が切れてるから、骨惜しみをしなくては呼吸がつゞかないのさ。社長さんや支配人さんなら働甲斐もあるだらうが、こちとらなんか一生懸命に働いたとして、それがどうなるんだ。

はな唄をうたひながら廊下へ消える。

かつ　あの人も新參のくせによくない口をきくねえ。

給仕登場。

給仕　倉持さん、支配人さんがねえ、みんなを連れて社長さんのお部屋に來て下さいつて。

善藏　みんな一緒に？

給仕　賞與が渡るんだとさ。

いひ捨てゝ去る。

善藏　早い方がいゝよ。

かつ　社長さんのお部屋だつて？　こんななりをして行つていゝかしら。

善藏　會社で働く時のみなりなら差しい事は無い。

二人とも行く。

恰も退出時間になつてゐる。裏口から歸る男女の社員もある。その人々が何か會話をしても差支無い。但し、あまりはつきり聞えない方がよい。やがて誰の姿も戸外に消える。しばらくたつ。淸吉あわてゝ、しきりにうしろの氣になる心持で歸つて來る。帽子と襟卷をいつしよに叩きつけて、ぐつたり腰を下す。

野方はな、ひそかにつけて來る。淸吉驚いて立上る。

淸吉　いけない、いけない。行つて下さい。

はな　誰もゐやあしないぢやないか。

淸吉　ゐるんですよ。話はもう濟んだぢやありませんか。

はな　濟むもんか。淸ちやんの方では濟んだ積りか知らないけれど、あたしの方では未だ濟まないんだよ。

淸吉　そんなわからない事を云つて。

はな　何がわからないのさ。あたしはお前のやうな薄情な眞似は出來ないんだよ。いつたん斯うと思ひ込んだら、一生離れやしないんだからね。逃げるつたつて逃がしやあしないよ。まだ話も濟まないのに逃げ出したりなんかして。あたしが年上なもんだから……

清吉　あたしの心持はあれ程いつたぢやありませんか。ついおかみさんとあんな事になつたのは、そりやあ全くあたしが惡かつたんです。だけど、旦那に對しても……

はな　旦那々々つてなんだい。いゝ年をして刄物なんぞ振り廻してさ。お前は脅しの肉切庖丁が怖くて縮みあがつてしまつたんだね。あんな奴に人が殺せて堪るもんか。

清吉　あたしは自分の心が濟まなくなつたんです。だから心を入替へて、眞人間にならうつていふんです。（泣きさうな聲になつてゐる）

はな　隨分自分勝手な心なんだねえ。あたしはお前のために、斬られたりふんづけられたりしても、どうしても思ひ切れないんだよ。それをなんだつて、心が濟まないから入替へて眞人間になるだつて。そんな事をいつてあたしを捨てようつていふんだね。お前つて人は……（これも泣聲になつてゐる）

突然電話の呼鈴が鳴る。清吉出ようとしたがはなに袂をつかまれてしまふ。その儘呼鈴は鳴つてゐる。

清吉　おかみさん、かんにんして下さい。

はな、默つて押迫つて來る。

清吉　後生です。誰か來ると惡いから。行つて下さい。

はな、默つて押迫つて來る。

清吉　おやぢでも來ると困りますから……

又電話鳴る。

倉持登場。電燈のスウイツチをひねる。あかりがつく。

善藏　どなたさまです。

はな、流石にぎよつとして淸吉の袂を放す。

善藏　何か御用ですか。淸吉、お前のお客さまか。

電話鳴りつゞけるが誰も出ない。

善藏　御用が濟みましたら御歸り下さい。

はな、やがて悄然として出て行く。

善藏　どうしたんだ。

清吉　困つちやつたんです。

善藏　馬鹿。なんだつて……

その時三谷と山口つれ立つて來る。

二人とも手に持つ紙包を開いて見る。

定七　ありがてえ。俺あ、こゝの會社に來て、まだ半年にもならねえから、一文にもなるまいと思つてゐたら、へ、ちよつぴりだがお裾分にあづかつた。

かつ　(叮寧に札を勘定し、又元の通り紙に包み、懷の財布にしまふ)おもひやりのある社長さんだねえ。あたしや、あんなにお傍へ行つたのは始めてだけれど、自然と頭が下がつてしまつたよ。

定七　人間金がありやあおもひやりも出て來るし、人も自然と頭を下げるんだ。俺達は喰へるか喰へねえか、それぱかり心配してゐるもんだから、他人樣の事なんか考へてゐられねえのさ。

かつ　憎らしい口をきくものぢや無いよ。戴けない積りでゐたところへ下すつたんだから、文句をいはずにゐるがいゝやね。

定七　だがね、社長さんは一人で十萬圓とつたんだつていふぢやあないか。俺あ二十五圓だ。一ケ月の給料にも足りやあしねえ。いつたい十萬圓といふのは、二十五圓の何倍に當るんだ。勘定する事も出來ねえや。

善藏　三谷さん、それが君の癖だよ。なんでもかんでもひとの事を羨しがつて、自分ばかりが馬

鹿を見たやうに云ふ。二十五圓戴けば結構ぢやあないか。君はうちの會社に來て、まだ半期にもなりやあしないのだぜ。社長さんを御覽。三十年此の會社を盛立て丶いらつしやつたんだ。今日何處へ行つたつて、うちの會社の名前を知らない者は無いだらう。さうなつたのも、みんなあの方の御力なんだ。三十年と一息にいつてしまへば短いが、考へてみると長い月日だ。その間には辛い事もあつた。世の中のあふりを喰つて、此の會社も幾度つぶれさうになつたかわからない。並一通りで無い苦勞をなすつて、それをしのいで來たのもあの方のお力なのだ。

定七　わかつた、わかつた。だがね、三十年勤めたといへば、倉持さん、お前だつて同じ三十年の御奉公ぢやないか。考へて見るがい丶や、片方は自動車に乘つて、大きな邸に住んで、何をしようとしたい放題、會社に來たからつて、一番立派な部屋に納まつてゐれば、支配人だ課長だつていふいつぱしの人間がひよこひよこ頭を下げて、何から何迄してくれる。時々盲目判さへ押してゐればそれで濟むんだ。それなのにお前はどうだい。こんな薄暗いところにくすぶつてゐて、廊下を掃いたり、便所の掃除をしたり、誰しもいやがる事をして、それで片方が十萬圓で、片方は……俺は知らねえが、まづたかの知れた金だらう。

かつ　倉持さんなんか大したものなんだよ。今度は長く勤めた人程割がい丶んだつていふから、

下端の社員さんなんか倉持さんにはかなはないんだとさ。倉持さんお前さんいくら戴いたんだい。

善藏　いくら戴いたかまだ知らないよ。よしんばそれが十圓でも、二十圓でも、涙の出る程嬉しいよ。社長さんは此の手を握つて、倉持、お前とわし丈だ、三十年勤めたのは。どつちが先にお目出度くなるか知らないが、お互に一生會社に御奉公しようぢやないか。さう仰つた時は、目の中があつくなつて何もいふ事が出來なかつた。こんな、何の智惠も才覺も無いものが、兎に角三十年奉公させて戴いたのだ。それ丈でも難有いのに、臨時のお手當迄戴いてはもつたいなさ過ぎるよ。お金なんぞはどうでもいゝ。思召だけで充分だよ。それより、これ(胸の徽章を見せる)が何よりの御褒美だ。今頂戴したのだが、いゝかい、かういふものを二十年以上勤めた社員は襟につける事になつたのだ。それがたつた三人しかない。しかも形はもう少しちひさいのだ。ところが社長さんとわたしは三十年だ。それで一廻り形の大きいのをつける事になつた。社長さんのお手で、此の胸につけて下すつたのだよ。どうだ倉持、わしとお揃ひだよ、社長さんは御自分の胸を叩いて御笑ひになつた。

感激して言葉がつゞかない。

かつ　つまり勳章みたいなものなんだね。
定七　子供ぢやあるまいし。
善藏　何だつて。
定七　つぶしのきくものでもなささうだし、おもちやの洋刀(サアベル)をぶらさげて威張つてるやうなものさ。

沈默が室内を不愉快にする。
三谷と山口歸支度を始める。

かつ　あたしも歸らう。すつかりお腹が空(す)いちやつたよ。
定七　今日は思ひもかけねえ戴き物があつたから、久しぶりでいつぱいやるかな。
かつ　眞直ぐお歸りよ。おかみさんが待つてるだらう。
定七　だから腹の中迄あつたかくして歸つてやるのさ。おもてはべらぼうに寒さうだぜ。
かつ　おまちよ。其處いら迄いつしよに行くから。倉持さん左樣なら。
定七　をばさんといつしよぢやあはじまらねえなあ。
かつ　大きにお世話だよ。

二人出て行く。

善藏　清吉。先刻の人はありや誰だ。カフヱのおかみさんだな。

清吉　困つてしまつたんです。

善藏　お前はあれ程いつてきかせたのに、お父さんの目を盜んで逢つてゐたんだな。

清吉　そんな事があるものか。そんな……

善藏　そんならどうしたんだ。場所もあらうに會社へのめのめと來られた義理か。い丶年をして、自分とこの若い者と不義を働いたものが、あんまり圖太過ぎるぢやあないか。

清吉　先刻實は、不意に電話がか丶つて來たんです。直ぐあすこの角の自動電話からで、若し出て來なければ此處へやつて來るつていふもんだから……

善藏　そんな事でおびき出されたのか。

清吉　だつて行かなければ來るつていふから、來られては困ると思つて、つい……

善藏　馬鹿な。

清吉　するとおかみさんは待つてゐて、なんでもかんでも元の通りになれといふ、そんな事は死んでも出來ないと云つてもきかないで、今から直ぐに二人で何處かに行つてしまはう、九州で

も、北海道でも、朝鮮でも何處でもいゝから遠方に駈落して、二人で暮らさうと云つてきかない。

善藏　なんといふ女だ。

清吉　それを無理に振り切つて逃げて來たんだけれど、あとからづかづかはひつて來てしまつた。出て行つてくれと云つても行かないで困つてるところへお父さんが來てくれたので、やうやく歸りは歸つたけれど……

善藏　女つてやつは怖しい。いつたんかうと思ひ込むと、見榮も外聞も無いばかりか、命迄も投出してかゝるんだ。ふしだらな眞似をして、あぶなく旦那に殺されそくなつたといふのに、まだ懲りないで呼出しに來るなんて。お前もしつかりしないと、ほんとに取返しのつかない事になつてしまふぞ。世間へ對しても羞しい事だが、お前のからだの中には不身持の血がいつぱい流れてゐる。お父さんからして、昔の事を思ふと、先祖から傳はつた家藏をつぶしてしまつた。お前のおふくろは俺やお前を捨てゝ、自分よりも若い男と逃げてしまつた。おぎんはおぎんで、おふくろの眞似をして行方さへわからなくなつてしまつた。たつた一人殘つたお前はどうだ。小學校ではいゝ出來だつたから、苦しい中から中學校へも通はせて置いたのに、何時の間にか

立派な不良少年になつて、筒袖の着物を着てゐる小僧のくせに、女の尻を追廻す。學校からは放逐される。うちを飛出してカフヱのボオイなんぞになつて渡り歩く。あげくのはてが、かりにも自分の御主人のおかみさんと不義を働いて、恥の上にも恥をさらしてくれた。お父さんはあの時は、何故お前もおかみさんも斬殺されてしまはなかつたかと思つた。正直だ、眞面目だとみなさんから云はれて、此の會社を一生の我家だと思つて勤めて居るところへ、まをとこの片割がころがりこんで來たんだ。外聞は悪し、申譯は無し、お前の爲にはお父さんどの位肩身の狭いおもひをしてゐるかしれないのだ。尤も、お前も今度といふ今度は懲々して、これからは根性を入替へて眞當な道を踏まうといふから、みなさんにも打あけてお願ひして、何處か堅い會社か銀行にでも入れて藏かうとしてゐるのに、先刻のやうにあのきちがひが押かけて來るやうでは、お前も餘程肚をしつかりきめてかゝらないと駄目だぞ。

清吉　もう決して、お父さんに心配をかけるやうな眞似はしない。今度といふ今度は肚をきめた。どんなところでもいゝから堅氣のところに勤めて、つまらない根性は起しません。

善藏　人間は眞面目に正直に世の中を渡ればいゝのだ。偉い人は偉い人、偉くない奴は偉くない奴、これは生れつきで爲方が無いが、守る可き道はひとつだ。お父さんはさう思つて居る。だ

から一生小使をしてゐても、それは自分が偉い人間に生れなかつたのだから爲方がない。たゞ正直に分を守つて、三十年間御奉公したといふ事が自慢なのだよ。これを御覽(胸の徽章を見せる)三十年間勤めたおかげで、社長さんとお父さん丈が此の大きな徽章をつける事が出來るんだよ。ははは……

懐から紙包を取出して押戴き、開き叮寧に札を勘定する。

善藏　清吉。五百圓だよ。(もう一度押戴く)大したものだ。いくら三十年勤めたとはいへ、小使風情に五百圓の御手當はもつたいない。これもみんなお父さんが正直一圖に勤めた御褒美だ。これで、死んでも石塔は自分で建てられるぞ。ははは……

又札を勘定して、元の通り紙に包む。

善藏　そろそろ飯の支度をしなくちやあ。今日はめざしのいゝやつを買つといたよ。お祝のお頭つきだ。

清吉　御飯は、私が炊くから、まあひとやすみなさい。

善藏　さうか。それぢやあ頼まうか。一寸事務室の戸締を見廻つて來るよ。

善藏去る。

清吉、飯の支度をしようとするところへ、はな再び忍び入る。清吉たちすくんだが、一生懸命にはなを戸外に押出し、その勢で自分も一緒に出てしまふ。一寸の間、外で二人の爭ふ樣子。しばらくして、荒川登場。倉持もあらはれる。

善藏　おゝ、荒川さんか。珍しいね。

吉五郎　久しぶりで一番やらうと思つてね。先刻電話をかけたんだが、どうしても出ない。幾度かけても通じないのさ。

善藏　さうかい。それはすまなかつた。まあお上り。(清吉を探す心)どうしたんだ。

吉五郎　誰だい。お前さんとこの息子さんかね。

善藏　今、飯の支度をして置いてくれるやうに云ひつけたんだが。

吉五郎　なんだ、まだ御飯前だつたのかい。

善藏　うゝ、まあいゝや。何か買ひにでも出たのだらう。一番やつてるうちには歸つて來るよ。

將棋盤を出す。

善藏　此の前の時は、二番勝越しだつたかな。しつかりしないと今日も返討だよ。

吉五郎　お手柔かに願ひ度いね。

駒を並べてさしながら。

吉五郎　倉持さん、君のその胸につけてゐるのは何だね。

善藏　これか。これは三十年勤續のしるしだよ。社長さんとわたしと、二人丈が三十年で、此の大きいやつをお揃ひさ。二十年以上のものはひと廻りちひさい。

吉五郎　名譽だなあ。兼々噂のあつた記念賞與も出たのかい。

善藏　どうもお手厚いなさり方でね。おつとと、この歩はうつかりつけないぞ。

吉五郎　こいつは弱つた。かういくと、あゝいらつしやる。こつちから攻めると、そちらさんはお逃げになる。はてね。えゝい、かうやつてみるか。(さす)それといふのも君が三十年間正直に働いたおかげさ。あゝ、會社としてはどんな事をしたつて足りない位なもんだ。

善藏　おかげさまで誰の世話にもならずに自分の石塔だけは建てられるよ。はは……

吉五郎　これから樂をするのさ。心配ばかりさせられた息子さんも、危ないとこ迄行つたのがかへつて藥になつて、今度は眞面目にやるといふのだから君も大安心さ。

善藏　王手。初王手目の藥か。
吉五郎　弱つたよ。お手は。
善藏　歩がふたつきりさ。
吉五郎　そんなら大した事も無いが。だが、しかし。
荒川考へる。
とたんに淸吉、すさまじい樣子で馳込んで來る。
淸吉　お父さん。
善藏　どうした。
淸吉　大變な事をやつちやつた。おかみさんを。(刄物を振上て刺すさまをする)
善藏　なに。どうしたといふんだ。
淸吉　お父さんがゐなくなると、先刻からうかがつてゐたと見えて、おかみさん又はひつて來た。無理におもてに突出したんだが、まるできちがひで、どうしてもうちには歸らない、一緒に逃げてくれと云つてきかない。あげくの果てが刄物を出して、一緒に逃げるのがいやならこれで殺してくれと云つて振廻す。あぶなくつて爲方が無いから、もぎとらうとするうちに、自分で

やつたのか、私がやつたのか、こゝんとこを。（息が切れて話せない。咽喉のところを押へる）

善藏　死んだのか。

清吉　あつと思つた時につまづいて、一緒に倒れたつきり、おかみさんは起上らない。倒れる拍子に刺したのかもしれない……

善藏　何處だ。それは。

清吉　あすこの普請場の板圍（いたがこひ）の中です。

善藏　お前は其處にゐろ。卑怯な眞似をするんぢやあないぞ。（荒川に）兎に角行つて見なくちやあ。

吉五郎　わたしも行かう。

二人出て行く。

清吉茫然と見送る。幕。

（大正十五年十月三日）

律子と瑞枝

高木律子　二十三歳
小柴瑞枝　二十一歳
高木賢一　十七歳
竹村景吉　三十二歳
主　婦　五十歳位

第一幕

律子と瑞枝と賢一の間借りしてゐる二階。ふたまつゞきの廣い方に律子病臥してゐる。
夜。

梯子口から主婦あらはれる。

主婦　高木さん、またいつもの男の人が來ましたが、どうしませう。今日は何か會社の方の話があるのだから、一分でも二分でもお目にかゝり度いつてね、いくら病氣で寢てるからつて斷つても、きかないんですよ。

律子　困るわねえ。でも、こゝでは爲様がないから、そちらでお目にかゝりませう。

主婦　また口説かれないやうに用心なさいよ。

律子　いやな小母さん。けれども會社の用だつていふと、思ひ當る事もありますから、お通しして下さいな。

主婦階下へ行く。

律子中じきりの襖をしめ、手鏡を見て髪に櫛を入れる。羽織をひつかけて次のまへ行く。

同時に竹村あがつて來る。

律子　こんななりをして居りまして、失禮で御座いますが。

竹村　いゝえ、こちらこそ御病氣のところへお邪魔しまして。いかゞですその後は。

律子　どうも長引いてしまひまして。でも此の頃は熱もさがりましたし、氣分もひところよりは

大層よくなりましたから、自分では起きてもいゝやうに思ひますけれど、お醫者さんのお許が出ませんのと、何分體が疲れて居るものですから、大事をとつてもう少し引籠つてゐようかと存じまして……

竹村　かるはずみをすると取返しがつかないから、まあお大事になさい。

律子　ありがたう存じます。

竹村　高木さん、さぞかしうるさい男だと思つてるでせうが、今日は社の用事でうかゞひました。僕としても、あなたに結婚を申込んで斷られたからは、こちらには一寸來にくいのですけれど……

律子　どうぞあの事はお忘れ下さいまし。

竹村　さうはなかなか忘れられませんよ。（まぎらかしに笑ふ）今日うかゞつたのは、あなたも御承知の通り、うちの會社には病氣缺勤者給與規定といふのがありましてねえ。あれは元來月給者が長く休んで、給料たゞとりとなるのを惧れて制定したので、日給者に適用するのは殘酷なんだが、又一方から考へると、長く休んでゐても、兎に角社員名簿に名前の載つてゐる間は、補充として新規の人を雇ひ入れるわけにもゆかないので……

主婦煙草盆と茶を運んで來る。

竹村　どうぞおかまひなく。

主婦階下へゆく。

竹村　それでその、勤續年數によつて缺勤期間が定めてあつて、期間が切れると自然退社といふ事になるのですが……

律子　その事はあたくしもよく承知して居ります。つまり今月中に出勤しませんと、あたくしも退社になるといふので御座いませう。

竹村　さうなんです。あなたのやうな模範的の婦人社員には特別の詮議があつてもいゝと思つて、係長にも話してみたけれど、矢張多勢の社員がゐるものだから、人によつて差別的待遇をするといふわけにもいかないといふので……

律子　それはさうで御座んせうとも。あたくしもかう長く休まうとは思ひませんでしたが、變にこじれてしまひまして、つい會社にも御迷惑をかけてしまひました。まだ御覽の通り病みほうけて居ますので、萬一此の月末迄に出られませんやうでしたら、解職になつても致方御座いません。

竹村　それで、その事を前以て御注意申上げて置かないと、後で誤解があつても困るといふので、僕が御使者に來たやうなわけでして……

律子　毎度恐入ります。

竹村　(公用はすんだといふやうな態度で煙草をふかしながら)この間會社をやめた小柴さんは、今でもこちらに御いつしよですか。何處かほかに勤めてゐるさうですが。

律子　雨洋商會といふのに出てゐらつしやいます。

竹村　何故うちの會社をやめたのですかねえ。あの人もなかなか仕事はよくしたが。

律子　あの方(かた)は英文タイプライタアが出來るものですから、その方の口を探してゐたのです。それに今度のところでは、はじめから月給ださうでして、さういふ點も私共には望ましい事ですから。

竹村　しかし、あの商會の經營者の淺羽つて男は評判のよくない男でしてねえ、學校では吾々の先輩だつたが、先代が金を殘したものだから、隨分遊び廻るさうですよ。小柴さんも奇麗(きれい)だから、うつかりするとひどいめにあひますぜ。

律子　でも、しつかりしていらつしやるから。

竹村　（時計を出して見て）いや、とんだお邪魔をしました。では、なるべく月末迄に出勤して下さい。折角熟練したあなたによされては吾々の係の能率にかゝはりますからな。

律子　さうでもありますまいけれど、あたくしとしても此上職を失つては困りますから、どうにかして出勤したいと存じます。

竹村　ながい事寝てゐたので、隨分かゝりも大變でしたでせう。失禮ですが、何かさういふ方の心配はありませんか。

律子　會社から戴く給料で、やつと生活してゐるのですから、かういふ時には心細う御座いますわ。

竹村　さうでせうとも、それで何ですか、別に今さしあたつてどうといふやうな事は……

律子　困つてゐるかとおつしやるのですか。それは困つて居りますわ。

竹村　僕がいふと變にとられるかもしれないが、若しお醫者のお禮とか藥代とかいふやうなもので、入用がありましたら、失禮ですが御用達してもよござんすけれど……

律子　ありがたうございます。

竹村　僕は決してそんな事で恩に着せようなんて氣はありませんよ。たゞ一時援助してあげるだ

けのつもりです。その點誤解されては困るんだが。

律子　ありがたうございます。けれども、只今差當つて拜借しなければならないといふ事もありませんですから。

竹村　さうですか。又何か心配事でもありましたら遠慮なく御相談なさい。出來る丈の事はしますよ。(又時計を見て)おやおや、大變お邪魔してしまつた。では失禮します。こんなに長く起きてゐて、障(さは)りませんかしら。ではお大事に。

竹村梯子段へかゝるのを、律子送るこゝろでしたがふ。

竹村　もうどうぞ、お見送には及びませんよ。そんな事して體に障るといけない。

律子　では失禮致します。

下りてゆく客の後姿を見下してゐる。

見送り果てゝ、又床に戻る。

主婦夕刊新聞を持つて上つて來る。

主婦　無事でしたか。口説かれやしませんでしたか。

律子　いゝえ、今日は會社の用でしたから。

主婦　（そんな事には頓着なく）男らしくさつぱりあきらめればいゝのに。毎日のやうに手紙を寄越したり、草花なんか持つて來たりしてさ。此間來た時、あたしア思ふさまいつてやつたんですよ。高木さんは病氣だから、幾度來たつて無駄ですよ、逢ひたくないつていふ人のところへ、度々押かけて來るなんてみつともないぢやありませんかつてね。ちつとひどいかなとは思つたんだけれど、あゝいふのに限つて妙に押の強いものだから、手きびしくやつてやつたのさ。

律子　悪い人ではないのですけれど、困つたものですわねえ。

主婦　それでも、よくよく思ひ込んだものと見えて、いくら嫌はれても思ひ切れないんだねえ。あなたも奇麗に生れついたおかげで、自分では知らず識らず、罪をつくつてるんですよ。

律子　もう結構。

主婦　いゝえ、ほんとですよ。裏の寄宿舎のお婆さんとお風呂でいつしよになるんですが、あんたところの二階にはいゝ女が二人も居るもんだから、うちの書生さん達が大騒ぎだつていつてましたよ。傘の色かなんかでつけたんでせうか、あんたの事を紫さんと呼んでるんだつて。それから小柴さんが、なんとかいつてましたよ。ピンクさんさ。何の事ですかねえ、英語かしら。

律子　（うるさくなつて返事をしない）

主婦　いつだつたか小柴さんに男の人から手紙が來て、いつかに日比谷公園に來てくれつてのがあつたでしよ。あれなんかも裏の書生さんのしわざぢやあなかつたかしら。あたしはあんたの方がいゝと思ふけれど、小柴さんも當節向のいゝ女つていふんでせうね。

律子　奇麗だわ。あんなに表情のある眼つてないと思ふわ。

主婦　あの方もおくにの方で、義理のお母さんの連子とかに惚れられて、逃出して來たんですつてね。どんな事があつても國には歸らないつていつてましたよ。

律子　人つてものはめいめいうるさい事があるものですわねえ。

主婦　でも小柴さんは、あんたと違つて、何のくつたくも無さゝうぢやありませんか。

律子　あたしは駄目。意氣地が無いのよ。それに弟の事も心配だし、瑞枝さんのやうにはなれないわ。

主婦　性分ですよ。陽氣な人とさうでない人と。どうでせう、此の頃の小柴さんたら、餘程どうかしてますよ。夜は度々遲く歸つて來るし、髮の結ひ方でも、みなりでも、すつかりはでになつたぢやありませんか。ないないで、いゝ人でも出來たのかしら。

律子　いやな小母さん。

主婦　いゝえ、どうだかわかりませんよ。あんたといつしよに會社に通つてる頃は、こんなに遲くなる事は一度だつて無かつたのに、近頃は一週間に二日か三日、きつと遲くなるんですからねえ。よつぽどあやしいもんですよ。

律子　それは、こんどのところは貰ふものも多いかはりに、商賣柄忙しいのでしよ。個人商店つてものは、大きい會社のやうに規則づくめではないでせうから、夜業なんかもあるんですよ。

主婦　おつとめの事はわからないけれど、あたしの眼にはちやんとわかつてゐるんですよ。たゞの娘さんと、いい人の出來た人とは樣子が違ふんですからね。

律子　（處女に特有の羞恥と憤りで返事をしない）

主婦　おやおや、とんだお喋りをしてしまつた。今夜は賴まれた物を縫ひあげてしまはなくちやあ。

喋り足りない後姿を見せて階下へ行く。

律子新聞を讀んでゐる。

賢一歸つて來る。

賢一　只今。

律子　お歸んなさい。今日は何時もより遲かつたぢやないの。

賢一　ちよつと廻道(まはりみち)したものだから。

律子　何處へ行つた？

賢一　何處ツて事もないんだけれど、晝間役所が忙しかつたものだから、變に疲れちやつて頭がぼんやりしてるから、無闇に歩いてやつた。姉さん、氣分はどう。

律子　いゝ方よ。あたしも何時迄も寢てはゐられないから、四五日したら起きようかと考へてるの。

賢一　熱は。

律子　朝のうちはちつとも無かつたけれど、夕方になつたら、又微熱があるやうな氣持がするの。あたしもうはかつてみるのいやになつちやつた。

賢一　(律子の額に手をあてゝみて)少しあるかな。大した事はないけれど。

律子　かういふのがいけないのよ。熱があるならあるで、すこし位高くたつていゝのだけれど、あたしのはいつ迄も同じやうな、これが一番いけないの。じれつたくなつちやつた。

賢一　今はいけない時候だからなあ。
律子　時候のせゐならいゝけれど、あたし、やつぱりほんものになるのではないかしら。
賢一　ほんものつて？　そんなことありやあしないよ。お醫者さんもただの風邪のこじれたのだといふぢやありませんか。
律子　それは氣やすめよ。あたしはお父さんの子なんだから、あの病氣が出やしないかと心配はしてゐたのよ。
賢一　姉さんがさうなら僕だつて同じだ。親が肺病で死んだからつて、子供にもきつと遺傳するとはいへないとさ。
律子　賢ちやんは大丈夫よ。あなたはお母さん似だから。
賢一　さうかしら。
律子　そつくりよ。
賢一　あんまりありがたくないなあ。僕も今にお母さんみたいな人間になつてしまふのかしら。
律子　違ふわよ。そんなつもりではないのよ。
賢一　だつてお母さんにそつくりだつていふからさ。

律子　それは爲方が無いわ。だけどお母さん似だからつて、一から十まで同じだといふわけではないわ。

賢一　一から十まで同じでたまるものか。

二人しばらく默す。

律子　あたし昨夜お母さんの夢見ちやつた。

賢一　どんな夢。

律子　子供の時の夢なの。はつきりとは覺えてゐないけれど、みんなで庭に筵(むしろ)を敷いて、お辨當を食べるところだつたわ。お父さんもゐたし、賢ちやんもゐたし、眼が覺めてから涙が出ちやつた。病氣になると氣が弱くなつて、あんなに憎んだお母さんの夢なんか見るのねえ。賢ちやんはお母さんの夢なんか見たことない。

賢一　ないよ。

律子　ほんと。

賢一　うゝん、もう先(せん)にはあつたけれど。

律子　さう、やつぱりねえ。

間。

律子　お母さんどうしてるかしら。あたし達の事考へることもあるかしら。

賢一　どうしてたつていゝぢやないか。事業に失敗した上、死病にとつつかれたお父さんを、さんざん苦しめた奴と……(突然憤りがこみあげて來る)あんな奴の姿みたいなものになる根性なんた。僕達の事なんか考へるものか。僕はお母さんの事なんか、なるたけ想ひ出さないやうにしてるんだ。

律子　賢ちやんは氣が強いわね。あたしもあの頃は氣丈だつた。お母さん程けがらはしい人間は無い、こんな人と同じ家に住み、こんな人といつしよに御飯を食べる事なんか出來ないと思つて、東京に出て來る氣になつたんだわ。賢ちやんは全くあたしに誘はれて來てしまつたのね。

賢一　うゝん、僕は一人でも飛出したよ。誰があんな侮辱をうけてゐられるものか。

律子　だけどねえ、あたし此の頃は時々思ひ出すの。あたし達がお母さんの不都合を責めた時、お母さんは泣きながら何といつて。みんなお前達の爲めだ。お父さんが借金の外には何も彼もなくなつてしまひ、その上長くわづらつてゐた後で誰がお醫者のお禮をし、誰がみんなに御飯を食べさせる事が出來るか。これからさき、誰が働いてお前達に食べさせるか、あたしはみん

なお前達の事をおもふから――といつて泣いたわねえ。あたしはあの時のお母さんの心持を、此の頃になつてやうやく察しる事が出來るやうになつた。

そつと眼を拭く。

賢一　そんならお母さんを許してもいゝと思ふのかい。僕は御免だ。

律子　さうぢやあないのよ。たゞお母さんも決して惡い人では無く、弱い、氣の毒な人だとおもふやうになつたのよ。

賢一　姉さんも病氣の爲めに弱虫になつたんだなあ。僕はかうして姉さんと二人で働いて生活してゐられれば滿足だ。役所の給仕で、朝から晩迄こきつかはれてゐるのだつて、國の町の人達にうしろ指さゝれて、肩身の狹いおもひをしてゐるよりは、よつぽどましだ。中學に入る事が出來なくたつて、ほしい本が買へなくたつて構ふものか。

律子　此の間ほしいといつた字引は未だ買つて上げなかつたわね。あたしがなほつたら、きつと買つてあげるから待つててね。

賢一　何いつてるのさ。僕はそんな事いつて姉さんをいやがらせようとは思つてやしないよ。

律子　この頃は自分が働けないものだから、賢ちやんのお小遣も、すつかりあたしの爲めになく

なつてしまふのね。

賢一　そんな事いはなくつたつていゝぢやないか。だけどね、僕瑞枝さんには濟まないと思ふよ。あの人がゐなかつたら、僕の力ではお醫者を呼ぶ事も、藥を貰ふ事も出來ないからねえ。

律子　ほんとに瑞枝さんにはお氣の毒ねえ。いくらなかよしだからつて、斯う迄親切にしてくれる人なんてあるもんぢやあないわ。あの方だつて、おくにの方は立派にやつてゐらつしやるさうだけれど、うちを捨てゝ來てるのだから、今ではあたし達と大した變りの無い身分よ。今度は今度で、少しでも收入の多い方がいゝからつて、馴れた會社をやめて、勤務時間の長い商店に移つたのも、みんなあたしの爲めなんですもの。

賢一　僕は瑞枝さんの親切だけは一生忘れない。

律子　あたしこそ、どうして恩返しをしていゝかわからないわ。萬一此の儘ほんものにでもなつてしまつたら、一生御恩になりつぱなしで、むくゐる時はありはしない。さうしたら賢ちやんがかはつてしてくれるわね。

賢一　よさうよ、そんな下らない心配は。いつたい姉さんはさきの事ばかり苦にしてゐるからいけないんだ。惡い癖だよ。

律子　損な性分なのね。だけど、くどいやうだが、瑞枝さんに對しては、あたしは感謝で胸がいつぱいになる——(聲が震へてやめてしまふ。)たゞあたしが心配してゐるのは、かうして寢てから三月の餘にもなり、その間收入は一文もなく、すつかり瑞枝さんのお世話になつてゐるのだが、これからさき、まだ斯うやつて寢てゐるやうだと、さうさう瑞枝さんだつて背負ひきれるわけが無いのだから、何とかあたし達も覺悟しなくてはなるまいと思ふの。

賢一　覺悟をするつて？

律子　あたし達があの人と別れて、こゝを出て行かなくてはならないかと思ふのよ。

賢一　出て行つてどうにかなるかしら。

律子　なるかならないか知らないけれど、兎に角瑞枝さんの肩を樂にしてあげなくてはねえ。(默つて考へてゐる)それはさうと、瑞枝さん今日も遲いのね。いくら忙しいからつて、こんなに遲く迄引止められては堪らないわ。

賢一　雨洋商會つてなんだらう。

律子　亞米利加や獨逸と取引があるんだつて。

賢一　割合に貧弱な店だね。

律子　どうして知つてるの。
賢一　今日散歩がてら見て來てやつた。外からだから内の事はわからないけれど。
律子　みかけはそんなでも、大變はでな商賣なんだつてさ。あたし達の會社なんかとはまるつきり風が違ふらしいわ。
賢一　だから瑞枝さんも此の頃は、段々變つて來たんだねえ。
律子　賢ちやんの眼にもさう見えて。
賢一　隨分變つたよ。頭から、お化粧まで變つたぢやないか。
律子　男の癖にそんな事迄氣がつくの。
賢一　だつてあんまり變り方がひどいからさ。
律子　そりやあ女は爲方がないわ。いつしよに働いてる人がさういふ風なら、ひとり丈違つたなりもして居られないぢやないの。
賢一　そんなら姉さんも、外の人がはでな風をすれば、その眞似をするのかい。
律子　あたしは駄目。あたしは依怙地だから多勢といつしよにはなれないのよ。そこへ行くと瑞枝さんは、そんな事にはこだはらないから、いくらでも流行について行かれるのよ。あゝいふ

明るい氣持は、とても羨ましいわ。

賢一　僕はあんなはでな風嫌ひだ。

律子　餘計な事だわ。瑞枝さんは瑞枝さんであれでいゝのよ。それに、あの位なら、そんなにはでつていふ程ではないわ。世間はもつともつと思ひ切つてはでになつてるんだもの。あたしがあんまり地味なものだから、それと比べて目立つだけなのよ。それぢやあ瑞枝さんが可哀さうだわ。

賢一　そんな事いつて、階下の小母さんだつて、さういつてたよ。小柴さんの此の頃の變りやう、あれがモダン・ガアルつていふんでせうかつて。

律子　こゝのうちの小母さんは口がうるさくていけないのよ。あんな人、なんてつたつて構やしない。あなたなんかいつしよになつて、女のみなりの事なんか、とやかくいふのはおよしなさい。みつともないわ。

賢一　(意外に強い律子の語氣に反撥して)僕はみなりの事ばかりいつてるんぢやあないんだ。それよりも、あの人の全體が變つて來たと思ふ。せんのやうにおちつきがなくて、年中そはそはして居て……

律子　およしなさい。あたし達は、瑞枝さんに感謝する事以外に何もいふ事は無いのです。あなたゞつてその位の事はわかつてゐるでしよ。聞き苦しいわ。

賢一　僕悪口をいつてるんぢやあないよ。たゞ心配してゐるんだ。階下の小母さんなんかゞいやな事をいつてるから。

律子　小母さんなんか何をいつたつて取合はなければいゝのよ。どうせいゝ加減な事を想像してゐるんだから。

賢一　だけど、瑞枝さんについては、僕も變に思ふ事がある。

律子　まだそんな事をいつてるの。變に思ふ事つて、何が變です。はつきりいつてごらん。

賢一　僕は瑞枝さんが、夜業があるなんて噓では無いかと思ふんだ。いくら忙しいからつて、女の事務員が九時になつたり、十時になつたりする事が度々あるものかしら。

律子　それはお役所なんかとは違つて、商賣となれば忙しい時は忙しいのよ。

賢一　をかしいなあ、僕今日瑞枝さんの店の前を通つた時、もう扉がしまつて、あかりが消えてゐたんだもの。

律子　賢ちやん、あなた變な氣を起して、探りに行つたんぢやないの。そんな探偵の眞似みたい

な事すると、姉さん承知しませんよ。

賢一　だつて……

突然おもてに自動車がとまる。格子が開く。

律子　瑞枝さんかしら。

瑞枝、酔つて居る。

瑞枝　苦しい。

律子　(起き上つて)どうしたの。

瑞枝　(べたんと坐る)あたし、お酒飲まされちやつた。

律子　お酒?　まあ、あんたつたら。

瑞枝　かんにんしてね。

律子　かんにんするもしないも、あんたそんな事していゝの。

瑞枝　よくないのよ。よくない事は知つてゐるわ。だけど飲んぢやつた。あんまり勧めるんですもの。

律子　誰か?

瑞枝　店の人達。だつて女の人も平氣で飮んで見せるんですもの。あたしだつて、お酒位飮んだつて大丈夫だと思つてね、つい飮んぢやつたのよ。

律子　いけないわ。ほかの人が何をしたつて、あんたはそんな眞似をしてはいけない。

瑞枝　叱つちやあいや。かんにんするといつて頂だい。

律子　（とらうとする手を振拂つて）瑞枝さん、あたしは眞面目にいつてるのよ。

瑞枝　だからかんにんして。（無理に律子の手に縋つて體を崩す）あゝ苦しい。いきが切れて、顔がほてつて、頭がづきんづきん痛む……

律子　おひや貰つてあげませうか。賢ちやんおひや持つて來て。

賢一不愉快さうに立つて行く。

律子　瑞枝さん、あたし女の醉拂ひなんか大嫌ひよ。

瑞枝　だからあたしあやまつてるのよ。もうお說教なんかしちやあいや。あたしあんたに叱られるの大嫌ひ。あんたは姉さんで、あたしは妹。だから、だから叱らないで、可愛がつてよ。それでなければ、あたし泣いちやふ。

律子　およしなさいよ、そんな駄々子みたいな事いふの。ふだんならあんたの茶目さんは可愛ら

しいけれど、今日のやうなのはいや、それよりも、いつたい、どうしたのか、ちやんと話して頂だい。誰と、何處に行つて、どうしたか。

瑞枝　もう二度とお酒なんか飲まないから何も訊かないで頂だい。

律子　いゝえ、訊く。あんたあたしには何もかくし事はしない約束よ。

瑞枝　そんな意地惡いはないでさ。

　　賢一こつぷに水をもつて來る。

律子　さ。

瑞枝　ありがたう。あゝおいしい。お酒なんかよりおひやの方がよつぽどおいしいわ。

律子　瑞枝さん、あたしくどいやうだけれど、きくだけの事はきいてよ。あんたもかくしだてしないで、はつきりいつて頂だい。

瑞枝　何をさ。

律子　あたし眞面目なのよ。よくつて。

　　瑞枝ただうなづく。

律子　あんた今日誰と何處へ行つた？

瑞枝　お夕飯を御馳走するからつて、主人がみんなを御料理屋へ連れて行つたの。あたしたちのとこみたいな店では、さういふ事が時々あるのよ。
律子　女の人までも。
瑞枝　こなひだうち、大變忙しくて夜業迄させたから慰勞の爲めだ。みんないつしよがいいつて、あたしを入れて三人ゐる女の人も、みんな行つたの。あたし一人なら斷るんだけれど、みんなが行くつていふのに一人だけ斷るのも變だから、つい誘はれてしまつたの。さうしたら、みんなお酒を飲んで、あたしにも無理に飲ませるんですもの、ひどいつたらないのよ。
律子　それから。
瑞枝　あたしお酒なんて飲んだ事ないでしよ。だから、こんなに醉拂つてしまつた。もう、こんな事しないから、ゆるしてよ。
律子　それでもよく一人で歸つて來られたわね。
瑞枝　あたし、とても、一人で電車に乘る事なんか出來ないのよ。だもんだから、自動車でそこの角迄送つて來てくれた。
律子　誰が。

瑞枝　主人が。

律子　瑞枝さん、賢一のゐる前で、こんな事いふのはいやだけれど、あたしの性分として默つてゐられないわ。氣にさはる事もいふかもしれないけれど、ゆるして頂だい。あたし、あんたの今度のおつとめ先は、よくないところぢやないかと思ふの。なんだか、今にとりかへしのつかない事が起きさうな豫感があるのよ。いくら忙しかつた慰勞だからつて、女の事務員迄料理屋へつれて行つて、お酒を飲ませるなんて變ぢやないかしら。

瑞枝　變よ。たしかに變よ。それでも世間では珍しい事ではないんですとさ。

律子　駄目。あんたは人のする事なら、何でもして構はないと思つてゐるからいけない。いいえ、あんたつていふ人は、人のする事が直ぐにしてみたい人なんだわ。

瑞枝　ひどいわ、それは。

律子　いゝえ、さうよ。あたしには危險に思はれて爲方がないの。あたし、あんた程好きな人はないから、そんないやなところに勤めさせて置き度くない。あんたは、こんなに長く寢てゐるあたしに、何から何迄よくして下さるばかりでなく、つとめはつらくても收入の多い方がいゝといつて、今度の店に變つたんでしよ。みんなあたしの爲めでしよ。あたし達は、職業によつ

て、さも獨立した生活をしてゐるやうに見えながら、一寸病氣にでもなれば、藥代を拂ふ事も出來やしない。幸ひあなたみたいなお友達があつたからこそ、お醫者様にもかゝれるし、下宿を追出されないでも濟んだんだわ。感謝するわ。何といつて感謝していゝかわからない。けれども、そんな店に行くのはいや。ひとごとではないわ。

瑞枝　あたしはまだまだあなたに對して盡し足りないのよ。あたしこそ、あんたつて人が居なければ、どんなに世の中が寂しいかわかりやあしない。

律子　ありがたう。ほんとにあたしはあなたといふお友達があるのでしあはせなのよ。でも、そのお友達があたしの爲めに、少しばかり月給が多いからつて、いやなところにつとめてゐるのを、默つてみてはをられない。あたし、お醫者なんかにみて貰はなくてもいゝ。三度三度御飯なんかいたゞかなくてもいゝ。だから、あんたはそんな風儀の惡い店なんかやめてよ。ね、あたしの體がなほつたら、又どこか二人いつしよのところに勤めませうよ。月給なんかいくら安くてもいゝわ。二人がいつしよに働いてゐられゝば、それ程幸福な事はないぢやないの。

せき込んで喋るので暖入りながら、律子瑞枝の手を強く握る。

瑞枝感動して、身をすり寄せる。

瑞枝　あたしが惡かつた。かんにんして、かんにんして……（幕）

第二幕

前の幕よりも二月位後。

病院の一室。

瑞枝顏面と手に繃帶をして床上で鏡を見てゐる。外傷の回復期。

賢一ノックして入つて來る。

瑞枝　誰。あゝ賢ちゃん。今頃どうしたの。

賢一　今日は日曜だよ。

瑞枝　あらさう。ちつとも知らなかつた。まあおかけなさいな。姉さんは。

賢一　又職業探しに出て行つた。三四日前、先の會社にゐた人に往來であつて、その人の心當を

きいて貰ふ事になつて居るんだつて。

瑞枝　それでは今日は來てくれないかしら。

賢一　どうだかしらない。たぶん來ないだらうと思つて僕來たんだ。

瑞枝　さう。姉さんあんたにはあたしのところへ行つてはいけないといふんぢやないの。

賢一　うゝん。

瑞枝　さうでせう。かくしたつてわかるわ。

賢一　いけないつたつて構はないぢやないか。ひとが入院してるのを見舞つて惡い理窟は無いや。

瑞枝　賢ちやんも偉くなつたわねえ。先の頃は姉さんのいふ事だと、口返答も出來なかつたくせに。

賢一　そんな事あるもんか。

瑞枝　だけど、ほんとに姉さんのいふ通り、賢ちやんはあたしのところへなんか來ない方がいゝのよ。こんな顏になつてしまつたのも罰だわね。あたしがあの晩乘つた自動車がトラックと衝突したと知つた時、賢ちやんどんな氣がして。

賢一　僕はね、あの晩瑞枝さんが、いくら待つても歸つて來ないものだから、夜つぴて寢られな

かつた。何か大變な事が起つたに違ひないと思つてね。姉さんも姉さんで、眠つたふりはしてゐるんだが、床の中でため息をつくのが聞えるのさ。

瑞枝　さう、そして朝の新聞を見た時、姉さんは何といつてた？

賢一　(答へるすべを考へながら)新聞は半分は出鱈目だから、さう思つてゐろ。どんな事が書いてあつても、瑞枝さんを信じてゐろつて……

瑞枝　で、あなたもあたしを信じてゐたの。新聞に書いてあるやうな女では無いと思つてくれたの。

賢一　(困つて)新聞なんてほんとに出鱈目なんだからなあ。

瑞枝　さうばかりもいへないのよ。あたしの事なんか一概に嘘とはいへないわ。

賢一　でも、嘘の事もあるんだらう。

瑞枝　それはあつてよ。けれども、何といはれても爲方が無い。自業自得(じごふじとく)なんだから、律子さんの眼には、あたしなんかなんて卑しい人間に見えるでせう。あたしはあの方のやうな強い意志を惠まれて生れなかつたのよ。だからあなた方にさげすまれるやうな事になつてしまつたんだわ。

賢一　僕達瑞枝さんをさげすんだりなんかしてゐやあしない。姉さんの長わづらひの間、どんなに親切にしてくれたか、その恩は忘れてはいけないと、姉さんも始終さういつてる。僕だつてさう思つてゐる。誰がさげすみなんぞするものか。

瑞枝　それは、むかしの事でしよ。今ではあたしなんか、同じ家にゐるのもけがらはしいんぢやあない？

賢一　そんな事あるものか。

瑞枝　あつてよ、あつてよ。あゝあ、何故あたしも、あの時運轉手やあの男の人のやうに、ひと思ひに死んでしまはなかつたんだらう。

賢一　死ぬなんて、そんな馬鹿なこと、その位の傷なら直きなほるだらう。

瑞枝　此の傷は元の通りにはなほらないのよ。それよりも、あたしつていふ人間が、もうどうしたつて元の通りにはなれないわ。あたしは此の病院にかつぎこまれ、意識を囘復した時に、直ぐに律子さんと賢ちやんの事を想ひ出したわ。こんな姿になつたからは、もうあの二人には顏を合せない。どうのめのめと逢へるものか。瑞枝は死んだものと思つて戴くと、それぱかり考へて、悲しくなつて涙が出たわ。それなのに、翌日目がさめたら、病後で衰弱してゐるのに、

律子さんが附添つて看護してゐて下さるんだもの、あたしには、それが苦痛だつた。何故はふりつぱなしにして置いてくれないの、何故見捨てゝ行つてしまつてくれないのと、心の中で恨んでゐたわ。賢ちやんには、こんなひねくれた心持はわからないでしよ。

賢一　瑞枝さんは怪我をしてから、又人が變つちやつたなあ。そんなにひがんで居るのはいけないと思ふよ。

瑞枝　ひがんでゐるつて？

賢一　ひがんでゐるとも。僕達は、瑞枝さんにどんな事があつたつて、一生變りはしない。いつ迄もいつしよに暮らしてゐたいんだ。

瑞枝　ありがたう。賢ちやんは先からあたしが好きだつたのね。姉さんよりもあたしの方が好きなんでしよ。やかましい事をいはないから。どう？　好きだつたのなら好きだつたといつて頂だい。

賢一　瑞枝さんはいつ迄も僕を子供扱してゐるんだなあ。そんな事きかれて返事が出來るものか。

瑞枝　いやな人。はつきりおつしやいな。あたしの方が好きだつて。

賢一返事が出來ない。

瑞枝　だけど、あたしはむかしの瑞枝ではないのよ。わかつて？

賢一すつかり悄氣てうつむく。

瑞枝ぢつとその様子を見てゐる。

律子ノック無しに入つて來る。

律子　(冷かに)おや、賢ちやんも來てゐたの。

瑞枝　もうちよつと前から。

律子　どう、あなたは。

瑞枝　もう退院してもよさゝうに思はれるの。顔の繃帶はなかなかとれないでせうけれど、手や足の痛みは殆んどなくなつたわ。

律子　さう、一度お醫者さんにきいて見ませう。でも、なるたけ無理をしない方がいゝ事よ。

瑞枝　それでも病院にゐては不經濟だから、一日も早く退院したいわ。

律子　そんな事いつて、無理に出てしまふわけにもいかないでしよ。手當丈は充分しなければ。

瑞枝　充分にしたつて、どうせ傷だらけの顔ぢやあないの。どうなつたつて構ふものか。

律子　(賢一に)あなた先刻から來てゐるのでしよ。そんならもう歸つてもよくはない。

瑞枝　いゝぢやありませんか。居たつて。

律子　あたし瑞枝さんと二人つきりで話したい事があるから、あなた先に歸つてね。

賢一　(むつとして)では歸らう。さよなら。

賢一さつさと出てゆく。

律子　あの人は今度の事があつてから、どうかしてしまつて、勉強も何も手につかないのよ。あの記事の出た新聞を、幾度も繰返して讀んでゐるの。

瑞枝　自分の信じて居た人が、いやしい心の持主だつたと思ふと殘念なんでしよ。あゝいふ純粋の心持の人には強く響くのね。濟まないわ。

律子　あたしの口からいつてはをかしいけれど、賢一はあなたを慕ひ過ぎてたわ。あの年頃になると、何か戀愛の芽生のやうな感情があるのではないかと思ふの。あたしには男の子の氣持はわからないけれど。

瑞枝　まさか賢ちやんが。

律子　いゝえ、さうもいへないわ。此の間も筆記帳の占いのが本箱の中にあつたから、何氣なく

開いて見てゐると詩や歌のやうなものが書いてあつて、それが矢張り戀愛の感情をうたつてゐるのよ。いつたいあの子早熟の方だけれど……

瑞枝　若しさうとしたつて、それは戀とかなんとかいふものではないでしよ。あたし達だつて、女學校の時分には、何といふ事もなく、先生や上級生を慕はしく思つた事があるでしよ。あんな氣持ではないのかしら。

律子　取越苦勞かとも思ふけれど、でもほんとに心配は心配なのよ。

瑞枝　それで賢ちやんがあたしのところへ來るのをいやがつてゐらつしやるの。

律子　別段いやがるつて事はないけれど……

瑞枝　さうかしら。あたしは、あたしみたいな自墮落な女に近づかない方がいゝと、あんたが考へてゐるのかと思つた。

律子　いやな瑞枝さん、何故そんなに疑ふんでせう。

瑞枝　律子さん、あたしこんなになつてからは、なるべくあなたとほんとの心持の、觸れ合はないやうに觸れ合はないやうにと努めてゐたけれど、うちあけるよりも祕しかくしてゐる方が苦しいから、お互に腹藏なくいひあつてみない？

律子　どういふ事なの。あたしはあんたにかくしてゐる心持なんか何もないけれど。

瑞枝　嘘。あたし、あんたの心持はよくわかつてゐてよ。

律子　つまらない想像はいやよ。あなたにも似合はないぢやないの。何でも構はずおつしやいな。

瑞枝　そんならいふわ。

律子　なあに、おつしやいつたら。

瑞枝　律子さん、あなたあたしを憎んでゐるでしよ。大嫌ひになつちやつたでしよ。けがらはしいと思つてゐるでしよ。顔を見るのもいやだと思つてゐるでしよ。

律子　どうしたの、そんなに興奮して。よくないわ。

瑞枝　いゝえ、あたしほんとのあなたの心持をきゝ度いのよ。

律子　いやな方。何故あんたはそんなに疑深くなつたのだらう。

瑞枝　あたしがさういふのは、自分の馬鹿がはつきりわかつたからよ。それから、あなたの性格を、あなた自身よりもよく知つてゐるからよ。ねえ、律子さん、あなたの現在いだいてゐる私に對する感情を、はつきりきかせて下さるのが、何よりの親切だわ。あたし達のながい間の友情に對しても、かくしだてするのは殘酷だわ。

律子　瑞枝さん、あなたはあたしを信じないの。あたしはあなたを嫌つたり、憎んだり、さげすんだりする心持は微塵もないわ。あたしはあなたに心をいつはつた事は、たゞの一度もありはしないわ。

瑞枝　きつと。

律子　きつとよ。

瑞枝　律子さん、あたしはもう、元の瑞枝ではないのよ。あなたにあまつたれて、可愛がられて喜んでゐた瑞枝ではなくなつたのよ。

律子　あなたは矢張どうかしてゐるわ。そんなに自分でいろいろの心持をこしらへて苦しむのはいけないことよ。瑞枝さんはむかしの通りのあたしの瑞枝さんよ。

瑞枝　あなたこそあたしの心持がわかつて下さらないのよ。あたしは自分のした事を、あなたから非難されるのは覺悟してゐるの。あなたはあたしが、兩洋商會に入つてから、萬事につけて變つた變つたといつて、度々忠告してくれたわね。いつだつたか、あたしが醉拂つて歸つて來た時は、ほんとに恐いと思ふ程叱られたわ。あんなところにつとめてゐてはいけない、直ぐにやめてしまへといはれたでしよ。あの時ほんとにやめてしまへば、こんな事にはならなかつた

のに、あんたのいふ事をきかなかつた罰があたつたのね。あの時、お酒を飲んだ丈でも、あなたは許して置けない人なんですもの。それがあたし……どうせわかつて居るでせうけれど、あたし自分をやすやすと提供してしまつたのよ。（泣聲にはなつてゐるが泣いてはゐない）

律子　瑞枝さん、およしなさいよ。さういふお話なら、いづれゆつくりきくわ。今そんな事考へないでね。

瑞枝　考へるなといつても、それは無理よ。誰が考へないで居られるものですか。いくら自業自得だつて、あんまりひどいわ。こんなみつともない片輪者になつてしまつて、あたし世の中が、こんなに暗くならうとは思はなかつた。ほんとのところ、あたしはあなたと斯うしてゐるのもいや、これからさき、あなた方といつしよに居る事なんか、あたしには堪へられない、そんな我慢は出來ない。

律子　何故そんな事をいふの、あたしいやだわ。

瑞枝　あなたは清淨な事を理想とする人ですもの。あたしみたいに踏みはづした女を、側に置いて平氣で居られる人ではないわ。

律子　いゝえ、決してそんな事はない。あたしはあなたにどの位、精神的にも物質的にも世話に

なつたか、どんなに助けられて來たか、それを忘れるやうな女だと思はれては殘念よ。どんな事があつたつて、あなたの方から逃げて行つたつて、一生あなたを忘れはしない。あたしの友情に變りはない。

瑞枝　あたしの方から逃げて行く？　そんな事があつていゝものですか。

律子　だつてあんたはあたし達といつしよには居られないつていふから。

瑞枝　あたしはあなたのやうな理性の勝つた人に縋つてゐて、はじめて安心してゐられたのだわ。最初に一目あなたを見た時、これはたゞの人ではないといふ氣がしたのよ。あたしの直感に間違ひはなかつた。あなたの端正な顏と、考へ深い眼の光、それがどれだけあたしを賴らせてくれたか。あたしはまだ戀愛の感情を、ほんとには知らないのよ。それはあなたに對する思慕の情が、戀する餘地を與へなかつたの。あなたの庇護があれば、あたしは一生淸らかに暮らせる――そんな事もなぐさめのひとつだつた。それがどうでせう。あたしは自分から、あなたの一番嫌ふ境界に落込んでしまつたのですもの。

律子　瑞枝さん、もう過ぎた事は爲方が無いわ。それよりも、これから二人で助けあつて、出來る丈意義のある生活を送りませうよ。

瑞枝　駄目よ。駄目よ。あたしには何が意義ある生活か、まるつきり見當がつかない。

律子　正しく生きる事。奴隷のやうに扱はれてゐた女が、獨立して生活する、それ丈の事でも意義があるわ。

瑞枝　そんな事、あたしには何の値打も認められないわ。あたしは、あなたのやうな精神的の滿足丈ではいや。あたしはいつでも、內心おもひあがつて居た。結婚しようと思へば、どんなところへでも行かれる。結婚なんかしまいと思へば、タイプライタアを叩いてさへゐればいゝ。さういふ安心があつたの。それなのに、こんな顏になつてはあたしには人中に出る勇氣が無い。あなたのやうな奇麗な方には、醜い容貌の者は、どんなにいぢけた心、どんなに寂しい心を持つて居るか、まるつきりわからないのよ。自分でいつてはをかしいけれど、人が奇麗だといつてくれゝば、あたしだつて嬉しかつたわ。それ丈の事にも生甲斐を感じて、一生の安心がもたれかゝつて居られたの。それがどうでせう。顏半分に傷痕が殘つて、死ぬ迄消えないといふのですもの、あたしは駄目。あたしは駄目。

律子　あたしはきりやうが惡くたつて、そんなに悲觀しはしないわ。それではあなたの煩悶は、顏の傷の事ばかりなのね。

瑞枝　（意味をとりかねたが察して）い丶え、決してそればかりではないけれど、でも、若い女にとつて、これこそほんとの致命傷ではないでせうか。

律子　瑞枝さん、怒つてはいやよ。だけどあたしなら、顔の傷よりももつと消し難い傷の方が深いと思ふわ。

瑞枝蒼白になつてじつと相手を見る。

律子　あたしは、こんな事はいふつもりは無かつた。けれども、あんたがあんまり顔の傷ばかり氣にしてゐるものだから……

瑞枝　律子さん、あたしの場合、あなたゞつたらどうなすつて。

律子　あなたの場合つて？

瑞枝　あたしの不幸のもとは、兩洋商會に入つた事だと思つて居らつしやるでせう。あの時は、少しでも收入の多い方をと思つて移つたのよ。先の會社では普通の事務員でしよ。隨分報酬が違ふんですもの。尤もふたんはそれでよかつた。自分がどうにか食べて、着て行かれゝば滿足だつたわ。けれども、あなたが病氣になつてからは、あたしはもつともつとお金がほしくなつてしまつた。今から考へれば、僅かのお金だけれど、前の會社からは退社手當を貰ふ、今度の

店ははじめから月給がいゝ、そんな事を胸算用して、あたしは一息ついた積りだつた。だけど、駄目。お金なんてものは、よつぽど澤山あるのでなければ、少し位の多い少ないでは同じことだわ。どうかしてもつとお金がほしい。あなたに何の心配も無く養生させ、出來る事なら轉地もさせ度い。賢ちやんにも勉強させ度い。さういふ慾が段々大きく、しまひにはお金の事ばかり考へるやうになつてしまつたわ。そこへつけこんで來たのが、あの男なのよ。だけど、あたしはひとに誘惑されたとは思はない。いくら反省してみても、自分から進んで行つたとしか考へられない。それ程お金がほしかつた。さうする外に、あたしなんかのうでゞ、どうしてお金が入つて來るでせう。

律子　瑞枝さん、それではあなたは、みんなあたしの爲めだとおつしやるのね。あたしが病氣で寢てしまつて、收入はなくなる、醫者にはかゝる、いろいろものいりが多く、あなたに負擔をかけなければならなくなつた爲めに、あなたは……（心外に堪へられなくなつて聲が消える）

瑞枝　いゝえ、律子さん、誤解しては困るわ。あたしはあなたの爲めに身を捨てたとはいひはしないわ。あたしは意氣地が無かつたのよ。そんな事迄しなければ、外に絶對に途が無いといふせつぱつまつたところ迄は行つて居なかつた。あたしのは、自分にも慾があつたのよ。みつと

もないなりはしたくない。いゝ着物も着たい。洋服も着てみたい。さういふ根性の強い人間ですもの、決してひとの爲めにどうといふ事はいへないわ。むしろ、ひとの爲めといふ口實の出來たのに安心した、その心に隙間が出來たのだと思ふわ。

律子　いゝえ、いゝえ、あなたはあたしの爲めに犧牲になつたと思つて居らつしやるに違ひ無い。何故あたしなんか、死なうとどうしようと、放つて置いてはくれなかつたのです。あたしはあなたに、そんな事を求める氣はなかつた。

瑞枝　だからあたしはさういつてるのよ。決してあなたの爲めではない、自分の心のぬかりだつたと。だけど律子さん、お金の無い女が、親とか良人とかにくつついて居ないで、生きてゆく途があるものでせうか。

長き沈默。

突然律子に感動が來る。

律子　瑞枝さん、許して頂だい。あたしは自分の方が年上だと思つて、姉のやうな氣持でゐたけれど、ほんとはあたしがあなたに甘つたれてゐたのね。あなたが、どんなにあたしの事を心配してくれたか、どんなに苦しいはめに陷つてゐたか、どんな誘惑に直面してゐたか、あたしに

はわからなかつた。だから、あたしは自分勝手な理想主義から、あなたの行爲を憎み、嫌ひ、さげすむ心を抑へる事が出來ませんでした。あたしこそ憎まれ、さげすまれなくてはならない人間なのに、それには微塵も氣が附かず、何の反省もなく、自分はいゝ子になつて、あなたを咎める心でいつぱいでした。許して頂だい。

涙が頰を傳ふ。

瑞枝しばらくそれを見守る。無言のまゝひしと抱きつく。上から律子かゝへてむせび泣く。幕。

第三幕

第一幕に同じ。

瑞枝まだ半面に繃帶をしたまゝ雜誌を讀んで居る。

律子歸つて來る。

律子　いやに雲が低く下つてゐて、氣持の惡い日ね。往來を歩いてゐるうちに、頭のしんがぼうつとして、自分が何處にゐるのだかわからないやうな氣がするわ。

瑞枝　うちにゐても息がつまるやうで、堪らないのよ。又傷口が痛みさうな豫感がして爲方が無い。かういふ天氣だと、繃帶が一層うつたうしく思はれるわ。

律子　今年はほんとにどうしたつて年なんでせう。

瑞枝　太陽の黑點があるんですつてね。

律子　いやだいやだ、太陽の黑點は。何處へ行つても、不景氣で人べらしの必要はあるけれど、新しく採用する餘地はないとか、あなたは體が弱さうだから、折角雇つても缺勤が多からうとか、こつちで望むところでは、てんから相手にしてくれやあしない。さうかと思ふと、新聞廣告を賴りにして行くところなんかは、まるで信用の出來ない人達ばかりで、あれではまるでこつちから女衒宿に飛込んで行くやうなものだわ。今日なんぞ、かういふうちがあるのよ。共榮相互利殖會社つていふのが、婦人監督役招聘といふ廣告を出してゐるから、たづねて云つて見ると、とてもひどい路地の中で、浴衣がけの事務員らしい若いのが取次に出ると直ぐに、社長が二階から裸で下りて來て、まあお上んなさいなんていふのよ。そこそこに逃げて來てしまつ

たけれど。さうかと思ふと、保險證券擔保貸金組合つていふのは、通ひならば日給八十五錢で、同居してくれゝば食費もたゞで、月給四拾圓くれるなんて、人を馬鹿にした事をいふんですもの。腹が立つて爲方が無いから、何故通ひだと安いのですかつてきいてやつたら、通ひだとふいに休まれて困る事があるからだなんて白々しい事をいひながら、人の顏ばかり見て笑つてゐるの。それからもうひとつ冒險してやつた。あたしだつて、本心からそんな家に雇はれようとは思はなかつたけれど、どんな樣子のものか知つて置き度いと思つて、女給さん至急入用と書いて貼出してあるカフヱに入つて行つたの。亭主とおかみさんがかはるがはるいろんな事をきくのよ。御亭主はあるかだの、いろ男はないかなんて、隨分失禮なのよ。そのあげくがどうでせう。給金といつてはあげないけれど、お前さんのきりやうで心掛けさへよければ、うんと儲かるよ。その上いゝ鴨でも引かゝれば玉の輿さだつて。

瑞枝　ひどいわねえ。

律子　あゝあ、あたし女がつくづくいやになつた。なんだつて女なんてものに生れて來たんだらう。世の中が男なら男ばかり、女なら女ばかりだつたら、どんなに合理的に暮らせるでせう、男と女とがいつしよになる世の中では、女はいつ迄たつても駄目ね。女にも職業が與へられ、

經濟的獨立が出來るやうになつたといふのは表面ばかりで、女の重役も、女の課長さへありはしないぢやないの。たゞ家庭内の召使だつたのが、事務所の召使にもなれるやうになつたといふに過ぎやあしない。それも、女を雇ふ方が安いといふ、たゞひとつの理由で許される丈だわ。少數の天才か、幸運者は別として、昔から女の食べてゆかれる唯一の職業は、藝者の外に何があつて。何もありはしないぢやないの。

話のうちに主婦あがつて來る。

主婦　ごめん下さい。お話中ですか。

律子　いえ。構ひません。どうぞ。

主婦　今日はなんていやなお天氣なんでせう。とつても堪つたもんぢやあない。これでは達者なものだつて病氣になつてしまひますよ。

律子　(氣の無い返事)ほんとにねえ。

主婦　小柴さんもこんな日に、お醫者さん通ひはかなひませんね。

瑞枝　(うるさゝうに)えゝ。

主婦　何べんいつてみても同じ事だけれど、ほんとにとんだ災難でしたねえ。

瑞枝　罰があたつたのですわ。

主婦　それでも、まだしも運が強かつたんですよ。その男の方や運轉手なんか、その場で死んでしまつたんだつていふぢやありませんか。御身分のある方だつていふのにねえ。

二人とも不愉快になつて默つてゐる。

その氣色をみてとつて、かへつて反撥的に。

主婦　それはさうと、ほんとにいひにくい事なんですが、うちでも御存じの通り、長いこと注文取に田舍を廻つてゐて歸つて來ませんし、あたし一人留守をして困つてるんですがね、高木さんも長い間わづらつて寢てゐらしつたし、小柴さんもとんだ事で、いろいろ出の多かつた事は承知してゐますけれど、こつちも二月も三月も支拂を戴かなくては、全く困つてしまひますからねえ。あたしんとこだつて、華族さんでも大臣方でもないんだから、だまつて寢てゐても、銀行のお金が子に子を生むつてわけにはまゐりませんしね。今月も亦戴けないとなると、あたしもひぼしになつてしまはなければならないんですよ。

律子　小母さん、さう仰らないでも、あたし達も心配してゐるのです。何とかしなければ濟まないとは思つてゐるのですけれど、何しろあたしも長らく寢てゐましたし、そのうちに會社の方

もやめられてしまひ、やつとよくなつて、これから新規のつとめを探して働かうといふやさきに、今度は瑞枝さんがこんな事になつてしまつたんですもの、ほんとのところ今直ぐにつてわけにはいかないのですが、どうにでもしてお返ししますから、もうしばらく待つて下さらない。今日のところ三人のうち、賢一だけが稼人なんですもの、如何心配しても爲方がないのですわ。でも、あたしだつてさういつ迄も斯うしてはゐられませんから、ほんとにもう少し待つて下さいましな。

主婦　だつてさ、あんたの病氣の時から隨分待つてあげて、これが癖になつてはあたしの方もやりきれませんよ。

律子　小母さん、あたし達を信用して頂だいな。今迄にこんな事は一度も無かつたのですからね。あたし達も、ほんとに今は苦しいんですもの。

主婦　高木さん、餘計な事をいふやうだけれど、あんたなんか考へやうひとつで、ちつとやそつとのお金に苦勞しないだつて濟むぢやありませんか。人一倍いゝ女に生れて來たしあはせで、どんないゝめを見る事も出來るんぢやありませんか。あたしみたいになつては、誰だつてはなも引かけないけれど、此の頃は女にだつて、いろいろ面白い商賣があるつて話ですよ。

瑞枝　（たまりかねて）小母さん、小母さんは律子さんに何をしろつていふの。お妾にでもなれつていふんですか。

主婦　（一層意地にかゝつて）何もお妾とばかりは限りますまいけれどね。

瑞枝　あんまりひどいわ。そんな事いつて。

主婦　あたしにいはせれば、小柴さん、あんただつてあんまり人がよすぎますよ。社長さんだかなんだか知らないけれど、勝手な眞似をされて、おまけにひどいめに逢つたんぢやありませんか。向ふのうちにねぢこんで行けば、先方だつて話のわからない人間ばかり揃つてるわけでもないんでしよ。

律子　小母さん、御親切にありがたう。あたし達もよくよく考へてみますから、もう少しの間待つて下さいな。

主婦　ほんとにとつくりと考へて御覧なさいよ。惡い事はいはないから。

律子　御忠告は忘れませんわ。だからがまんして下さいまし。

主婦　爲方のない人達ねえ。そんなら一度にとはいはないから、少しでもいゝから入れて貰ひませうか。さうしないと、八百屋や豆腐屋にやるお金もないんですからね。

律子　そんならあたしの持つてゐる丈、みんな差上げませう。どの位あるか知らないけれど、それでかんにんして下さい。

帯の間から金入を出し、さかさにして疊の上に錢を落す。

瑞枝と顔を見合せて苦笑する。

律子　これつきりありませんわ。

主婦　(すつかりつむじをまげて)そんなら遠慮しずに戴いて置きませうよ。(ひとつひとつ錢を拾ふ)それでは、あとも成るたけ早くして下さい。あたしんとこも、たゞであなた方を養つてゐられる身分ではないんですからね。

主婦わざとおちつきを見せて去る。

瑞枝　なんていふ失禮な奴なんでせう。あたし達がこゝに來てから、もう二年にもなるのに、まだあんなに人の心がわからないんでせうか。

律子　あゝいふ人は、人の心なんてものの存在は知らないのよ。

瑞枝　だつて、あんまりだわ。あたし達あの人には、隨分親切にしてやつたのよ。いつでしたつけ、御亭主が旅先でお金がいるといふ時には、丁度貰つて來たボオナスを、その儘貸してやつ

た事もあつたし、あの人が病氣をした時には、あなたとあたしとかはりあつて、よつぴて看護してやつた事もあつたぢやないの。

律子　駄目よ。そんな事いつたつて、あの人には自分の苦しみはわかつても、人の苦しみはわからないのだから。いゝわ、いゝわ。當分何とでもいはして置いて、こつちも一生懸命に働いて、今に又お世辭をいはせてやるから。

瑞枝　だつて、あんまり失禮よ。あんたにむかつて、きりやうがいゝからどうだとかいつてさ。

律子　いゝ事よ。あゝいふ人間にはとりあはないのが利口よ。お金の顔さへ見せてやればいゝんだから。

瑞枝　でもねえ、そのお金つてものが、あたし達には縁のないものなのではないかしら。

律子　そりやあ百萬長者になれつこはないけれど、いつ迄かうでもないでしよ。

瑞枝　あんたは何時でも將來に希望を置いてる人なのね。

律子　えゝ、あたし夢想家なの。

瑞枝　あたしには明日の希望がなくなつちやつた。律子さん、あたしはね、此の繃帶のとれる日の近づくのが、段々苦痛になつて來たわ。元の通りなほるものならいゝけれど、深い傷痕の殘

る事は覺悟しなければならないと、お醫者さんもいふんですもの。いくらあんたにさとされても、あたしには勇氣が出ない。こんなみつともない、誰にも直ぐに、あゝあの女だと指さしされる顏を、のめのめと人中に曝す事は出來ないわ。第一、あたしは、あなた方きやうだいのやうな、淸淨な人といつしよにゐるのが苦しいのよ。御覽なさい、此の頃の賢ちやんを。あんた、いつかさういつた事があるわねえ、賢ちやんはあたしを慕ひ過ぎてゐたつて、あれはほんたうだつたのね。賢ちやんはきつと、あたしを缺點の無い、やさしい女だときめてしまつてゐたのね。それが途方もない人間だつたとわかつたものだから、世の中にあるもの丶値打が狂つてしまつたんでしよ。此の頃賢ちやんの樣子を見ると、あたし自分の罪業が恐ろしくなるわ。

律子　それはあたしも心配してゐる事なのよ。あの子はちひさい時から敏感過ぎていけなかつたの。だけど、なんといつてもまだ子供ですもの、別段戀とかどうとかいふ意味ではなくて、たゞ何か人なつかしい感情の芽生が折られてしまつた位のものでしよ。

瑞枝　それでもねえ、あたしには口もきかなくなつてしまつたわ。まだしも病院に來てくれた頃はよかつたんだけど。

律子　いつか折を見て、あたしからようく話をしてみるわ。此間も、あんまり遲く歸つて來たか

ら、どうしたのかと思つたら、役所のお友達といつしよに淺草へ行つたんですつて。段々さういふ事を覺えるので、あたしも心配は心配なのよ。

瑞枝　なんだかあたしの事がもとになつて、一人の人を惡くしてしまふのではないかと考へると、こゝにいつしよにゐる事は辛いのよ。そんな風に人に迷惑をかけ、自分自身は生甲斐を感じる事も無いものが、たゞ生きてゐるといふ丈で、何の意義があるのでせう。

律子　瑞枝さん、又あなたはじめたのね。あんたはあたしさへあれば、外には誰もいらないといひいひしたのを忘れたの。一生涯あたしといつしよに暮らしてゐたら、生甲斐を感じない? あたしは、あなたといつしよに暮らせる丈でも生甲斐があると思つてよ。

瑞枝　あたしも先にはさう思つてゐたわ。さう思ふ自分の感情に醉つてゐたけれども。正直にいへばもう駄目よ。

律子　それぢやあひどいわ。あたしはちつとも變らないのに。

瑞枝　あんたはそれで生甲斐を感じる筈よ。だつて、あんたには奇麗に身を持してゐるといふほこりもあれば、弟を偉いものにしようといふ張合もあれば、あたしといふ片輪みたいな厄介者を背負つて立つてゐて、それの爲めに犧牲になつてやるといふ強い者の喜びがあるわ。あたし

にはさういふものが一つも無く、みんな遠方に行つてしまつて、もう二度と歸つては來ないのですもの。あたしは、東京へ出て來てから、一度も音信をしない故鄕の事も考へるやうに弱くなつてしまつた。でも、自分が見捨てゝ來た土地、誰も彼もむかしのあたしを知つてゐる土地へ、どうして此の姿で歸れるものですか。

律子　あんたもお國の事を考へたの。あたしもふいと鄕里の事を想ひ出す事があるわ。母に縋つてお金を送つて貰はうか、あたしのうちが貧乏になつた爲めに、心ならずもよその人の世話になつてゐる母ではあるけれど、少し位の融通ならしてくれるだらうなんて、勝手な事を考へるのよ。けれども駄目。あたしには出來ない。母の行爲を非難したものが、どうしてその母からお金が貰へるでせう。母のお金は、母が自分で正當に稼いだお金ではないにきまつてるわ。母が身を賣つた、みのしろ金にひとしいものだわ。あたしには、そんなお金を貰ふ事は出來ない。出來ない。瑞枝さん、どうぞ辛抱して頂だい。今にあたしがどうにかするから。

瑞枝　どうにかするといつたつて、どうなるものでせう。あなた一人なら、それはどうにでもなつてよ。だけど、あたしはどうなるでせう。あたしには働く氣も、自分を養つてゆく氣も何もないのよ。そんな氣はなくなつてしまつたのよ。あなたに慰められてゐる瞬間には、あたしも

まぎれて笑つてゐられるかもしれないけれど、人つてものは、さうさうひとつの心持を持續ける事は出來やあしないわ。あたしは此の世の中がいやになつてしまつたんですもの。人は未來の夢を持つてゐないで、生きてゐられる筈が無いわ。あたしは矢張、あの時死なゝかつたのが不幸なのよ。どうしてみつともなく生殘つたんでせう。

律子　およしなさいよ。それよりも、あたし達の友情を、どこ迄も至上のものとして、そこに生甲斐を見出す事につとめませうよ。生活の事なんか、どうにかなるに違ひないわ。まさか、ひぼしになる事もないと思ふわ。

瑞枝　若し、どうにもならなかつたら、どうして。

律子　あなた一人をひぼしにはしないわ。あたしもいつしよにひぼしになるのよ。

瑞枝　（わざとはれやかに）嬉しい。あたし早くひぼしになつてしまひ度い。

律子が笑顔を向けたのに甘へて。

瑞枝　あたしほんとは死んでしまひ度い。いやなおもひをして生きてゐるよりも、いやな事の少ないうちに死んでしまひ度い。

律子　あたしは死ぬのは嫌ひ。此の世の中に生きる力が無くて、負けて死ぬのなんかいやだわ。

端枝　あたしはもう負けてしまつたのですもの。そんな負惜しみはいはない。

律子　負惜しみ？　ひどいわねえ。負惜しみでもなんでもいゝわ。あたし、どうかして瑞枝さんを、もう一度むかしの快活な瑞枝さんにしてみたいわ。

瑞枝　無理な注文よ。やつぱりあなたには、今のあたしつてものが、ほんとにわかつてゐないのねえ。

律子　その事はもういはないで頂だい。あたしだつて愈々となれば、あなたのいふ通り、いつでもいつしよに死んであげますよ。でもね、あたしいつだつたか、何かで讀んでひどく口惜しく思つた事があるのよ。女といふものは、直に自殺といふ最後の手段を擇んで責任を回避する――そんな攻擊だつた。あたしはそれを讀んだ時、ほんとに口惜しく思つたの。死ぬものか、どんな事があつたつて死ぬものかと決心してやつた。ほんとに死を擇ぶ事は卑怯な氣がするの。

瑞枝　それは、あなたがまだ死ぬやうなめにあはないからいへる事なのよ。

律子　いゝえ、あたしは死なゝいわ。どんなめにあはされても。たゞ、あたしに死ぬ場合があるとしたら、あなたといつしよに死ぬ事だけだと思つてゝ頂だい。

主婦突然梯子口から顔だけ出して。

主婦　高木さん、お客さまですよ。
律子　どなた。
主婦　いつもの男の方。断りますか。
律子　（考へて）あたし、おめにかゝりませう。
　　瑞枝に意味のあるやうな無いやうなめくばせをして立つ。
　　主婦の顔消える。
　律子へだての襖をしめ、次の室に座蒲團を出し、階下へ行く。
　直ぐに、竹村景吉を伴つてひつかへす。
律子　又こんな狹いところで失禮ですけれど。
竹村　お邪魔してすみません。その後はすつかり御丈夫ですか。
律子　おかげさまで元氣になりました。
竹村　矢張流感かなにかだつたのですね。
律子　さあ、いかゞでせうか。肋膜炎とか肺病とか、そんな病氣ではないかと心配して居りましたんですよ。

竹村　（襖の奥を氣にしながら）小柴さんは今でも御いつしよで。

律子　えゝ、でも今日は出かけまして、居りません。

竹村　（矢張襖が氣になる）では、どなたもおいでにならないのですか。

律子　えゝ、あんまりとりちらして居るものですから、樂屋はお目にかけ度くないと思ひまして。しめると暑いので御座いますけれど。

竹村　小柴さんはとんだ事でしたねえ。新聞を見て驚きましたよ。あの人もうちの會社をやめないで、辛抱してゐればよかつたのに。

律子　でも、兩洋商會の方ですと、自分の技能の振へるタイピストとして、相當の待遇をしてくれるといふ話でしたから。

竹村　そのかはり、とんだ大怪我をするやうな事になつたぢやありませんか。つまらない事をしたもんですなあ。

律子　それは結果から見ての事ですわ。誰がそんな不幸を豫想するものですか。

竹村　しかし、いつかもお話したやうに、あそこの主人といふのは評判の色魔だつたのですからねえ。で、小柴さんは、今はどうしてゐるのですか。

律子　まだ怪我がなほりきらないものですから、病院へ通つてゐらつしやいます。
竹村　傷は餘程ひどいのでせう。顔をやられたのださうですね。
律子　えゝ、お氣の毒ですわ。
竹村　氣の毒ですねえ。あの人なかなかシャンだつたし、自分でも大分自信があつたのでせう。
律子　さあ、どうでせうか。
話が途切れると間が悪く、竹村煙草を出して火をつける。
律子　（賢一の机の上の新聞をとつて）灰皿もありませんの。これでかんべんして戴きますわ。
竹村　いや、それには及びません。
ポケットから別の煙草を取出し、ひとつを灰落しに代用する。
律子　竹村さん、今日は何か御用でもおありなんですか。
竹村　（ひどくあわてゝ）いや用事といふわけではないのです。會社をやめてから、どうしてゐらつしやるかと思つて。それに會社の立場も一度よく説明して、惡しからず思つて戴き度いと考へましてね。實際病氣缺勤者に對する規定は、少し殘酷ですよ。あれは何とか改正しなくては……

律子　その事ならわかつて居りますの。あたくし、會社の御處置に對して、別段何とも思つては居りませんわ。

竹村　さういはれると尙更お氣の毒ですよ。あなたのやうな、讀み書きそろばん何でも達者な人を失ふのは、會社としても非常な損ですからなあ。

律子　竹村さん、よして戴きませう。あたくし、ほんとに何とも思つては居りませんわ。多勢の人を使つてゐらつしやるのですもの、めいめいの都合で勝手に休むやうでしたら、仕事の能率はあがりつこありませんわ。

竹村　なんだか、こつちが氣になるものですからね。

律子　御親切に。恐入りました。

竹村　それで、その後はどうしてゐらつしやるんです。

律子　どうもいゝつどめがなくて困つて居ります。

竹村　それは困りますね。あなたなんか、何でも出來るのだから、雇ふ方からいふとしあはせなんだがなあ。うちの會社なんかも、一度やめた人には再入社を許さないなんて窮屈な規則を作つてゐるのは愚かですよ。不都合があつてやめたのなら別だが、病氣なら爲方がないぢやあり

ませんか。
律子　あたくしねえ、今日はカフェの女給になつてみようかと思つて、行つてみたのですよ。
竹村　カフェに？
律子　えゝ。それからこゝのおかみさんには、妾奉公か賣春婦にでもなれといはれましたわ。
竹村　まさか。
律子　いゝえ、ほんとなのです。おはづかしい話ですが、このうちへ拂ふ可きものも拂へないやうな次第でして、だもんですから、今日はお茶も煙草盆も出て參りませんのです。
竹村　さうですか、それはひどいなあ。成程、あれだけ長くわづらつて、その上就職の道が無いとすれば、お困りなのは無理もありませんよ。
律子　あたくしの病氣の時は、小柴さんが何から何迄して下さつたのでした。ところが、その小柴さんがあんな事になつたのに、あたくしにはどうしてあげる力も御座いませんのです。それで、あつかましい事ですけれど、一度おたづねして、お願ひしてみようかとも思つてゐたのですが、あんまり虫のよすぎる話ですから……
竹村　あつかましいといへば、僕こそあつかましいはなしで、あなたが迷惑される事を承知しな

がら、かうして度々うかがふのですから、さぞかし不愉快に思はれる事と氣はついてゐるのです。いつだつたか、此處のうちのばあさんに、手きびしくいためつけられましたよ。

律子　申譯ございません。

竹村　さういはれると尙更參つてしまふ。

律子　(しばらく考へて)竹村さん、あたくし自分ながらづうづうしいと思ふのですけれど、あなた先日お出で下さつた時、あたくしが病氣で困つてゐるなら、少し位の事は心配してやつてもいいといつて下さいましたが、只今でもさういふ御親切をお持ち下さるのでせうか。

竹村　それは、あなたが困つてゐる場合、勿論僕なんかに大した事は出來ないけれど、出來る範圍に於て御助けする位の事なら、何とかしてあげ度いと思つたのでしたが……

律子　只今でも？

竹村　つまり、今さしあたつて困つてゐるといふんでせうね。

律子　えゝ、はつきり申しますと、一文も無いので御座います。けれども、あなたのお言葉に甘えて、こんな事をお願ひするのは、あんまりずるいやうにも考へましてねえ。

竹村　ずるいなんて事は無いけれど。

律子　いゝえ、あなたから度々御親切にお手紙を戴いた時には、失禮な御返事を差上げながら、自分が食べる事も出來ない程困つて來たとなると、今度は勝手なお願ひをしようといふのですから。

竹村　それは別問題ですよ。で、いつたいどの位御入用なんです。

律子　さうですねえ、あたくしどもの力では、一時におかへしする事は出來ないし、さうかといつて度々お願ひするのもいやだから(しばらく考へて)いかゞでせう、五百圓拜借出來ませんでせうか。

竹村　五百圓？

律子　この家の拂ふものは大した事はありませんのですけれど、小柴さんの入院費も隨分かゝりましたし、これからも未だいるだらうと思ふのです。

竹村　(豫想した金額より多いので)五百圓ですか。

律子　實は千圓と申上げようかと思つたのですけれど、五百圓でもあたくしどもには大金ですし、ほんとのところ、あたくしまだ五百圓のお金を持つた事は御座いません。いゝえ、その半分だつて、持つた事があるかないか……

竹村　五百圓は困つたなあ。僕はあなたの下宿料か藥代位の話と思つてゐたのだが、小柴さんの入院費もあるのですか。病院も近頃は高いからなあ。

律子　いかゞでせう、拜借出來ますでせうか。

竹村　しかし、その入院費の方は、あの男の家の方で負擔するのが當前ではないでせうか。

律子　でも、御主人がおかくれになつたのでは、どうにもなりませんでしよ。

竹村　僕にとつても五百圓はとても大金ですよ。實は百圓内外の事と考へてゐたのでしたが、こいつは弱つたな。

律子のはつきりした態度にすつかり壓倒されてゐる。

律子　無理なお願ひでしたかしら。

竹村　どうも少し荷が勝過るので……

律子　それでは致し方御座いませんわ。あたしも大金を拜借するには覺悟をして居りましたのですよ。

竹村　覺悟？

律子　えゝ、どういふ覺悟だとお考へになつて？

竹村　さあ、なんですかなあ。

律子　あたくしねえ、あなたの御望みになるものを差上げようかと思ひました。

　　竹村氣魄に打たれてしまふ。

　　長き間。

竹村　（非常な努力で）では、僕がその金をお貸しするとしたら、いや、その金を差上げるとしたら、あなたは僕が度々申上げた通り、僕と結婚してくれるつもりですか。

律子　はつきり申上げませう。あたくし、結婚はいやなのです。お金も拜借する丈で結構です。第一あたくしは、あなたに對して少しも戀を感じては居りませんの。たゞとりひきを致さうかと思ひましてねえ。

竹村　冗談はよしませう。僕は實際眞劍で、あなたに結婚を申込んだのですから。

律子　あたしこそ眞劍なのです。

　　極めて眞面目なので、竹村愈々かたくなる。

竹村　今の御話は御話として、僕は決して代償を求めようとは思ひません。しかし、兎に角金策して見ませう。出來るか出來ないか、いづれあらためて伺ひます。

律子　折角お出で下さいましたのに、いやな事ばかりお耳に入れてすみません。

竹村　いゝや、なあに……

追はれるやうに階下へ行く。

律子見送つて行き、直ぐに引返す。

襖をあけると、瑞枝沈思してゐる。

律子側に來て坐つて。

律子　瑞枝さん、驚いた？

瑞枝　驚いたわ。あんな事いつて追拂はれては堪らないわね。

律子　あたし追拂ふつもりでいつたのではないのよ。あたし、ほんとに自分をくれてやらうかと思つたの。

瑞枝　あなたが。まあ、どうして。

律子　瑞枝さん、あたしにもようくわかつた。女には、からだの外に提供するものは何もない。腕力があれば土方にもなれるけれど、あたし達では駄目だし、あたし達の持つてゐる才能なら、男の方が餘計もつてゐるに違ひ無い。どうしてもせつぱつまつた場合に、女がお金を得る道は

外には無いわ。あたしは、あなたが容易に人にゆるした事を心の中で責めて居た事を後悔した。あのおひとよしの意氣地なしと向きあつて話をしてゐるうちに、あたしはあなたの事ばかり考へてゐたのよ。あたしも同じ犧牲を拂はう。同じ苦痛を經驗して見よう。さう思つて、切出したの。若し、五百圓卽座に出したら、あたしはきつと拒まなかつたでせう。

瑞枝　律子さん、あんたどうかしたんぢやないの。ほんとにさう思つたの。

律子　ほんとに。

瑞枝　では、明日にもあの人が、お金を持つて來たらどうなすつて。

律子　持つて來やあしなくつてよ。あたしはあの會社に入つた時から出る時迄、あの人の下で働いて居たから、よく知つてるけれど、あの人は惡い人では無いのよ。どつちかといふといゝ人だわ。たゞ小心な、意氣地なしなのよ。あたしのいひ出した位のお金なら持つてゐるに違ひないのだけれど、驚いてしまつたのね。あたしの態度にびつくりしてしまつたのよ。

瑞枝　でも、ようく考へて、又出直して來さうな人ぢやあない？　あの人には、さういふ變な根強さがあると思ふわ。

律子　あたしは來ないと思ふ。あの人は、ほんとに氣の毒な位熱心に、あたしと結婚したいといい

つて來たのよ。だけど、結婚はしないといつてやつたから、もう來やしないわ。普通の男のやうに大膽ではないのよ。だから、かういふ一夜妻は買へないのよ。

瑞枝　わからない事よ。幾度あんたが斷つても、根氣よく手紙を寄越したり、あつてやりもしないのに度々たづねて來たり、いつもいやな顔もしなければ、怒つた樣子も見せない、何處かに執念深いところのある人だわ。萬一決心してやつて來たら、あんたどうするつもり。

律子　あたしねえ、瑞枝さん。その時はその時の考へにまかせるわ。さつきは、ほんとに自分もあなたの爲めに犧牲になりたかつたの。けれども、今は又我身が惜しくなつて來た。あたし、若しその時いやだつたら斷る。いつたん決心して差上げますといつたのだから、やつてしまつてもいゝけれど、考へてみるとお金なんかいらなくなつた。瑞枝さん、あたしもあんたといつしよなら死んでしまつても構はないわ。

瑞枝　だつて、あなたは死ぬ事はないわ。あんたが死んでは賢ちやんが可哀さうだわ。

律子　賢一は賢一で、自分の力で生きて行くでしよ。たゞ、あたしは、死ぬ事はやつぱり嫌ひなのよ。どうしても卑怯な逃げ方だと思はれるの。だから、もう一度あたしが滿足して生きて行く道を探してみる。いゝえ、職業なんかどうでもいゝの。そんなものでなく、もつともつと、

あたしの心をしつかりとつかまへて、夢でもなんでもいゝから、それによつて強い生甲斐を感じる事が欲しいのよ。そんなもの無いかしら。無かつたら、その時にいつでも、あなたにあたしを差上げるわ。

瑞枝、律子の両手を握る。

瑞枝　律子さん、ほんとに。

律子強くうなづく。

二人とも感激に言葉を失つて、互に顔を見合せたまゝ動かない。幕。

（昭和三年八月三十一日）

隣同志

人

兵頭　主人
はるみ　妻
甲斐　友人

第一幕

場面

兵頭の家。室内。

兵頭、疲れてうとうとしてゐる。甲斐庭前から入つて來る。

甲斐　今日は如何、ちつとはいゝ方。
兵頭　どうもよくない。昨夜は夜中苦しみ通した。
甲斐　それは困るね。君もたいていではないな。
兵頭　おかげで一睡もしない。
甲斐　醫者は胃癌だといふのか。
兵頭　さうらしいといふのだ。本人には知らせてないが。
甲斐　困るな、それは。君はふだん忙しい人だ。充分休養を要する人だ。看護も看護だが、一睡した方がいゝぢやあないか。
兵頭　僕も寝たいと思つてゐるのだが、今電話がかゝつて、これから面會に來る奴がある。折角の日曜に商賣用の話を聞かされるのは堪らない。

二人とも話材が無い。兵頭はあくびばかりしてゐる。甲斐は所在なさに新聞を取上げる。

甲斐　どうも不景氣は愈々深刻になるやうだね。
兵頭　うゝ、一度は免れない運命さ。
甲斐　又、地方の銀行が大分怪しいやうだぜ。さうかと思ふと、保險會社の重役が、背任横領の

嫌疑で拘引されてゐる。

兵頭　苦しまぎれにいろんな事をやるのだ。みんな慾をたくましくする事ばかり考へてゐて、眞面目に事業を背負つて立たうとしないからいけない。

甲斐　實際世の中は惡くなつた。かうして三面を見てゐると、つくづく浮世だと思ふね。土工百餘名亂鬪、不良少年の暴行、萬引、保險金ほしさの放火、貧と病苦に親子心中――女房は病氣で寢てゐる、亭主は稼いでも稼いでも追つかない、二人の子供を殺し、女房を殺し、自分も首をくゝつてしまつた。

兵頭　全く悲慘だ。さういふ話をきくと、僕なんか子供の無いのがしあはせだ。はるみに萬一の事があつても、その點丈は心配が無い。

甲斐　緣起の惡い事をいふものでは無い。

兵頭　ほんとだよ。君だからいふのだが、はるみは助かるまい。可哀さうだが時期の問題らしい。

甲斐　しかし、醫者にもみたて違ひはある。よしんば胃癌だとしても、必ず死ぬとは限らないだらう。

兵頭　それは奇蹟に屬する事だ。奇蹟は今の世の中には無い。

甲斐　さうきめてしまふ事は出來ないよ。吾々の知識で解けない事はいくらでもある。不思議は未だ世の中に澤山殘つてゐる。

兵頭　さういへばさうだ。不思議は未だ世の中に殘つてゐるか。(急に身を起し、熱心になる)實はね、僕も不思議に思ふ事がある。はるみが病氣になつてから、僕は變な夢を見るのだ。ほんとに變な夢なんだ。夢でははるみが病氣で無くて、僕が病人なのだ。はるみが看護してくれる。君も毎日親切に見舞に來てくれる。だが、僕は助からない。どうしても死ぬといふ事が、自分にははつきりわかつてゐる。はるみも君もそれを打消すけれど、僕の精神は水のやうに澄んでゐて、死後の事をはつきり考へてゐる。僕は遺言する。そして死ぬ。死ぬには死ぬのだが、僕の眼は鋭く物を見る事が出來る。その眼の前に、ありありと色彩のある景色があらはれて來る。夢には色は無いといふが嘘だ。僕の夢は豐富な色彩を持つてゐる。まばゆい日光の中に、此の庭の景色があらはれる。そして僕の遺言通り、二人がその中で暮らしてゐる。誰だと思ふ、その二人を。

甲斐　わかるものか、夢ぢやあないか。

兵頭　それは、はるみと君なのだ。

甲斐　…………

兵頭　それが僕の遺言なのだ。自分の死んだ後は、いつしよになつてくれといふ……

甲斐　馬鹿な事を……

兵頭　ところが其の夢を度々見るから不思議だ。あんまり度々繰返すので、それが現實の事で、斯うして生きてゐる自分が夢なのでは無いかと疑ふ事さへある。

甲斐　君は疲れてゐるのだよ。はるみさんの病氣を心配して、神經が疲勞し切つてゐるに違ひ無い。

兵頭　さうかもしれない。自分でも、多分さうだらうとは思つて居る。しかし、それが夢で無く、現實の事だと假定しても、僕は同じ遺言をするに違ひ無いと考へるやうになつた。

甲斐　よしたまへ。君はどうかして居るよ。

兵頭　いゝや、ほんとの事だ。僕は冷靜に考へて、その外に道は無いと思ふ。

甲斐　冗談いつちやあいけない。

兵頭　冗談では無い。しかし、實際今吾々の目の前に迫つて來たのは、僕の死では無くてはるみの死だ。醫者ももう氣やすめをいはなくなつた。駄目なものと覺悟しろといふ意味の事を婉曲(ゑんきょく)

にいふやうになつた。僕丈では無い、はるみも覺悟をきめてゐるらしい。氣分のいゝ時には、いろんな物をかたづけてゐる。

甲斐　はるみさんは何の病氣だか知らないのだらう。

兵頭　誰も知らせはしないのだが、さとつてはゐるやうだ。病名はわからなくても、死ぬのだとはきめて居るらしい。

甲斐　そんな事は無いだらう。はるみさんは體こそ衰へはしたが、氣はしつかりして居るぢやあないか。病人とは見えない時もある。

兵頭　人間は死ぬ間際程精神はしつかりして來る。自分の一生をかへりみて、ほんたうになつかしみ、悔い、嘆く事の出來るのも、死の宣告を受けてからだらうと思ふ。僕も、はるみは死ぬものだと思ひきめてから、自分もいつしよになつて、吾々の今日迄の姿を、明鏡のやうな心にうつして見てやらうと思ひ始めた。(間)僕は此の頃になつて、はじめて君と吾々との關係といふものを、正しく理解出來るやうになつた。どうして今迄、何もわからずに平氣でゐられたか、考へると冷汗が出る。實に君と吾々との間柄程、複雜な心持を胎んでゐるものは無いと思ふのだ。親しい友人、實に親しい……(自分の心持をかへりみて默し、又思ひかへして)それといふのも、

君のやうな人だつたからこそ吾々は、斯うして長い間、隣同志で、友達以上のつきあひをして來る事が出來たのだと思ふ。全く感謝の外は無い。

甲斐　よしたまへ。君はどうかして居るよ。僕こそ君のおかげで職も得たし、此處の地面が分譲(ぶんじやう)される時も、君の勸めで、君に融通して貰つて家を建てる事も出來た。その上、殆んど家族同樣に、毎日々々ゆききしてゐるといふのは、僕こそ感謝しなければならない。

兵頭　僕のいふのは、そんなうはつつらの事では無い。もう十六七年近くもたつた事だから、昔の事をいひ出しても君も何とも思ふまいが、僕は今日迄君に對して、すまないと思ふよりも、もつと深い感謝で胸がいつぱいだつた。しかし、そんな事を口に出して、萬一君に不快を與へはしまいかと思つて云はなかつたのだが、ほんとに僕は君といふ人間には驚いてゐる。君のやうな、寛仁といふのか、何といふのか、心のゆとりが人となりになつて……

甲斐　よしてくれないか。めんとむかつてやられては赤面するばかりだ。

兵頭　まあ、云ふ丈いはせて呉れたまへ。僕ははるみが不治の病氣にかゝつた今日になつて、殊に君の友情を深く考へるやうになつたのだ。萬一僕が君で、君が僕だつたらどうだらう。僕にはとても君のやうな態度はとれない。いぜんに變らない友情を持ちつゞける事なんか思ひも及

ばない。まさか自殺もしまいけれど、やけになるか、高飛するか、すくなくとも君とは、絶交したに違ひ無い。考へても見たまへ。君とはるみとは幼馴染だ。君ははるみの家から學校に通つてゐた。はるみの母親は勿論の事、君もはるみも、二人は行末いつしよになるものと思つてゐた。それを、突然僕が横から出て行つて、有無をいはせず奪つてしまつたのだ。

甲斐　それが自然のなりゆきさ。僕みたやうな引込思案の人間は、此の世の中で、何時もさういふ役廻りを演じる運命を背負つてゐるのだ。何事にも熱情をもつて、積極的に突進して行ける君のやうな人とは違ふ。

兵頭　そんな事は無い。僕の場合、最もいけないのは、僕は強ひて君と同じ家に寄宿するやうに頼込んだ時、既に計畫を立てゝゐたのだ。何の成心も無く、さういふなりゆきになつたのなら許せるが、君とはるみとがどういふ關係にあるかといふ事を知りつゝ、づうづうしい計畫を立てゝしまつたのだ。おまけに、君に打勝つといふ優越感も僕のひとつの目標だつた。

甲斐　むかしの事をいつたつてはじまらない。たとへ君がどんな心持で事を運んだからといつて、僕には何もいふ事は無い。僕の無氣力では、自力で道を開く事は出來やあしないのだ。ゐてもゐなくても、同じ人間なんだ。

兵頭　とはいへ、一面から考へると、君は強い人だ。僕のやうな人間には、一切の感情を抑へて、何のわだかまりも無く人を赦す君のやうな人には驚く外無い。僕は、僕達が忽ち肉體の關係迄結んでしまつたのを君に知られた時、君は吾々から遠くへ行つてしまふものと思つた。それが冷然として吾々の結婚式に列し、祝辭を述べ、二人の幸福を祈つてくれた。それから今日迄、吾々のつきあひはちつとも變らない。君がつとめの關係で、滿洲へ行つてゐた三四年間の外は、殆んどいつしよに住んでゐたと云つてもいゝ位だ。

甲斐　それは君達が親切にしてくれるからさ。會社が解散して職にはなれ、こつちへ引上げて來て弱つてゐると、自分の事のやうに心配して奔走してくれたのは君だ。お蔭でいゝ地位をあてがはれ、今日では何の不安も無い生活をしてゐられる。地面を買ひ、家を建て、つとめの餘暇には好きな本を讀み、草花をいぢり、釣を樂しむいゝ御身分だ。みんな君の御かげさ。

兵頭　それは君に手腕があるからさ。學校にゐる時だつて、僕がいくらあせつたつて君の足下にも及ばなかつた。君の頭腦、君の圓滿な理性は先天的のものだ。その上に、豐かに、溫い、練れた感情を持つてゐる。幾度繰返してもいひ足りないが、吾々が心の上に何の負擔も受けずに、永年つきあふ事の出來たのは、君の宏量、君の深い友情のたまものだ。その君に對して、僕が

後事を託す氣になるのはあたりまへぢやあないかしら。子供も無し、親も無し、近い土地には兄弟もゐないはるみと、同じく何のみよりも無い君とがいつしよになるといふ事は、決して不自然では無いと思ふのだが。

甲斐　何をいつてるのかと思つたら、又夢の話か。

兵頭　たとへ夫婦にならないにしろ、かうして隣同志垣根も無い家に住んで、兩方とも一人つきりでゐるのは寂し過ぎる。それに、はるみにとつても、それが一番しあはせな事だ。

甲斐　あんまり小說の筋なんか考へない方がいゝぜ。はるみさんこそ病氣だが、君は現にぴんぴんしてゐるのぢやあないか。それなのに、若し死んだとしたらなんて、強ひて不自然な場面を空想する必要はない。

兵頭　氣に障つたら許してくれたまへ。

甲斐　なあに、氣に障るなんて事はないが、君があんまり馬鹿々々しい事を想像してゐるものだから。

兵頭　しかしねえ、君だつて僕達の爲めに一生獨身で暮らす氣になつたのだらう。若し僕といふものが無かつたら、君ははるみと結婚したに違ひ無い。

話の最中に、はるみ次の部屋から出て來る。

甲斐　それはわからないよ。さうなつたかもしれないが、ならなかつたかもしれないさ。

兵頭　そんな筈は無い。たしかに君とはるみとは……(氣がついてやめる)どうしたのだ。起きて來ていゝのかい。

はるみ　昨夜はあんなに痛みましたけれど、今日は大變樂になりました。それに寢てゐるのは退屈で。

甲斐　大事にしないといけませんよ。退屈位我慢しなくちやあ。

はるみ　我慢したつて何にもなりませんもの。それより好きなやうにしてゐる方がいゝと思ひます。どうせなほるあては無いのですから。

甲斐　そんな事があるものですか。隨分長い間寢てゐる割には、元氣もいゝし、痩せもしないし……

はるみ　いゝえ、こんなになつてしまつて。(手を出して見せる)

甲斐　それ程でもない。追々氣候もよくなる時たから、氣に張りをもつて養生すれば、忽ち回復しますよ。病氣なんて、ひとつは氣のものだから。

はるみ　いくら氣ばかりしつかりしてゐても、體がいけなくなつてしまひました。兵頭はほんとの事をいつてくれませんけれど、今度の病氣丈は囘復の見込が無いと思つてゐます。自分一人で覺悟してゐて、誰にもいふまいと思つてゐたのですけれど、はつきりわかつてゐるのですよ。

甲斐　そんな事が。

はるみ　いゝえ、はつきりわかつてゐるのです。みんな氣やすめばかりいひますけれど。(兵頭にむかつて)ねえ、喜多博士は胃癌だとおつしやるんでせう。どうせ覺悟はしてゐるのですから、ほんとの事をおつしやいよ。

兵頭　何をいふんだ。醫者ももう峠は越したと云つてゐる。自分一人で、なほらないなほらないと思ふなんて、馬鹿々々しいよ。どうしてもなほるぞと力んでゐれば、たかゞ胃病だ。自然になほつてしまふ。醫者や藥よりも、本人の鬪病精神が肝心なんだ。

はるみ　さういふ氣やすめは、今の私には藥にも何にもならないの。私は死んで行く自分を靜かに見守りながら、皆さんにお別れしたいと思つてゐます。甲斐さん、私はあなたに何といつて御禮を申上げていゝかわかりません。ほんとに一生の間、親切にして戴いて……

兵頭　おい、あんまり興奮するのはよくないよ。

はるみ　どうか私の思ふ通りにさせて頂戴。こんな晴々とした日には、みんなで樂しくお話でもしませうよ。（無理に微笑する）

甲斐　あとで障るといけないがなあ。

はるみ　でも氣分のいゝ時には、ちつとはおしやべりでもしなくてはつまらないわ。誰か面白いお話でも聞かせて頂戴よ。

兵頭　かう不景氣では、面白い話もないね。

はるみ　甲斐さんなんか、年中本を讀んでゐらつしやるんだから、話材はどつさりある筈よ。

甲斐　駄目々々。話の下手な人間には、話材が話材にならない。

はるみ　そんなら私が面白い話を聞かせてあげませう。私ねえ、此の頃變な夢ばかり見て爲方が無いのですよ。

兵頭　夢。どんな夢。

はるみ　夢ではね、私が病氣ではなくて、あなたが病氣なの。

兵頭　なに、僕が病氣になる夢だつて。それで。

はるみ　それからねえ（意外に熱心な相手の態度にいひにくくなる）氣になさつてはいやよ。

兵頭　夢なんか氣にする奴があるものか。
はるみ　段々病氣が惡くなつて、おかくれになつてしまふの。
兵頭　僕がかい。
はるみ　えゝ、あなたが。
兵頭　ふうむ。それから。
はるみ　それつきりなの。夢なんて氣まぐれなものねえ。あなたが死んでしまふなんて。
兵頭　ふうむ、僕が死ぬのか。それで、その同じ夢を度々見るのかい。
はるみ　えゝ度々。大概毎日。時には一日のうちに幾度も幾度も見る事があるの。
兵頭　不思議だなあ。
はるみ　逆夢(さかゆめ)つていふんでせうね。だから、ほんとは私が死ぬのよ。
甲斐　矢張り體が衰弱してゐるからだ。
兵頭　しかし、不思議ぢやあないか。そんなに度々同じ夢を見るなんて。
甲斐　さういふ事はよくあるよ。はつとして目が覺めて、又うとうとすると同じ夢を見る。時にはつゞきを見る事もある。

兵頭　それはある事には違ひ無いが、はるみ丈で無く、僕も同じやうな夢を繰返して見るのはをかしいぢやあないか。

はるみ　あら、あなたも同じやうな夢を見るんですか。へえゝ、どんな夢。

兵頭　どんなつて、つまらない夢さ。

はるみ　わかつた。私が死ぬ夢でせう。

兵頭　ところが違ふんだ。矢張り、僕が死ぬ夢なんだ。

はるみ　あなたが死ぬんですつて。まあ、いやだ。何十年にも病氣をした事の無いといふあなたの死ぬ夢を、あなたも私も見るなんてゝ餘程變だわ。矢張り私の死期の近い事を逆に知らせるのですわ。

兵頭　二人の夢が全く同じだと、なほ不思議だが、お前の夢では僕が死ぬ丈で、お前は出て來ないのか。

はるみ　私も出て來るには來るのですが……

兵頭　さうして。

はるみ　それがはつきりしないんですの。

兵頭　そんなら僕の死ぬ景色丈がはつきりしてゐるのかい。甲斐君なんか出て來ないのか。

はるみ　甲斐さんも出て來るには來るんですよ。

兵頭　ふうむ、僕の夢と同じだな。

はるみ　あなたはどうなんです。

兵頭　僕が死んでしまふと、その後でお前と甲斐君とがいつしよになるんだ。

はるみ　まあ。

兵頭　お前の夢もさうなんだらう。お前と甲斐君とが……

甲斐　つまらない話はよさう。たかゞ夢ぢやあないか。

兵頭　夢さ。夢は夢だけれど、不思議ぢやあないか。(はるみに)ほんとにお前の夢では僕が死ぬばかりで、そのあとはぼんやりしてゐるのかい。夢を見てゐる時にははつきりしてゐるが、さめてから思ひ出せないのかい。さういふ事はよくある事だが。

はるみ　さうですねえ、私にもよくわからないんですよ。

兵頭　さうかなあ、僕なんか實にはつきりわかつてゐるんだ。繪のやうに、寫眞のやうに……

はるみ　詳しく話して頂戴、やつぱり氣になるわ。

兵頭　そんなら僕が話したら、お前も詳しく話すか。
はるみ　だつて私はよくおぼえてゐないんですもの。
兵頭　そんなら爲方が無い。僕のはねえ、僕がわづらつて死ぬ間際に、お前と甲斐君が枕頭にゐる。僕が遺言する。
甲斐　よせよせ。お互に夢なんか信じる事はないのだから。
はるみ　でも聞き度いわ。信じなんかしませんけれど。
兵頭　その遺言といふのは、僕の死後お前と甲斐君と夫婦になつてくれといふのだ。そしてその遺言通りになる。いつの間にか、お前と甲斐君は樂しさうに花園の中に立つてゐる。死んでしまつた僕の眼にそれが見えるのだ。
はるみ　まあ氣味が惡い。
兵頭　お前の見る夢も同じではないのか。
はるみ　いゝえ。
兵頭　かくす必要はないぢやあないか。
はるみ　何をおつしやるの。かくしなんかしやあしませんよ。

兵頭　かくしてゐる。確かにお前の夢も同じだ。
はるみ　誰がそんな事をかくすものですか。
兵頭　お前は二人共同じ夢を見る不思議さを、しんそこから感じてゐるな。夢とばかりは考へられなくなつてゐるんだな。
甲斐　よしたまへ。はるみさんの體によくないよ。たかゞ幾晩か同じ夢を見つゞけたといふ丈の事で、何もさう興奮する事はないぢやあないか。ふだんの君にも似合はない。
兵頭　興奮なんかしてゐやあしない。たゞ僕ははるみが變にかくし立てするのがをかしいと思ふんだ。
はるみ　私かくしだてなんかしてゐやあしないと云つてゐるぢやありませんか。それよりもあたの疑ひ深いのがをかしいわ。
兵頭　疑ひ深い。何も疑ひなんかしやあしない。お前がかくしてゐる丈の事だ。
はるみ　いやな方。どうかしてゐらつしやるわ。
兵頭　わかつてゐるよ。實に不思議だなあ、二人が二人とも同じ夢を、しかも繰返して見るといふのは。

二人とも不快になつて默る。

甲斐　はるみさん、そんなに長く起きてゐてもいゝかしら。

はるみ　苦しい時でなければ、起きてゐても寢てゐても同じ事ですわ。どうせ死病にとりつかれたのですから。

兵頭　案外僕の方が死ぬかもしれない。あんまり夢見が惡過ぎる。

はるみ　まだこだはつてゐらつしやるの。

愈々不快になる。

小間使あらはれる。名刺を差出す。

小間使　旦那樣に御目にかゝり度いといふ方が……

兵頭　あつちの座敷に通してくれ。折角の日曜に、うるさい用談を持つて來る奴も無いものだ。

一寸失敬する。

出て行く。

はるみ　兵頭は夢の事を變に氣にしてゐますのねえ。

甲斐　平生あんまり忙しいのと、はるみさんの病氣を心配して、頭が疲れてゐるんですねえ。下

らない夢なんか氣にする人では無いのだが。
はるみ　でも、毎晩同じ夢を見るとしたら、誰だつて氣になるのがあたりまへですわ。
甲斐　では、はるみさんも氣にしてゐるの。
はるみ　えゝ。
甲斐　揃ひも揃つて、そんな事を氣にかけてゐるとは驚いた。
はるみ　氣になるわ。私は自分丈がそんな夢を見るのだと思つてゐたら、兵頭も同じ夢を見るときいて、ほんとに驚いたのよ。だつて不思議ぢやありませんか。二人が二人とも全く同じ夢を見るなんて。
甲斐　全く同じ夢ですつて。では、はるみさんの夢の中でも、兵頭君の死んだ後で……
はるみ　兵頭のいふ通りですの。花園の中に、あなたと私が立つてゐる姿は、ほんとに繪のやうに、寫眞のやうに見えるのですもの。
甲斐　ほんとですか。
はるみ　ほんとですとも。私も兵頭の話を聞いて、あんまり一致してゐるので氣味が惡くなりましたわ。

甲斐　それは不思議だ。

はるみ　不思議といへば不思議ですけれど、不思議で無いといへば不思議でもなんでもありませんわねえ。

甲斐　(意味を汲み兼ねる)どうして。

はるみ　だつてさうぢやありませんか。甲斐さん、私は今迄あなたの御親切に對して感謝こそしてゐましたが、別段濟まないと思つた事は無かつたの。ところが此の頃は、ほんとに申譯の無い事だつたと、自分の一生を悔むやうな心持が起きて來ました。人つてものは、自分が幸福でゐる間は、決して他人の事は考へないものなんですねえ。あなたの御親切を、たゞ御親切だと思つて來た自分達の得手勝手な考へ方が、申譯なく思はれて來ましたの。

甲斐　何もあなた方が濟まながる事は無いぢやありませんか。僕こそあなた方に對して感謝しなければならないのです。

はるみ　私の申上度いのは、さういふ事ではありませんの。私はねえ、若しも私が兵頭といつしよにならなかつたら、どうだつたらうと考へ始めました。をかしいではありませんか。十幾年も、つひぞそんな事を考へもしなかつたものが、命の果てが見えるやうになつてから、突然物

に襲はれるやうに、自分の心に惱まされるといふのは。

甲斐　病氣のせゐですよ。病氣の時はひどく感じやすくなるものだから。なあに、病氣がなほれば、そんな下らない事は考へなくなるに違ひない。

はるみ　兎に角、私つくづく考へちやつたの。人の一生なんて、どんな事でどのやうな道を辿るのか、ほんの僅かの事で、あゝもなり、かうもなるものなのねえ。

甲斐　吾々にはわからない運命が働くのですよ。だけど、はるみさんの一生——一生といつても未だ先が長いのだが、全く幸福だと思はなければ嘘だ。少しでも不滿足に思ふと、罰が當る。

はるみ　ほんとにさうよ。けれども、その爲めに他人を不幸に陷れてゐたとしたら、あの世に行くのにおもひが殘るわ。

甲斐　誰を不幸に陷れたといふのです。

はるみ　氣を惡くなさらないでね。もう、どうせ死期の遠くない私なんだから、勝手な事を云はせて頂戴。甲斐さん。私はほんとはあなたのところへゆく筈の人間だつたのでは無いでせうか。さうしなければ申譯の無い人間だつたのでは無いでせうか。

甲斐　そんな事があるものですか。成程、僕があなたを深く想つてゐた事は、今更かくす事も出

來ないが、兵頭君だつて同じだつたのだから、僕のやうな引込思案の人間が、取殘されるのはあたりまへです。はるみさんが兵頭君を擇んだのは、あなたの幸運だつた。僕にしても、あなたが幸福に暮らしてゐるのを見て、安心もし、喜びもした。萬一、あなたに不幸な境涯にゐられては、僕も見てゐられない。何か苦しい責任を感じなくてはならなくなります。

はるみ　さう迄おつしやられると、尙更申譯がありませんわ。

甲斐　僕は妻として、あなたを得る事は出來なかつたけれど、親しい友達として末永くおつきあひの出來るのは、何よりの幸ひだと思つてゐますよ。

はるみ　末永くなんておつしやつても、もう長い命ではありませんわ。

甲斐　そんな事があつて堪るものか。醫者を信じ、自分を信じてゐらつしやい。

はるみ　私は何といふずるい人間なんでせう。良人の外に、一生あなたを賴りにし、その上あなたの一生を、寂しい不幸なものにしてしまつたのですもの。

甲斐　僕が獨身で終るといふ事ですか。

はるみ　少なくとも私といふ者がゐなかつたら、あなたは誰かと結婚してゐらつしやつた筈ですわ。

甲斐　それは、どうだかわからない。僕は自分のねちねちした性質から、始終あなた方の側をはなれず、あなた方に不愉快なおもひをさせてゐるのでは無いかと、かへりみる事が度々ありました。執念深い（しふねんぶか）といふのか、づうづうしいといふのか。

はるみ　とんでもない。づうづうしいのは私ですわ。甲斐さん。私ほんとの事を申しますとね、あの頃の私は、兵頭よりもあなたの方をおなつかしく思つてゐたのですよ。あの年頃の女には、自分が最初に思つた人を、たやすく他の人にみかへる事は、思ひも及ばない事なんですよ。ですけれど、あなたは何時迄たつても距（へだ）てを置いてゐらつしやつて、私なんか振向いても見ないといふ風をしてゐらつしやるものだから……

甲斐　それが僕のうまれつきなんです。損な性分（しやうぶん）で、勇氣が無いのです。思ふ事を、正直に行爲にあらはす事が出來ないのです。おまけに用心深く、臆病なものだから、うつかりした事をして、あなたに嫌はれてはいけないといふやうな心持も働いたに違ひない。第一、はるみさんの心もはつきりとはわからなかつたから……

はるみ　若い女には、自分の方から心をうちあける事は出來ません。私は、自分がいくら待つてゐても、あなたが近寄つていらつしやらないので、まちあぐんでしまつたのでした。そこへ、

突然兵頭があらはれて來て、寂しがつてゐる私の心を、素早くつかんで行つてしまつたのです。果敢（くわかん）な男の行爲の強さは、娘心を捉へるのに一番有力なのです。あなたに對するつらあても手傳つて、私も大膽に振舞ひましたわ。

甲斐　それがあたりまへですよ。その爲めにはるみさんは幸福の道へ進む事が出來たのだ。

はるみ　私も惡い道を擇んだとは思ひませんでしたわ。それがどうしたんでせう、不治の病氣だと悟つてから、私の心も病氣になつたのでせうか。私には、何ともいへない底深い、おそろしい世界が見えて來ました。あなたのやうな健康な、正しい精神を持つてゐらつしやる方には、おわかりになるまいと思ひますけれど、甲斐さん、私は兵頭には申譯のない夢を見る事が重なるのです。

甲斐　夢ならば、どんな夢を見たつて爲方が無いぢやありませんか。

はるみ　夢といつても、それがほんとに眠つてゐる時ばかりでは無いのですもの。どうかすると起きてゐる時でも……

甲斐　病氣のせゐですよ。

はるみ　さうでせうか。人間には、ふだん氣のつかない自分の心を、死に迫つて突然見出す事が

あるのでは無いでせうか。

甲斐　人の心はどう働くか、自分自身にもわからない。他人にわかるものですか。その意味で、はるみさんの心は僕にはわからないし、僕の心ははるみさんにはわからないのですよ。

はるみ　それはさうでせうけれど、あなたが私共に見せて下さつた宏い御心は、充分わかつてゐる積りですわ。私共は始終いひあつては感謝してゐました。あなた程親切な方は無いといつて……

甲斐　親切か。卑怯者には持つてこいの看板だ。はるみさん、あなたはその親切のかげに、どんないやしい根性がひそんでゐるか、疑つた事はありませんか。

はるみ　誰がそんな事を疑ふものですか。

甲斐　だから卑怯者には持つて來いだといふのです。はるみさん、あなたは病氣で身心の平衡を失つた時に、心の底に潛在してゐた何かを思ひ起して驚いてゐるが、僕の如きは、もつともつと勝手氣儘な、怪しからない事を想像しつゞけてゐるのですよ。あなたや兵頭君が、取るにも足り無い夢にさへ悩まされてゐるのに比べると、僕は何といふづうづうしさか、吾ながら驚く外はない。僕は兵頭君の死ぬ夢を、夢では無く、白晝にも、本人と向きあつて話をしてゐる時

にも、夢想しつゞけてゐました。十有餘年、全く同じ夢を見つゞけて來た人間もあるのですからねえ。

はるみ　まあ、あなたが。

甲斐　それにも拘らず、あなた方は眞實變らない友情を持ちつゞけてゐる。或は僕に對して、何か濟まない氣もあるのだらうとは思ふけれど、それよりもあなた方の善良な心の自然のあらはれだと思ひます。それと比べて、自分の卑怯な、づうづうしい根性を、幾度恥ぢたかわからない。しかも僕の執念深い、男性的でない性分は、何等積極的な行動を許さない。たゞ、何時迄も何時迄も、厭ふ可き空想を樂みながら、毎日あなた方の營む家庭に入込み、好意に甘えながら、とんでも無い日の到來を待つてゐました。あなた方の見る夢は、決してよりどころの無いものではなかつた。それは僕が心の中に描いてゐた世界です。

はるみ　ほんとですか。

甲斐　誰がそんな意氣地の無い嘘をつくものですか。

はるみ　そんならほんとにあの頃から今日迄……

甲斐　おもひつゞけてゐたといふのですよ。はははは……

はるみ　さうとはちつとも知りませんでした。知らないものだから、あなたはすつかりあきらめて下さつて、寛大な心でつきあつて下さるものと、たゞたゞ感謝してゐたのでしたが……

甲斐　ところが聞いて見ると、感謝どころか、呪ふ可き奴だつたといふのでせう。

はるみ　いゝえ、いゝえ。私の夢も、あなたの夢と違はないのです。私は此の頃迄、兵頭に貞淑な妻だつたと思ひますけれど、不治の病氣にかゝつたと知つてからは、どういふ迷ひが出たのですか、昨日迄のはるみでは無くなつてしまひました。兵頭が死んで、あなたと私とがいつしよになる夢は、ほんとに夢なのですけれど、起きてゐる時も、現在今でも、同じやうな事を心に描いてゐるのです。いけない自分だと思ひます。それでも、その夢は消えません。私は、かういふ迷つた心で、死んで行き度くありません。

甲斐、いつかはるみの身近にゐる。

甲斐　ほんとですか。はるみさん。

はるみ、うなづく。

兵頭、客を見送つた心で戻つて來て驚き、姿を消す。二人氣がつく。

はるみ、甲斐の胸に倒れるやうに飛び込んで泣く。

第二幕

場　面

兵頭の家。室内。

食卓の用意が出來てゐる。

兵頭窓際の椅子で新聞を讀んで居る。はるみ入つて來る。

はるみ　甲斐さん、どうなすつたんでせう。もう一度お迎ひにやつてみませうか。

兵頭　まあいゝだらう。もう直き來るよ。

はるみ　でも折角こしらへたものがつめたくなつてしまひますわ。

兵頭　よし、そんなら僕が呼んでやらう。

いきなり窓をあける。

はるみ　およしなさいよ。女中をやりますから。

頓着なく。

兵頭　おゝい。甲斐君。

返事が無い。

兵頭　おゝい。

はるみ　およしなさいつたら、みつともない。

兵頭　あいつ、此の頃すつかり様子が變つたね。先のうちは毎日々々、こつちから呼ばなくたつて入浸つて居たのに、近頃はなるたけ來ないやうに來ないやうにと心掛けてゐる。

はるみ　でも、段々お勤の方も忙しくなるのでせうから。

兵頭　つとめ？　つとめの忙しいのは朝の九時から午後四時迄さ。あの男はつきあひ嫌ひの變人だから、他所へ顔を出す事なんか全く無い。うちへ來る外に行くところは無い筈だ。

はるみ　あなたこそ變つておしまひになつたわ。どうしてそんなに甲斐さんの悪口ばかりおつしやるの。

兵頭　悪口ぢやあない。ほんとの事を云つてる丈だ。

はるみ　ほんとの事ですつて。先にはそんな事は一言だつておつしやらなかつたぢやありませんか。

兵頭　先は先さ。僕にはあの男の正體が、此の頃やうやくわかつて來たんだ。

はるみ　正體だなんて。

兵頭　正體さ。化の皮を剝いでやつたのさ。

はるみ　およしなさいよ。よしんば甲斐さんにいけないところがあるからつて、あんまりひどい事を仰るのは、みつともないわ。

兵頭　みつともないさ。實にみつともないよ。二十年近くも欺かれて居たんだから、みつともなさを通り越して居るんだ。

はるみ　又あなたはつまらない事を仰るのね。もう二度と面白くない事は云はないと云つたぢやありませんか。

兵頭　云ひ度くはないさ。しかし……

はるみ　あれは全くあたしの病氣の所爲だつたんですよ。あたしだつて、もう助からないと思つたもんだから……

兵頭　死ぬときまれば何をしても構はないと云ふのか。

はるみ　さうぢやあないのですけれど。さういふ理窟なんか考へた譯では無いの。たゞあたし、甲斐さんがお氣の毒になつてしまつて……

兵頭　氣の毒だから、どんな事でも許すといふのか。

はるみ　よして頂戴。あたしはそんな間違つた事はしない積りです。あなたはそんな事迄疑つてらつしやるのですか。

兵頭　さうではない。さうでは無いけれど、若し僕といふものが死んだとしたら、どうだ。二人はいつしよになるだらう。

はるみ　そんな事考へた事もありません。たゞ、自分の命が長くないと信じて居たものですから、長い間寂しい思ひをして居た甲斐さんに濟まないといふやうな心持が深くなつて來たのでした。それ丈なんです。そして、幸ひ病氣はお醫者の見立違ひで、あたしは此の通り丈夫になつたのですもの、心も元通り健康になりました。

兵頭　お前は健康になつたか知らないが、僕は不健康になつた。お前はもう夢を見る事なんか無いと云つてるが、僕は今でも同じ夢を繰返して見る。前よりも段々凄くなつて來て、昨夜なん

か、僕はお前達に絞殺（しめころ）されてしまつた。（笑ふ）

はるみ　どうぞもうやめて下さい。そんな事を聞かされる位なら、病氣で死んでしまつた方がしあはせです、何かといふとつまらない事を云はれて暮らして居るのなんかいやですわ。あたしは以前のやうに、あなたと二人、誰にもみだされない生活を取戻さなくてはならないと思つて一生懸命なんです。

兵頭　…………

はるみ　（窓の向ふを見て）あら、あれ甲斐さんでせう。窓のところに頭が見えるわ。早く來て下さいつて、もう一度女中に行つて貰ひませうか。

兵頭　いゝよ。僕が呼んでやる。おゝい。

返事が無い。

兵頭　おゝい。甲斐君。

かすかに返事が聞える。

兵頭　飯の仕度が出來た。早く來てくれ。

はるみ　そんな大きな聲して、近所の方に笑はれますよ。

兵頭　笑はゞ笑へさ。他人なんか笑ひ度ければ笑はしとけ。

突然稍狂暴にはるみの手をつかんで引寄せる。

はるみ　およしなさいよ。甲斐さんが來てよ。

兵頭　來たつて構ふもんか。誰にもみだされない、二人丈の生活を取戻すんだ。

荒々しく、兩腕の中に抱かうとする。はるみ驚いて拒み、兵頭をみつめる。

はるみ　どうなさつたの。

甲斐入つて來る。

甲斐　どうも遲くなつてしまつた。

兵頭　どうしたんだ。馬鹿に待たせるぢあないか。

甲斐　今日は歸りが少し遲かつたので、急いで戻つて來ると、うちに人が待つてゐてね、すつかり待たせてしまつた。はるみさん、濟みません、度々お使だつたさうで。

はるみ　いゝえ、どうしたんですか兵頭が、お腹が空いたお腹が空いたといつてきかないものですから。まるで子供なんですよ。

甲斐　僕もぺこぺこです。今晩はきつと素晴しい御馳走だらうと思つたから、晝はトオストと珈

琲だけで我慢しました。

はるみ　困るわ。そんなに御馳走なんかありやしない。

兵頭二人の話して居るのをぢつと見て居る。はるみ氣がついて。

はるみ　どうせ手料理なんですけれど、兎に角運ばせませう。

去る。

甲斐　はるみさん。すつかり元氣になつたねえ。めきめき肥るぢやあないか。

兵頭　醫者の見立て違ひで、少し騒ぎ過ぎたよ。

甲斐　ほんとに馬鹿々々しかつたなあ。博士だなんていつても、あてにならないものだねえ。

兵頭　そりやあ醫者だつて見そこなひはあるさ。吾々だつて、お互に何十年とつきあつて居て、ほんとに肚（はら）の中迄知り合ふといふ譯には行かないのだ。まして、平生知りもしない人間の體の中が、さうたやすくわかつてたまるものか。

甲斐　さういへばさうだが、それにしても、不治の病だと宣告したのはひど過ぎるぢやあないか。

兵頭　それでもいゝさ。萬一不治の病だつたのに、輕症だと云つてゐて、死なしてしまふよりはましだらう。

甲斐　醫者にとつては不面目だらうが、兎に角お目出度いよ。

兵頭　お目出度いよりも寧ろ滑稽だね。一場の喜劇だ。醫者は死ぬものだと云ふ。僕も勿論信じた。はるみははるみで、自分は助からないときめて居る。それがどうだ。醫者は見立違ひだと云つて頭を掻く。明日にも死にさうな事を云つて居た本人は、もうけろりとして、芝居に行つたり、三越に行つたりさ。

甲斐　ほんとにみんな心配させられちやつたなあ。まるで夢だね。

兵頭　夢だ。夢といへば、僕は未だ同じやうな夢を見るんだぜ。

甲斐　同じ夢つて？

兵頭　何時か話したらう。僕の死ぬ夢さ。僕も見ればはるみも見る……

甲斐　あゝ、君はひどく氣にして居たが、夢なんか氣にする事は無いぢやあないか。はるみさんもあの通り元氣になつたのだもの。

兵頭　さう、はるみは元氣になつた。だからもう夢なんか見ないさうだ。だが僕は未だに同じ夢を繰返して見るんだからね。僕は死にかけてゐる。はるみは看護して居る。君は見舞に來る。しかし僕は助からない。助からないとわかつたものだから、僕の死後君とはるみと夫婦になつ

てくれと遺言して死ぬ。僕の體は死んでしまふ。だが、僕の魂は生きて居るのだ。おまけに、僕の眼も生きて居て、生前よりももつとはつきり物を見る事が出來る。その眼にありありと映るのは、君とはるみが此の家で、幸福に暮らして居る景色だ。

甲斐　よしたまへ。君ははるみさんの病中の心配以來神經が疲れて居る。それで同じ夢を繰返して見るやうな事になるのだ。それが氣になる。氣になるから叉夢を見る。

兵頭　そんな事かなあ。だがねえ、それは神經衰弱の結果として、こいつが若し夢で無く、ほんとの場合にはどうだらう。

甲斐　ほんとの場合とは。

兵頭　つまり僕が今死んだとして。

甲斐　何をいふんだ。君が死ぬなんて、そんな事があるものか。

兵頭　いや、死ぬと、假定してだ。僕は僕の死んだ後でも、はるみが幸福である事を願つて居る。たから遺言するんだよ。君とはるみといつしよになつて呉れとね。その場合君はこれを拒むかどうか。

甲斐　僕はさういふ小說に興味を持たない。

兵頭　小說ではない。現實の問題だ。第一君だつて、はるみが賴り無く一人で暮らして居るのを見て、いゝ氣はしないだらう。うつちやりつぱなしにして置くのは殘酷ぢやあないか。

はるみ女中といつしよに入つて來る。

はるみ　お待遠さま。

食卓の上に脚のない膳を置く。

はるみ　あとの物もさめないやうにして置いてね。

女中去る。

はるみ　さあ。どうぞ。

甲斐　とんだお手數をかけます。

はるみ　いゝえ、命拾ひしたあたしの心祝ひですもの、ちつとは働かなくては、病中御心配をかけたあなた方に申譯がありませんわ。さあ、あなた。

三人食卓に就く。女中飲料を持つて來る。以後適宜の時に女中出入あること。

はるみ　甲斐さんも今日はひとつ召上れな。

甲斐　お酒ですか。僕は食ふ方專門だ。

はるみ　意氣地無しねえ。あたしだつて、ひとつやふたつは頂きますわ。

みんなの盃をみたす。

甲斐　それでは頂く事にしよう。

はるみ　乾盃？

兵頭　さうだ、乾盃しよう。

甲斐　お目出度う。

はるみ　有難う。

三人飲み干す。

甲斐　あゝ、いつぱい飲んだ丈で顔が赫々(かつか)として來た。僕はサイダアにして貰ひ度いな。

兵頭　不思議だねえ、たつたいつぱいで參るなんて。

甲斐　性分だよ。そのくせ僕のおやぢなんかひどい大酒(たいしゆ)だつたが。

兵頭　飲んで見たら飲めるのぢやあなかつたかしら。

甲斐　駄目だらう。ひとつには性格的にもいけないのだ。酒も飲み、うたのひとつもうたへるやうだと賴母しいのだが。

兵頭　性格的に駄目なのか。成程ね。さういへばさうだなあ。君は何でも陰に籠る方だよ。愼み深いと云ふのか、控へ目と云ふのか、學校時代からさうだつた。たまに會に顏を出しても、デカンショさへ歌へなかつた。

甲斐　それが僕の運命を決してしまつたのだ。何事につけ立遲れになる。世の中へ出てもぱつとしない。やうやく君のおかげでどうにか暮らして居る次第だ。君のやうに勇敢に、人生の大道を濶歩して行く力を惠まれて居ないのだよ。

兵頭　そのかはり君には他人の持つて居ない底力がある。惡く云へば執念深い強さがある。

はるみ　いやな方。執念深いだなんて。

兵頭　いゝや、さうだよ。僕みたいながらがらした奴は、存外脆い。怒る時は怒る。笑ふ時は笑ふ。泣く時は泣く。感情をかくさないからね。其處へ行くと君なんざあ凄いよ。つひぞ一度怒つたり、怒鳴つたりした事は無く、笑ふつたつて大きな聲なんかしやあしない。冷靜に、他人の泣いたり笑つたりするのを見て居るんだから。實際君の眼から見たら、僕なんかの得意になつてはしやいで居る姿は、實に馬鹿々々しいものだらうなあ。

甲斐　冗談云つちやあいけない。そんなに人が惡くは無いよ。

兵頭　どうだか。
はるみ　まあ、あなたつて方はどうしたの。甲斐さんだからいゝやうなもの丶、そんな事をひとさまに申上げるなんて……
兵頭　なあに、お互にいゝところはいゝ、悪いところは悪いと正直に云つてこそ友達なんだ。ねえ、甲斐君。二十有餘年の親友だもの。
はるみ　いくら親友だつて、執念深いだの、人が悪いだのつて、失禮ですわ。そんなつまらない事を云つてないで、もつと面白いお話をなさいよ。
兵頭　僕は此の頃人間の心の中を見る事に興味を持つて居るんだ。人間の肚の中なんてものは、實に素晴しいからくりだね。そいつをぢいつと覗いて見て居ると實に面白い。親切だと人に云はれて居る奴が、實は飛んだ人非人だつたり、いゝ人つて奴が存外悪人だつたり、人間て奴、決して一通りや二通りの曲者ではないのだからね。
甲斐　しかし、人の肚の中なんか、わからないのが當然では無いかしら。わかつた積りで、大いに誤解してるやうな事もあるだらう。
はるみ　さうですともねえ。兵頭は此の頃どうかして居るんですよ。神經衰弱なんでせうか。

甲斐　あんまりあなたの病氣を心配したからですよ。しかし、醫者の見立違ひとわかり、斯う元氣になつたのだから、兵頭君も以前の通り快活にならなくてはいけないなあ。

兵頭　實際さうだ。はるみはめきめき回復してゆくが、僕はその反對だ。僕こそ不治の病に罹つて居るのかもしれない。人間の命も何時虫が喰つてゐるかわからない。

はるみ　縁起でも無い。今日はあたしの全快祝（いはひ）ぢやありませんか。

兵頭　さうだ。それに違ひ無い、お前は全快する。同時に僕は弱つて行く。この儘死んでしまふやうな氣がするんだ。そこで……

はるみ　何故そんな事ばかり仰（おつしや）るんでせう。

甲斐　よさうよ。きいてる者もあまりいゝ氣持はしないから。

兵頭　しかしだねえ、僕としてはこれを氣にしない譯には行かないのだ。自分の死ぬ夢をつゞけざまに見てゐては、氣になるのが當然ぢやあないか。

甲斐　又夢か。

はるみ　あなたこそ執念深いといふものよ。あんまりつまらない事ばかり氣にしてゐらつしやるぢやありませんか。

兵頭　君達にはつまらないかもしれないが、僕にとつては眞劍なんだ。考へてもごらん。自分の死ぬ夢をのべつに見るとしたら。

はるみ　氣にするから見るんですよ。

兵頭　それはさうだらう。けれども、ありありと死の床に横たはる自分の姿を見るんだからね。しかも、お前迄同じ夢を見たんだから不思議ぢやあないか。

はるみ　でも、もうそんないやな夢なんか見ませんわ。

兵頭　ほんとに此の頃は見ないのかい。見てもかくしてゐるんぢやあないか。

はるみ　かくしなんかするものですか。

兵頭　きつとか。かくさなくたつてい丶んだぜ。

はるみ　くどい人ねえ。

兵頭　くどい。實にくどいよ。自分でもそいつはわかつてゐる。わかつて居てどうにもならないのだ。いつそ思つてる事を殘らずさらけ出してしまつたら、少しはさばさばした氣持になるかもしれないが。

はるみ　よしませうよ。あなたは此の頃どうかして居て、つまらない事を苦にやんで居るのだか

ら。
兵頭　さうなんだ。つまらない事さ。下らない事さ。だから殘らず吐き出してしまはうと云ふのぢやあないか。
はるみ　およしなさいつたら、そんな話。
兵頭　いゝぢやあないか。下らない事なら、おなぐさみに過ぎないのだ。別段怖れる事はないだらう。
はるみ　怖れる事なんかありはしないけれど。
兵頭　たゞ困るのか。
はるみ　何云つてらつしやるの。
兵頭　甲斐君、どうだい。その下らない事を吐出しちまふのは。
甲斐　さあ、兎に角あんまり些細な事に頭腦（あたま）を惱ますのはよくないぜ。
兵頭　些細な事か。些細な事はよかつた。
さかんに酒を飲む。夙に醉つて居る。
はるみ　まだあがるんですか。

兵頭　飲むよ。今夜はお前の全快祝だ。
はるみ　でも過ぎるとよくないわ。
兵頭　だつてあんまりお目出度いからさ。
はるみ　あんまり飲むと體の爲にいけませんからね。
兵頭　體なんか構ふものか。飲むよ。酒は飲むもの、泥は吐くものか。
はるみ　汚ならしい事を仰るのね。
兵頭　汚ならしい？　人間の肚の中みたいにか。え、さうだらう。
はるみ　あたし醉拂ひはいやだわ。
兵頭　いやだ。何がいやなんだ。僕をいやだといふのか。
はるみ　困るわねえ。
兵頭　何も困る事なんかありあしない。お互に本心をうちあけてしまへば、存外解決は早いんだ。ねえ甲斐君。君にしたつて、僕がいひ度い事を云はないでゐては、かへつて氣持が惡いだらう。
甲斐　さあねえ。

兵頭　それとも、いひ出されては君が困るか。
甲斐　僕が？　何か僕にかゝはる事なのか。
兵頭　さう、先づかゝりあひと云ふのがなあ。何しろ二十有餘年の親友だからね。どうだい、許してくれるか。
甲斐　許すとかなんとか云ふ問題ぢやあないのだらう。
兵頭　さうさ、何でも無いんだ。たゞ僕としては君の本心をきいて、安心を得たいのだよ。
はるみ　あなた、およしなさいよ。何だか底にわだかまりのあるものいひをなさるのは、みんなを不愉快にする丈よ。
兵頭　だから底にあるものを、さらけ出さうと云ふんぢやあないか、ねえ。
甲斐　そんなら、君の氣の濟むやうにしたまへ。
はるみ　いゝ加減になさいよ。面白くもない。
兵頭　いゝよ。お前は默つてきいてゐろよ。
はるみ　いやだわ。あたし。
兵頭　ねえ、甲斐君。先刻話したあの夢ねえ。

はるみ　あら又夢ですか。だからおよしなさいつて云つたのよ。もう夢の話なら御免だわ。
兵頭　あの夢がだねえ。萬一ほんとに起つたとしたらどうしてくれる。僕は今死ぬときまつたら、矢張遺言をするよ。君とはるみといつしよになつてくれと。
はるみ　そんな馬鹿々々しい事を考へて居るからいけないのよ。そんな話をなさるなら、あたし御免かうむつて、あちらへ行つてしまつてよ。
兵頭　待つてくれ。お前にも是非きいて貰ひ度いんだ。ねえ甲斐君。僕がほんとにさう願つて居るとしたら、承知してくれるかい。僕は君が承知してくれゝば安心して死ねるんだよ。君さへうんと云つてくれゝば、はるみは一生幸福に暮らせるんだから……
はるみ　あなた。
兵頭　僕はその返事をきかないでは、安心して死ねないんだ。
甲斐　兵頭君。よして貰はうぢやあないか。君が死ぬなんて事は考へられないぢやあないか。
はるみ　ほんとにさうよ。馬鹿々々しい。
兵頭　それはわからない。よしんば病氣で死なゝいにしても、此の市中には不慮の災難で死ぬ奴が、毎日一人や二人ではきかない。自動車に衝突する。電車に轢かれる。感電する。食物にあ

たる。強盗に斬られる。姦夫姦婦にしめ殺される。何時どんな事で命を落すかわかりやあしない。だから、何時死んでも差支無いやうに、後々の事迄心配して置く必要がある。それが夫としての責任だ。義務だ。ね、さうだらう。だから僕も、はるみの夫として、萬一僕の死んだ後で、はるみが心細く暮らして居ては浮かばれないから、後事を君に託さうと云ふのさ。

甲斐　冗談もいゝ加減にしようぢやあないか。何もそんな假定の上に立つて、つまらない心配をする事はない。そんな事を云へば、僕だつていつ死ぬかわからないぢやあないか。

兵頭　さうだ。それはわからない。君だつて明日が日にも、自動車か電車に轢かれて死ぬかもしれない。又一分間後に、誰かの手で殺されるかもしれない。

はるみ　あなた。いくらお酒の上だからつて、あんまり亂暴な事を仰るぢやありませんか。さ、いゝ加減に御飯にして、あとで珈琲でもいれませう。

兵頭　そんな時間は無いかもしれないぞ。人間の命なんて脆いものなのだ。

はるみ　およしなさいつたら。

兵頭　お前だつてさうだぞ。不治の病だときかされて、もう死ぬものと覺悟をきめて居たが、今は斯うやつてぴんぴんして居る。しかし、ほんとは矢張不治の病で、何時死ぬかわからない身

の上かもしれないぞ。

はるみ　縁起の悪い事はよして頂戴。

兵頭　若し又病氣で死なゝいにしても、僕の手で息の根をとめる事も出來るんだ。

はるみ　あなたが氣がちがつてゞすか。

兵頭　なあに、冷靜にさ。斯ういふ風にね。

いきなり懐から短銃を取出す。

二人驚いて立上り、思はず雙方から助けを求めるやうに、かばふやうに寄添ふ。そこに銃口の向いたまゝ、三人共動かない。

兵頭短銃を卓上に投出して笑ふ。

兵頭　おもちやだよ。これがはるみの全快祝の餘興さ。

不健全に笑ふ。

第三幕

場面

兵頭の家。室内。

兵頭とはるみ向きあつてゐる。
甲斐あらはれる。

兵頭　おゝ、甲斐君。

甲斐　何か用があるつて？

兵頭　まあ入(はひ)つてくれ給へ。

甲斐　入つても構はないのか。

兵頭　構はないとも。だから迎ひをやつたんぢやあないか。さあ、かけ給へ。

甲斐、腰かける。

兵頭　甲斐君、僕は君にあやまるよ。何もいはずに許してくれ給へ。

甲斐　何をいつてるんだ、君は。

兵頭　僕が惡かつた。君に對して非常に失禮な眞似をしてしまつた。實に申譯が無い。許してくれ給へ。あやまる。

甲斐　あんまりあやまられると、ひやかされてゐるやうでいけない。用事を聞かうぢやあないか。

兵頭　用事といつて外には無いのだ。わざわざ君に來て貰つたのは、あやまる爲なんだ。吾々二人の前で、君の口から許してやると云つて貰ひ度いのだ。

甲斐　もうい丶よ。何もまた、人を呼びに寄越してまであやまる事は無いぢやあないか。

兵頭　いや、どうしてもあやまらなければ氣が濟まない。君が僕の無禮を許し、もとの通りつきあつてくれる事をお願ひし度いのだ。これは僕ばかりのお願ひでは無い。はるみもともども御願ひするのだ。折角ひとを呼んで置きながら、短銃（ピストル）をつきつけて脅かすなんて言語道斷（ごんごだうだん）だからね。

甲斐　（冷嘲的に）あれはおもちやの短銃で、はるみさんの全快祝の餘興だといふのぢやあないか。

兵頭　さういはれるとなほさら一言も無い。甲斐君、あれはおもちやでは無いよ。
甲斐　おもちやでは無いつて？
兵頭　ほんものさ。しかも實彈が裝塡してあるんだ。
甲斐　冗談ぢやあない。ほんとか。
はるみ　ほんとなんですつて。驚くぢやありませんか。
甲斐　僕もおもちやとは思はなかつた。しかし、まさかに彈がこめてあらうとも思はなかつた。
兵頭　實に申譯が無い。あれつきり、君が來てくれなくなつたのも無理は無いのだよ。けれどもねえ、考へて見てくれ給へ。僕達のつきあひといふものは、なまやさしいものでは無いのだぜ。殊に君とはるみは幼馴染だ。君と僕とのつきあひよりも君とはるみのつきあひの方が長いんだからなあ。それがつまらない事で斷絕してしまつては殘念だよ。かうして、隣同志何の距ても無くゆきゝしてゐたものが、突然見ずしらずの他人のやうに、背中をむけ合つて知らんつらをして暮らすなんて、そんな馬鹿な事があるべきでは無いぢやあないか、それといふのが、たとへ一時の事にしろ、氣まづい思ひをするやうになつたのは、全く僕の責任なんだ。僕の罪なんだ。あやまる言葉も無いよ。だから、たゞあやまる。

甲斐　わかつた。わかつた、君のいふ事はよくわかつてゐる。
兵頭　さうか。では許してくれるんだね。
甲斐　許すも許さないも無いさ。僕だつて、君達との長年のつきあひをつまらない誤解の爲に失ふのは心苦しい。朝晩顏を合せてゐたものが、急に口もきかない間柄になつては、地面を接して住んでゐるのも不愉快だ。僕だつて、決して好んで君にそむかうとは思はない。しかし、君ははるみさんの病氣騷ぎ以來、非常に神經質になつてゐるよ。失敬だが、どうかしてゐると云つてもいゝ位だ。その爲に、事毎にふだんの君とは違つた言動に出る。いひ過ぎるかもしれないが、常軌を逸してゐる。
兵頭　全くだ。僕は確かにどうかしてゐるよ。
甲斐　つまるところ、平生の君とは全然違ふ人間にぶつかつたのだから、僕にはお相手がつとまり兼ねるのさ。
はるみ　ほんとにどうしたつて、いふんでせうねえ。些細な事を氣にして、あゝだかうだとかんがへて、一人で苛々(いら〳〵)してゐるんですもの。おかげで自分も面白くなければ、ひとにもいやなおもひをさせるばかりで、こんな事ならいつそ病氣がほんもので、死んでしまつた方がましでし

たわ。

甲斐　そんな事が……

はるみ　いゝえ、ほんとに、あたし生きてゐるのがいやになつてしまつたつて、先刻も兵頭にさう云つてゐたんです。

兵頭　ほんとにさうなんだよ。はるみは、僕とはるみとの間の誤解がとけ、君と僕との間のつまらない感情が一掃されて、全くもと通りの吾々の世界を取戻さなければ、生甲斐が無い。病氣がなほつても嬉しくない、といふんだ。

はるみ　長い間親類よりも親しくおつきあひしてゐたのに、つまらない事から兵頭が疑を起し、あれつきりお互にゆきゝ出來ないやうな事になるなんて……

兵頭　だから僕があやまり、甲斐君が許してくれて、以前の通り愉快な友情を持ち續けようといふので、かうして君に來て貰つたわけなんだ。僕は今になつてみて、自分の頭を惱ました妄想の下らなさに驚いてゐる。何といつていゝか、實に馬鹿だよ。馬鹿々々しいといふ外は無い。だが、それでゐて、どうにも振捨てる事の出來ない力で僕をつかまへてしまつたんだ。今考へても、恐ろしい氣がする。

はるみ　ほんとに怖い事ですわ。あたしには人間ていふものも、此の世の中といふものも、どんなものなんだかまるつきりわからなくなつてしまひましたわ。不思議ですわねえ。つひぞ考へた事も無い、複雑な、こはい事が、何處にひそんでゐるのか……

甲斐　實際です。突然短銃が此の胸を的にしてつきつけられる。その中には實彈がこめてあるなんて、誰が考へ及ぶものですか。

兵頭　一言も無いよ、さういはれると。しかし、僕が心からあやまつてゐるのだから、君も許すといつてくれてもいゝだらう。それとも、どうしても許してはくれないのか。

甲斐　許すとか許さないとか、そんな問題では無いさ。勿論あゝいふ悪いいたづらに對して、僕は愉快には思つてゐない。(一層ひやゝかに)だが、僕は白狀する。僕は君に撃たれても爲方が無いと思つてゐる。

兵頭　(突然平靜を失つて)それでは君は撃たれる覺えがあるといふのか。

甲斐　いや、はや合點してはいけない。僕は君も知つてゐる通り、行爲の上の意氣地無しだ。決して積極的に人を傷つける事はしない男だ。臆病なのさ、卑怯者さ。

兵頭　それだからどうだといふのだ。はつきり云つてくれ給へ。

甲斐　僕は長い間心の底に靜かにおさへつけてゐた情熱を、君の爲にひつかき廻され、追ひつめられ、逃げ道を失つてしまつたのだ。僕は、はるみさんが病氣にならず、君が夢なんかに脅(おびや)かされないで、以前のやうに健全だつたら、恐らく一生いゝこになつて、君達のよき隣人として暮らし得た事を疑はない。ところが運命は皮肉だ。はるみさんは自分で死病に取りつかれたものと思ひ込み、醫者も診斷をあやまり、君は君でその心配の爲か、精神狀態の均衡を失ひ、僕とはるみさんとの間を變に疑ひ出した。平生の君にも似ず、しつつこくその疑を深めて、吾々を追及(つゐきふ)しはじめた。そして、君が吾々にかける疑は、かへつて吾々にひとつの暗示となつて働きかけ、僕の心にむかしの情熱をよみがへらせてしまつたのだ。

兵頭　それは君の辯解だ。君の方で一切僕に責を歸するつもりなら、僕も默つてきいてはゐない。僕にだつていひぶんはある。僕は自分の態度に惡いところがあつた事は認めるが、君の心の底に、おひとよしの僕なんかゞ想像も出來ない忌はしい呪のあつた事は否定出來ないだらう。夢が僕に暗示を與へてくれたのだ。僕の心は俄かに活潑に働きはじめた。僕は、むかしはるみを君から横取りし、又君よりも早く世間的に成功した事を以て、大つぴらに優越感をほこつてゐたが、その實君にはかなはない、角力が違ふといふ事に遲まきながら氣がついた。君といふ人

間の執念に壓倒されて來た。君の存在が僕の苦痛になつて來た。どうにかして、遠方へ追拂つてしまはなくては、自分がやられるのでは無いかといふ生命に對する疑念さへいだいた。ほんとに君をぶつぱなしてやらうかと思ふ心持も、全く無かつたとはいひ切れない。

はるみ　嘘です、嘘です。兵頭はあたまをいためてゐて、自分の心にも無い事を考へたり、言つたりするのです。

兵頭　嘘なもんか、ほんとなのだ。

はるみ　およしなさいつたら、せつかく甲斐さんに來て頂いて、仲直りしようと云つてゐらつしやつたのに、又そんな事をいひ出しては爲方が無いぢやありませんか。あたしもうそんないやな事をうかゞふのは御免かうむります。

兵頭　僕だつて愉快では無いさ。お前がやいやい言ふものだから、いひ度い事もいはずにあやまらうと思つてゐたのだが、甲斐君があつさり許すと云つてくれないものだから……

はるみ　およしなさいよ。ごしやうですから。

兵頭　だがねえ、雙方がいひ度いだけの事をいひ合ふのも惡くはないのだ。肚にわだかまりがあつて、どうして親しいつきあひが出來るものか。少くとも僕には、そんな芝居は打てないよ。

それよりもお互に泥を吐いて、その上でつきあへるものならつきあふ事にした方がいゝ。

はるみ　駄目よ。そんな事いつて誰がおつきあひなんかするものですか。

兵頭　つきあはないといふなら止むを得ないさ。

甲斐　兵頭君、僕は失禮しよう。僕のゐる事が結局君の神經を苛立たせるやうに思ふ。

兵頭　待つてくれ給へ。今君に歸られては、何の爲に來て貰つたのかわからなくなる。

甲斐　それはさうかもしれないが、君は興奮し過ぎてゐる。又いつかゆつくり話す事にしよう。

兵頭　大丈夫だ。僕は決して己れを失つてゐやあしない。冷靜に話しをする事が出來る。いつたい今日は君にあやまるつもりでゐたのだ。

甲斐　君が僕に求める事はわかつてゐる。しかし僕にもゆつくり考へさせてくれ給へ。

兵頭　何も考へる事なんか無いぢやあないか。僕はあらためて君の前に頭を下げる。何も彼もゆるしてくれ。はるみが第一に願つてゐる。もう一度吾々はお互のよき理解の上に立つ友情を取戻さう。

甲斐　それはわかつてゐる。だが、君は冷靜でも、僕は些か平靜を失つてゐるかもしれない。兎に角今日は出立が惡かつた。又の事にしよう。

強ひて行かうとする。

兵頭　どうしても君は行くのか。

押止めるところで立ちふさがる。

甲斐　それがいけないよ。さう無理に引き止められると、又短銃をつきつけられさうで不氣味だ。

（無理に笑ふ）

兵頭　はゝゝゝ短銃か。短銃ならば此處にあるがね。

物のかげから取出す。

甲斐　（ぎよつとして）君はまだそんなものを身邊に持つてゐるのか。

兵頭　安心し給へ。僕はこんなものに用は無いのだ。君が不安心なら、君に渡して置かう。

甲斐の目の前に差出す。

はるみあわてゝ取る。

はるみ　あなたつて方はどうなさつたの。こんなあぶないものを持出して。これまだ彈が入(はひ)つてゐるんでせう。

兵頭　入つてゐるよ。先刻、彈を拔出さうと思つて出して來たんだ。

はるみ　あぶないぢやありませんか。
兵頭　あぶないとも、うたうと思へばお前にだつて撃てる。
はるみ　どうしませう、怖(こは)いわ。
兵頭　その手を斯うあげて、ひきがねを引けばいゝんだ。僕はさういふ夢を見たよ。僕と甲斐君とが並んで立つてゐる。そいつを的にしてお前が向ふに立つてゐる。どつちか一人を撃たなければならないんだ。ぢいつとこつちを見定めて、手が上つた。銃口は僕の胸にぴつたりと、吸ひつくやうに狙ひがきまつた。――おいかういふ風に手をあげてごらん。よく狙つて、こゝをうつんだ。

はるみ窓際へ身を引く。
兵頭かへつて興奮して前へ進む。

はるみ　いけません、いけません。
兵頭　いつそ其の方が手取早くていゝぢやあないか。僕だつて、出來るものなら昔の通り甲斐君と吾々と親しいつきあひをし度いと願つてゐる。しかし、それはお互に心の底から融和しない限りは駄目だ。第一お前からして、もとのやうな心持で僕と暮らす事も、甲斐君に接する事も

出來ないだらう。出來ないのがあたりまへさ。たぶん、お前が病氣にさへならなかつたら、心の底にひそんでゐた不思議な心持に襲はれる事は無く、僕の貞節な妻として、又甲斐君の親しい友達として暮らしたに違ひ無い。だが、お前が病氣になり、遠からず死ぬのだとおもひきめた時、お前の心には隙間が出來たのだ。そこに惡魔が飛込んでしまつた。そして今では、お前ももとのお前ではなくなつてゐる。

はるみ　えゝ、たしかに心に隙間が出來ました。あたしは何もかくしません。あたしが昔甲斐さんに對して、どういふ心持を持つてゐたか、それはあなたも御存じの事です。でも、あたしはあなたの妻になつてから、あなた以外の人の事なんか考へた事もありませんでした。それなのにどうしたんでせう。自分が死ぬのだと信じてから、このまゝ死んでしまつては甲斐さんにすまないといふやうな心持が起きて來ました。（間）その事も殘らずあなたにお話したぢやありませんか。

兵頭　その上に、僕の態度がよくなかつたといふんだつけね。

はるみ　さうですとも。いやな夢をつゞけて見て頭が變になつたあなたは、その夢と同じ事があたし達の上に起るものと疑ひ出し、どうしてもさうなんだときめておしまひになつたのですわ。

兵頭　しかもそれが全然嘘でも無かつたのさ。

はるみ　嘘です、嘘です。あたしがあれ程いつても、あなたは信じて下さらないのですか。あたしは全く病氣の爲に、心に隙間が出來たのです。けれども、今では健康な、もとの通りの心持で、あなたと樂しく暮らし度いといふ事ばかり念じてゐるのです。それなのに、それなのに……

はるみはげしく咽び泣く。

兵頭身近に迫る。

はるみ　いけません。いけません。

短銃を持つ手をかばふこゝろで逃身になる。

兵頭　さうか。お前は僕と樂しく暮らし度いといふ事ばかり念じてゐるのか。

構はずはるみを抱きすくめる。

はるみ短銃を甲斐の方へ投げる。

兵頭　僕もさうだ。その上に何の望みも無い。友達もいらない。友達なんかいらないだらう。二人きりでいゝぢやあないか。

甲斐足下の短銃を拾ふ。

兵頭　（嘲笑的に）甲斐君、その短銃（ピストル）には彈がこめてあるよ。

甲斐　（誘はれるやうに短銃を持つ手をあげて）撃てるものなら撃てといふのか。

兵頭　（はげしくはるみを抱きしめたまゝ）撃て、撃て。

甲斐　撃たう。

いきなり窓から庭にむかつてつゞけさまに撃つ。

甲斐　二度とこの家の平和をみださないやうに、君達の隣人（りんじん）の家を撃つたのさ。

兵頭はたゞたゞはるみを狂的に愛撫するばかりで、ふりむきもしない。

甲斐　さよなら、僕はもう君の庭にも足をふみ入れまい。けれども、僕はあの家が氣に入つてゐる。一生君達とは隣同志で暮らすつもりだ。この短銃は記念の爲に貰つて行く。

二人を殘して出て行く。

（昭和四年五月三日）

姉と妹

第一幕

人

三上甚吉　銀行の小使
芳　枝　娘
とし子　娘

場　面

三上甚吉の住居

初夏の夜。ちやぶ臺のそばで妹は夕刊を讀んでゐる。姉は臺所で夜食の支度をしてゐて、時々來ては食器などを並べて行く。

父親歸つて來る。恰も何か運んで來た姉がまづ聲をかける。

芳枝　おかへんなさい。今日はいつもより遲いんぢやないかしら。

甚吉　今日は電車がストライキをやりやあがつたものだから、たまに來るやつはきまつて滿員で、鈴なりになつてゐるし、やつと乘れたと思ふと、靑年團の運轉手と來てるから、前のやつにぶつけたりしやあがつて、あぶなつかしくて乘つてられやあしない。おまけに乘換はくれないんだ。あんまり馬鹿々々しいから途中から步いて來た。

芳枝　大變でしたねえ。

甚吉　お前の歸つて來る頃はどうだつたい。

芳枝　隨分こんではゐましたが、でもどうにか割込んで乘りましたわ。

甚吉　どうもこの頃の若い奴等と來たひにやあ始末が惡いや。何かといふとストライキだからな。

洋服をきものにかへ、煙管をとる。

姉は臺所とかけもちで忙しい。

甚吉　なんだい、素晴らしい御馳走が出て來さうだな。どうしたつていふんだ。

芳枝　いゝえ、としちやんもおつとめがきまつて、明日(あした)から會社に出るんですから、お祝のつも

りなんです。

徳利を銅壺に入れる。

甚吉　へえ、たいしたもんだな、とし公は。

とし子　姉さんは御馳走をこしらへたりなんかするのが好きなのよ。

甚吉　御馳走ならお前だつて嫌ぢやあないだらう。

とし子　喰べる事ならね。あたしは御飯をたいたりおかずをこしらへたりするのは性に合はないのよ。

甚吉　むしのいゝ事を云つてやがら。姉さん一人働かしといて、自分は大めけで新聞なんか讀んでゐやあがる。

とし子　だつて、あたしも手傳はうかつて云つたら、姉さんそれには及ばないつて云ふんだもの。

芳枝　ほんとにさうなんですよ、お父さん。今日はとしちやんの御祝なんだから、としちやんはお客様みたいに默つて坐つてゝくれゝばいゝのよ。

いひながら、たべるものを運んで來て、自分も坐る。

妹も新聞をはふり出しちやぶ臺を圍む。

芳枝　お父さん、お燗はどう。もういゝんぢやないかしら。

甚吉　どうも恐れ入つたね。椀さし酢の物と揃つてゐるぢやあないか。

酒をはじめる。

甚吉　いゝ酒だなあ。こいつはいつものとは違ふぞ。

芳枝　えゝ、歸りに和泉屋によつて、一番上等のを下さいと云つて貰つて來たんです。今日はおかはりしてもいゝんですよ。

甚吉　まことにお手厚いことで。（妹の方にむかつて）では遠慮なくお相伴いたします。

とし子　いやなお父さん。

父いかにもうまさうに飲む。

甚吉　なんだい、おさしみはお父さんだけで、お前達にはないのか。

芳枝　あたし達には外にいゝものがあるんです。今持つて來てお目にかけるわ。

甚吉　そんならいゝけれど、お父さん一人でこんなには喰へないから、三人で分けたらどうかと思つて。

芳枝　いゝえ、そんな事しなくていゝんです。あたし達にはもつともつとおいしいものがあるん

だから。

笑ひながらとりに行く。、

芳枝　これはあたしととしちやんだけで、お父さんにはあげないの。

甚吉　なんだい、そいつは。あやしげなものぢやあないか。

芳枝　これ、とてもおいしいのよ。

甚吉　洋食だね。

芳枝　えゝ、ソオセヱヂつていふの。

甚吉　ソオセヱヂ。牛肉だな。

芳枝　いゝえ、豚の腸詰なんですとさ。

甚吉　驚いたね。ほんとかい、ふむん、豚の腸詰だつて。

芳枝　えゝ、會社の食堂でよく出るんですよ。ソオスをかけて頂くととてもおいしいわ。

甚吉　うちにはソオスなんて氣の利いたものはないだらう。

芳枝　えゝ、でもお醤油で結構なのよ。

甚吉　さうかい。お父さんなんか舊弊で、豚の腸詰なんてものは、それこそ煮ても燒いても喰へ

やあしないや。

上機嫌でしきりに飲む。

甚吉　おい、お前達は飯を喰ふ方だらうから、お父さんに構はず、すませておくれ。お父さん今日は遠慮なく、ゆつくり頂戴するよ。

芳枝　それではさうさせて頂きませうか。（妹に）ぢやあね、お魚を燒いて來るから、そろそろ喰べてゐて頂戴な。

立つてゆく。

甚吉　なんだい、まだお魚があるのかい。

芳枝　えゝ、鯛のおかしらつきよ。もつとも朝鮮鯛で、しかもいつぴきしかなかつたつて。これはみんなで分けるの。

甚吉　もつたいない。朝鮮だらうが臺灣だらうが、鯛は鯛だらうぢやあないか。

妹默つて箸を取上げて喰べてゐる。

甚吉　なあ、とし公。

とし子　あら、お父さん今日はもう眞赤よ。

甚吉　嬉しいからよ。お父さん嬉しくて堪らないんだよ。嬉しいつてよりもありがたいつて云つた方がいゝかな。ほんとにお前、姉さんの恩を忘れちやあすまないぞ。お母さんがなくなつてからといふものは、何から何迄姉さんがやつてくれてるんだ。朝は誰よりも早く起きて飯をたく。お辨當をこしらへてくれる。自分は自分で稼いでくれる。會社がひけて歸つてくれば、又飯の支度から何から一手でやつてくれる。お父さんは意氣地なしだから、お前達に何もしてやる事も出來ないが、お前が別段ぼろもさげずに學校に通はして貰へたのも姉さんのおかげさ。あいつは、自分は着たいものも着ずに、お前には分に過ぎたなりをさせてくれる。その上今度は又會社の方にお願して、お前みたいなもの迄使つて頂くやうになつたつていふのも、これも姉さんの働きだ。ふだんの心懸がいゝからだ。會社の方では、きやうだいいつしよは面白くないといふ事だつたさうだが、支配人さんも姉さんのふだんを知つてゝくれて、あれの妹ならいゝだらうといふので、やうやく御許しが出たんだつていふぢやあないか。だからお前も姉さんの恥にならないやうに、一生懸命につとめてくれなくては申譯がないぞ。なんでえ、きいてゐないのか。

とし子　きいてるわよ。

甚吉　そんなら横ずつぽうを見てる事は無いだらう。

とし子　お父さんの御酒はいやさ。お談義上戸つていふのね。

甚吉　それだ。お前はその口がいけないよ。世間知らずのお前の身に間違のないやうにと心配して、お父さんはいろいろ注意してやるんぢやあないか。

とし子　あたしだつて、それ程世間知らずでは無いつもりだわ。

甚吉　なまいふない。お父さんなんか年からいけば、お前なんかの二倍も三倍も世間を見て來た人間だ。世の中つてものはな、若い娘つこなんかのおもひも及ばない廣大なものなんだ。

とし子　それはお父さんの見て來た世の中はあたしにはわからないかもしれないわ。そのかはり、あたしの知つてる世の中は、お父さんにはわかりはしないでしよ。

甚吉　又屁理窟か。お前がどんな世間を知つてるんだ。お父さんや姉さんのおかげで、學校に通はせて貰つた丈で、ほんとの世間へ出た事はないぢやあないか。

とし子　學校に通はせた通はせたつて、お父さんは二言目にはいふけれど、女學校にも入れてくれなかつたぢやないの。

甚吉　さういはれてはお父さんかたなしだ。全くお父さんにはそれ丈の働きがないんだから爲方

が無い。かんにんしろよ。

姉おはちと燒魚を運んで來る。

芳枝　いやだよ、としちやん、又お父さんをやりこめては。

とし子　やりこめるなんて、そんな事ぢやないんだけれど、だつてお父さんたら、いつ迄もあたしを赤ん坊だと思つてるんだもの。

甚吉　はいはい、すみません。とし公は赤ん坊では御座いませんとも。明日からは立派な會社のタイピストさまだ。

芳枝　お父さん、おかはりでしよ。

空になつた德利をしきりにさかさまにしてゐる。

それをとる。

甚吉　もういらない。こんないゝ酒を、やたらに飮んじまつちやあもつたいない。

芳枝　いやなお父さん。もうひとつつけませうよ。

立つてゆき、すぐ戻る。

甚吉　すまないなあ。意氣地なしのおやぢが、おかしらつきで醉拂つてゐちやあ。

とし子　そんないやみおよしなさいよ。（姉に）姉さん、あたし御飯頂くわ。

芳枝　さうねえ、それでは先きに頂いちまはうか。

姉妹めしになる。

父は二本目の酒を樂む。

甚吉　あゝいゝ心持だ。お前達が大きくなつて、かうまでしてくれるんだから、お父さん自分では、自分程しあはせな人間はないと思つてゐるよ。これで孫の顔でも見れば、もう何もいふ事は無い。その日の中に死んだお母さんのところへ引取られても、さらさら異存はないよ。三上甚吉は貧乏には違ひ無いが、此の不景氣だといふのに、刺身でいつぱい飲めるんだから、うらやまれてもいゝ身分だぜ。え、これといふのもみんな姉さんのおかげだ。お父さんはお前の後姿を心の中で拜んでゐらあ。

芳枝　よして下さいよ。

甚吉　いゝえ、ほんとだよ。こんないゝ娘に、何とかしていゝお婿さんを持たせなくては、おやぢの義理がすまないや。

とし子　誰がうちなんかに來るもんですか。

甚吉　馬鹿いへ。いくらうちが貧乏だつて、姉さん程の娘つてものは、さうたんとはありやあしない。きりやうだつて、心だてだつて。
芳枝　お父さんたら、もう澤山よ。
甚吉　いゝえ、ほんとの事だよ。世間でみんなさういつてら。
とし子　いやんなつちやふはね。
芳枝　あたしは、かうしてお父さんが達者でゐてくれゝば、それが何より嬉しいのよ。氣心の知れない人に來て貰つたりなんかするよりは、一人でゐる方がよつぽどましだ。それよかとしちやんこそ、いゝとこに貰はれて行つて、お父さんのお望の孫を見せてあげるといゝんだわ。
とし子　あたし達みたいな貧乏なものは、いゝとこなんかにいかれやあしなくつてよ。お金持はお金持同志、貧乏人は貧乏人同志いつしよになるのが、それこそ世間のあたりまへだわ。ね、お父さん、あたしだつて世間を知つてるでしよ。
甚吉　馬鹿な事をいふない。人間いくら貧乏だつて、正直に働いてゐりやあ、いつかは運が向いて來らあ。お前達だつて眞面目に、身をつゝしんでゐりやあ、どんなとこから貰ひに來るかわかるものか。

とし子　噓々。そんな夢みたいな事をあてにしてゐたつて爲様がありやあしない。正直にしてゐて運が向いて來るものなら、お父さんみたいに馬鹿正直にしてゐて、どうしていつ迄も貧乏なんだらう。

芳枝　としちやん、いゝ加減におしよ。聞いてる丈でもいやな氣持よ。

とし子　だつてさ、お父さんあんまり人がよすぎるんだもの。世の中なんて、正直でゐたれるところぢやないわよ。

甚吉　とし公、お前本氣でそんな事云つてるのか。

とし子　えゝあたしはさう信じてゐるの。眞面目におとなしくしてゐたら、あたし達は一生くすぶつてゐなけりやあならないのよ。姉さんだつてごらんな、人の手本だ、親孝行だ、感心だとほめられたつて、たゞほめられるばかりで、何もいゝ運なんか向いて來ないぢやないの。一生會社につとめてゐたつて、百圓の月給もとれやしないわ。

甚吉　何といふいひぐさだ。そんな根性では、明日からつとめに出たつて、人並の働きは出來やあしないぞ。

とし子　それは大丈夫。あたし働く事は働くつもりよ。だけど、いくら働いたからつてどうなる

ものでもないと思ふのよ。

甚吉　ふてくされをぬかすない。お前は二言目にはうちは貧乏だ貧乏だといふけれど、金がなんだい。え、金があつたつてしあはせとは限らないぞ。かうして他人まぜずに暮らしてゐられる丈でも、ありが度いと思はなくちやあならないんだ。

とし子　そりやあお父さんは、お酒でも飲んでれば、ほかに慾はないだらうけれど、あたしなんかこれから先の永い一生に、どんないゝ事があるんだらう。何のあてもなく、たゞ働いて、年をとつて、汚くなつて、死んでしまふのね。

芳枝　およしよ、としちやん。そんな事云つて見たところで、今更爲方が無いぢやないの。世間にはあたし達より、もつとふしあはせな人が澤山ゐるんだもの、それを考へれば、うちなんかいゝ方(はう)だと思はなくてはならないわ。としちやん、あんた矢張カフヱか何かにつとめ度いつて氣があるんだね。

甚吉　カフヱだ。馬鹿な。俺の娘にそんな眞似がさせられるかい。お父さんは自分の娘を、そんな根性(こんじやう)には育てやあしないぞ。

芳枝　でもさ、此の間も、會社なんかにつとめるよりも、カフヱの方がお金になつていゝなんて

云ふんだもの。

とし子　えゝ、あたしはカフェにつとめるのがそれ程恥だとは思はないのよ。お金持のお嬢さんが酔狂で、カフェの女給になるつていふのなら馬鹿々々しいけれど、あたし達が稼ぐのなら、ちつとでも餘計お金のとれる商賣の方が得ぢやあないの。

甚吉　馬鹿。てめえは恥をしらねえんだな。いつの間にか根性が腐りやあがつた。

芳枝　としちやん、いやだわ。せつかくあたしがあんたの爲に働く先をこしらへて、心祝のつもりだつたのに、お父さんを怒らせるやうな事ばかり云ふんだもの。つまんないわ。

とし子　ごめんなさい。あたしだつてお父さんを怒らせようと思つてるんぢやあないのよ。たゞ正直に自分のお腹の中をいつて見た丈よ。

甚吉　あんまり勝手な口をききやあがると承知しないぞ。

やけに徳利をとつてつぐ。無い。

芳枝　あら、もうおしまひ。まだ半分位ならあるかもしれないわ。見て來ませう。

徳利をとらうとする。

甚吉　いゝや、もういらない。

その徳利をとりかへさうとする。二人の調子が合はないで、徳利は手をすべつて落ちて割れる。

芳枝　あら、どうしませう、

甚吉　ちえつ、縁起でもねえ。

酔つたのをまぎらす心もまぜて、いきなり肱を枕にして寝ころぶ。

芳枝　お父さん、御飯をあがつて下さいな。

甚吉　腹がいつぱいで喰へない。いゝ心持だからうつちやつといてくれ。

芳枝　いやだわ、燒魚なんか手がついてないぢやないの。

甚吉　もういゝ、結構な御馳走だつたよ。

芳枝　お父さん、寝ちまつちやあいやだわ。風邪を引いてよ。

父返事をしない。姉妹顔を見合せる。茶碗の中に冷くなつた飯の殘つてゐるのを、二人申合せたやうに喰べる。

第二幕

人

三上芳枝　　　タイピスト
三上とし子　　タイピスト
山路進一　　　會社員
その他

場　面

或る會社の事務室

夏の晝。食事時間。とし子、半巾で汗を拭きながら自席に着き、懐中鏡を見て顔を直してゐる。

山路そつとやつて來る。

山路　とし子さん、こいつ大急ぎで叩いてくれない。

とし子　急ぐの？　今おひる濟んだばかりなんだけれど。

山路　すまないけれど、急ぐんだから。

とし子　爲樣が無いわねえ。今日は原稿隨分澤山出てんのよ。

山路　(からかふやうに)濟みません。

とし子とり合はず、直ぐに機械にむかふ。少し打つてから、

とし子　いやだあ、山路さん。これラブ・レタアぢやないの。馬鹿にしてるわねえ。

山路　なんでもいゝから叩いてくれよ。

とし子　あたしいやだわ、こんなの。大急ぎだつて云ふから、會社の手紙だと思つてたら、あなたのうるはしき御姿を日毎に心ときめかし……なんて。いゝわ、支配人さんにいつけてやるから。

山路　いゝぢやあないか。戀愛は自由さ。私的生活に迄支配人の干渉をうけてたまるものか。

とし子　あんた色魔ね。誰にやるの、これ。

山路　誰だつていゝぢやないか。僕が心の中で熱烈に想つてゐるある女性にやるんだ。
とし子　何處の人？　うちの會社の人？
山路　（うなづく）
とし子　へえゝ、うちの會社の人だつて。誰だらう。
山路　誰だかあてゝごらん。
とし子　誰だらうなあ。會計にゐる秋野さんぢやあないかしら。あの人とてもシヤンねえ。
山路　シヤンかもしれないが、僕あんなつめたい感じの人嫌ひだなあ。ちつとも肉感的なところが無いぢやあないか。
とし子　でもいゝきりやうだわよ。あれで島田にでも結つたら、とても素敵だわ。
山路　僕あごめんだ。近代味のまるつきりない女なんてつまんないや。
とし子　あんたみたいなモボにはね。でも不思議だわねえ、そのあんたが、どうしてうちの姉さんにモオシヨンかけたのかしら。
山路　そんな事、誰が云つた。
とし子　會社の人みんな知つてゝよ。

山路　（佛蘭西人のやうに兩手をひろげ肩を持上る身振）でも、芳枝さんと秋野さんとは違ふよ。君の姉さんのには無理に色氣を消さうとしてるんで、秋野さんのは先天的に不感症なんだから。
とし子　觀察が細かいのねえ。
山路　よせやい。（一寸切つて）兎に角それ叩いてくれない。頼む。
とし子　でも、こんな手紙打つたら課長さんに叱られるわ。
山路　いゝぢやあないか、僕が無理に頼んだんだつていへば。
とし子　さうするとあんたくびになつてよ。
山路　くびか。敢て驚かないね。サラリイマン生活もあきあきした。わたしや月給とり悲しいとりよさ、午後の五時迄籠のとりつてね。いつ迄も上役の御機嫌とつてるのはいやだからなあ。これでもくにに歸れば地主の旦那なんだぜ。
とし子　あんたのおくにつて何處。
山路　越後だよ。くにの方では山路つていふとちつとは知られた家柄なんだ。
とし子　お金持なの。
山路　まあ金持つていふんだらうなあ。三井三菱にはかなはないけど。なあんてね。

とし子　いゝわねえ、あたし貧乏程いやな事無いと思ふわ。
山路　そりやあいやさ。だけど金なんてものはあんまりあつても困るかもしれないよ。
とし子　いくらあつたつて困るもんですか。ばらばら撒いてやつちやふからいゝや。あゝあ、一度でいゝから困つてみたいな。山路さん、あんたんとこにも困る程ある？
山路　田舍はみんな地面だよ。そいつを賣らなければ現金はないんだ。
とし子　そんなら賣つてしまへばいゝのに。
山路　それが又賣らうつたつて賣れないんだ。
とし子　つまんないのねえ。
山路　つまらないさ。世の中で面白い事と云つたら戀の外ないよ。人間なんて、結局はその爲に生れて來るんだからなあ。
とし子　あんたみたいなのが戀愛至上主義つていふのね。平つたくいへば色魔だつたつて。
山路　色魔々々つていふのよせよ。人ぎきが惡いぢやないか。
とし子　だつて立派な色魔ぢやないの。こんな手紙を誰かにやらうつていふんだもの。
山路　まあ色魔でいゝや。色魔でない人間なんてゐやあしないんだから。たゞ身の安全をはかる

爲に愼しんでゐる丈なんだ。

とし子　あんたにはその愼しみつてものが無いのね。まるつきり。

山路　なんでもいゝからそいつ叩いてくれよ。

とし子　ぢやあね、誰にやるんだか白狀したら叩いてあげるわ。

山路　誰たつていゝぢやあないか。

とし子　いけない事よ。第一卑怯だわ。ラブ・レタアをタイプライタアでうつなんて、誰の手だかわからないやうにして置いて、うまく行きさうだつたら名告つて出る、しくじりさうだつたら知らん面してゐようといふこんたんなんでしよ。

山路　そんなんぢやないんだ。

とし子　そんならはつきり誰にやるんだか教へたつていゝぢやないの。

山路　まあ讀んでみてくれたまへ、讀めば誰にやるんだかわかるから。

とし子　だつて、こんな甘つたるいきまり文句なんか讀むねうちがないわ。

山路　馬鹿にするない。

とし子　だつてさ、これなあに。あなたの白い指さきの動く時數千の文字は魚の如く生きて亂舞

する……

山路　わかつた？

とし子　（一寸考へるふりをして）いやな奴。まだうちの姉さんを思ひ切らないの。

山路　さうぢやあない。違ふよ。

とし子　だつてこれ、タイピストにやる手紙でしよ。

山路　さうかもしれないなあ。

とし子　ね。だからうちの姉さんだつていふんぢやないの。

山路　違ふ。

とし子　そんなら誰さ。

山路　みかみとしこ。

とし子　馬鹿。ひとに寄越す手紙をわざわざ本人に叩かせるなんてないわよ。

山路　いゝぢやあないか。その方が印象が深いだらうと思つてね……

芳枝の姿あらはれる。

山路あわてゝごまかす。

山路　では頼みますよ、急ぐんだから。

とし子引込まれて、忙しさうにタイプライタアを打つ。

芳枝うしろに來て立つて見てゐる。

とし子　山路さん、大急ぎでうつてくれつていふのよ。

しきりに打つ。

芳枝　としちやん、なあにその原稿。

芳枝　およしよ。そんなの。

手を延ばして原稿を引つたくる。

芳枝　としちやん、いやだわ。あたしがあれ程云つて置くのに何故あんな人の相手になるの。今にとりかへしのつかないめにあはされてよ。

とし子　大丈夫よ。あたしあんな奴なんとも思つてやしないわ。たゞね、これを打つてくれ打つてくれつてしつつこく云ふから、どうせおひる休みでひまなんだし……

芳枝　（原稿を讀んで）まあ、こんなもの又寄越す氣なんだね。づうづうしいつたらないのねえ。

ずたずたに引裂いて紙屑籠へはふり込む。

芳枝　としちやん、あの手紙誰にやるつもりだか知つてるの。
とし子　そんな事知らないわよ。
芳枝　そりやあさうでせうね。知つてたら、まさか頼まれもしまいから。
とし子　（てれて默つてゐる）
芳枝　こんな事いふの變だけれど、あの人あたしに度々手紙寄越した事あるのよ。はじめのうちは名前が書いてないので、誰だかわからなかつたの。さうすると今度は會社の用事の原稿らしく見せかけて、これ大急ぎで叩いてくれたまへなんて、變な事書いて持つて來るのよ。さうかと思ふと、歸りに電車んとこで待つてゐて、僕の手紙讀んでくれましたかなんていふから、あたし困つちやつてね、あたしは手紙なんぞ頂いては困りますからつて逃出した事も二三度あるのよ。ほんとに洒々してゐるんだからかなはないわ。それが今度はどういふ積りなんだらう、あんたんとこにこんなもの持つて來て。誰にやる手紙たといつてて。
とし子　あたしに寄越すんだつていふのよ。本人にうつて貰つた方が印象が深いだらうなんていつてるの。
芳枝　あんたに。さうかしら。

とし子　あの人さういつてゝよ。

芳枝　だつて、さうだとすれば、なんて恥知らずなんだらう。

とし子　ぢやあ姉さんは、あんたんとこに行く手紙だと思つてるの。

芳枝　だつて先にあたしに打つてくれといつて持つて來たのとまるつきり同じ文句よ。第一あたしにむかつて、なんだかんだと云つて置きながら、今度はあんたに同じやうな事をしむけるなんて、あんまり馬鹿にしてるぢやないの。

とし子　そんな事どうだつていゝぢやないの。あんたの御亭主だとかいふのなら別だけれど、あんたが好きだからつて、なんでもないぢやありませんか。そんな事氣にしてゐたら、其處いら中の男は、みんな姉さんが好きかもしれない事よ。

芳枝　としちやん、あんたほんとにそんな氣持でゐるの。そんなんぢやあ姉さんいやだわ。あたしが眞面目につとめてゐるおかげで、あんたも此處に來られるやうになつたんぢやないか。あんまり愼しみがなさ過ぎてよ。あたしみなさんに對しても羞しいわ。

とし子　それは姉さんとあたしの性分の違ひだから爲方が無いわ。あたし姉さんみたいにおすましで、びくびくしてつとめてなんかゐられないのよ。

芳枝　そればかりぢやあないわ。第一はじめの約束と違つて、あんたの御化粧は濃過るし、いつたいにはで過るし……

とし子　それは無理よ。あたし姉さんみたいにきりやうがよくないんだもの。おつくりでもしなければ見られやしないわ。

芳枝　會社では仕事をさせる爲にあたし達に月給を下さるのよ。お化粧にうきみをやつしたり、男の人とふざけたりするのが仕事ぢやあないわ。

とし子　知つてゝよ、そんな事位。會社は會社で都合のいゝやうに考へてゐるでせうさ。そんならあたし達の方にだつて、ちつとは自由があつたつていゝ筈だわ。あたし會社の仕事を怠けるなんて氣は微塵も無いけれど、お化粧位したつて差支ないと思つてるわ。何も好きこのんで、タイプライタアなんか叩いてるんぢやないのよ。働かなければ滿足には着物もきれないから爲方が無いの。出來る事ならこんなとこに、一日だつてつとめ度くは無い事よ。

芳枝　さう。いやならよして頂戴。あたしだつてあんたが來てからは、肩身が狹くて困つてんのよ。無理に御願して雇つて頂いても、ちつともありがたいと思はないやうな人は、さつさとやめて貰つた方が結構だわ。

とし子　姉さん、あたしやめやあしない事よ。やめて、ほかにいゝとこがあるのなら、今からでもよすけれど、そのあてがない限りはこゝで働いてゐる積りなのよ。
芳枝　そんな心がけで、一人前の仕事が出來るもんですか。
とし子　仕事は仕事よ。あたしだつて、もう少し馴れゝば、姉さん位のうでにはなつて見せるわ。
芳枝　うでばかりよくたつて、心がけが悪くては駄目よ。
とし子　いくら心がけがよくたつて、社長さんにはしてくれないし……
芳枝　（相手の口をふさぐやうに）としちやん。
とし子　一生タイプライタアを叩いてゐたつて、恩給がつくわけでもないし、たゞひからびたお婆さんになるばかり、なんの生甲斐があるんだらう。
言葉の切れないうちに、食堂や喫煙室から社員達が戻つて來て、めいめいの席につき、仕事をはじめようとする。
芳枝何かいひ度いのをがまんして自分の席につき、機械をうちはじめる。
とし子もそれに倣ふ。

第三幕

人

三上甚吉　　銀行の小使
芳　枝　　娘
とし子　　娘
山路進一　　會社員

場　面

三上甚吉の住居。

夏の夜。樂まない顏色で、甚吉烟草をふかしてゐる。

芳枝臺所で洗物を終り、入つて來る。

芳枝　ほんとにどうしたんだらう。まさか悪い人達につかまつて、何處かへ連れて行かれたんではないでせうねえ。

甚吉　あいつはそんなお人よしぢやあない。その方は大丈夫だ。

芳枝　でも、淺草だの銀座だの新宿なんかには、隨分不良が多いんですつて。萬一そんな事だつたら、早く警察へ願つた方がいゝんぢやあないかしら。

甚吉苦り切つてむやみに烟草を吸ふ。
芳枝つぎほなく默つてしまふ。

甚吉　警察なんかに頼む事はない。そんな事をしてみろ、とんだ恥さらしだ。あいつは心得違ひをして、誰かといつしよに遊び歩いてゐやあがるんだ。それに違ひ無いと、俺は睨んでゐる。お前には何か心當りは無いのか。

芳枝　心當りつて。

甚吉　誰かあいつをそゝのかして、いゝおもちやにしてゐる奴さ。

芳枝　男の人ですか。

芳枝考へる。

甚吉　さうさ、お前のやうな心がけの人間なら、お父さん何も心配する事は無いけれど、あいつはお前とは違ふよ。會社の若い社員さんにでも、うまい事を云はれると、直ぐに乘つてしまふ柄なんだ。當節の若い人達は、隨分女の社員にからかつたりなんかするやうぢやあないか。

芳枝　多勢（おほぜい）の事ですからねえ。中には隨分よくない人もゐるけれど、こつちさへしつかりしてゐれば何でも無いんだから……

甚吉　さうともさ、お前みたいに萬事きちんとしてゐてくれゝば、誰もめつたな事はいひもしまいが、何をいつてもとし公は、物の筋目の立たない人間だから、何をしでかすかわかりやあしない。

芳枝　濟みません。あたしがついてゐながら御心配かけちやつて。

甚吉　なあに、お前の知つた事ぢやあない。ちひさいうちにおふくろにわかれたのがふびんだと思ひ、つい甘やかしたお父さんが悪いんだ。しおきをきびしくしなかつたのが俺の間違ひさ。

芳枝　そんな事つてあるもんですか。

甚吉　（ひとりごとのやうに）畜生、ふしだらな眞似でもしやあがつたら、この家（うち）の閾（しきゐ）はまたがせね

えぞ。

芳枝　でもねえ、お父さん。としちやんは氣が強いから、あんまりひどく叱るとやけになつて、かへつていけなくなりやあしないかしら。それが何より心配だわ。

甚吉　心配もくそもあるものか。腐つた根性の奴は、うちには置けねえ。俺あ甲斐性の無い人間よ。だが他人様からうしろ指をさゝれた事の無い人間なんだ。その俺の家から、ふしだらな娘を出したとあつちやあ、このさき世間に顏向けが出來ねえ。

芳枝　でも、たつた一度うちをあけたからつて、直ぐに追出してしまつては、それこそこの先如何なるかわかりやあしない。お父さん、ごしやうだから、今度ばかりはどんな事があつても、かんべんしてやつて下さいな。

甚吉　いゝや許せねえ。一度だから爲方が無い、二度だから許せ無いといつたわけのものぢやあ無い。若い女の身そらで、一晩うちをあけた丈でもかんべん出來無えんだ。考へてもごらん、昨夜は何處に泊つたのか知らないが、大概何をしてゐやあがつたか見當はつくだらう。としごろの娘が、親に無斷でうちをあけたといやあ、第一世間の眼が承知しないや。

芳枝　それはお父さんのいふ通りだけれど、これつきりうちへ入れないとなつたら、としちやん

何處に行くとこがあるだらう。

甚吉　何處に行かうと知つた事かい。手前の氣儘でうちをあけるやうな奴あ、俺の家には置けねえんだ。

芳枝　だつて……

甚吉　何がだつてだ。親の許しもうけないで勝手な眞似をする奴なら、行く所に困る筈は無いやな。

二人とも氣まつくなつて默つてしまふ。少し前から、おもてにとし子と山路が來てゐる。何か押問答の末とし子家に入る。

芳枝　あら、としちやん。お父さん、としちやん歸つて來ましたよ。

甚吉わざと返事をしない。

とし子　只今。

姉のそばに坐る。流石にとつつき場が無くててれてゐる。

芳枝　としちやんどうしたの。あんたが歸つて來ないものだから、心配したつたらないわ。あんたほんとにどうしたのさ。

とし子　あたし房州に行つたのよ。こら、こんな。隨分日に燒けたでしよ。
芳枝　房州。誰と。
とし子　お友達と。
芳枝　お友達つて誰さ。
とし子　誰だつていゝぢやないの。
芳枝　（父の方をはゞかつて）ひと言あたしに斷つて行つてくれゝばいゝのにさ。そんな事知らないもんだから、ほんとに心配しちやつたわ。
とし子　すまなかつたわね。（逃げるやうに）あたし一寸お湯に行つて來ようかしら。
　立上る。
甚吉　おい、お前にきく事がある。坐れ。
　とし子やけに坐る。
甚吉　お前友達と房州に行つたと云つてるが、その友達つてのは誰だ。
とし子　會社の人よ。
甚吉　會社の何といふ人だ。

とし子　いやんなつちやふなあ、誰だつていゝぢやないの。

甚吉　何だと。もう一度云つて見ろ。男の奴といつしよに行つたんだらう。

とし子默つてしまふ。

芳枝　お父さん、さう荒つぽくきかれてはとしちやんだつて返事が出來ないわ。としちやん、かくしたつて爲方が無いんだから、誰と行つたか、みんなお父さんに話してしまひなさいよ。あたしがあやまつて上げるから。

とし子　あたし何もかくしだてなんかしやあしない事よ。あたしね、お父さんでも姉さんでも、何かあたしが惡い事をしたやうに思つてるからいやなのよ。

芳枝　だつて、うちに斷りもしないで、他所に泊つて來るなんて、いゝ事ではないわ。

とし子　それはあたしも惡かつたのよ。だけど、うちに斷つたら、きつと行つちやあいけないつて云ふにきまつてるんだもの。

芳枝　そんな事云つて、あんたお父さんやあたしがどんなに心配したかわからないの。

とし子　すみません。でもね、お父さんや姉さんが想像してるやうな事は無いんだから、それ丈は安心してね。

芳枝　あたし達が想像してる事つて。
とし子　いやだわ、わかつてるくせに。
甚吉　なに。親に無斷で泊り歩くやうな奴を、誰がよく思ふものか。どう思はれたつて、みんな自分のふしだらからだ。
とし子　ふしだらだつて。お父さんは直ぐにそんな事云ふからいやだわ。
芳枝　としちやん、ごしやうだからそんな口のきゝ方しないでさ。
とし子　だつて、お父さん何でも彼でもあたしを自墮落な女にしてしまはうとするんだもの。
甚吉　おい、お父さんのきく事に返事をしろ。お前會社の人と房州へ行つたといふんだな。誰の許しをうけて行つた。え、この俺の許しを何時うけた。勝手に男といつしよに寢とまりしやあがつて、それが自墮落でなくてなんだ。え、いつたいその相手はどいつだ。會社のなんていふ奴だ。
芳枝　としちやん。誰なのさ。
とし子　山路さんよ。
芳枝　矢張さうだつたのね。

甚吉　山路たあ誰だ。

芳枝　大學出の若い人なんです。

甚吉　大學出だらうが何だらうが、ひとの娘をそゝのかした奴なんか、どうせろくでなしに違ひ無い。そんな奴をこの儘にしといちやあ、世間のみせしめにならねえ。社長さんに御目にかゝつて免職にしてやるから。

芳枝　としちやん、だからあたしが度々注意してあげたんぢやないの。あんな人と口をきくんぢやあない。何處かに誘はれても決していつしよに行くんぢやあない。今にきつとひどいめにあはされるからつて、あれ程云つたんぢやないの。どうしてあんたは……

とし子　姉さん、あたしひどいめになんかあはされやあしない事よ。そんな事は無いつていつてるのに。

甚吉　馬鹿。女たらしみたいな奴に連れ出されて、たつた二人で宿屋に泊つて來やあがつて、それでよく平氣で歸つて來られた。ひどいめにあはされた事なんか無いたあ何てえせりふだ。ひどいめでなければおもちやにされたんだらう。

とし子　嘘です、嘘です。そんな事ありやあしません。

甚吉　何が無い事があるものか。親の目を忍んで泊つて來るやつが、何をして來たといふんだ。汚らはしい。出て行け。貴様のやうな奴は親でも無い、子でも無い。勝手に何處へでも失せやあがれ。
とし子　(すつかり反抗的になり)出て行けつていふんなら出て行きます。だけど、あたしお父さんの疑つてるやうな事は全くないんですから……
甚吉　そんな事を云つたつて、誰がほんとにするものか。お前はその山路とかいふ奴といつしよに、房州へ行つたといふんぢやあないか。
とし子　えゝ。
甚吉　いつしよに宿屋に泊つたんだらう。
とし子　(頷く)
甚吉　それでも身のあかりが立つと思ふのか。
とし子　でも、あたしほんとなんですもの、嘘だと思ふなら、山路さんにきいて下さい。
甚吉　馬鹿。そんな奴がおめおめ白狀するものか。
山路格子に手をかける。

山路　ごめん下さい。
芳枝　どなた。
立つて行く。
山路入つて來る。
芳枝　あら、どうして……
山路　今晩は。僕先刻から其處にゐたんですが……
芳枝　としちやんといつしよだつたんですか。
山路　えゝ。
甚吉　芳枝、どなたゞ。
芳枝　山路さんなんですよ。
甚吉　なに。山路さんだ。さうか。そんならこつちへ上つて頂かう。
芳枝　どうぞ。
甚吉　さあ、そこぢやあ話が出來ないから、上つて下さい。
山路上る。

山路　ごめん下さい。僕山路です。

甚吉　私はこいつらのおやぢで……

　　みんなの位置きまる。

甚吉　（ひどく改まつて）實は私の方から今晩にもうかゞはうかと思つてゐたんで。

山路　どうも濟みません。たぶんそんな事になるんぢやあないかと思つて、とし子さんを送つて來たんです。來なくてもいゝといふんだけれど、僕氣がすまないもんだから……

甚吉　それはどうも。どうもこいつは馬鹿でしてね、とんだ心配をさせられましたよ。昨日の朝いつもの通り、姉といつしよに會社に出かけたつきり歸つて來ない。姉の方にきいて見ると、會社からいつしよに歸らうと思つて探したが見つからない、たぶん買物にでも廻つたんだらうと思つたと云ふんです。待つても待つても歸らない。飯を濟ましても歸つて來ない。つひぞこんな事は無かつたもんだから、私も私だが、芳枝の心配つたらないんで、惡者に誘拐されて田舎へつれて行かれたんぢやあないか、自動車に轢かれたんぢやあないかなんて、よつぴて寢ずに待つたが歸らない。

山路　それはどうも。

甚吉　今日は今日で日曜なものだから、朝から親子が顏をつき合してゐたが、さて何處へ行つたものか見當がつかない。私は一日ぼんやり待つてゐる。こいつはこいつで、あても無いのに何度も何度もおもてへ出て見る。隣近所から新聞をかりて來て、何か間違があつたんぢやあないかと探して見る。長い一日だつたが、遂々日が暮れても歸つて來ないので、しまひには警察にお願して探して貰はうかなんていひ出してね……

山路　みんな僕が惡いんです。其の場の拍子で、つい誘つちやつたところが、存外わけなく同意されちやつたので……

甚吉　そんなわけで、親子が屈託しきつてゐるところへ、こいつがしやあしやあ歸つて來やがつたんですが、きけばお前さんも大學校を卒業した方だつていふのに、どうしてつまらない眞似をしてくれたんです。（言葉次第にそまつになる）

山路　僕あ何も深くたくんでゐたわけではないんだけれど、昨日はぶりかへした暑さで、會社の窓から青い空を見て汗を拭いてると、ふいと海へ行つて見度い氣が起きて來たんです。去年友達と泳ぎに行つた房州の景色が、やけに誘惑するもんだから、畜生、誰か友達を誘つて出かけたら素敵だらうなあと考へてゐるところを、何をぼやぼやしてゐるのさつて、此の人が後から

肩を叩いたんで、そいつがきつかけになつてしまつて、房州へ泳ぎに行かうと思つてるんだつて云ふと、そいつは素敵だつていふもんだから、つい出かけてしまつたんです。

甚吉　あなたも立派な紳士なのに、どうしてそんな無考な事をなさるんです。こいつはごらんの通りねんねえで、何のわきまへもありやあしないんだ。そんなものを遠方へ引張出すなんて、どういふ積りなんだ。

山路　それが實際出來心なんで、後になつて見るといろいろ手落はあつたと思ふんだけれど、その時はあんまり思ふつぼにはまつて來たので……

甚吉　冗談ぢやありませんぜ。お前さんには娘を持つ親の心持はわかるまいが、こんな不束なものでも、我身よりも可愛いゝと思ふのが親なんだ。間違の無いやうに育てゝ、末はしつかりした人に貰つて貰はうと、それを樂みにして來たんですぜ。親といふものはね、娘をひとのおもちやにはし度ないのさ。

山路　これからは氣をつけます。

甚吉　人の娘をつれ出して、勝手な眞似をして置きながら、これから氣をつけたつて爲方が無いや。

山路　それなんですよ。僕がこちらへ伺つたのは。その點に誤解があつては愈々とし子さんに氣の毒だと思ひましてね。

甚吉　誤解だつて。何が誤解なんだ。

山路　それは無理も無いんだけれど、あなたは僕達が特別の關係を結んだやうに想つてゐるらしいが、それは誤解なんです。全く誤解なんです。

甚吉　何だつて。では、お前さんはこいつと房州へ行つて宿屋に泊つた、泊つたには泊つたが、別段その方の間違は無かつたと云ふのかね。

山路　さうなんです。それが問題になつては困ると思つて、その證明の爲について來たのです。第一、若しもそんな事があつたとしたら、のめのめ來られたわけでは無いでせう。

甚吉　當人の證明ぢやあ何にもならないや。それに、何の目的も無しに娘つこをつれて房州くんだり迄行く奴があるものか。

山路　さう云はれると僕としては一言も無いんです。けれども、とし子さんはがつちりしてゐて……

とし子　何いつてんのよ。馬鹿ね。

甚吉　默ってろ、手前は。（山路の方に）で、その目的で引張出したには引張出したが、結局何でも無かつたと云ふんだね。ふん、いゝ加減人を馬鹿にするがいゝや。若い男と女が海水浴に出かけて、ひとつ宿屋のひとつ部屋に寢とまりして、それで間違が無かつたと當人同志が云つたからつて、誰があゝさうですかと云ふもんか。

山路　ところがほんとなんです。實際僕にとつては自慢の出來る話では無いけれど、斷然ひつぱたかれちやつた。（自分で頰を打つ眞似をする）

とし子　馬鹿ねえ。

甚吉　するとなんですか。こいつはお前さんとひとつ宿屋に泊る事は泊つたが……

とし子　お父さん、くど過るわよ。

甚吉　そいつはをかしいぢやあないか。お前たつて若い男が、いつしよに遊びに行かうなんて持ちかけたら、どうせろくでもないたくらみがある位の事はわかつてゐたんだらう。

とし子　あたしたゞ泳ぎに行かないかつて云ふから行つたのよ。あたし海、好きなんだもの。

甚吉　さう云ふ馬鹿だから、ひとの口車に乘せられて、うかうかくつついて行きやあがるんだ。

とし子　口車になんか乘せられやしないわよ。どうせ男なんて、みんな同じだとはわかつてゐる

けれど、こつちさへしつかりしてゐれば、相手がどんな奴だつて平氣よ。

甚吉　馬鹿。誰もゐない所で亂暴されたらどうするんだ。

とし子　大丈夫よ。みんな意氣地なしで、女の機嫌ばかりとつてるんだから。

甚吉　何といふいひ草だ。（山路にむかつて）では、くどいやうだが、何も今迄には關係は無いといふんですね。

山路　噓はつきませんよ。

甚吉　（とし子にむかつて）お前にもきいて置くが、ほんとに間違は無かつたんだな。

とし子　お父さんまだ疑つてるの。

甚吉　（ひどく嚴粛ぶつて）それはまあ結構だつた。だがね、かういふ事といふものは、いくらお前さん達が間違ひは無いと云つても、世間が承知しませんよ。私は學問も何もない男だが、間違つた事やふしだらな事は大嫌だ。あなたたなんざあ大學校を卒業した立派な方なんだから、ものの道理はよく御承知の筈なんだが、失禮だけれど未だお若いもんだから、私共に云はせると、ちつと考へが足りないんだ。ね、考へてもごらんなさいな。じつと辛抱してゐれば、だんだん出世するからだで、どんなとこからでもお嫁さんをよりどりで貰へる人が、何も好きこのんで

私共みたいなもの丶娘にからかふ事はありませんや。第一そんな事が知れてごらんなさい、會社ではうつちやつては置きませんぜ。幸ひ大した間違は無かつたといふからい丶やうなもの丶、若し飛んだ事にでもなつてゐてごらんなさいな。この三上甚吉だつて默つてはゐませんや。よござんすか。もう二度と他人の娘に手を出すやうな事はやめて貰ひますぜ。あなたと私共の外には誰も知らない事だから、今迄の事は無い事にして、以後は一切こいつとは口をきかないと誓つておくんなさい。

山路御談義に參つてゐる。

芳枝　山路さん、大變生意氣なやうだけれど、あたしからもお願しますから、今後變な眞似はしないやうにして下さい。會社の仕事の外には一切口をきかないで下さい。あなたつて方もあんまりぢやありませんか。最初あたしに手紙を寄越したり、歸道に待つてゐたりしたくせに、今度は妹を連出したりしてさ。うちはお母さんが死んでから、お父さん一人であたし達を育て丶くれたんです。そのお父さんに丈はいやな心配をさせ度ないと思つてゐるんですから、惡い冗談はよして頂戴。

甚吉　何だつて、此の人はお前にも手紙なんか寄越した事があるのか。

芳枝　え丶、うちの近所迄あとをつけて來た事もあるんですよ。

甚吉　(嚇として)山路さん、あんまりみくびつた眞似はして貰ひ度無いねえ。うちも貧乏はしてゐるけれど、娘達には眞正直に世の中を渡らせ度いと思つてるんだ。藝者や女給と間違へられちやあ困るぜ。

山路　何もさういふわけではないんですよ。そんな藝者だとか女給だとか……

甚吉　何を云つてもお前さんみたいな人間にやあわからねえだらう。兎に角、今後は一切うちの娘とは口をきいて貰ひ度ねえんだから、その積りでゐて貰はう。さ、失禮だが歸つて貰ひませう。

山路　困つたなあ、さう云ふ風にとられては……

甚吉　器用に歸つておくんなさいよ。

山路　(しばらくもぢもぢした後で)では今晩はこれで歸りませう。いづれあらためてお詫びに伺つて、氣持を直して頂く積りですが……

甚吉　もう來なくてもよござんすよ。

山路　では失禮します。

歸らうとして靴を穿く。

とし子　（追かけて）山路さん、ごめんなさい、あんたばかり惡者にしてしまつて。

山路　いや、もともと僕が惡いんだから……

とし子　だつてあんまり御氣の毒だわ。

甚吉　おい、とし公。いゝ加減にしろ。お前にはこれから云つてきかせる事があるんだ。

とし子　お父さん、あれだけ云つてもまだ足りないの。そんなに小言ばかり聞かされるんなら、あたしこんなうち出て行つてしまふわ。

甚吉　何だと。出て行くだ。よおし、出て行け。手前みてえな根性の腐つた奴あ、俺のうちに置く事あ出來ねえんだ。こつちから追出してやるから今日限り出て行け。

とし子　出て行つてもいゝんですね。

芳枝　としちやん、どうしたのさ。そんな事いつて。

とし子　あたしつくづく考へたわ。お父さんはあたしを可愛がつてゐるのかもしれないけれど、あたしにはお父さんの氣に入るやうにはしてゐられないのよ。朝から晩迄働き通しに働いて、おいしいものも喰べられない、着たい着ものも着られない、見たいものも見られない、そんな

つとめをしてうちへ歸れば、おとなしくしろ、生意氣な口をきくな、と手も足も縛られたと同じで、正直にしてゐればいゝ酬があるときかされたつて、それが何時來るんだかあてもなし、たぶんそんなしあはせは來やあしないやうにも思はれるし、あたし辛抱のねうちがわかんないのよ。そんな事をして一生過ぎてしまふんだつたら、何の爲に生きてゐるのかわかりやあしない。(何時か泣聲になつてゐる)

芳枝　としちやん、およしよ。みつともないぢやあないか。

とし子　姉さんはそれでいゝのよ。親孝行だ、感心だとほめられて滿足してゐられるんだから。だけど、あたしは駄目さ。あたしは親孝行だなんてほめられるより、親不孝だといはれてもいゝから、出來る丈自分の思ふ通りにしてみたいの。姉さんは姉さんのいゝと思ふ通りにすればいゝんだし、あたしはあたしで、自分がいゝと思ふやり方で、一生過せばいゝと思ふわ。あたしのやうな根性の者は、お父さんの御氣に入るわけもないし、これから先も心配ばかりかけるに違ひ無いんだから、出て行つていゝなら出て行くわ。

甚吉　やかましい。てめえのやうな奴あこつちで叩き出してやる。さあ、出て行つてくれ。たつた今、出て行け。

とし子默つて出て行かうとする。

芳枝　としちやん。いけない、いけないつたら……

甚吉　おい、當人が出て行くと云つてるんだ。うつちやつとけ。

芳枝　としちやん、駄目よ、としちやん……

必死になつて引戻す。

とし子はげしく泣きながら。

とし子　出て行く。あたし、出て行く。

振切つて格子の外へ出る。

芳枝　としちやん、としちやんたら……

放さずついて出る。

山路うろうろしてゐたが、これもついて出る。

第四幕

人

三上芳枝

三上とし子

山路進一

場　面

山路の住むアパアトメントの一室。

秋の日曜日の午後。とし子西洋寝衣の姿で、ベッドに半身を起し、バナナを喰べてゐる。扉の外に聲がする。

とし子　誰。

　何かいふ。

とし子　誰さ。

　扉があいて芳枝の顔がのぞく。

とし子　あら、姉さんだつたの。(ベッドから下りて)おはいんなさい。

芳枝　構はないの。

とし子　いゝのよ。

芳枝　としちやん病氣。

とし子　いゝえ、怠けてんのよ。

芳枝　だつてそんな風してるんだもの。加減が悪いのかと思つちやつた。

とし子　いゝえ、お金が無くなつちやつて、何も買へないから、なるたけからだを動かさないやうに寢てゐるのよ。それでも、あんまりお腹が空つぽになつたから、昨夜のお殘りを喰べてたとこなの。どう、あがらない。

芳枝　たくさん。山路さんは。

とし子　ゐないの。今朝からお友達んとこに就職の事頼みに行つたのよ。それに、いくらか借りて來てくれなければ、晩の御飯も喰べられないし……

芳枝　いやあねえ。ほんとにあんた達御金に困つてるの。

とし子　えゝ、文無しよ。

芳枝　どうしてさ。山路さんのうちお金持だつていふんぢやないか。

とし子　けちでくれないのよ。それにあたしといつしよに居る事が知れちやつたもんだから、なんだかんだつて愚圖々々云つてるらしいのよ。

芳枝　それぢやあ、あんたと山路さんと御夫婦になる事いけないつて云ふの。

とし子　もちよ。親のえらんだお嫁さんでなければいけないんだつて。だけど、あたしだつて夫婦になんかならなくたつていゝのよ。

芳枝　そんな事つて無いわ。あたしだつてはじめのうちは、あんた達みたいなやり方はいけないと思つたけれど、でも斯うなつてしまつたものなら御夫婦になるより爲方が無いぢやないの。今更いけないつたつて、それぢやあとしちやんが馬鹿みちやふわ。

とし子　だつて、向ふであたしみたいなものではいけないつていふのなら爲方がないぢやないの。

芳枝　でもさ、あんたが可哀さうだわ。山路さん、なんていつてゝ。
とし子　別段何ともいつてないわ。あたし達ほんとに夫婦になつた方がいゝか、ならない方がいゝか疑問だと思つてるのよ。
芳枝　そんな事つてないわよ。かうしていつしよに住んでゐてさ。そんならどうするの。わかれちやふの。
とし子　先々の事はわからないけれど、いやになつたら別れちやふわ。お互に氣まづいおもひをしても、無理に夫婦になつてるから、世間には夫婦喧嘩が絶えないのねえ。
芳枝　としちやん、そんな事いつてゝ、末始終どうなるんだらう。あんたゞつて山路さんだつて、いつしよになる積りで斯うなつたんぢやないの。
とし子　さうねえ、あたしは夫婦になる方がしあはせなら、なつてもいゝと思つてゐたけれど、あの人なんて、そんな氣は微塵も無かつたんぢやないかしら。
芳枝　だからあたし、あゝいふ人には氣をつけなくちやあいけないつて云つたのよ。最初から眞劍ぢやあなくて、ひとをおもちやにする氣でからかふんだから……
とし子　でもねえ、あの人そんなに惡人ではないと思ふわ。むしろいゝ人よ。

芳枝　いやだあ、としちやんたら。

とし子　いゝえ、ほんとよ。はじめのうちこそいゝ加減な氣持でゐたらうと思ふけれど、段々眞劍になつて來たやうに見えるわ。それに比べればあたしの方が惡者よ。誘ひをかけたのは向ふだけれど、それに乘つて押かけて來たあたしの方は、ちやんとそろばんを彈いてゐたんだもの。うちに居たつて、お父さんに窮屈な小言を聞かされるばかりで、面白い事はなんにも無いし、これから先どうなるつていふあてはなし、いゝきつかけだから出てやらうと、あたしの方から來てしまつたんだわ。ところがいつしよになつてみたら、ちつとも面白い事なんかありやあしない。會社は馘首になつてしまふし、くにからお金は來なくなるし、此の頃ぢやあ二人とも、仕事を探して歩くばかりで、活動ひとつ見れやあしない。矢張罰があたつたのかしら。

芳枝　そんな事はじめからわかつてる筈よ。山路さんだつて眞面目につとめてゐれば、段々出世も出來る人なのに、心がけがよくないから、うちから見放されるやうな事になるんだわ。としちやんだつてさうさ。折角あたしがお願して會社に雇つて頂いたのに、三月と辛抱出來ないんだもの。皆さんに申譯ないし、あんたの妹さん山路さんと友愛結婚なんですつてねなんてからかはれると、あたしも會社をやめてしまはうかと思ふ事度々あつてよ。

とし子　すまないわねえ。あたしそんなに、姉さんに迄迷惑かけようとは思はなかつたわ。あたしはあたし、姉さんは姉さんだと思つてたんだけれど……

芳枝　世間てそんなもんぢやあないわよ。それにあんたはお父さんの事ちつとも考へてあげないのね。あたしお父さんが一番氣の毒だと思ふけれど。

とし子　あたしだつてお父さんには濟まないと思つてゝよ。

芳枝　ほんとに。

とし子　えゝ。

芳枝　そんなら何故お父さんのいやがる事ばかりするのさ。口では強い事を云つても、あんたがうちを出てしまつてから、お父さんほんとに寂しがつてゐるのよ。なんだか、めつきり年齢をとつたやうに元氣が無いわ。あたしと二人つきりでは何も變つた話もないし、顏こそ向き合せてゐるけれど、めいめい心の中ではあんたのゐた時分の事を考へてるのよ。あんたさへお父さんのいふ事をきいてゐてくれゝば、三人仲よく暮らしてゐられたのにさ。

とし子　あたしは駄目ねえ。姉さんみたいに辛抱強く、自分の境遇に安心してゐられないんだもの。姉さんは自分の希望なんか殺しても、お父さんの爲に盡さうつていふ堅い信念があるから

しあはせよ。あたしは駄目だ。

芳枝　駄目だなんてきめちまふからいけないのよ。(間)としちやん、あんた山路さんと別れる氣はないの、別れてもう一度うちに歸る氣はないの。

とし子　ほんとはね、あたし別れてしまはうかとは考へてゐるのよ。だつて、斯うしてゐて、結局どうなるのかと思ふと馬鹿々々しいのよ。だけど、あたしうちには歸らないわ。

芳枝　何故さ。お父さんだつてあんたがしあはせに暮らしてゐるなら安心するだらうけれど、さうでないと知つたらなほ更心配するばかりよ。いつたんは怒つても、親は我子を捨てる事は出來ないのよ。あたしがあやまつてあげるから、もう一度うちに歸んなさいよ。

とし子　あたしあの人と別れても、うちには歸らない。

芳枝　どうしてさ。

とし子　あたしには辛抱出來ないとわかつてるんだもの。姉さん、あんたあたしにうちへ歸れと勸めに來たの。

芳枝　いゝえ、さうぢやあないけれど。ほかに相談したい事もあつて……

とし子　相談したい事つて、なあに。

芳枝　あのねえ、お父さんがねえ、あたしに養子をとれつていふのよ。
とし子　養子。誰を。
芳枝　それがねえ、お父さんの銀行の運轉手なんだつて。
とし子　どんな人。姉さん逢つた事あるの。
芳枝　いゝえ、あたしは知らないけれど、お父さん馬鹿にほめるのよ。お酒も烟草も口にしない、今時の若い人間には珍しく身持がいゝなんて、すつかり乘氣になつてるの。月給は九十圓貰つてゐて、その外に賞與があるんだつて。あんたどう思ふ。
とし子　いきなりさう聞かれてもわからないけれど、お父さんほんとによく知つてるのかしら。
芳枝　毎日顔を合せるんださうだから、滿更知らない仲ではないでしよ。
とし子　へえ、姉さんが運轉手のおかみさんになるの。
芳枝　變でしよ。あたしも運轉手なんて、なんだか眞面目でないやうな氣もするんだけれど、でもうちみたいなところに來て、お父さんの面倒までみてくれる人なんてありはしないわ。だから、どんな人でも、來てくれゝばありがたいと思ふのが本當かもしれないわよ。
とし子　姉さんて人は何でもさういふ風に考へるのね。

芳枝　だつて、あたし達みたいなものが、どんな望を持つたからつて叶ひつこないし、第一養子に來る人なんて、そんなにしつかりした人つて無いんぢやないかしら。
とし子　そんなら養子なんかしなけりやいゝのよ。
芳枝　さうはいかないのよ。そんな事云つてたらうちが絶えちまふわ。
とし子　うちなんか絶えたつていゝぢやないか。華族さんぢやあるまいし、自慢になる家柄でもないぢやないの。
芳枝　だつて、あとゝりが無ければ、勝手にうちを出てお嫁には行かれないんだとさ。
とし子　どうして。
芳枝　さういふ法律があるんだつて。あたしつてものが三上のあととりだから、勘當されるかどうかしなければ、よその家の籍には入らないんだつて。
とし子　そんな不便なものかしら。そんな籍なんてものどうだつていゝのに。
芳枝　あんたみたいな人つてないわ。
とし子　あたしが姉さんなら勘當されたつていゝからうちを出てやるわ。
芳枝　そんな事いつて、あたしがうちを出てしまつたら、今度はとしちゃんがあとゝりで、何處

にも行かれなくなつてしまふのよ。

とし子　あたしならどうでもしてやるからいゝや。

芳枝　そんな事いふけれど、女つてものは、いくら自分がどうしようと思つても、どうにもなるもんぢやあないと思ふのよ。

とし子　どうしてさ。

芳枝　だつて、あんたゞつてお父さんやあたしを見捨てゝうちを出たくせに、ちつともいゝ事なんか無いぢやないの。朝から御飯も喰べないで寝てゐるなんてみじめ過るわ。

とし子　ひどいわ。あたし今度は失敗しちやつたのよ。だけど、うちに居たからつて、どうにもなるんぢやないんだもの。どうせどうにもならないとわかつてゐるよりは、どうにかしてやらうと思ふ丈でもいゝと思つたのよ。

芳枝　そんな事いふけれど、そのかはりにあんたはもうせんのとしちやんではなくなつちまつたわ。どうしたつて、もとのとしちやんにはかへれないんだから……

とし子　なにが。

芳枝　何がつて、さうぢやないの。いつたんあの人といつしよになつたんだもの……

とし子　疵物だつていふの。

芳枝　（答へる勇氣が無い）

とし子　あたしだつて、はじめはお父さんがあんまり頑固な事いふから、うちを出てやらうつて氣になつたので、外に行くところもなし、ふらふらつとこゝに來てしまつたんだけれど、別段いつしよにならうなんて氣は無かつたのよ。でも男つてもの、どうしてもそれぢやあ承知しないのね。

芳枝　いやなとしちやん。

とし子　でも、そんな事どうだつていゝと思ふわ。

芳枝　だつて一度さうなつたら、とりかへしがつかないぢやないの。

とし子　だからあたし疵物なのよ。だけど疵物だからつて、無いからつて、いゝとこのお孃さんならそんな事が大切かもしれないけれど、あたしたちにはどうでもいゝ事なんぢやないかしら。

芳枝　いやだ、いやだ、そんな事。あたしなんかには思ひもつかない事だわ。

とし子　そりやあ姉さんはさうでせうさ。だから、いゝお婿さんを貰つてをさまればいゝのよ。

芳枝　そんなに冷かすもんぢやあないわ。あたし眞面目にあんたに相談に來たのに。

とし子　あたしひとの事より自分の方を先に考へなくちやあならないのよ。

芳枝　隨分だわ。

山路入つて來る。

山路　おや、お客さまか。

とし子　珍客よ。

山路　（抱へてゐる紙包を卓上に置き）あゝ腹が減つた。君、何か喰べたかい。

とし子　昨夜のバナナ。（指を二本出す）

山路　僕あ何も喰やあしない。（紙包を解き）どうだい豪遊だらう。パンと燒豚をそこの市場で買つて來た。

とし子　あんたお金持つてたの。

山路　うゝむ、友達に借りて來たんだ。たつた一圓つかんだ丈で、愈々腹が減つてしまひ、途中で食物（たべもの）やの前を通る時の誘惑つたらなかつたぜ。しかし感心なものだらう、我慢して歸つて來たんだから。

自分で洋刀や皿を運んで來て、パンや肉を切る。

山路　芳枝さんにも御馳走するよ。

芳枝　あたし澤山よ。おひるを頂いてるから。

山路　だつてもう夕飯の方に近い時間ですよ。（とし子の方に）さ、喰べないか。

とし子　まだ紅茶殘つてたわね。あたしお湯沸かして來る。

臺所に去る。

山路　（パンを嚙りながら）お父さんどうしてます。

芳枝　相變らずですわ。

山路　相變らず頑固では弱るなあ。矢張僕達の事かんかんに怒つてるの。

芳枝　そりやあお父さんにして見れば、折角自分の手ひとつで育てたとしちやんが、うちを出ちまつたんですからね、面白くないのがあたりまへでしよ。

山路　だけど女の子ならどうせよそに行つてしまふんぢやないか。

芳枝　でもねえ、行くやうにして行くんならいゝんだけれど、としちやんのは違ふんですもの。

山路　形式はね。しかし、自分で行かうと思ふところへ行つたんだから爲方が無いぢやあないか。

芳枝　理窟はさうかもしれないけれど、親になつて見れば、こどもは間違の無いやうに、しあは

せにと望んでゐるんですからね。

山路、では芳枝さんも、現在としちやんがふしあはせだつていふんだね。

芳枝　ふしあはせつて事はないかも知れないけど、山路さん、あんたほんとにとしちやんを可愛がつてるの。

山路　困るなあ、この口ではい可愛がつて居りますとはいへないぢやあないか。

芳枝　でもさ、いつしよに住んでるには違ひ無いけれど、ほんとの御夫婦つていふわけでもないんでしよ。

山路　そんな事あどうでもいゝんだよ。芳枝さんだとさういふ事はやかましいだらうが、とし公は平氣さ。問題にしてゐやあしない。

芳枝　それだつていつ迄もうつちやつては置かれないでしよ。何とかきまりをつけなくては、第一子供でも生れたらどうするのよ。

山路　生まなきやあいゝさ。

芳枝　山路さん、あんたそんな無責任な事云つてゝ、ほんとにとしちやんを可愛がつてくれてるの。

山路　とし公にきいてくれたまへ。

芳枝　おくにの方でも喜んでゐないんだつていふぢやありませんか。
山路　なあんだ、とし公そんな事迄喋つちまつたのか。矢張女は女だなあ。
芳枝　誰だつていやだわ。山路さんごしやうだから、としちやんをひどいめに合しちやあいやですよ。あたし恨んでよ。
山路　誰がひどいめになんか合すものか。
芳枝　あんたつて人、その點では信用出來ないもの。
山路　何故さ。
芳枝　だつて……
山路　芳枝さんを口說いた前科があるからかい。
いきなり手を延ばして頰邊を突かうとする。
芳枝　(その手を拂つて)いやな人。
とし子紅茶を運んで來る。
とし子　何してんの、又姉さんを口說いてるの。
芳枝　うそよ。そんな事が……

とし子　駄目よ。いくら口說いたつて、姉さんはあたしみたいな馬鹿ぢやあないから。

とし子も卓を圍み、紅茶を配り、パンを喰ひ、豚を喰ふ。

とし子　あのねえ、姉さんとこにね、養子が來るんだつて。

芳枝　あら嘘よ。まだきまつたわけぢやあないのよ。

山路　へえ、ほんと。ちえつ、しあはせな奴だなあ。どこの人。

とし子　お父さんの銀行の運轉手だつて。

芳枝　としちやんたら。

山路　運轉手。そりやあいゝや。大學出の會社員よりは馘首（くび）になる心配が少ないさうだ。

芳枝　あたしもう歸る。冷かすんだもの。

とし子　まだいゝわよ。お茶でもあがらない。

芳枝　これから歸つて晩の支度をしなくちやあ。

紅茶に口をつける。

山路　おい、がつがつ喰ふなよ。みつともないぜ。

とし子　自分こそみつともないわ。鼻の頭にパンの屑がくつついてゝよ。

山路　嘘をつけ。そつちこそ口の廻が豚のあぶらでぴかぴかしてらあ。しかし、金のある時はそれ程にも思はなかつたが、やつとのおもひでありつくと、物を喰ふつて事は樂しいなあ。貧乏も惡くないぞ。

とし子　あたしは、お金のある時の方が樂しいわ。折角姉さんが來てくれたんだもの、いつしよに御飯を喰べて、活動にでも行き度いわ。

山路　ぜいたく云つてらあ、失業者のくせに。

とし子　だつてあんまりおあいそが無さ過ぎてよ。

芳枝　いゝのよ、としちやん。ぢやあ、あたし歸るわ。

山路　まあいゝぢやあないか。まだ早いよ。

とし子　とめたつて何のおもてなしも無いぢやないの。あんたにじろじろ顏を見てゐられちやあ、姉さんだつて居にくいわよ。

芳枝　では、又來るわ。さよなら。

山路　又來て下さい。今度はとし公のゐない時にね。

とし子　馬鹿。

芳枝出て行く。

山路　姉さん何しに來たんだ。養子のはなしを報告に來たのかい。

とし子　なにつて事も無いんでしよ。遊びに來たのよ。

山路　僕達の事何か云つてたんぢやないのか。

とし子　いゝえ。

芳枝又扉口から顏を出す。

芳枝　としちやん、一寸。

とし子　あら、何か忘れもの。

二人廊下に出る。

山路滿腹して口笛を吹いてゐる。

間もなくとし子戻つて來る。

山路　なんだい、ないしよ話か。

とし子　あゝ、あんたには聞かされない話さ。

山路　何の話。お父さんから何かいひつかつてゞも來たのか。

とし子　あんたと別れて歸つて來いつて。

山路　嘘だい。きうり切つて勘當だ。二度と再び俺のうちの閾はまたがせない。浮氣者め、ふしだら女。きさまのやうな奴は親でも無い、子でもない。はゝゝゝ。

とし子　よせ。みつともない。

山路　どうしたんだい。御機嫌斜ぢやあないか。

とし子　あたし泣き度いんだよ。泣き度くなつちやつた。

山路　なんだつて泣き度いんだ。よおし、泣かしてやらう。

立上つてとし子の肩に手を置く。

とし子　うるさい。

山路　どうかしたのかい。姉さんに何か云はれたんだな。

とし子　姉さんがお金くれたのよ。(手に握つた札を見せる)今、廊下に出てから。

山路　え、豪勢だなあ。五雨か。ビステキを喰はう。活動に行かう。素敵々々。

とし子苦々しげに見てゐる。

山路　ね、行かうよ。先刻云つてたぢやないか。よそで御飯を喰べて、それから活動に行き度い

つて、難有いぢやあないか。持つべきものは姉さんだなあ。
とし子　難有すぎて涙が出ちやつた。
山路　感涙つてやつか。
とし子　感涙ぢやあないわ。あたしほんとに悲觀しちやつた。
山路　悲觀なんか蹴飛ばしちまへ。銀ぶらしよう。ダンス・ホオルに行かう。
ダンスの眞似をする。
とし子　（いきなり札を山路の方へ叩きつける）あんた一人で、酒場にでも踊場にでも行つてらつしやい。あたしうちにゐるから。
山路　今日に限つてどうしたんだい。あかるくなれよ。
とし子　だつてさ、あたし勝手にうちを飛び出したんでしよ。あたし達のうちなんてそりやあ貧乏なのよ。お父さんと姉さんとあたしと三人で稼いで、これからさき少しは樂になるだらうつて、お父さんら樂みにしてゐたのに、折角つとめにありついたあたしつてものが馬鹿で、うちの助けにもなんにもならなくなつちまふし、うちが貧乏でいやだいやだと云つてたくせに、うちを飛出した今はどうなんだらう。文無しでバナナなんか嚙つてるところを姉さんに見せちや

つたんだもの。おまけに、一生貧乏暮らしで我慢しようていふ姉さんからお金を貰ふなんて恥だわ。あたし達みたいなむだづかひする人間と違つて、姉さんにとつて五圓のお金の値打がどんなに大きいか、あたしそんなお金で活動なんか見たくない。

山路　活動が見度くなければ見ないでもいゝさ。だけど、五圓の金を借りたからつて、借つぱなしにしやあしないぜ。僕だつて何時迄もこんな事はしてゐないよ。いづれ仕事が見つかつたら、倍にして返したつていゝんだ。それに、くにの方だつて、今でこそ愚圖々々云つてるが、どうせしまひには僕があとを取るんだからね。

とし子　あたしのいふのはそんな事ぢやあないのよ。親の財産をあてにしてるやうな人間には思ひも及ばない尊いお金を、なんだつてこんなふしだらな妹にくれたんだらう。きやうだいだからよ。みうちだからよ。それなのにあたしつてものは、そのきやうだいの云ふ事も、親の云ふ事もきかないで、あんたみたいな人間のとこへ來ちやつたんだもの。

山路　あんたみたいな人間はないだらう。

とし子　いゝえ、あたしあんたを責める氣なんか無いのよ。馬鹿は矢張自分だと思つてるの。あゝあ、あたしなんていやな人間なんだらう。貧乏なうちに生れた癖に、慾ばりで、見榮坊で、

考へなしで、そのくせずるい奴なのよ。はずみでうちを出たには出たんだけれど、心の中ではあんたのやうな國許のしつかりした、學校出の人なら損は無いつて氣があつたのよ。その根性がいやになつちやつた。最初のうちこそ會社をやめられても平氣でふざけてゐたけれど、こんなだらしの無い事してゐて、これからどうなるんだらう。いづれは親の財産を貰ふんだなんていやな事だわ。親の死ぬのを待つてるみたいだわ。あたしあんたつて人、みかけのふわふわしてる程惡い人だとは思はないけれど、あたし達貧乏なうちに育つたせゐか、なんだか賴りにならない氣がするのよ。ごめんなさい。でも、これほんとのあたしの心持なのよ。

山路　わかるよ。しかし僕だつて決して何時迄もこんな生活はしてゐない積りだ。

とし子　つもりはつもりでも、あてにはならないわ。

山路　さうか、そんなら君はもう僕と別れてうちに歸らうつていふんだね。

とし子　うちになんか歸らない。歸れた義理ぢやあないわ。

山路　うちには歸らない。しかしこゝにゐるのもいやになつたのか。もつといゝとこを探して行かうつていふんだね。成程僕は信賴される程の人間ではないだらう。第一僕は、人に信賴されようなんて考へた事も無い。僕はお坊ちやんなんだ。さういつちやあ失敬だけれど、君や君の姉

さんみたいに、子供の時から生活の事を考へて育つた人間では無い。君の姉さんはあゝいふ風に地味に堅く身を持して行くのが、生活上一番安全だと知つてゐる。君は君で、そんな消極的の安心よりも、もつと生活の發展といふか向上といふか、盲探しにでも探し度いと考へてゐる。しかし、僕はそんな必要に迫られてゐないんだ。戀愛にしても同じさ。君の姉さんは戀愛のれの字を口にしても身の破滅になり、明日からもつと生活に脅かされると思つてびくびくしてゐる。君は戀愛さへもひとつの足がゝりとして生活の變化を求めてゐる。それなのに、僕は戀愛なんてものは散歩と同じ位にしか考へてゐなかつた。だから僕は、君がこゝに飛込んで來た時、實際いゝ鴨だと思つたよ。しかし今はそんな氣持では無い。僕には君の露骨な生活第一主義が一寸壓迫的で參るけれど、出來る事なら僕もこゝいらで性根を入れ替て、君といつしよにしあはせをつかまうと思つてゐる。くにの方だつて、頑固な事はいふものゝ、若し僕達に子供でも出來たら、存外やかましい事は云はなくなるかもしれないよ。子供なんて、あつてもなくてもいゝやうなものだけれど、とし公が子供をうむとなると、想像する丈でも愉快ぢやあないか。

抱擁しようとする。

とし子　いやいや、子供なんかうむのいや。

山路　いやだつていやあ尚更うましてやるぞ。

接吻しようとする。

その横面をうつ。

とし子　いや、いや、あたし一人で考へ度い。一人で泣き度い。あんたはそのお金持つて何處にでも行つてらつしやい。

山路　どうしたんだい、そんなに興奮するなよ。

とし子　うるさいつたら。（ふたゝび相手の手を振拂つて）あたしは馬鹿よ、あたしは馬鹿よ。

兩手に顏を埋めて泣く。

第五幕

人

三上甚吉

芳　枝

と　し　子

山路進一

場　面

三上甚吉の住居。

日曜日の午前中。

山路がたづねて來る。

山路　今日(こんにち)は。（返事が無いので大きな聲で）今日は。

芳枝返事をしながら出て來る。島田に結つてゐる。

山路　返事をしないもんだから、誰もゐないのかと思つて大きな聲しちやつた。

芳枝　すみません。じやあじやあ水を出してゐたもんだから、聞えなかつたのよ。さ、おあがんなさいな。

山路　れこは。（親指を出して見せる）
芳枝　もう直き歸つて來るでしよ。
山路　何か僕に用事だつていふから、あわてゝやつて來たんだけれど……
芳枝　兎に角上つて頂戴。
山路　上つてもいゝんですか。
芳枝　上らなくちや話が出來ないからさ。
山路　僕はこゝの家に足ぶみしてはいけないのかと思つてた。
　　上つて坐る。
芳枝　そんな事云つてる時ぢやないのよ、山路さん。（烟草に火をつけてゐて返事をしないので）あなたに來て頂いたのは何故だか知つてる。
山路　芳枝さんの御目出度の事でだらう。今度の土曜日にお婿さん來るんだつてぢやないか。
芳枝　それがどうだつていふの。
山路　その日丈は特別にお許が出て、とし公も席末を汚すつてな事かと思つたんだ。
芳枝　誰がそんな事で朝つぱらから使を出すもんですか。

山路　まさか、僕に逢ひ度いっていふんでもないだらうし、島田に結ったところを見せようといふわけでもあるまいし……

芳枝　冗談いってる時ぢやないのよ。（間）あんた、ゆうべとしちやんうちにゐた？

山路　ゐた。それがどうした。

芳枝　嘘おつしやい。ゐやあしなかつたぢやありませんか。

山路　どうして知つてる。

芳枝　わかつてるのよ。

山路　そんならきかなきやいゝのに。

芳枝　今迄にもうちに歸つて寢ない事あつたんですか。

山路　たつた一度あつた。

芳枝　そんな時何處に泊つて來るの。

山路　つとめてるとこに泊つて來るのさ。あそこには寢泊りしてゐる女もゐるさうだから、その連中の中にころがつて寢るんだらうね。

芳枝　何故そんな事するんでせう。うちに歸ればいゝぢやありませんか。

山路　それがね、遲くなつて電車はなくなる、圓タクに乘るのも無駄だし、疲れてはゐるし、どうせあした又來るんだと思ふと、歸るのが面倒になるつていふんだ。無理も無いよ。

芳枝　さう、それぢやあゆうべもナイチンゲエルとかいふ家に泊つたんですか。

山路　さうだらう、たぶん。

芳枝　そんな呑氣（のんき）な事云つてるからいけないのよ。としちやんゆうべ警察に引張られたんですつて。

山路　警察？　どうして。

芳枝　どうしてだか詳しい事は知らないけれど、今朝早く人が來て、としちやんが悪い事してつかまつてるから、お父さんに直ぐ來いつていふのよ。どうしたんです。悪い事したつて、何をしたんですつてきいても、來ればわかるつていふ丈で、話してくれないのよ。で、お父さんはあわてゝ出て行つたから、兎に角あんたんとこに知らせた方がいゝと思つて、近所の人にお使に行つて貰つたの。だつてどうせ知れちやふ事でしよ。そんなら早い方が、餘計な心配しないですむと思つたの。

山路　とし公何したんだらう。警察につかまつたつていふのは、昨日の晝間の事かしら、それと

もゆうべの事かしら。

芳枝　ゆうべですとさ。いやだ、いやだ。としちやんどうしてあんなになつちやつたんだらう。あたし山路さんに申譯が無いわ。

山路　どうして、申譯の無いのは僕の方だよ。

芳枝　いゝえ、さうぢやあないの。あんたのいふのは、最初としちやんを誘惑したのは自分だつていふんでしよ。あたし達もさう思つて、隨分あんたを憎んだわ。だけど、考へてみると、あんたつて人がゐなくたつて、どうせとしちやんは此の家を出ちまつたらうと思ふのよ。あたしが申譯無いつていふのは、今度の事なのよ。

山路　今度の事つて？

芳枝　今度の事さ。ゆうべよそで惡い事してつかまつたつていふんですもの、どんな事したんたか大概知れてるわ。

山路　さあ、どうだかな。あれでとし公馬鹿ぢやあないからなあ。

芳枝　馬鹿ではないかもしれないけれど、悧巧でもなささうね。

山路　芳枝さんにはわからないよ。あいつが存外しつかり者だつて事は。

芳枝　あたしにはしつかり者だなんて思へないわ。しつかり者ならもうちつと親きやうだいの事も考へてくれてもいゝと思ふわ。ほんとになさけなくなつちやふなあ、又肩身の狹いおもひをしなくちやあならないんだもの。

三上甚吉とし子をつれて戻つて來る。

甚吉はひどく不機嫌で、何もいはずに上つて來る。

とし子はあがり口で愚圖々々してゐる。

芳枝　おかへんなさい。

山路　しばらく。

甚吉に挨拶するが、片方は苦りきつてゐる。

芳枝　お父さん、あたしねえ、あとで叱られるかもしれないとは思つたけれど、使を出して山路さんに來て頂いたの。だつて、どういふ事になるのかわからなかつたんですもの。でもよかつたわねえ、早く歸れて。

父親は返事をしない。自分の考をまとめるやうな樣子で烟草を吸ひはじめる。

芳枝　としちやんこつちに御出でよ。(妹の手をとらんばかりにして)ね、こんなとこにゐたつて爲

方がないぢやないの。

とし子やうやく上つて來て、姉のそばに坐る。

山路　どうしたんだい。何かへまをやつたのか。

とし子、何か答へようとして山路の顔をまともに見たが、こらへてゐた感情が一時に爆發して、泣出す。

甚吉　山路さん。あたしからひととほりお話しませう。芳枝からきいたでせうが、としが警察にとめられてるから來いといふ事で、行つてみると、ゆうべ新宿のホテルとかへ男と泊つてあげられたといふんです。（あまりの心外さに時々言葉が途切れる）なんてえ事だ。喰ふに喰へなくなつて泥棒をする、それでもまだましだ。それなのに、こいつは盜人にも乞食にも劣つた眞似をしやあがつて、このおやぢの面に泥を塗りやあがつた。私だつて、勘當したつもりでゐるにはゐたんだが、ここまで育てゝ來た娘だと思へば、どういふ風に暮らしてゐるか、ふしだらの罰があたつて困つてゐやあしないか、しあはせに暮らしてゐるかと、たまには想ひ出す事もあつたんだ。それがどうだい、おやぢのうちは貧乏で面白くねえと、自分から追ん出た奴が、何時の間にかカフエの女給になつてゐやあがつて、まだその上に、金が欲しさの淫賣だ。なんといふ

根性だらう。ねえ山路さん、あたしやああなたに對しても面目無い。これが我子だとは思へ無いんですよ。

みんな何と云つていゝかわからないで顔を見合せてゐる。

甚吉　ねえ、よく聞いておくんなさい。こいつがうちを出て行く時、なんと云つたか覺えてゐますかい。こんなうちに何時迄もゐたところで、窮屈なおもひをするばかりで一生いゝ事はありやあし無い、自分は自分で立派にやつてみせると云つた奴が、半年も立たないうちにこのざまだ。うちはごらんの通りの貧乏暮しだ。だがね、うちにさへゐてくれゝば、まさか警察へ引張られるやうな眞似はしなかつたと思ひますよ。

山路　どうも申譯ありません。

甚吉　さうあやまられるとこつちも困るんだ。そりやあお前さんにも惡いところはあつた。あたしやあ實際お前さんを恨んでゐたよ。けれどもかうなつてみると、もともとこいつの性根が腐つてゐたんで、お前さんを責めるわけにもいかないのさ。かへつてこつちがお前さんに御氣の毒で、なんといつていゝかわからない位ですよ。

山路　ですが、ほんとに現場でつかまつたのなら、かうやすやすと許してくれるわけはないでせ

う。すくなくとも拘留何日とか、罰金いくらとか云ふ事になるんぢやないんですか。

甚吉　それが運……運がいゝつてやつは無いけれど、相手の人が身分のある方(かた)ださうで、その爲にこいつ迄さげて貰へたんだ。はじめてのやうだから、今度丈は許してやるが、二度とかうした事があつたら承知しないからさう思へと、さんざん油をしぼられたあげくに、頭から怒鳴りつけられましたよ。この年になつて、さも娘を稼がせてゞもゐるやうな事をいはれてさ、いゝ恥さらしつたらありやあしない。

山路　へえ、相手が身分のある人だつていふんですか。何ていふ人なんです。

甚吉　そいつは私も知らないんだ。向ふでもいやあしないから。

いつか泣きやんでゐるとし子の方にむかつて、

山路　ほんとに君は誰かとホテルなんかに行つたのかい。

とし子　(うなづく)

山路　この前歸つて來なかつた時も何處かに泊つて來たのか。

とし子　(自信の無い首のふり方をする)

山路　それぢやあ今度がはじめてなんだね。

しと子　（うなづく）

山路　誰と行つたんだい。どうせ始終カフェに來るお客なんだらうが……

とし子返事をしない。

芳枝　山路さん、ごしやうだからそんな事きかないでね。

山路　きいてどうしようつていふんぢやあないんだ。たゞ身分のある人だなんて云はれると、好奇心も手傳つて、面を見てやり度いやうな氣がするのさ。

芳枝　およしなさいよ。そんな事知つたら、かへつて氣持が惡いぢやありませんか。

山路　そんな事は無いさ。知つたつて知らなくたつて同じだけれど、わかつてるのにかくしてゐられるのは不愉快だからなあ。

芳枝　それだけはかんにんしてやつてよ。

山路　君は誤解してるんだよ。僕は何も……

甚吉　山路さん、そりやあよしませう。きけば私も氣持が惡いし、第一お前さんもこんな根性の腐つたあまはうつちやつちまふほか爲方が無いんだから、隨分癪にはさはるたらうけれど、何もいはずにさつぱりと見捨てゝやつておくんなさいな。（とし子の方に）おい、お前も山路さん

に、すまなかつたとあやまるがいゝんだ。手前が惡いんだ。いくら泣いたつてはじまらねえや。

山路　何もあやまらせなくたつていゝんですよ。僕にも罪があるんだから。いゝえ、全く僕が惡いんです。

甚吉　何もお前さんが惡い事あないぢやないか。とつくに過ぎた事を今更いつたつて爲方が無いんだ。

山路　いゝえ、せんの事もせんの事だけれど、今度の事だつて結局僕が惡いんです。僕さへしつかりしてゐれば、こんな事は起らなかつたんだ。僕に女一人養つてゆくうでが無いからいけないんです。養つてゆかれないどころぢやあない、養つて貰つてるんだからなつてゐないんです。實際又かう不景氣では、男には勤口はありませんよ。だから、とし公がカフヱで働いてくれる氣になつたのも、つまりは僕が稼げないからなんです。勿論僕だつてとし公一人働かしといていゝとは思つてゐなかつたんだけれど……

甚吉　わかつてますよ。けれどもだね、働くのは結構だけれど、間違つた事をしでかされちやあ困るぢやありませんか。今更いつたつて爲樣がないが、私にいはせりやあ、大體カフヱになんか勤めたのがよくないんですよ。

山路　さうなんです。それも全く僕が惡いんです。カフェがどんな所だつて事は、僕の方がよく知つてゐるんですからねえ。

甚吉　お前さんが惡いつて事はありませんよ。私はカフェもバアも知らない舊弊だが、よしんばカフェがどんな所だつて、本人がしつかりしてゐれば間違は無い筈だと思ふんだ。だが、あいにくこいつは御らんの通り考への足り無い人間だから、かういふ奴には堅い、どつちかといへば窮屈位の役所にでも勤めさせるより爲樣が無いと思ふんだ。まあなんと云つてもあなたには申譯が無いんです。いづれこいつの始末をつけてから、あらためて御詫に伺ひますから、今日はこのまゝ歸つてやつておくんなさいな。

山路　始末をつけるつて？

甚吉　このおやぢが土性骨を叩き直してやるんですよ。

山路　そんならとし公はこの儘こゝの家にゐる事になるんですか。

甚吉　御承知の通り芳枝に婿が來る事になつてるんで、そのやさきに身内の者からこんな恥さらしな眞似をされちやあ、來てくれる人間に對しても申譯が無いんだが、今日にも一部始終を話して、それでもいゝといふ事なら、いづれこいつの方は何とか處置をつける事にしようと思つ

てゐるんです。ほんとに芳枝にも氣の毒だ。こんな妹があつては、つれあひに對しても肩身が狹いわけだから。

とし子　お父さん。あたしお父さんにも姉さんにも御氣の毒だから、こゝの家にはゐませんわ。

甚吉　なんだと。こゝのうちにはゐない。

とし子　えゝ、だつてあたしみたいな腐つた女がゐちやあ、外聞が惡いでしよ。恥さらしでしよ。肩身が狹いでしよ。だから、だから……

甚吉　さうだとも。外聞が惡い。肩身が狹い。だけども手前みてえな奴をつつぱなして置いたら何をしでかすかわからないから、親きやうだいの慈悲で、うちに置いてやらうと云つてるんだ。

とし子　その御慈悲はありがたいんですけれど、あたしがうちにゐると、いつ迄もお父さんや姉さんは安心してゐられないだらうし、しよつちゆう世間に對してびくびくしてゐなければならなくなりあしないかしら。それよりもあたしみたいなもの、娘でもない、妹でもないと思つて、放り出してしまつた方がいゝんぢやないでせうか。

甚吉　馬鹿な事をいふもんぢやあない。そんな生意氣な口を叩かないで、今迄の自分は惡かつた、間違つてゐましたと改心して、眞當面な人間になるやうに心懸けなければならないんだ。

とし子　でもあたしには眞當面な人間になんかなれないんですもの。
甚吉　自分からさうきめてるからいけない。一生懸命になつて心を入替て、今迄のしくじりをとりかへさなくちやあならないんだぞ。
とし子　いくら心を入替たつて疵物はきず物よ。
甚吉　ふてくされはよせ。お前だつて世の中は思ふ通りにはならないつて事はわかつたらう。たかゞ若い女の力で、いくら力んでみたところが、一本立で暮らして行かうつてのは無理なんだ。
とし子　それはわかつてゐます。それでもあたしうちにゐるよりは、自分の性にあふんでせうか、どうにでもして自分で働く方が……
甚吉　馬鹿。何をいつてやあがるんだ。自分で働く？　とんだこつた。手前どんな働きをしたんだ。恥知らず。
とし子　えゝ、どうせあたしは恥知らずです。だからお父さんみたいな正しい人といつしよには暮らせないんです。
甚吉　何を。なんだと。
芳枝　お父さん、待つて下さい。としちやん、あんたもあんまりだわ。いくらやけだといつたか

らつて、そんな口をきかなくたつていゝぢやないの。

甚吉　人が出來ない我慢をしてゐりやあいゝ氣になりやあがつて、よくも勝手な事が云へたもんだ。とんでもねえ眞似をしやあがつて、警察に迄引張られたやつが、ちつとでも恥る事か、しやあしやあしてゐやあがら。こんな奴には理窟をいつてきかせたつてわからねえ。たゝきのめしてやらなくちやあ、土根性は直らねえんだ。

芳枝　手荒な事はよして下さい。今日はとしちやん昂奮してるんですから。あとであたしがゆつくり云つてきかせますから……

甚吉　駄目だ、駄目だ。お前なんぞの云ふ事をきく奴ぢやあない。

芳枝　いゝえ、きつとわかるやうに云つてきかせます。きつとあたしが……

山路　一寸、僕のいふ事も聞いて下さい。さつきからいひそびれてゐたんです。お父さんはとし公をこの儘こゝに置いて自分が監督するといふ、とし公はとし公で、こゝにゐるのはいやだと云ふんだが、これは僕に任せて下さい。僕ははじめから、連れて歸る氣でゐたんです。

甚吉　お前さんが連れて歸る？

山路　えゝ、問題は無いぢやありませんか。最初のなりたちは今更云はない事にして、現在僕と

とし公はいつしよに住んでゐるんですからね。別段僕達が喧嘩したわけではないし、別れようなんて事も此頃ではお互に云つてゐやあしないんだし、第一僕はこゝのうちにあづかつて貰はうなんてお願した事も無いんだから。

甚吉　なんだつて、こゝのうちにあづかつて貰はうと頼んだ事は無いと云ふんですかい。そりやあないさ。ないけれどもこいつが申譯の無い眞似をしたもんだから、親として默つてはゐられない、どうせ一度は見捨た奴だけれど、そちらに迷惑をかけちやあすまないと思ふから引取らうといふんでさあね。

山路　それが間違つてるんですよ。僕は何も迷惑なんぞかけられてやあしないんだし、あなたに引取つて貰はうなんて考へた事もないし……

甚吉　だつてお前さん、現に警察へあげられたんだから……

山路　運が悪かつたんですよ。

甚吉　さうぢやあないんだ。私のいふのは、つまり亭主の面に泥を塗つたんだから、お前さんの方で默つてはゐられないわけだと思ふんですよ。

山路　僕ですか。そりやあ僕だつて、そんな事の無い方がいゝには違ひ無いけれど、爲方が無い

とも思ふんですよ。カフエなんて、誘惑が多いんだからなあ。

甚吉　いくら誘惑されたからつて、お前さんてものがあるのに、おいそれと乘る奴があるものか。

山路　ところが、その僕つてものが無力なんですからね。男でも女でも經濟力を持つてる方が強いんだから、その點では僕一言も無いんです。

甚吉　なんの事だか私どもにはわからないが、お前さんも一人前の男ぢやあないか。他所（よそ）の男とホテルへ泊つて現場（げんば）を押へられた女なんか、のめのめうちへ入れるつて事は無いでせう。そんな意氣地の無い事を云つてるから、立派に大學まで出てゐながら、仕事にもありつけないんですぜ。

山路　やられたなあ。それは全くその通りだ。

甚吉　感心してちやあいけないや。

山路　いゝえ實際さうなんですよ。僕もこんどは覺悟をし直して、一人前の人間になりますから、しばらく默つて見てゐて下さい。ねえ、芳枝さん、今日は僕達この儘歸つた方がいゝと思ふんだが、どうだらう。

芳枝　（父親に氣兼しながら）さうねえ、あんたがそれ程ひろい心持でゐて下さるんなら……

山路　（甚吉の方に）さうしませう、僕達うちに歸つてから、ゆつくり相談しますよ。これからはあなた方に心配かけないやうにしますから、ゆるしてやつて下さい。

甚吉　ゆるす、ゆるさないは私よりもお前さんの方の心にある事だから、兎や角いふ事は無いかもしれないが、私は人間が頑固に出來てるもんだから、うす汚ねえ眞似をした女を、お前さんみたいに平氣でみちやあゐられないんだよ。女も昔たあ違つたが、當節の男のする事は私共にはわからないや。

むしやくしや腹で、しきりに烟草をふかす。

山路　さ、とし公、おいとましよう。（とし子返事をしず、考へてゐる）どうしたんだい、行かうぢやあないか。え、いやなのか。

とし子　あたし考へてるのよ。どうしたらいゝかと思つて……

山路　そんな事はあとでいゝよ。兎に角いつしよに行かう。いやならいやで、あとで話をすればいゝんだからさ。

手をとつて引起す。

甚吉　とし。お前お父さんに挨拶して行かねえのか。

とし子　（立つたまゝ父親の顏を見て、感慨迫つて泣き出しさうになるが、こらへて、疊に伏して）お父さん、すみません……

山路　ではいづれまた……

再びとし子の手をとつて引起す。二人出てゆく。

（昭和五年九月五日）

短歌

ひとりの歌

小泉信三さんにささぐ

初めて拙き歌を詠みたるは
わが幼き日のことにしてみづからも
はやく既に忘れはてたり
玆には三十五年の春の頃より
手記し置きたるを集めつ
さばかりはとてはぶきたるも
数あれど　つとめて拙きが中にも
拙きをさへ　そもまた興ありとして
拙きがまゝに殘したり

明治三十五年

雨風に浪は濁りて船見えず沖の嶋山今日影かすか

夏帽子に釣をまかせて吾はまた草を敷寝の夢結びける

秋雨に小川のながれ水まして岸につなげる小舟朽ちたり

明治三十六年

しぶきして山緣なる溪川の淺瀨の波に白百合の散る

谷間より湧くか白雲山をおほひ姫百合風に香を送るなり

月細く桂の香り山にみちて妻戀ふ鹿の峰に迷へる

夕立に彌山（みせん）の高嶺雲湧きて行者の白衣霧に濡れたる

蟬の聲に朝霧はれて海しづか舟夫（かこ）が欸乃（ふなうた）水の面渡る

星ひとつ流れて落ちぬ天の川潮の香高き夕涼みかな

月清き今宵濱邊のそゞろあるき石竹かざす女神にあひぬ

松古りし高嶺ひかへて駒ゆかず名もなき花の風にちりかゝる

月宿す池の藻の花色褪せて岸にこぼるゝ白萩の花

月ふみて白毛の駒の鞍の上に櫻かざしてかへる若人

夕日あびて向日葵（ひぐるま）の下にわが好む詩集ひもとく少女子もがな

月細く波しづかなる秋の夜の松の下みち虫の聲きく

夕日さす砂原みちを白き馬に姫百合積みてかへる馬士（まご）あり

秋雨や堤の柳しぐれたる木の下ぬひて蛇の目がさゆく

蛙なきて今宵は雨となりにけり狹霧の闇に栗落つる音

風なきに神樂の囃子きこゆなり森の彼方の鎭守の祭り

そのかみの強兵どもが夢のあと今宵すぐれば芒騷げる

月高くしどろみだれし青芒露のきざはし鈴虫のなく

むれ遊ぶ羊を呼ぶと秋の暮森のこかげに柴笛を吹く

雨の日の客足絶えしパノラマの暗き戸口に花ちりかゝる

古寺の夕日をあびし山門に白鳩舞へり餌をあさるべく

明治三十七年

殘月や銀杏の梢霜白く百舌なく朝のさむくもあるかな

句にうみて筆なげうちて寢ころべば花ちる軒に春雨の降る

君病むと見て夢さめぬ霜のあしたひまもる風のさむくもある哉

里川に馬洗ふ老の聲さびて入日さびしく蘆の花散る

京の春朧月夜に舞姫が鼓しらぶる軒に花ちる

香にほこりし御庭の牡丹葉になりて今日は孔雀の姿も見えぬ

江の嶋も狹霧に消えて行き暮れぬ片瀨につゞくみち雨にして

大佛も花に冷えたる春の夜の由井ヶ濱邊の夜寒身にしむ

月見花咲きみだれたるうす月夜たをやめ露にうすものにして

燈火も見えず旅路にゆきくれて枯野小一里秋の雨降る

いそのかみ古き神代の戀語り畝火香具山みゝなし霞む

ものゝふが軍見山の月の夜の磯に碎くる白浪をきく

柳煙る雨の湖朝霧に小舟は見えず櫓の音ひくき

畫筆捨て劒とる君さきくあれ死するはやすく死してかひなし

桐一葉落ちて今年も暮れにけり男の子十八爲すこともなく

明治三十八年

霞立つ年の初の高山に登りて初日見まく欲する

たき捨てし篝火消えて春雨に櫻吹きまく夜嵐の風

佛壇のともし火ゆれて白桃のほろほろちりぬ風もあらぬに

萬葉集は古りて破れぬ古今集は虫はみにけり新詩興ある

藪かげの椿花咲き花散りて山鳩こなく春雨の降る

右左山吹咲ける垣根みち春日長閑に深張傘（ふかばり）の人

春かすむ宇治の茶園の茶摘うた茶つみめ若くうたの聲よき

池水の濁りに染まぬ花はちす清きは君が心なるらん

山門の丹ぬりはげたる増上寺若木のさくら花盛りなり

ちるさくら春雨降る日先生の御墓に詣で涙せきあへず

花の中の花のさかりに生ひし君人の中なる人となるらし

春は花の百花千花花は咲けど花のなかなる花さくら花

鷺鳥遊ぶ眞晝の池はしづかにて水に綾織る小雨降るなり

櫻ちりさくら散る雨の夕暮のおばしまさむし行春の風

焼鳥の肉の香高き夕ぐれの厨の窓をうつ霰かな

年もよく月よく日よく時もよく生ひしみどり子はなやぎてこそ(美知子に)

靈廟に燕巣くひて今日もまた小雨降るなり櫻ちるなり

夕には虎やほゆらんから山の行春の風さむくもあるらん

旅の繪師と過世相似し物かたり別るゝ山に袖濡らしける

世にそむき人にそむきて春雨の春逝く窓に物思ふかな

君とありし昔偲べば今更に涙に袖の濡れにけるかな

過ぎし日を偲べばかなし行春も花もろともに散りし君はも

春ゆくや床の小琴のそらなりに牡丹くづるゝ夕暮の雨

雌雄の孔雀ながきしだり尾はたやかに鳥屋の南の草いきれかな

天がける鳳の羽音に雲落ちて潮はひゞく大和田の原

我戀は鹽なれ衣宵々にほすよしもなく濡れにぬれつゝ

足曳の山の尾上の花すゝきみだれみだるゝわがおもひかな

年毎に花咲く見れば君をおもひ花ちる見れば君をしぞおもふ

さらばとて別れてかへる亂橋(みだればし)みだれ心にしばしたゝずむ

夕されば潮風凪ぎて宵月の相模海原鷗むれとぶ

みいくさの戰へば勝つ今日生ひて國を守りの男の子ともなれ(一藏に)

南瓜(たうなす)の花さかりなるうら畑に庭鳥なきて晝しづかなり

水車めぐりのどけき一村は笹のともずれ水のせゝらぎ

剱ヶ峰みねにたゞよふ白雲はふもとの里の小雨なりけり
うすがすむ富士の裾野は朝めよし露に香れるいたどりの花
登りゆく行者の鈴の音も消えて雨さへまじる山風の聲
桑摘みに出でゆく頃を家に居て病む身につらき蠶飼うたかな
うす靄に花の香ゆれて松原は露のこぼるゝ音しづかなり
戀あらず歌成らぬ夜のわびしらに月の渚をさまよひぬ吾
うたひめがかなづる琵琶の音も絶えて軒端にさむき秋の雨ふる
山姫が朝のけはひのとき髮に百合の香ちりて夏も去にけん

うらぶればわびぬれば身は秋風の誘ふがまゝに去なんとぞ思ふ

夕暮の罌粟の花ちる里川にやせしわが影うつしても見つ

月今宵白き芙蓉の露ちりて水の輪描く興そゞろなり

君が家の方にゆけとて流しつる花は流れず春も暮れゆく

詩の國に迷ひ入るよと夢さめて瓶の白百合そと散るを見る

廻廊を美童十人燭とりて吾をみちびく花吹雪かな

明治三十九年

大利根や白帆流れて欸乃に霞ゆれつゝあけはなれたれ
日あたりの雪解の小庭南天のみのこぼるゝに雀よりくる
櫻ちるうまやの軒に小雨して暮れ行く春を神馬老いたり
うらゝかに山鳥の尾のしだり尾のなびくと見たり花園の風
朝戸出や太古に似たる青沼の白きはちすの露ちるを見る
歌成らぬもだえと云ひて面はゆげやさ手にあげし君が亂れ髮
海ぞひの小家に秋を旅寢して今日もみづゑの筆とり暮らす
さまよひし羊の群はうす靄の遠になりつゝ野はくれてゆく

牡蠣がらの曝れたる磯にたゝずめば春の潮は遠鳴り寄する

世にそむき人にそむくも吾を知る一人の君に足る世とぞ思ふ

うたゝ寝の夢より覺むる水仙や雫のいふべを瓶に咲きたる

衣ずれはわたどの通ふ上臈か雪降る風の戸にふるゝ宵

浮雲は水に流れて湖の藻に寄る魚にさゞ波の立つ

額ふせて牡丹の蕊の百の中の雌蕊に春のいぶきをぞ知る

繪だくみのうしろ姿は秋風に吹かれて青き草にかくるゝ

なき人のこよなうめでし三尺の鉢の李の花咲きにけり

あつき頬を杉生の森の葉さやぎに吹かせて眠る石の獅子かな

殿の灯の百のゆらぎや春の夜の神も訪ひこぬ古雛かな

遠方の筑波の雪のたそがれを花野の風に君と別るゝ

棟上の木やりきゝつゝ永き日を夢にも入らでまろび寝るかな

陽炎はいらかにもえて大江戸の八百八ちまたに柳芽をふく

故郷の築地あれたりうらぶれてかへれば門の枯柳ちる

家を出でゝみ寺へつゞく菜の花の一里の風に思ひ出多き

やがて散るものとは知れど牡丹花の一日の榮をねたしとぞ思ふ

追羽子の群にそむきて門松の高きに姫はふとかくれたり

うつら病む籠の鶯日當の緣にゐねむる紅梅の花

なにとなく人なつかしむうたひめが紅とく雨の花に降る宵

うつし世の戀しかなしみわびしさもこもりて鳴るよ雨の夕鐘

天上の千人(ちたり)の姫が髮洗ふ油もまじる春の雨かな

紅白の鉢の接木の梅の花白きが散りし春の風かな

牡丹のその欄にもたるゝうたゝねに春の夢みる人うつくしき

春雨に傘して植ゑし姉と吾姉はゐまさず花さきにけり

閨の戸を狐の叩く湯の宿の枕ものうき春の宵かな

君は雲の吾は水ゆく方へとて秋の峠に別れける人

うつくしき妻なる人に口寄せてざれ言〔原〕ふを憎み初めしか

紫陽花は失せにし人がありし世の病む日に似たり小雨ふる宵

朝の日に聖の御代の花と見し梅白かりき風さむかりき

わびしくもたまごいだきて鶯の巣にうづくまる春の雨かな

若き心に戀の御神はたはむれて鶯放つ春のあけぼの

旅役者村のはづれの菜の花に駕を下り立つ春の風かな

わが成りし歌の八千巻中のその歌のひとつに君笑まば足る

なにとなく花の色香をあやぶみぬふとまた神を心疑ふ

不如歸をよみて泣きたる友は今伊香保にありて一人泣くとふ

ゆく秋を長きいたつきいゑよとて寺の仁王に紙つぶて打つ

山の朝椿落ちたりみやしろは白蛇をまつる石の鳥居に

頂きの一本松は幾年を石にもよらで風に吹かれけり

火花して山に石きる音にまじりきゞすのなくをわぶや湯宿に

何と云ふ病む名は知らず妹の琴にもふれで春を病み臥す

谷川を恐氣に渡る夕暮の橋のなかばに靄せまり來る

春や昔はなやぎてこしはれ衣を子に着せてみる母のおもひで

春風や猪の皮干す獵人の崖の小家の桃咲きにけり

鑿(のみ)の冴えに石の地藏を刻むとて火花ちらしつ軒の霰に

騷がれの娘とつぎてさびれたる湯宿に宿る春の宵かな

春の宵を祖母(おほば)の伽に草艸紙よみて更けたり山の湯の宿

水の音かすかに聞きつ海底をゆくと思ひぬ山霧の中

深山路や斧の音して雜木の林につらき如月の風

金色の垂尾をひきて上ぬるむ池の金魚は藻を放れたれ

釣鐘に夕風吹けばそらなりぬ雨に宿かる青葉の御寺

白蓮の巻葉の露に筆染めてあかぬ別れの文は書かまし

鋸の目こぼる楠の木の香り木場の小雨は音立てずして

地に雲の空には草の影見えて我世の秋は又廻り來ぬ

五六人汀はなるゝ舟の上に鼓うつ夜のほとゝぎすかな

大木に花無き森の木の香り斧の響や啄木鳥の聲

武藏野は菜の花咲きぬ草萌えて富士を遠見るうす霞かな

一人住む山の菱沼白鳥はいつしか雌雄となりにけるかな

悲しきは花の行衛か朝風は枕に殘る夢をこそ吹け

目白とるとちさき弟は囮籠富士見る花の木の間にかけぬ

山住みの苦吟をわぶる夕雨に山の鴉も濡れかへり來る

長城に匈奴寄すると篝して炎萬里や木枯の風

紫に紅に黄に金色に孔雀に似たり秋の夕雲

鶯の啼かぬをめづる君ときゝ口吻（くちと）をはづる少女となりぬ

酒しみの干せし舞衣酒の香に牡丹ちるらん風香るなり

泣澤女涙涸れたる六月の若葉さやぎの想ひと云ふや

雨七日七夜呂蚊帳に迷ひたる螢は月に皆飛びにけり

蛇の瞳炎の野に生ひて苺の花は白く咲きけり

秋の風柱（ち）置かぬ琴の緒の切れを數へて瘦すと云ふは誰が子ぞ

和田津海の波かとも見ゆれ夏草の月の露吹く山の夕風

別れては橋を渡りてゆく人の踵を白く朝の日に見る

若かりしいとけなかりし友染の振袖思ふ春の雨かな

故郷は海の上なる紫の嶋より夏の風の吹き來る

武蔵野の野分の朝の雑草の中の小草の花咲く見れば

我心枯野に燃ゆる萱草の燃えつくす日を待てる淋しさ

水草の白き汀を髪濡らし小走る君を想ふ雨かな

地の上に動かず笑まず悲しか〔原〕ず怒らぬ石は吾うらやまず

花園はあや羽つくらふとりの如みだれて咲ける孔雀草かな

みいくさの船よそほひすのぼる日に鯨潮ふく春の日の灘

この一時去年と今年の別れ路に憂かりける日を戀ひもするかな

明治四十年

湯上りは櫻にかゝる春雨の如くも君は美しきかた

花畑は三色菫の紫の上に降りける春の雪かな

海豚鰐魚鮫ども住める春の水寄せては濡らず〔原〕磯の貝から

竹原に鶯なきて連翹の芽ぐむを見れば病おこたる

武藏野は空遠白し草の名も得わかぬ迄に春は來にけり

雄たけぶや魔女の長髮なびく如立てる銀杏は風に吹かれて

のち悔の心起りつ病葉の生ひ立つさまに日經ぬ月經ぬ

日は永し待てば待たるゝ日はながし櫻芽ぐむと日記する日かな

あひ見し日よべの夢さへ語り得ぬ心弱さに戀もするかな

山燒けし黑きが上に雨かゝり日あたる裾に雉子なく日かな

そは暗き胸に開ける紅の培はねども生ひし花なり

春の風電車待つ間の紫の小傘の上に柳しづるゝ

古への戀の心の凍りしか又燃え初めし椿の花か

千人に力を與へ萬人の力を奪ふ君にやはあらぬ

うぶ毛吹く人の世の風つらからず君は生れぬ櫻の中に(眞に)

穢土逃れ至樂の境にあこがれの蟻の迷へる白き牡丹花

舟の子よ橋の上ゆく白雲の夕べは遠方に母のまつらん

粕壁の藤の紫君が髪綠といづれ春長かりし

夏は來ぬ東海道は宿々のはた織る家のかきつばた咲く

白藤は神代ながらに垂氷して山の夜あけぬ初夏の風

波の上なびける君が黒髪に小魚群れ來ようつくしき藻と

工場の爐の火は盡くるのらのらの煙なびきぬ夕ぐれの空

我心冷ゆる時なし君知るやつめたき石も火花すと云ふ

たゝかひに走るさまして雲はとぶ何處と云はず我心飛ぶ

山の霧笛の音きゝし古への旅を想ひて涙流るゝ

一座みな月夜見草の月のぼり花咲く時と君を見るらん

なほまどふわれと心の法廷に幾度問へど美しき罪

君と立ちし岡の銀杏はうらがれの秋の一日をわれ病みて來し

花簪くしげ鏡臺置きみだる中にくづ折れ泣きたまふ君

片耳は君が聲聞く片耳はあざみ笑ひをきかんとはする

祭の日萬人通る中にわがくちつくる人あるやあらずや

秋の日はゆるさず人のひめ心覗ふとしも梢もれ來る

黒髪の解かば七尺癖つかぬ少女にあればまばゆきものか

まだ人の知らぬ神祕の靜けさを探れと立てる山の姿よ

我領はちいさく暗きひとつ家悲しみは住むよろこびは住む

燃えて燃えて炎盡れば土に入るもみぢ散る日をなほ心燃ゆ

はなやかに笑ひ玉へる黒髪の障子にゆるゝ春なりしかな

若き血は古りしを戀ひてなぐさまずあらたなるべき吾を欲する

ふと過ぎし日のなつかしく高らかに呼べども行きて歸らざる哉

明治四十一年

誰がいけし瓶の古びに水仙の枯色わびし客去りし室

船の帆も荒べる浪もそのまゝに氷こゞれと吹く海のこがらし

美しき夢も枕も黒髪も永久に祕めよと夜の雪降る

われとわが牢獄(ひとや)をつくる三千の道とく人を屠らん劍

花散るも人興ずるもよそめして七人舞ひぬ清水の廓

牛車並めても行かめ杉木立奈良は明治と世へだてるらし

百の中の十人(とたり)の中の稀人の黒髪に似る奈良の大杉

洗ひ髪丈にあまるが雫すと奈良の神代の杉に降る雨

矢つがへて射るにも似たりしれ人を追ふと春日の神立の雨

古市はたわれの唄に神知らず酔へるあるじは源内太夫

春の雨寺に隣れる古家に鶯きゝし日も思ふかな

山遠き櫻消えゆく海の帆のほのにおぼゆる人の戀しき

白き手の折々來りおとなへばくろがねの戸もあけなんとしぬ

時鳥山越ゆる時大らかに相模の海はあけにけるかな

今遠く彼方の闇に走せ去りし車上の人の御眼忘れず

八月の石高みちを痩馬の馭者は酒思ひ強く鞭ふる

目伸(まのし)してまちぬかゞやく梅雨ばれの空の如くも美しき子を(惠美子に)

相模の海午後より來る南風に浪立つ中を子らは泳ぎぬ

岡越えて鷺鳥群れ來る池のふち小草萌ゆれば吾もまろびぬ

物なべて浮べてあまる大海も心破れぬ今ぞ龍卷く

草の上騷がずなりし醉人にこほろぎなきぬ丘越えの路

弱き眼に見せじとおほふ手をとりて舞ひ玉ふかな憎きおん方

山の野も青一色の高原を越えて都に來し秋の風

夏の夜の柳のかげに蛇皮線ををかしときける女づれかな

みちの果てみな海見ゆる南の強き風吹く父母の家

いつしかに人を見る眼に愛憎の濃き色うかぶ少女となりぬ

まろ柱夕日かゞやく半面にまざまざ殘る古ききずかな

目くるめくとばかり見しは昨日なりそがひ姿をよしと今日見る

明治四十二年

むしろ吾死をば欲する暗黒のながき齡をむさぼらんより

若きより血汐凍れる美しき人は奴隷となりにけるかな

日毎々々變ることなき生活を三十日經ぬれば旅をしぞ思ふ

目ざめたる狹き室より蒼き空靑き野原に吾を放たん

僞りのあまきさゞめき逃れては波の響をよろこびてきく

乘合は惡臭みてる船室に干魚など嚙みてうたふ男ら

夏の日の動物園の檻に寝る獅子の倦怠の二時三時

百鳥の羽もて飾り百鳥の聲を囀る少女子の群

着かざりて慈善の市に集れる女の衣をまづ脱がしめん

人妻は動物園にとらはれの孔雀が羽をほこるに似たり

我友は皆歌捨て銀行のおもき扉の中に走せ入る

あかき灯もだみ聲高き人顏も我胸の中にありと曇れる

戀せざる少女が胸は廣き家に家具なきさまにさも似たりけり

隣家（となりや）は人氣少なくなまめける鳴物聞ゆ雨降る日など

消息す小雨降れゝばまろび居り庭のあやめの花三つ咲く

蜩のなきやむ暮は市中(まちなか)の物の遠音もなつかしきかな

蜩や永き日中(ひなか)の倦怠(けたい)より人もけものも呼びさまされぬ

西日照るトタンの屋根に今さめし夢の面わはたちまちに消ゆ

和田津海に浮かば小魚も寄りぬべき丈なる髪をきるとなげきぬ

戸出れば常に右するしかするはわがはき物のあしき性(さが)故

十二月肺病院の窓あかり凍れる中に死にゝける人(五首松永千城をおもひて)

韓(から)の風身にしむと云ふ消息のつぎに病を得つとをこせし

わか如くさかしま事を好むまでながらへずして若く逝きける

吾のみを友とし共に歌などをよみならひし子今は世になし

夕されば涙流れて果てなしと親もたぬ子は灯にそむきける

傳へきく千里ゆくてふ駿足を駄馬が追ひけんかけへだちけり

たそがれの動物園に百獸の百鳥の聲聞くが悲しき

朝顔のしぼめる垣に鷄の抜毛など舞ふ初秋の風

しばし待つ高岡にして幼き日蜻蛉つりにしうたうかび來ぬ

鴛鴦の瀬戸の水さし水あるをさむしと思ふ秋は來にけり

同じ程多くの人をなつかしく思ひゐし日を忘れかねつも

その言葉蓄音機にも入れたまへ後の男のいましめのため

いつしかに恐れずなりぬ酒店に入るとひとしく死ぬてふことを

秋來れば殊更風のめにしむとしばしばわき見し玉ひしかな

今日も亦一人歌舞伎の木戸に入るこの寂しさを誰か知るべき

ふたつみつ袂に殘る銅錢の擦るるより吹く秋の風かな

囚はれて三年經にけり囚人は泣かずなげかず母となりぬる

たそがれの草の中ゆく八月のうしろ姿を吹く秋の風

かへりこぬ鳩の瞳の夜となればかゞやく大空のもと
なつかしき昔の日記に名を殘す少女の群の行衞知らずも
南の燕の國にうたへるや少女の群は訪ひ來ずなりぬ
かりそめのたはむれ事にあらねどもあまりやすきは物たらぬ哉
その後の十年の吾は世の常の女の如く泣くと云ひ來し
牛に女(め)を替へしはむかし黃金に金剛石(ダイヤモンド)に今は女を買ふ
木犀の甘き愁ひをきく如く涙もよほす君が消息
ながしめもくれず嶋田の髷の根の高く聳えてわが前を過ぐ

ひもすがら廻る車を口に持つ古女房に叱られて居り

塗板に書きつゝ消すにひとしかり少し戀しと思ひし少女ら

髪梳けば秋の風吹く木曾越のうしろさむげの旅人の見ゆ

此日頃強き渇きをおぼえつゝ平沙を歩む吾は日も夜も

ぬけ出でて林に高き大木の百舌の高音の山彦ぞする

ひもすがら叫びつゞけし觀覽車動かずなりし空の寂しさ

着ふくれし女を見るが悲しかり柳並木に霜月來れば

玉乘の樂隊の音もくれぬれば獸の叫ぶ淺草のうら

しみじみとはかなかりける半生を思ひぞ出る酒のさめ際

初秋の夕べの雲のうつくしさ見んと露臺に誘なはれけり

夏の日は白きものゝみ身につくる君が露臺の白百合の花

大海の波のしぶきの眞白なる鷗となりて飛ぶ春のこし

明治四十三年

雪積みし一月二十六日の夜と後の世の史は記すらん(紀に)

たゞ二人一間の中に殘されしその時共に死ぬべかりけり

この家の老孃（オールドミス）の眼の色にをじてや君は來まさずなりぬ

壹岐の海の波がうみけんとめ度なく涙流せし松永干城

少年の春を惜しめと何處より督促狀を誰の持て來し

みづからを嘲り笑ふ面白さ知り初めしよりふてくされけむ

初夏の港の潮のかゞやきを思ひぞ出る御瞳の色

「亂れ髮」「戀衣」など愛誦の十七の頃病み初めし君

うら藪の狐の聲が我父の怒る聲より身にしみにけり

ゆく春の物の哀れを知り顏の沈丁花より暮れ初めにけり

ホノルヽの少女の群がもてはやす大和男子と云ふは君かや（齋藤衙平に五首）

フランクのおぢと云へるも桃太郎花咲翁の物語すや

たまたまはその長椅子にブロンドの長髪の子も訪ひ來るや君

ますらをの君が書齋の眩つきのその紅の艶なるもよし

隣り住むヤング夫婦が戀語りしめやかに聞く夜もありぬべし

山薫る四月の風がもて來しや櫻咲く日にうぶ聲を聞く（義彦に）

默しなれしピアノの黒き塗ぶたの埃につきし指のあとかな

四辻の行路病者の人だかり春の柳のかげなればよし

歌舞伎座のだんだら染の引幕のまんなかのめも君を見つむる

山裾の林にのぼるうす煙なつかし春の雲となるべき

和蘭陀の幽霊船に招かれて船出せしより行衛知らずも

ふりそゝぐ如露の水に一列の鉢の花草濡るゝうれしさ

両國の橋のたもとの早船の牡丹の客の中にまじりつ

深川の川筋に聞く泥舟の女の唄もものあはれなれ

しめやかに泣ける氣配しうらやぶのあけびの花に春の別るゝ

いたづらにコスモスの莖のびし上の遲れ花こそ心もとなし

夏の日の花壇の花の息づきに稍汗ばめるおしろいの顔

春は來ぬ我十八の若き血の狂ひ覺えし頃もなつかし

忘れゐし去年の鉢の花草のやはらかき芽のいつか吹きけむ

この吾も××も共に死ぬるてふ彗星も見ず今日も暮れしか

絶間なく鬱金櫻の散る頃のつめたき土に寢てありなまし

莚若のヘレネ・マロオワが短銃を手にせし時の蒼白の顔

うちやみし太鼓櫓の川風に吹かれて立つもいとあはれなれ

相撲場の大圓蓋の頂の旗を濡らして降る小雨かな

九州の船着町に黒船の汽笛を聞きて泣きたまふとか

若松の鐵工場の溶鑛爐火の消えぬれば空に星見ゆ

泣きぬれし頬にひたとつくもみあげの殊に長きも艶なりしかな

うらがなし露臺の鉢の花草のちりつくす日の夕雲の色

降り暮らし吸取紙もこぼれたるインキを吸ふをよろこばぬ頃

長雨の夜も日もわかず泣き濡れし薔薇の新芽の今朝の日の色

往來の唐人笛のたそがれて行衞も知らずなれば灯ともる

ほの青き桐の反射の漂へる皿の牛乳（ミルク）をのめる犬の子

貰はれし子犬はあはれ身に廣き小屋の寢藁に夜もすがら泣く

鎌倉のその一夏の思ひ出の涙流れて海となるべき

たぐひなくなまめかしけれ淡紅いろの君が水着の波に濡るれば

歌麿がニンフの繪をや描きけん海より濡れて出で丶來し人

はろばろと安南國をはなれつ丶海月の來る初秋の潮

花につく毛虫を見たる驚きを常にかもする眉のひそめき

行春のたんぽ丶の穗のやはらかさおもふ柔毛の血の透ける耳

血に染める獸の死屍を眼前にともす煙草の殺生の味

尺八が旅愁を誘ふはかなさを病牀錄の歌に得しかな

トマトウにハムをよそへし酢の物の齒にしむ秋となりにけらしな

七年の秋もくるれば君が彼のうす唇も冷えまさるらん

長雨に二階に寢たる眼七のあくびのみ聞く左二郎の家（八笑人より七首）

あけぬれど茶番疲れの左二郎の家の雨戸はたゞ春日さす

左二郎の軒の春雨阿波太郎があわたゞしくも濡れて走せ入る

暫はものゝはかなく夕鐘を友を送りて左二郎も聞く

眼七が酒屋にはしる下駄の音晝の大路にしばし聞ゆる

一趣向あらまほしさに集りし八笑人は醉ひしれて寢る

圖武六が叔父の小言にふて寢して來ぬ日はさびし七人の顏

夕されば濱の埋地の月見草逢引の子の袖ふれて咲く

兩國の橋の桁にもひたひたの出水を渡る白きパラソル

雲龍の墨繪ゆゝしき夏帶のうしろ姿に氣をくれのして

いとかすかに砂の崩るゝ音をきき防風の莖を嚙める寂しさ

海岸の防風林に秋の風早くも吹けば東京戀し

更に又あはれ深きは初秋の避暑地の町を葬列の練る

八月の末の汽笛はかなしけれ濱の女皇（クイン）も泣きてゆくらん

やるせなや更けてさまよふ大川の岸邊を流す夜の三味線

氣の抜けし薄荷パイプの吸口の琥珀を嚙みて君を思へる

夕されば頭に雪の降積る百本杭も潮にかくるゝ

たまたまは君が新居を驚かす醉しれ人もをかしかるらん（兄に）

決鬪の後の悲哀の身震ひに酒はあふれぬさかづきのふち

月光か靑き林檎か齒にしむとうす脣が吾にさゝやく

ヴェスビオの山の麓の旅やかたそれはしらねど旅の寂しさ

頂きの千古の雪の山風にともし消なんとしつゝ夜ふけぬ

玻璃戸（ガラス）のそとは噴火のてりかへし山頂の空星も燒くべく

鶯の夜の囀りか隣室の女のうたか涙誘ふは

湯上りの脣あまり熱ければ露臺の百合にくちつけぞする

湯あたりの疲れはうれし誓は君がつれなき事も忘るゝ

決鬪にゆく日の心ときめきとひとしき程の身震ひをする

夜はゆく詐言（いつはりごと）の發覺を恐れて逃ぐる人のさまして

我叔父も醉へば必ず若き日の戀を語りて他事に及ばず

麦わらの管をはなれし石鹸玉それにも秋は青く光れる

里住みの指にしみしぎんなんの匂ひも消えて冬来るらし

流れたる月を汲まんと盃を持ちて川原に出づる舞姫

赤蜻蛉むらがり飛びぬ武蔵野の野分の朝の水たまりより

疲れたるモデル女の曲線のうすき光もあはれなるかな

パラソルの上這ふ虫の背の光り秋の夕日の金のゆらぎに

しらじらと月の光りす廢園の灰となりたる戀の文がら

家々の格子に白き顔見ゆる出水の町をつばくらめ飛ぶ

三笠山その山裾の刀鍛冶庖丁鍛冶となりにけらしな

盃の數かさなればさんざめく辛氣瘦すとなげきける子も

高笑ひそれもさびしくこだましぬ苦痛の谷のどん底にして＊

七夜の同じ惡夢を門のあたり見る心地して文を開かず＊

港街夜の三味線に誘はれし旅の愁も君にかゝはる＊

園丁の高き鋏の音につれて木の間を出づる霜月の顏

あさましき女歌舞伎の樂屋をば見し悲しみに別れけるかな＊

故里の母もたまたま目に見えぬほしいまゝなる酒の愁に＊

歸らんと酒場の卓にわが投げし錢の響に冬は來りぬ*

四辻の時計の針の止まりたる秋の御空に浮ぶ白雲

醉どれの顔をまたぎて馳せ出でし酒屋の門(かど)に春の雪降る*

鐘撞けばそのひゞきより秋の蚊の一むれ湧きてしばし光れる*

南の海の渚の貝がらか風に吹かれて物も思はず

しき石に吾を立たせて大佛の背より顔を出したる君

冬の日の白けてうつる杯のつめたき酒は爐にや注がん

酒のめば見果てし夢のなきがらと思へる父も何か歌へる*

秋に咲く白き櫻のたまたまは昨日の吾にあこがるゝかな

高らかにうたへどはやす人もなきさびしさに又君を思へる

ひとり身の物思ひこそはかなけれ廢園の花白くちる如*

うつくしき物のすべてがもてあそぶ心を塔に閉ぢし我父*

東京のうつりかはりのはげしさか昨日(きそ)を忘れし君がまなざし*

因はれし吾のひとやの壁の歌涙に濡れてうすく光れる

いつはりの歌をうたはんいつはりを我がしばらくの慰めとして

「待て」と云ふ聲のうしろにひそみたる文は落ち來ぬ高き窓より

すゝき野の枯色に身を横たへぬ青かりし日の思ひ出のため

「夜の宿」をかしや浮世哲學を説く盗人も醉ひて泣き出づ

兵隊のひとかたまりがかくれたる森より夜のせまる麓野

落書のいたづら事も面白しかく思ひつゝ君に文書く

ほとゝぎすとばりかゝげし明眸の夜半のうるみに星うつる時

すりつくる犬の背につくいぬじらみ逢引の野も秋たけにけん

しばらくは食事の後のものうさに君を忘れて長椅子に寝る

夜涼みの銀座通りをうら町にすこしまがればさむき川風

新しき物語好く少年をのゝしる父もさびしかる秋

叱られて泣寝入りたる夜の夢か涙に浮ぶ吾の思ひ出

我父が我運命かかく思ひ草木の如く默したる吾

きりぎしの下(もと)にある身か絶間なき父の怒りに心おびゆる*

わが父の怒りを避くる心より漂泊を好く身とはなりけん*

我父の前にぬかづく人の眼も白く笑ひぬ吾を見る時*

父の子はぬすむ人の如まもられてわれを歌ふもゆるされぬかな*

うらめしき父と思へど盃を持つ手も老いてふるふあはれさ

破りたる牢獄の戸のしまる音うしろにきゝて心驅け出づ

黑船の來る驚きをふたゝびす掟逃れし我を見る時＊

荒らかに假面を捨てし氣やすさもまた悲しみとなりにけるかな＊

玉乘のをさなき子らもなげくらん追はるゝ鞭のしばしやむ時＊

たはれ女のほしいまゝなるかなしみを慕ふ心に塔を逃れぬ＊

冬は來ぬ酒に狂ひし暴君の怒りの後のかなしみの如＊

曙のちかづく如く剃りあとの靑き横頰に酒の色する＊

よき家の子も囚はれをかなしみぬはづかにほこる孔雀にも似て

わが父の物語りめく一生が得たる吾とはかなしからずや

囚はれし身はあまたゝび青空に飛ばんとしてはきずつきしかな

わが投げし麥酒の瓶の落ちてゆく霧の底なる白きせゝらぎ*

うつけつゝこれは墓より出でゝ來し人か師走の風に追はるゝ*

黄ばみつゝ都の柳大逆の噂にちりて暮れてゆく年

歌

○

あさましき女歌舞伎の樂屋をば見し悲しみに別れけるかな

高笑ひそれもさびしく反響(こだま)しぬ苦痛の谷のどん底にして

七夜(なぬかよさ)のおなじ惡夢をまのあたり見る心地して文を開かず

秋に咲く寒き櫻のたまたまは昨日の我にあこがるるかた

酒のめば見はてし夢のなきがらと思へる父も何か歌へる

ふるさとの母もたまたま目に見えぬほしいまゝなる酒の愁に

冬の日の白けてうつる杯のつめたき酒は爐にや注がん

酔どれの顔をまたぎて馳せ出でし酒屋の門(かど)に春の雪降る

運命の神のちからもしばらくは我に及ばず酔ひしれし時

歸らんと酒場の卓にわが投げし錢の音にも冬は來りぬ

鐘撞けばそのひびきより秋の蚊の一むれ湧きてしばし光れる

ひとり身の物おもひこそはかなけれ廢園の花しろく散る如

港街(みなとまち)夜(よ)の三味線にさそはれし旅の愁も君にかかはる

――「スバル」明治四十三年十二月號

○

きりぎしの下にある身か絶間なき父の忿怒に心おびゆる

わが父の忿怒を避くる心より漂泊を好く身とはなりけん

わが父の前にぬかづく人の眼も白く笑ひぬわれを見るとき

父の子はぬすびとのごとまもられてわれを歌ふもゆるされぬかな

おのが子を思ふがままに虐げし満足をもて父の飲む酒

いたましき酒亂の父の後より墓に行くべきわれの運命

うらめしき父と思へど盃を持つ手も老いてふるふあはれさ
破りたる牢獄の戸のしまる音うしろにききて心驅け出づ
黑船の來るおどろきをふたたびす掟逃れし我を見る時
荒らかに假面を捨てし氣やすさもまたかなしみとなりにけるかな
玉乘のをさなき子等もなげくらん追はるる鞭のしばしやむ時
たはれ女のほしいままなる哀しみを慕ふ心に塔を逃れぬ
冬は來ぬ酒に狂ひし暴君の怒りの後のかなしみの如
曙のちかづく如く剃りあとの青き頰べたに酒の色する

うつくしき夢のやぶれにきずつきし「吾」を抱きて父にかしづく

わが投げし麦酒の瓶(びん)の落ちてゆく霧の底なる白きせせらぎ

うつけつつこれは墓より山でて來(こ)し人か師走の風に追はるる

——「スバル」明治四十四年一月號

○

黒門(くろもん)の柱に倚りて町の子を羨みし日につづく今日かな

別當の久作の子が亞米利加の野に來たまへとおこせつる文

うなだれて我の歸るを嘲るや門長屋より光るしろき眼

美くしき物のすべてが弄ぶ心を塔に閉ぢしわが父

囚はれしわれの獄(ひとや)の壁の歌なみだに濡れて薄く光れる

火の如き脣もまた時に見ゆわれの獄の壁のまぼろし

わが父が我の二十(はたち)に築きたる塔をめぐりてもゆる凶(まが)の火

木像にたましひ入りて踊りたる後(のち)の靜默(しじま)の如きさびしさ

金曜の斷食の日のとこしへに續く我とは知らざりしかな

父により處刑(しおき)するとて入れられし土藏のなかに二十四となる

わが窓を覗ふ顔にぴすとるをさし向けながら涙拭ひぬ

人まへの我の笑ひの底に泣く冬の虫よりかすかなる聲

まろびつつその痒(かゆ)き背を地にすれる手なしの如く生ける若人(わかうど)

刑場(しおきば)の朝のひかりを待ちながらふるへて歌ふわれの心か

石垣を落つる水より速かに君が窓をば闇に下りきぬ

東京のうつりかはりのはげしさか昨日を忘れし君がまなざし

——「スバル」明治四十四年一月號

○

うつくしき夢の破片をもてあそぶ涙の中に父の笑へる

物音が夢を破るに似て父はわがあこがれにいましめをおく

叱られて母の乳房にかくれたる古きおそれをなほ父に抱く

世の常のかなしみのみを知る母の深なさけこそ泣かまほしけれ

母の乳をわが弟に奪はれしそのかなしみをまた君に知る

大海のまなかに身をば投ぐるごとわがすがりたる母のふところ

勘當の心やすさを願ふ日も母を忘れずそれにつまづく

限りなくいとけなき日の母戀し遠き國にて旅寢するごと

わが父のうつろの姿大なる廢屋のごと眼の前に立つ

わが父にぬかづく人の板敷に坐るさむさを思ひ知るわれ

父により老木の枝の雪なだれ襟に入るごといましめをきく

かなしさは極地をさしてゆく船の行方のごときわかき日の夢

しくしくと海嘯の後の砂原にわく水のごと涙かわかず

ひとしきり入日に燃えし白壁に夜のしむごと心冷えゆく

おもひではうつろの胸をいろどりぬ忘れし鉢に花のさくごと
うつくしき霧の底よりあらはるる東京のごと傷つきしかな
冬の來て蕾のままに土となる蒔き遲れたる花草の種
十二人處刑せられし翌朝も塔上の子は青空を見る
囚はれて朝な夕なに倚る壁のつめたさをもて白梅の咲く
いやはてにうこん櫻の散る頃のつめたき土にひとり寢なまし

——「スバル」明治四十四年三月號

○

わが父の馬車の入る時出づる時墓の如くも開かるゝ門（もん）

こしかたは門（かど）の柱に背をよせて下町（したまち）の灯にあくがれしかな

二十（はたち）にて大事（だいじ）を成すと相（さう）しつる辻うらなひはいづち行きけん

かなしくも檻（をり）に生れし獅子の兒はものうき事を常と思へる

とらはれて終日（ひねもす）ねむる獅子の檻狐と猫の檻（をり）に並びぬ

かしこげに眞似をよくする猿のむれ獅子の拙きわざを嘲る

人眞似のさびしき事を思ひ知る猿もおのれをかへりみる時

猶殘るうつくしかりし母の顏今日のわが身を歎く心に

春暮れてさくらの花の散るたびに美くしかりし母も衰ふ

美くしきものを罪する掟をばひとり逃れし春の花かな

行く春のかなしみ我の身を嚙みぬ白き櫻の土となる時

切厓を蜥蜴はしりてくづれたる砂のあとより山櫻ちる

三階のてすりに物を思ふ子も赤丹(あかに)の空に染まる夕まぐれ

ほろほろと尺八の音も靑き夜の泉に泛ぶ初夏の月

いやはてに春のもてこし悲しみの泉に溺る若き心は

あまりにも己が命をたふとしと思ふ身なれば父に背きぬ

いつの間かわが父母にとられたる手を放たれぬ知らぬ國にて

舊きものすべて尊しこの國の歴史も父が褪せし帽子も

奪はれし古きおきてに代るべき掟を知らず子等の父母

運命も少しおどろく忽ちに我のすべてが酒となる時

いつはりの歌をうたはんわが父もわが師も共に我を褒むれば

――「スバル」明治四十四年五月號

母

愚かなる吾を又なくめで給ふ母にそむきて君に走りぬ
放ちつる心疲れて歸り來ぬしみ〴〵母にすがらんとして
母戀し夢を見る夜も見ざる夜も涙の中に浮ぶ思ひ出
母の乳のうすきかなしみ其後もまつはりて居ぬ吾の心に
なほ殘る美しかりし母の顔今日の吾身をなげく心に
幾度か逃るとすれど母戀し我が愚かさを世の笑ふ時

傷口に薬のしみる心地して涙を誘ふ母のくり言

幾年か母の長髮落ちながらわがかなしみにふれてなげきぬ

青ざめぬ美しかりし母の顏その子の胸に涙する時

身をまける鎖はいよよ絕ちがたし一日〳〵に母の老ゆれば

衰へし母にすがりて泣き得ざる吾を歎きぬ國亡ぶ如

はてもなき海こぐ船にのる人のなげきをぞする母に別れて

うなだれて父の書齋を逃れ來し我身を投ぐる母のふところ

いつしかに我父母にとられたる手を放たれぬ知らぬ國にて

母に背を見せてものうと横たはるよこしま者もなげく夕暮

父母はまづ聲あげて泣く事を恥と教ふる國のならはし

もののふの道は母をもはた子をも御國のために刺してくやまず〔外三首〕

朝

武藏野をひろ〴〵わたる朝風の心地してきく寶生九郎

乞食らが祠の緣にをろがめる朝日のさせる城の白壁

音たてて朝の別れに君が踏む道の霜より白菊の咲く

大海のとどろと鳴れば砂山を草より落てはしる朝露

逃れゆくみそか男の足音かしめやかに降る春の朝雨

桐の葉を風のゆすれば牛乳もうすら靑みぬ初夏の朝

朝の日に白(しら)けて立てる銀行の重き扉に枯柳ちる

買出(かひだし)のどよみの去れば河端(ばた)の魚の鱗に朝の日の照る

恐ろしき惡夢さめたる曉の水盤に咲く睡蓮の花

冬草に細々と啼く虫の音をたててあしたに消ゆるともしび

なつかしきたより持て來る人の如小草の上を渡る朝風

大空の星よりもなほ消えやすきあしたの夢に破れたる吾

香水のあでにしみたる長髪に珈琲の香も匂ふ朝かな

はたごやの縁の鏡に青ざめし寝起の顔のうつるわびしさ

くれてゆく一日を惜む夕暮の愁ひありとも思はれぬ朝

——「明治四十四年五月詠草」

牡丹

音もなく牡丹の花のちりぬれば輕きほこりを立つる庭土

あでなりし若かりし日の母戀し牡丹の花の咲く日となれば

うつくしき夢とこしへに消ゆるやと吾ら悲しむ牡丹散る時

紫の煙草の煙たゆたひぬ紅茶の後の卓の牡丹に

急ち(たちま)に牡丹の花の崩るるとみだれて飛べる夏の白雲

大寺の御堂の燒る火あかりにあはれにあでに夜の牡丹散る

隅田川四目がへりの舟の上の白き牡丹にうつるともしび

ゆく春のもののはかなきなげきより白き牡丹は死を思ふらん

數知れず羽蟻の群れてとびたちし白き牡丹に夕立の降る

いれずみの牡丹の花に紅さすとさかづきを取る叔父なりし哉
忍びよりちさき妹は大輪の牡丹の花にくちつけて行く

夕

ほそ〴〵と出水のあとの石原の夕日の中にきり〴〵す啼く
夕暮はあだに過ぎたる一日をくやむならひとなりにけるかな
長廊下ふむ足音が岩あなにしたたる水と響く夕ぐれ
夕暮は下駄のけりたる石くれの音もさびしき山の手の町

くれゆけば暑き日中（ひなか）の魂のよみがへる如町に灯ともる

夕暮は常にかなしむ露草の晝は日向にしぼめる如く

夕されば遠居る人の戀しけれかなしき吾のならはしとして

遠方にいかづち聞え野の末のつりがね草もふるふ夕ぐれ

燒跡の灰をあされる人の群斜めに濡らし夕立の降る

黑潮に乘りて海月（くらげ）の來る時夕燒雲に響く潮の音

隅田川夕べ〳〵はたはれめのかなしき歌をのせて流るる

夕ぐれは都戀しと繰返へす姉のたよりの哀れなるかな

――「明治四十四年六月詠草」

一　堀口大學を送る

美くしき友は醜き國を捨て行方も知らずならんとすらん

美くしき少年の乘る大船が青海原にひかる七月

よき歌の美くしき頰の少年を奪ひし船の消ゆる海原

美くしき友をぬすみて黑船はよろこびの笛吹きて走りぬ

この國の少女は悲し美くしきこの歌びとをよそに奪はる

その朝は薄荷酒よりも靑かりき大學の船海に消えにき

猶きこゆかの黒船に奪はれしかの少年の桃色の歌

帆ばしらの蔭に歌へる大學と籠の鸚哥の目に泛ぶかな

少女をば又おもふらん大海がくれなゐの頰に飛沫(しぶき)する時

逃れ行く夜(よる)にまぎれて消ゆる夢君と歌ひて大船に立つ

亡びゆく國のはてかと涙おつ黒船の來て友を奪へば

かたくなのこの肖三を泣かせつる優しき歌も今遠ざかる

美くしき夢の俄かに消ゆるごと我等かなしむ君の去る時

二　暗き壁にもたれて

長廊下ふむ足音を岩穴にしたたる水と晝も聞く家

母方の（わが戒めの例にひく）やくざの叔父のなつかしきかな

うまれつき少し足らざる弟と我と傷つく父のほまれを

わが踏みし路をたどれる弟の生正直(なましやうぢき)もあはれなるかな

つめたくも蛞蝓(なめくぢ)あとのうす白き七月(ふづき)の壁に倚ると思ひぬ

闇に馴れあかるき街に出づる時わが頰を打ちて人の馳せ去る

くらやみに青き螢のひかる如どん底に居て心よろこぶ

大いなる謎より生れその謎の底へとたどる石のきざはし

馬丁（べつたう）の久作の子は知らざらん辛（から）き涙をわが嘗むること

わが父が斷えず塗る壁その上に我がいたましき歌を書く壁

葡萄酒の酸（す）えしにひとしわが父の怒りの後の母のくり言

横町の闇に曲りてあざけりを避けよと時にそそのかす聲

傷つきし心の底の黒き血をあらそひて舐むけだものの舌

目を潰せ目を潰せとぞ叫びつつ人の死にゆく夕陽の中（なか）

調馬師の鞭のひかれば黒鹿毛の苦しき汗の青草に散る
さかしまに落ちて眞白き鋪石に死ねと誘ふたそがれの窓
おそろしきはやり病を浮べきぬ海のかこめる國は危し
けだものもひれ伏すと云ふ大君に弓ひく者は子も屠るべし
たはけたる死を美くしと讃へたる門左衛門の墓をあばかん
悲しきを可笑しと言ひて年を經ぬわれ自らに飽きはてしより
箱船にノアの逃れし洪水を今のうつつに欲りするは誰
心ざま悪しきはすべて首を斬れ一つ一つに歌をうたはん

父の家を走り出づるや忽ちに路傍の石につまづきし吾〔外七首〕

——「スバル」明治四十四年七月號

青葉

高嶺より青葉ながらに吹下す風の障子に騷ぐ溫泉宿(ゆのやど)

底知らぬ水に落ちゆく心地しぬ青葉の中の石のきざはし

夕立の見る間に過ぎし庭の面の暗き青葉に映るともしび

針金をひけば答ふる對岸の青葉の家の渡守かな

水百里いかだに下る兩岸の青葉の中に啼くほとゝぎす

暗きまで茂りうつして晝顏の青める花もいと哀れなれ

しみ〴〵とくちなしの花匂ひ初む青葉の雨の晴れし夕ぐれ〔外一首〕

蚊

大らかに蚊遣りの末に月出でぬ見よと隣家に人の呼ぶ聲

しみ〴〵と遠き都を思はしむはたごの蚊帳の色の褪せしも

いつしかに街の影もくれゆけば廂の空に蚊ばしらの立つ

冷々と月の光のさしくれば水の底とも思はるゝ蚊帳

たまく〳〵は蚊の來て血など吸へかしとものうき夏は思はるゝかな

夕されば ひさしに近き蚊柱の中にかゞやく宵の明星

はたごやの窓の障子に秋の蚊のすがりてあるも哀れなるかな

――「明治四十四年七月詠草」

蟬

風吹けば落葉の如くかさこそと砂地をはしる蟬のぬけから

梢より蜩金の鈴振れば草より落ちて光る朝つゆ

口輕にうたふことをば許されぬ啞蟬の身のはかなさをしる

初秋の赤き入日のいた〱し風にもゆらぐ蟬のうす羽に

扇

天の川白く流るゝ秋來れば扇の風に心いたみぬ

水に咲く花より艶にたそがれの窓に扇の白くゆらめく

舞ひはてゝ扇を置きし舞姫のおしろいの頰にゆらぐともし火

舟端に扇拍子をとりてゐぬ川岸を流せる夜の三味線

山を切る鶴はしの手の休む時扇となりぬ白き手ぬぐひ

いと靜かに緞帳下りて平土間に白き扇のはた／＼と鳴る

橋の上水より風の吹き來れば少し波うつ小扇のふさ

——「明治四十四年八月詠草」

佐藤春夫に與ふ

古びたる皮肉をひとり喜べる佐藤春夫は早く死ぬらん

くろがねの地獄の門を破りきて佐藤春夫と我と飲む酒

酒のみて眉のあひだの竪の皺いきどほるとき君は美くし

たちまちに暴風の如くいきどほり水の如くに泣く男かな

酔ひ倒れ床を叩けりこの國に身のおきどころ無しと云ふ如

酒の座に春夫の泣くを我は見ず巖より落つる涙をば見る

友のため暴風の日をば殊更に擇びて酒を高樓に擧ぐ

笑ふとき君はいたまし怒るとき君のすべてのおもしろきかな

春夫はも都大路をいきどほり素足に靴を引きずりて行く

いと弱き又いと強きすべてをば常に憎める君のまなざし

二たびはおなじ言葉を勿言ひそと無口の友の云ひしひと言

力ある短き言葉こころよく人を罵るみじかき言葉

はなめがね士耳其の帽子身に著くる物もみづから嗤はんがため

ことさらに前掛をして大學に通ふ春夫の哀れなるかな

名をさして目のあたりをも憚らず我を罵るなつかしき友

この國とその父母のあやまちか春夫を生みて現し世に置く

×

かなしくも醉がたき身にさかづきをあまた持て來る人のたはぶれ

さめやすき我の哀しさ禁斷の果實（このみ）も酸（す）しと舌のつぶやく

きちがひの如く憤（いか）れば冷やかになだむる人の勝ち誇る顏

わけもなく物あらそひを好むかな少時（しばし）は強き我を見んため

暴風（ばうふう）の後（あと）のこゝろにひたひたと潮（うしほ）を寄する悔のかなしみ

路ばたの女の目さへするどくも胸の傷手に刄（やいば）もて觸る

うまれつき醜き我を憎むこと物のあはれと共に今知る

さかしげに我を知れりと人ぞ言ふ智慧の板をば弄ぶらん

わが爲に歌をうたはん逸早く葬る歌を高くうたはん

人あまた遊女をさへも引き去りし海嘯の後に靑みたる月

とこしへに物忌の日のつづきたる暗き家より生れきぬわれ〔外一首〕

――「スバル」明治四十四年九月號

送別

かしましき小人の嶋にうみはてゝかしこき人はとつ國にゆく

かなしくもかしこき人はいちはやく祖國を捨て遊ばんとする

大人は生れし國を狭しとし住みうしとして異國にゆく

すぐれたる人のすべてがこの國を捨つる日遂に來しと思はる

再びはこの嶋國に歸ることなからんとさへ思はるゝかな

此の國にあきはてにけん一人の母を殘して領三はゆく

日本の少女はかなしたぐひなきこの若人をよそに奪はる

船去りし波止場はかなし波の來てしぶきする時海となるらん

領三のやさしき歌も聞ゆらん帆綱まく子の怒罵の絶間に
甲板になほ歌ふらん岸を打つ波より君が聲の聞ゆる
いたづらに昨日をほこる國民に新しき日を持てかへるらん

月

しめやかに海の彼方の月の出のうるむ秋ともなりにけるかな
月光のつめたき頬のをくれ毛を六月の夜の青き風吹く
なにげなく浮世語りをしてかへる川原の上の夏の夜の月

砂濱に月の描ける我影も渚の波に濡れにけるかな

五六人渚の人は聲あげぬ海の彼方に月のぼる時

河豚(ふぐ)を煮る鍋をかこめる四五人に月の碎くる大和田の原

暴風の凪ぎたるあとの月の夜の破船の浮ぶ青き海づら

わが投げし匕首(ひしゅ)の光りて谷底の草に落ちゆく月光の中

何處より何處へはしる幌馬車か月夜の森に入りにけるかな

廢園の返り花こそはかなけれ曉に咲き月光に散る

音たてて霜ふむたびにうたがひぬ枯木の上の月を踏むやと〔外一首〕

——「明治四十四年九月詠草」

○

山のうへ草の平(たひら)に身を投げぬ海嘯(つなみ)を逃れ來(こ)しと如くに

二尺ほど山の絕間に鎌倉の靑き海見ゆそれも果敢なし

ああ君を忘るるほどの束の間を靑空として山に霧ふる

山を切るだいなまいとを心地よく聞く時ばかり病おこたる

わが投げし匕首(ひしゆ)も光りて谷底の草に落ちゆく月あかりかな*

手をはなれ谷間に落ちし短銃も秋のしづくに濡れて臥すらん

壁の上に歌を書かまし蛇（くちなは）に吸はせし血もて歌を書かまし

源氏山いなむらが崎鎌倉の山の幾つに君と逢ひけん

伯爵の世つぎの男ながながと君におくりし文のつたなさ

なにげなく浮世がたりをして歸る川原の上の天の川かな

何を讀み何を語らんかなしくも我は我より語る外なし

戀ふと云ふただひと言をわが父に否と云ふより難んずるかな

物言はぬ口のほとりのうすき鬚やや濃くなりて初秋はきぬ

この國を詛ふ如くにはやされぬ醜き我が君をおもへば

死なん日は君が言葉のうしろよりふとも來るやと君を恐るる

蛇をしかはな怖ぢそ身を嚙まば我口をもて毒を吸はまし

大海嘯來よと叫びぬ地の上に住むこと既に飽きしならねど

火に焚かれ共に死なまし大海嘯もしくは來よと心叫べる

君去りし渚に伏しぬ大空もおほうなばらも我に冷たし

指さきを茨に刺してしばらくは肉の痛みに君を忘るる

傷口に沁みて痛めと云ふ如く苦き顔して杯を擧ぐ

淺かりし戀のたくみを悔ゆる身に秋風ふきぬ海の底より
あけやすき夏の夢こそはかなけれ心疲れて日光を浴ぶ
一人(いちにん)を女のなかに擇ぶこと我が悲しみと知らざりしかな
君がため魂ぬけしわが肩にとんぼのとまる濱の夕ぐれ
砂山の砂のゆらぎて落つるとき海の底より秋の立つらし
砂のうへかんなの花のただれつつ散り盡す日に來る夕立

——「スバル」明治四十四年十月號

山の手の子の歌

お屋敷の子の解きがたき悲しみを知らぬ輩が吾に指さす

うら藪の狐の聲が我父の怒る聲より身にしみにけり

崖下のうら屋の三味に誘はれし吾のつまづく門前の石

吾を見るちまたの人の白き眼につめたき壁もはなれがたかり

猛火より追はれし人が燒跡の灰をあさるに似たる思ひ出

小間使靜は追はれて繼母の家に歸りぬ涙流して

放ちつる心疲れて歸り來ぬしみじみ母にすがらんとして

傷口に藥のしみる心地して涙を誘ふ母のくり言

戰の噂を嫌ひ落窪の物語をばちさきより好く

父母がまづ聲あげて泣くことを恥と教ふる國のならはし

あたらしき世の少年の悲しみを積みて港に來る黑船

黑船や積みて去にけんなつかしき古きやさしき女心を

千松の忠義を強ふる先生に氣づかはれたる日の廻り來ぬ

――「藻の花」明治四十四年十月十日號

雁

かりがねはやがてや來らん秋の風虫齒のうろにしみて痛めば

かりがねの來る日となれば大空の雲より浮ぶあはきなげかひ

砂山にまろびてあれば海の上の秋のみ空を渡るかりがね

姉はなほ田舍に泣くや海を越え南へ渡るかりがねを見て

ふたゝびはかりがねをきく秋來ぬと異國の兄に消息をする

さびしげに一つおくれしかりがねも南へゆきぬ秋ぎりの中

船の上にかりがねをきゝ領三は秋の夜頃を一人か寝らん

萩

白妙のきぬに書かまし萩の花すりし素ぎぬに歌は書かまし

初秋の萩をこぼるゝ白露に君や濡れけん吾や濡れけん

萩の花散る日はさびし秋雨に吾の心も濡れにけらしな〔外一首〕

――「明治四十四年十月詠草」

紅葉

若き日の終らんとするはかなさかもみぢの色もあせて霜ふる

故郷

いたつらに故郷遠み旅寢する山邊海邊に初冬は來ぬ

故郷の孟宗藪のからすうり赤らむ冬となりにけらしな

七年の秋もくるれば古里の庭の櫻も枯れやしにけん

すさびたる心も母のふところを故郷として泣き濡るゝかた

——「明治四十四年十一月詠草」——

年暮

醉どれの額をまたぎて戶を出でぬ師走の夜半の大雪の中

並柳ちりつくしたる歳晚の街の霧にともしびの唉く

盜人の走る氣配すみぞれ降る大つごもりの夜半のちまたに

つたなかりし戀のたくみを悔る身にくれゆく年も惜しと思はず〔外一首〕

霜

戸にちかき筧の水も凍る夜は我が枕にも霜や降るらし

君が家の門の扉になげうちしダリアの花も霜やおくらん

萱草の原に細々啼く虫のはねにも白く霜やおくらん

霜降りてさむき夜すがらわが泣けば若かりし日の母も泣きけん

——「明治四十四年十二月詠草」

海邊山邊

心なほ君をはなれず秋ふけて海邊山邊に旅寢すれども

この朝も君と踏みにし海際の潮の香りの袖に殘れる

しめやかに海の彼方の月の出のうるむ秋ともなりにけるかな

初秋の芒を傳ふ白露に君や濡れけんわれやぬれけん

山の夜の枕に近き水の聲聞えざりせば戀て死なまし

ひさごやのおかみの聲の高笑ひ二階に聞ゆ雨の湯の宿

山に來て靜江もなにかなげくらんてすりに迫る霧にぬれつゝ

いつしかに衰へて行く心より祖國をさへも恨みそめけん

もの喰ひて腹ふくるれば足れる子の不思議なるべき我が思ふ事

球投げに心なぐさむ君人につまはしきさる物を思へば

――「紅塔」明治四十五年一月號

紙つぶて

かにかくに事あるはよし我胸にダイナマイトをいだくならねど

心地よく大斧をもてきり倒すみを結ぶ樹も結ばざる樹も

日の本の神は日永の戲れにこぞりて石を人となすらん

日輪の裔もちまたの子にまじりその身に來るこころみを受く

怒りては獸のむれになげうちぬ貴き珠もあつき心も

みづからを賴めばいつかはらからも隣の人も仇となるらん

我死ぬ日親はらからのほかに來て泣くべき人を數へけるかな

昔わが求むるものを奪ひつるその黒き手の上に身を置く

はばからず人を罵るこころよさ知らぬ男となららんとすらん

すさびたる心も母のふところを故郷として泣き濡るるかな

うなだれてひとり歩めばうしろより街の子らは石つぶてする

半酔の口夙き吾をたしなむる寂しき吾のうつるさかづき*

足ることを知らぬ心になげきつつこの島國に死なんとすらん

この島のいとつつましきなりはひを旅の心に見てありなまし

青ざめし心のくまに光しぬ晝は日となり夜は月となり

飲み干せし酒のぬくみの消えてゆく盃に來て秋は泣くらん*

那須の原散りおくれたる萩まじり霰降る日となりにけるかな

川添のポプラに來る初冬が霰を投げぬわがうしろより

屋根うらのけむり出しより忍び入る霧に濡れつつこほろぎの啼く

脣を嚙めばつめたき血の出る師走は悔をともなひて來ぬ

――「三田文學」明治四十五年一月號

松上鶴

頂きの松より白き一むらの鶴とびたちぬ朝の日の中

すさまじきふゞきの中の松が枝に夜もすがらなくひな鶴の聲

鶴一羽雪より白き一線を御空にひきて下りし松原

山松に霧の中なる月あかりほのかにさせば白き田づむら

酒

酔さめのさびしさをふと思ふ時わが脣ににがきさかづき

二日三日酒をのがれて紅燈のちまたの子らも來たる山の湯（外三首）

――「明治四十五年一月詠草」

鶯

おちかたの火事のあかりに下りたちし如月の夜の庭の鶯

我姉は六人(むたり)の母となりし日のかろき疲れに鶯をきく

雪

旅人は野のたゞ中に聲あげぬ雪より出でて雪に日の入る

根を洗ふ波にゆらるゝ枯蘆にうす雪かゝる利根の川口

摘草

陽炎も若菜つむ子も濡れにけんひとしきり降る野路の春雨

——「明治四十五年二月詠草」

霞

しみじみと都の戀し山かくす霞の奥に灯のともる頃

——「明治四十五年三月詠草」

かへらぬこと

——故田中憲君のために——

二人なきわが友だちを奪はれし今年は悲し花は咲くとも

七日程はげしき熱のたゞ中に母を呼びつゝ君は死にゝき

父母にさきだつ事の悲しさをいまはにもなほかこちたりけん

乳母の手を母よととりし臨終の苦しかりしときくもかなしき

しら〴〵と白む朝は青空の日の照る町をね[原一]ぞやうらみし

ほそぼそと病牀録にしるされぬ灯ともし頃は涙流ると

つめたきは毒ものまんとむつかりぬ脣の火の燃えさかるとき

検溫器灯にすかす時水銀のうつりて君が眼やくもりけん

大寺の香の烟のまつはれるまろき柱のかげに泣く人

音たてゝ白きひつぎに降りかゝるみぞれにぬれてさむしわが頬も

鍬の刃の濡れて光るもいた／＼し雨の日君を土に埋むる

ほろ／＼とくづれて落つる濡れつちにやがてひつぎもうづみはてけり

萎れつゝ机の上に香をたてぬ君死にし日に咲きし水仙

かまくらの少女の群は今もなほ君來ん夏を知らで待つらん

君つねにほゝゑむをやゝあきたらず思ひし吾を憎み初めてき

吹きやみて靜に笛を放つ時汝が脣はあかゝりしかな

月の夜はいとゞはかなしわがために笛吹きし子は土にうもれぬ

君を燒く烟なびきて蒼かりし月はまどかになりにしものを

むらさきに君が墓場の垣の草もゆる頃ともなりにけらしな

やけといふその文がらを今日もなほとり出て見るをとがめ給ふな

――「三田文學」明治四十五年四月號

夢

わがための一人の人にあはん日を夢幻の家にはぐくむ

卒業

教場の柱に残るそのかみのわが落書も消えずあれかし

いたづらの處刑(しおき)をされし先生も卒業の日は別れかたかり

——「明治四十五年四月詠草」

○

死を賭けし戀も暦のきれはしもおなじたぐひとなりにけるかな

故もなく悲しき事になれにたるその後の日のわが心かな

鬓白き父の頼めるわれなりと心弱くも思ひ初めてき

やごとなき父の子なりとはらからがいましめあふを憎むならねど

後の世になほもおのれを殘さんと思へる父にわれはうらぎる

もの書けばちさき妹も家の名を汚せる兄と思ふわりなさ

あぢきなく事を好まぬ心より生れし家に起き伏しをする
父母にあらがふ事をわが道と時に思ふもはかなかりけれ
思ふ事つきなばもののさむからんつれなき人も死なであれかし
みぞれ降りすべてちまたのともしびを消す夜もあれや君を盗まん
ねむごろに人ぞ戀しきかりそめのいさかひしたる酔もさむれば
わがための一人の人にあはん日をこの幻の家にはぐくむ
たくみなるそら言うれしこの日頃君をあざむき吾をあざむく
いはれなく虐げられぬわが眉のすこしふときを師は憎くむらん

新しき酒を盛るべき皮ぶくろいとけなき日にわが破りけん

こざかしき祖先の猿のいたづらを今日のわれらも二なくよろこぶ

國のため捨てん命の糧盜む貧しき子等を誰が罪する

いとちさきいばらのとげのうづく時紅き血潮のをどる指さき

隣國の王のしりぞく噂よりすこし遲れて春は來しかな

海の上の風に光れるいかのぼり落ちなばやがて魚とならん

かりそめのなやみも君にかかはると心の底にもののつぶやく（五首病中作）

火の如し水の如かり我肉ははげしき熱にさいなまれつつ

うは言に汝が名を呼ぶを恐れつつねむり藥のさかづきをとる
この五日みとりの母も知らぬ名を熱病む人は呼びつづけけん
このまゝに死なばかたきに奪はれん人を思ひてあつき涙す

——「スバル」明治四十五年六月號

ひとりの歌

亞米利加へ行く日ちかづく父母の老の目立ちて悲しきかなや
海越えん來世を賴む日の本の少女心は哀れと思へど

友達に捨てられし時父母の家に在るこそやすけかりけれ

みそか事忍び歩きを興がれるわれとは母に知らせずもがな

さかしげにわれをいさむる妹に拳をあげし後の寂しさ

折にふれ猛き心となる時もものの哀れを知るぞ悲しき

物思へば心疲れておほかたの人のそしりにかかはりもなし

遠くより友の來る日も停車場の柱に倚りてものを思へる

花の色よごれつつなほ咲きつづく百日紅こそ泣かまほしけれ

銀行の帳簿の中にある時も物思ふ子は額に手を置く

君おもふ事怠ればそろばんの悲しき音のみ耳にふれ來る

地下室につめたきめしに茶をかけて晝餉する子にわれもまじれる

受付の少女は哀れ石だたみ寒きあしたもひとり戸に立つ

そろばんをとる子の誰が瓶にさす帳簿の中の芍藥の花

三階の窓より捨てし紙の浮く會社のうらの潦かな

なりはひの朝は夕にうつろへど昨日と今日とわかちがたかり

受付の少女が笑ふ小使のその禿頭見ぬ日さびしも

ひけ時の疲れし人の一列にうなだれて行く三菱の原

明日も亦この石造の銀行に來るわれとは思はずもがな

東京の芝居のかかる噂など身にしむ秋となりにけるかな（以下旅日記の中より拔く）

海添ひの赤土原の朝じめりばつたの飛べば秋の風吹く

たはむれに消息やらん方もなし長き旅寢に少し疲れぬ

山裾の林を走る汽車の笛こだまする夜は都戀しき

紀の川のわたしに迫る山の色暗き夕は悲しからまし

寺々の鐘鳴り出る夕暮は東京の人すべて戀しき

帆を張れる黑船の子よふたたびは稻佐少女を見にも來よかし

草深き熊本の城石垣の上にゆらげり夕立の中

ああ吾は薩摩隼人に殺されし朝敵の血の残る身なるや

我が祖父を斬殺したる薩摩人憎む吾をば誰か咎むる

衰へし姉の姿の忘られぬめぐりあひこそはかなかりけれ〔外二首〕

――「三田文學」大正元年十一月號

心づくし

——母上様——

やすらかに海の幾夜はあけにけり父母の家戀ひしとおもへど

すさまじく東へはしる青潮に乗りてゆく身もわびしかりけり

海原は暴風(しけ)の名殘りのちぎれ雲北に流れてさむき星かげ

とつくにの風をいとへと云ふ母ははやも涙にくれにけるかな

やがてまた佛の國にあはん日をたのめる祖母に泣きて別れぬ

あけくれに波のしぶきに濡れて立つへさきの旗もかなしかりけり

汽車はまた枯草の野に暮れにけり風見の上に浮ぶ夕月

屋根うらに三味の音のするシャトルの一夜はかなくあけにけるかな

パン屑のちらばる卓にたそがれの忍び來る時戀しきふるさと

あはつけき林檎の酒もふるさとを想ふ夕はかなしからまし

やすかれとふみには書きぬ故鄕を想ひ疲れて眠る夕べも

やがて我が知らぬ男に嫁ぐべき妹の上忘れかねつも

小夜更けて爐の火盡るも兄はなほつめたき床に汝をおもへり(小妹に送りし歌)

知る人になべておなじきたよりする心寂しき旅にしありけり
あてもなく夜半の大路をたもとほる人にまじりて吾もゆかまし
秋は又青き御空を流れゆく雲の影にもわかれともなし
故もなく泣きてあばれしそのかみのこころよかりし日も想ひ出づ
彼の人も嫁げりと云ふふるさとのたよりきく日はさびしからまし
彼の少女雪降る朝もなりはひに涙流して三味やならへる
別るればかにかく人の戀しかりかの酒癖のあしき友さへ
あざむかれ罵しらるるをかぞへつつ怒らば吾は日も足らじかし

海越えてなほ君戀ふと書き送る人も無き身となりにけるかな

そのかみにかはりて後の賴まるる吾と思へる母もかなしき

父は母に母は父にぞよりつつも老いゆく日こそかなしかりけり

我が拙なき歌など詠みならふはただわがはかなきなぐさみのみ「歌の宗匠」とならんなどは存じもよらぬところにて候。誰人のよしなき事は聞えあげけん、心なき人を恨み申候。

父上の御教へいかでそむくべき塵にひとしき此の身なるもの

父母の犧牲にささげし年月の心づくしもはかなかりけり

――「スバル」大正二年二月號

堀口大學に

おもふ事はばかりもなく云ひ捨てん仲たがひともならばなれかし

わが嫌ふ北の訛の堪へがたく思はるる日もなきにあらねど

忘れがたし紅梅町の先生の二階に君と詠みし歌など

田舎縞の袴ひとしほをさなげに見えたる頃の君のなつかし

亡き母の思ひ出のみを物語る越後訛も哀れ深かり

おづおづと上眼に人を見る癖もいとしと思ふ孤兒なれば

母なくて育ちし人のわれをさへ戀しがるこそ哀れなりけり

幼き日誰にか聞きし繼母の話に君をうかべなどして

亡き母を慕ふ心のこしかたに戀のなかりし君はめでたし

美しきものとおのれを一筋に思ひて君のあるもおもしろ

ひとはひとおのれはおのれいまはしきかかる心地は知らぬ君かな

うれしきは優しき心そのほかに君が歌などあらざるもよし

酒女かかる世界を夢みつつ君のうたへばうとまれもしぬ

汝が歌をあげつらはんは苦しかり歌を捨てよと云ふにひとしく

とこしへに夢みてあれと願はれぬあまり幼く見ゆる君故

美しき頬に涙して讀み給へアンデルゼンの戀がたりなど

大學の植ゑしダリアも枯れ枯れに秋暮るる日と終る師の文

或時はおのれを通す我がさがに君は笑ひて答へざりけり

意地悪く響くおのれの言葉より悲しきものはなしと知れるや

わが如くさかしま事を喜べる男も友と思ひ給ふや

此の頃

たよりなき×××の國民の心地に春も暮れにけるかな

五月五月ざぼんを切ればほのかにもうす紫の霧の匂ひて

何處となく山ふところに風の音する日は寂し雲のゆききも

父母の家を離れし寂しさもひと夜ふた夜はうれしかりけり

涙涙それよりほかに寄邊なく思はるる日となりにけるかな

怒る事泣く事すべておのれをば忘るる事にあくがれわたる

たまたまは涙流るる夕暮もあるをたよりにわれをいとしむ

むつがりては母に縋りて泣きし日のその泣き心地忘れかねつも

幼子の言葉を聞けば胸迫るあやしき癖のつき初めしかな

幼き日父に聞きたる話など思ひ出づるにも旅ははかなし

いつしかに所帯じみたる妹の髪のほつれも哀れなるかな

此の頃はちさき妹も愚かなる兄を哀れと思ひ初めけん

心狭く吾を罵る故郷のかの従兄さへ忘れかねつも

自を憎むおもひに堪へられぬ夕暮時の心もとなさ

我が父も我が母もまた衰へぬそれだけの事に心悲しむ

誰にもあれわが足もとにひれ伏して泣かば抱きてわれも泣かんを

その人もおのれも共に哀れなる人の一人と思ふ日は憂し

壁になくこほろぎ聞けば人妻となりし女の身さへ思はる

人しれず異郷の旅に死なん日の心安さもおもはるるかな

寧ろ吾らたたかひしげき隣國の革命の子と生るべかりし

――「スバル」大正二年十月號

落書

梶原可吉氏に

小泉のアイルランドの消息も數かさなるを君たよりなし

かりそめのをかしき事も必ずと云ひたる人のたより知らずも

汝が好む鏡花の筆の物語身に沁む秋をわれは旅寢す

夜となれば酒場に走る酒飲めば必ず君の思ひ出でらる

君はなほ工夫の群にうちまじり酒をたうぶや妻も忘れて

際立ちて白き額をうちたゝくその酒癖もなつかしきかな

世をあげてわが酒杯の酒にだもしかずと云へる君を忘れず

かにかくになぐさみ難きうつし世を醉はずばいかに寂しかるらむ

ともすれば泣かんとするも哀れなり多情多恨の若き男よ

君がため死なんと云ひし女さへ二人三人の母となりしか

その頃の少女の群もちりぢりに他所の男の妻となりけむ

哀れなり古き芝居の人情にほだされて泣く君が心も

松蔦の八百屋お七に降りかゝる雪いたましと泣きし君かな

「夜の宿」の役者盗人錠直し皆なつかしと君は叫びぬ

一切をつくし弱者にくみせむと叫ぶも戀に破れしためか

海賊とならむと思ふかく云へる君が涙をわれは知れりき

人に世に憚かることを知らざればこの高聲といへる高聲

マルクスと鏡花をともにあげつらふその高聲も心地よかりき

心中の美しさをも聲高く君は叫びぬ頬に涙して

火の如く罵りながら人知れずその人のため泣くも君なり

女より男の友のなつかしく思はるる日は君をおもへる

思ひ出づ我が小説の拙なさを罵られつゝ暮れし春日も

東京は戀人なりと云ふ君の上方住みも哀れなるかな

やりどころなき憤りそがために優しき人になげきあらすな

新妻をいたはらんことそれのみを氣づかふわれと知るや知らずや

五百歌左二郎氏に

おたがひに嘘の限りをつくしたるつきあひなれば忘れがたかり

世の中のとぼけし事の限りをばつくらむとする君にやはあらぬ

日本橋京橋などのうら町の路次を歩むをよろこべる人

永代の橋の柱に渦まきて流るる水も寂しからまし

さりげなく君の語りし戀がたり輕口などもまじへなどして

ベルギイに堀口ゆきて君は又一人銀座をたもとほれるや

戲作者にあきて繪かきにならんなど君よりきけば寂しかりけり

今もなほ泣き笑ひするひよつとこの人形つくりてあるや寂しく

汝がつくる土の人形に魂の入りて踊らばなぐさましを

友だちは皆めとりしをわれらのみ部屋住みの身をいとしがるかな

君遠し林檎畑の朝風も九月となれば寂しきものを

鎌倉の濱邊の船のかげに啼くこほろぎの音を想ひなどして

——「三田文學」大正二年十二月號

三味線草

門際の樫の老木の年毎に立枯れゆくを誰かなげきし

いたづらの焚火あやふく家土藏を燒かんとしたることもありしが

うら庭の赤土の崖春來れば霜のくづれに蕗の薹の萌ゆ

土筆摘み茅花をつみて飯事に永き春日も忘れけるかな

枸杞のみの赤らむ春の石垣にてんたう虫を見たるよろこび

春くれて蛙の卵朝毎に浮ぶ汀の山吹の花

惱ましく隣の寺の啞の子の泣く聲聞ゆ木蓮の花

春の日の長き廊下をゆきかよふ召使にも花の散りにき

鬼になりじぶくつてゐる妹に散りかゝる花の白きはかなさ

手毬つきお手玉とりて遊びたる姉も妹も母となりしを

さらさらと疊を走る貝殼をはじきあへりし人は何處に

手を置けばくすぐつたがる百日紅(さるすべり)おもしろがりし人も嫁ぎぬ

うす暗き土藏の中の黃昏のかくれんぼこそ悲しかりけり

夕されば門の扉のしまる音寂しく母の胸に縋りき

ものいはぬ父の額の立ての皺盗み見ることもひとりおぼえし

和蘭の體操をする我父の腰の曲りてをかしなつかし

擦り寄する頰の冷たさにむつかりぬ足萎えの叔母の可愛がりしを

我が知らぬ兄のお墓に行くことは悲しかりけり故わかねども

わがはらからかはりがはりに抱かれし母方の祖母も死にたまひけり

眞夜中にふと目覺めては我が祖母を狸と怖れ泣き出でしかな

むらがりて遊ぶ子供をうらやみし一人ぼつちのわれなりしかな

いぢめたる遊び相手の泣いて行くうしろ影よりはかなきはなし

夕ぐれの秋刀魚の臭ひ露路うらにいぢめつ子らもかへりゆくらん

我が姉とふた時ばかり物言はぬ仲たがひこそたよりなかりき

兄につきわれをいぢめる其の時はこまつちやくれの姉とおもひし

今泣いた鴉笑ふと手を叩く兄のうしろの姉を憎みぬ

みゆうみゆうと啼く猫見たくおもほへりなしよなるを讀む姉に聞くまゝ

願はくはがつくがつくとなくと云ふ鵞鳥飼はまし庭の古池

夜の雨に池の金魚を流されしあけがたの庭は悲しかりけり

わが凧は鴉塒にいそぎゆく夕ぐれの空にきれて飛びにき

竹藪の向ふに月ののぼる頃風船玉もしぼみ初めけり

妹が蜂にさされて泣いてゐる芝生の上の夏の午後の日

鴟の飛びて消えたる夕空にほのぼのとしておもひ殘りし

日あたりの垣根の際に我が築きし小鳥の墓もあれにけらした

何時しかに池の緋鯉をおどろかす鼬も來ずて町はひらけし

――「三田文學」大正三年七月號

旅客哀歌

北米合衆國マサチユセツ州ケムブリツヂの學校町の下宿の一間を借りて住みし二年の間に詠める歌の中より

あはつけき林檎の酒も故里をおもふ夕べは悲しかりけり

何處となく山ふところに風の音する日は悲し雲のゆききも

うら庭の木立に木鼠のなき叫ぶ如月の夜の雪あらしかな

やがてわが知らぬ男にとつぐべき妹の上忘れかねつも

今日もまた場末の寄席にゆきてまし旅の憂の誘ふまにまに

人しれずわがため息の消えてゆくうすらあかるき黄昏の空

ゆく春はひとりかるたをもてあそぶ所在なき身を捨てゝゆくらん

筆とれば乾ける文字のきれぎれに浮びてわびし春のくれ方

知るかぎり故郷のうたを吹き鳴らしわが唇は震へけるかな

出まかせにしやべりし後の寂しさに燈火を見て涙ぐむ時

家遠し林檎畑の朝風も九月となればさびしきものを

神無月落葉に埋むうら町を時雨に濡れて人の來よかし

一千九百十三年の夏休みにナイヤガラ瀑布を見に赴き川の邊りの貧しき旅舍に迫り來る秋を身にしみて感じつつ

ゆきかへり蜻蛉むれ飛ぶ川の瀬の雪より白き渦巻の上
三五人彼方の岸に聲あげぬ瀧のなかばに虹かかる時
晴れし日は川の彼方の遠山に忘れし程の雪殘る見ゆ
瀧の上のうすらあかるき夜の空をはかなく星は流れけるかな
消えてゆく秋の夕べの白雲をてすりによりてはかながる人
草の葉の風にそよぐも哀れなり夏より秋へうつるこの頃
はるかなるカナダの海に日の沈む夕べは悲し水も心も
川上の町の夜空にうちあげし花火も消えて秋迫り來る

紐育にありける時友もなき身のハドソンの川岸を一人歩み
つゝふと渡船に乘つてあてもなく彼方の岸に渡る事ありき

心常に水に憧れあてもなく渡船に乘つて川を横ぎる

ロンドン雜詠の中の一首

夏は來ぬ廣き都の一隅に夕月を見て母をおもへる

スコットランドの旅日記の中より

ジプシイの若き娘がうしろ影岡を越えつゝ日は沈みけり

巴里の病院に病みて横はりし日の日記より

やうやくに注射の藥消えて行く曉の窓に啼くは何鳥

病み疲れうつつに母をおもひつつまた短夜はあけにけるかな

ものおもへばものの皆悲し旅に病み癒えずて春もくれそゆく頃

——大正六年六月十七日「越後タイムス」

素人の歌

折にふれ歌など詠めばそのかみの優しき心湧きてはかなし

意地悪くわれをいぢめし先生もおいぼれてこそ哀れなりけり

幾人の子等を抱へて貧しげに暮らせる人を忘れかねつも

何時迄も自分を恨む友だちのその後をおもふ春の夕ぐれ

もろともに死んでしまへとおもふ日もありてはかなし我が一夜妻

そつと來て背中を叩くいたづらも久しくなりし君と別れん

折角の日曜日にも降りくらすつめたき雨を一人はかなむ

ひとり寢の足のつめたき曉に降り出したる春の淡雪

大阪へゆくとしいへど悲しがる人もあらねば一人酒飲む

掌の窪みに酒を酌むもよし世のならはしの厭はしき時

人中に默す寂しき時にふと壁にむかひて一人つぶやく

出たらめの歌をうたへど何かしら心に響く春の夕ぐれ

酒のめどさめては寒し友だちのあつき言葉もやがてもの憂し

故もなく石をなげうつ群集の一人とならばやすけからんを

いと狹き地上に人といさかひす此の大空の日輪の下

むえきにも御空の廣き事ばかりもつぱらおもふ朝ぼらけかな

墨吸はぬ吸取紙も腹だたし我がおもふ事の文字とならぬ日

くれ遲き春はも悲し橋の上に大空を見てありぬしばらく

筆とれば乾ける文字のきれぎれに浮びてわびし春の暮れ方

誰からもたよりなき日をはかながる吾とは人に知らせずもがな

足下に落ちて砕けし大皿の和蘭の繪をしばしはかなむ

みちばたに猫の死骸をみつけたる忌々しき日なほ暮れ残る

青空に雲も無き日を人しれず窪地に落つる雪解の水

高臺の家も窪地の雑草もうすき夜霧に濡れてをののく

泣いて泣いて泣き疲れたる赤坊の寢入る心地に日は沈みゆく

一群の羊越え行く岡の背に日はあかあかと沈みけるかな

石垣にまつはる草もはきだめの草の緑も濡るる春雨

暮れかねて所在なさうにためらへる大都の上の初夏の空

時にふと破れかぶれを興がりし少年の日をなつかしむ人

いたづらに空地に延びし名無草それにもいつか花は咲きけり

夏は來ぬ廣き都の一隅に夕月を見て母をおもへる

あけぬれば嵐のあとの水溜り底迄澄みてうつる青空

店さきの埃を浴びて賣れ殘る所帯道具のかげに啼く虫

秋は又葡萄の露の冷々と心に沁みて遠き故里

梨子林檎ばななな葡萄の香をたててまろびあふなり夜の食卓

果物の匂ひ藥の匂ひして暮れゆく秋のもののはかなさ

朝な朝な會社の石の段々に柳の散りてさむき十月

醉ひ倒れいびきをかける友だちを傍にして夜ぞ更けにける

おのが身を最も憎む心持秋は一層深まさりけり

草の葉も黃ばめば何時か忍從の心ひそかにしのび來るらし

馬の背を鞭うつ人も涙ぐむ秋の夕べの遠き故里

どこやらにこほろぎ啼けば長き夜を眠られぬ身もいとしかりけり

松柏椎樫楓銀杏の葉落ちて埋みし庭の古池

事毎におのれを責むる心根は愈々深く年くれてゆく

——「三田文學」大正八年二月號

歌十七首

ひと年の心の疲れ出でぬらん大晦日より大熱を病む

熱を病むうつつのなかにそことなく蜜柑のたぐひ匂ふ心地す

向ひ家の印刷機械ひもすがら廻れる爲めか熱は下らず

此家のあるじは病めり壁穴の鼠よろこび出でて踊れる

おもふこと稀にはあれど年毎に言葉すくなくなりにけるかな

櫛の歯にかかるぬけ毛も何となく心にかかる此頃の事

うつけたる心はいつか暗がりに消えてゆくべくおもはるるかな

棚の上にわがごと默す人形の目にも稀には涙浮ばん

いつしかにあらき言葉も忘れけん人とる沼の如く默(もだ)せる

世の中の面白からぬ事ばかり心を責めて秋たけにけり

夕されば踏まれし草の葉がくれの白き花にもゆらぐ秋風

春の日のいきづく中に草の蔓つめたき石を抱きて延びゆく
たはむれに人の寄せたる脣に肉桂の香のうすく殘れる
折々の旅の日記にかきとめし女の名さへ忘れかぬるを
鵠の鳥渡りし後の大空にいとけなき日の夢を浮ぶる
故しらず土に心の引かれけり霰の降りて踊る夕ぐれ
かへりみてうちにやましき心持人に抱きて秋も更けゆく

――「明星」大正十一年二月號

つとめさき

我窓のはるかむかふにすめらぎの御城はありて青き大空

誰よりもながく勤むる小使が鉢につちかふ朝顔の花

ひるげ終へ煙草くゆらし掃除婦の身の上話きくが樂しき

年老いし社長も若き給仕らも家路へいそぐたのしき夕ぐれ

——「相聞」昭和四年七月號

酒後

家主が遠き故郷の山の幸わかたれし日は酒すごしけり

赤茄子をきればほのかに信濃路の初秋のかぜ鉢に漂ふ

今宵はも晩酌の量ものたらず端居しをればはたたがみ鳴る

一本の麥酒はなかば泡なりや大きこつぷをひといきに飲む

――「相聞」昭和四年十月號

雜纂

海外消息

御手紙難有拜見しました。都新聞の切拔には驚きました。新聞記者なんてものはどうせ面の皮の厚い人間でなければなれない商賣とは思つてゐましたがあんまり出たらめをまことしやかに書いてゐるので吹出してしまひました。私はどんな出たらめを書かれても平氣ですし、且つあの記事では大變偉い人間になつてゐるので結構ですが私に對して何一つ干渉がましい事を云つた事のない父には氣の毒でございます。

第一に私は慶應義塾の幼稚舍にゐた事がない。普通部に這入つてから落第した事は事實だが「父も母もそれが文學の罪であるとして文學書一切を燒かしてしまつた」など丶云ふのは大嘘である。殊に「田舍の親戚から來てゐた〇子と云ふ美しい人」なんてものはお目にかゝつた事もない。思ふにこれは拙作「もの丶哀れ」及び「途すがら」の二編を平生三面記事を見なれてゐる目で見て三面的記述であると思つたぼんくら記者の罪でありませう。こんなデモ新聞記者の出たらめをまにうけ

る人もないでせうが私に對して寛容な父に對して氣の早い人々の間に誤解の生ずる事がないでもないと思ふと父の恩愛の深い丈それ丈私は父に對して濟まない氣がします。此の點から都記者を飽く迄憎らしく思ひます。

更に笑止なのは拙作「ものゝ哀れ」及び「噂」等から想像したものらしく私の學業の成績が大變よく首席で卒業したなどゝ書いてゐる。ほんとならばありがたい事ですが身に覺えのないほめられやうなのでくすぐつたくていけません。

最後に都記者のぼんくらのぼんくらたる所以を自身表明してゐるのは只今私が英國のケムブリッヂ大學にゐるとしるし、あまつさへケムブリッヂ大學の寫眞迄かゝげてゐる事です。私はまだ英吉利に渡つた事もないし從つてケムブリッヂ大學に學んだ事もない。一事が萬事で新聞記者なんてものは出たらめで終始押通してゐるものなんでせうね。

新聞記者をげぢ／＼のやうに嫌がつてゐるのは私の父ではなくて私自身なんだから愈々面白い事だと思ひます。とまれかくまれ私のつくり物語りが事實として見られたと云ふ事が所謂眞に迫つた描寫の結果であるならば年が年中嘘をまことらしく書く小說家として無上の榮譽だと思ひまして一人祝盃を擧げようと思ひましたが考へて見れば相手がぼんくら記者なんですから威張れた義

理でもないと氣がついてやめてしまひました。

大正二年二月二十七日

北米合衆國マサチユセッツ州ケムブリッヂにて

——知友某氏宛。「三田文學」大正二年五月號

○

ボストンにてフランスの新しい連中の繪畫彫刻展覽會有之フユーチユリスト、キユービストのすごいのを見て烟にまかれ申候。右展覽會中に一米婦人が精神に異狀を呈し Duchamp Villon と云ふ人の作なるボオドレエルの首を叩きこはし自分も人事不省に陷りて倒れし騷動有之候ひき。原因はあまり不思議な繪や彫刻を見たるためなりと噂され居候。

——井川滋宛。「三田文學」大正二年六月號

○

此頃德富氏の「みゝずのたはこと」を讀みてすつかりほれてしまひ候。實を申せば同氏の書かれしもの今日迄すべて嫌にて候ひしが此書のみはくりかへし／＼よみ申候。松本氏の「郊外の家」いつ

もながらうれしくこれも再讀三讀あく事を知らぬ次第にて候。同じく郊外を描くと云ふも德富氏のには田舍の土の匂ひをかぎ松本氏のにはよき家の並びたつ都らしき郊外を思ひ浮べ候。共によく郊外を知る人の筆と被存候。

夏近くして我室の内さへ樹々の綠にうす暗くなり申候。此頃のうれしきは夕ぐれ窓の下に立つ伊太利の乞食のオルガンを聞きつゝあわたゞしき落日を見送る事にて候。その後に涼しき夜の來ることを思へばいつもいつも此のオルガンの音の限りなく待たれ申候。……

——井川滋宛。「三田文學」大正二年八月號

○

小說書きに早くもあきが來て此頃は繪かきになり度くてしかたがなく度々美術館に出掛けてぼんやり考へをり候。ボストン美術館は相變らずサアジエントを買集め居り候。此の人の繪はなんとなく下品にてアメリカらしく被思候。小生はなんでも流行するものゝ好めない邪しまなる根性を有せる爲めかフユーチユリスト、キユービストの繪よりも昔の宗教畫がうれしくてたまらず被思候。どうしてかうも慘酷なのかと思ふ程ヤソの繪は凄く氣味が惡く忘れがたく候。日本畫殊に浮

世繪を模寫せる美術生多く、鏡臺の前に立てる女を描ける北齋の繪の如き最も繁昌致居候。小生は多く見た事もなけれどなんとなくギゴチなき心地して北齋はあんまり好まないのに候へ共此繪は好きにて度々眺め入候。湖龍齋の太鼓橋を渡る女を描けるや、いかゞはしきものも女畫工などに寫され居候。いかゞはしいから繁昌するのかとも思はれ候へどもいかにや……

○

永井先生のあめりか物語を案内記の類と思ひて購ひ小說集なるにがつかりして一頁も開かずうつちやりし人有之候由氣の早い人に御座候。失禮な事には候へども小生はあめりか物語に描かれし町々を求めて歩き申候て同書は案内記よりも一層詳しきものと存じ候。
まことに緣なき衆生は度し難き哉。

——井川滋宛。「三田文學」大正二年十月號

○

女のスカートの狹くなつたのは數年來の傾向でせうが近頃は益々甚だしく歩く度に足がスカート

につかへて困つてるやうなのも見かけます。或女が極端に狭いスカートをこしらへて丁度人に誘はれたゝめそれを着て一緒に出かけました。ところが女と雖も大まだに歩く癖のついてる事とてとかく不便を感じる。しかしマア得意でもあつたのでせう。ところがちひさい溝を越える場合が起つた。つれの人が平氣で飛越したので女も何氣なくまたぎ越さうとした。しかしあんまりスカートが狭かつたので足がつかへてしまひ、水の中に落つこつたとか云ふ話を聞きました。話をしてくれたのは年寄の女で狭いスカートを攻撃した後の事です。あてになる話かどうかしりません。今年の流行は日本の浮世繪から思ひついたものださうです。勿論巴里の職人でせう。それは今迄のやうに裾になる程開くのではなくまんなかどころがダブ／＼してゐて裾は又ちゞまつてしまふのです。その上腰にははばびろのリボンを日本の帯のやうに結ぶのです。しごき結びもあればおたいこや、たてやのじに似たのもあります。さうかと思ふと裾を二尺ばかり（前のもあり横のもあり）さいて、その間から下着の紅いのなんかを歩く度にチラ／＼させるのもあります。これこそ日本から思ひついたんぢやアないかと思ひます。更に此の趣味の發達したやつは長い下着を着ないで肉の透いて見えるうすい靴下の足を膝位迄露して歩くのです。日本婦人のけだしや白脛がチラ／＼するのは西洋人に對して恥かしき事ならずやなんて云つてると、その西洋人がこ

んなまねをやり出すんだから浮世は捨てられません。但し新聞雜誌紙上に於て道學者や又は單にガヤシたがる記者達が道德問題などゝ結びつけて書きたてる事、洋の東西に別なしと知るべし。一に西洋二に西洋で、どう云ふつもりなのかヴェールまでかぶつて見度がる女もある世の中、こちらでも亦東洋の品物が次第にめくら流行になる事疑ひもないと思ひます。夏になつて著しく目立つたのは方々の家の軒に日本風の提灯(岐阜にあらず、園遊會もの)がブラ〳〵し、青竹のすだれがポーチにかゝつたりなんかしてゐる事で、提灯は日本から來るよりも日本をまねした獨逸製が多いのださうです。

それから屋根を日本風の瓦で葺く事もソロソロ始まりました。瓦の色は茶の勝つた赤です。原料はなんだか知りませんが單に Terra cotta と云つてるやうです。大變高いものださうで、金持の自まんになるとか云ふ事です。みつともいゝみつともよくないなんて古い事は最早や問題にならぬ事これまた洋の東西を問はずと知るべし。

「お前はアイスクリームを喰つた事があるか」「日本に電燈や瓦斯はまだないだらう」「活動寫眞てものを見た事があるか」なんて云ふ鈍いアメリカの學生はいかにしてミカドの國に帝國劇場ありて女優がブランコに乘り、無數のカフヱーありて文士畫家が五色の酒に借金をし、熊さん八さん

の酒機嫌を以て擁護せらるゝ憲政の存在する事あるを知らんや。ましてやイブセンなんぞは一昔前の思ひ出となり、ハウプトマンもショオもメーテルリンクも既に／＼ハラキリと共にすたらんとする不斷の進歩に大車輪なる事恰も訥子の芝居を見るにさも似たる我が文壇の存在を彼等いづくんぞ知る事を得ん。社會劇に中村ハルサメ先生あり、古典劇も近代劇も時代劇も世話劇も正劇も笑劇も歌劇も(その他あれ劇それ劇のたぐひ無數にして數へてつくさず)一人でしよつてたゝるゝ松居マツノハ先生ある事を聞かば恐懼おくところを知らずして以後加州に於けるが如き無禮の言動あとを絕つや必せり。彼等が吾等神の國の國民を單に顏色のうす汚なき故を以てけいべつするは近代日本の進歩發展のタキシイよりも速かに新しき女の聲よりも大なる事を知らざるによる。無智こそは禍なれ。よろしく解散したる文藝協會を派して殖民地的なるアメリカの都都に新しきハムレットと新しきマグダとを演ぜしめ以て我が國の文化の程度のいかばかりなるかを知らしむべきである。二三の代議士實業家をしてニューヨーク、ワシントンのまん中に於て唐人共に解り得ざる英語のスピーチを爲さしめ、且又忠義と正義と人道とを知らざる米人の前にむやみやたらに平身低頭せしむるの愚をなさんよりも其の效果の大なる事八百萬の神々に乃木軍神廣瀨軍神犬養憲政擁護神を加へ、神かけて誓つて斷言して憚からざるものなり。

どうも平生jap〳〵と馬鹿にされてるので國をおもひ君をおもふの念愈々深くしかもわづかにかゝる手紙の上に於て我が文明の花をかげ自まんする他なき事かへす〳〵も悲しき事でございます。

それは別の話として日本の文明はアメリカに負るところが多いとの事なれど文學に至つては全く此の國に關係がないやうに思はれます。ポオとホイツトマンの他にはよそ樣迄手の延びた男が見つからない國なれば無理もありません。けれども文壇の調子に至つては經濟政治その他あらゆる方面の人のアメリカ式であると等しく矢張りアメリカ根性が行きわたつてゐるんぢやないかと思ひます。なんでもかんでも歐羅巴のものをつかんで來るところが殊によく似てゐると思ふのです。たゞアメリカの方はうばつて來ると云ふ字があてはまり、吾吾のは、ちよろまかして來ると云ふ字があてはまるやうな氣がする丈のちがひです。飜譯の他になんにもないやうなところが似てるんですが、しかし不幸にして此の國では飜譯者があんまり偉い人として尊敬されないやうで、從つてまだ學校でフランスの初歩をならつてる學生がメーテルリンクを譯す氣になつたりベルグソンをかつぐ氣になつたりはしないやうです。そゝつかしくてムラ氣なアメリカ人にしてはよくも落ついてると思ふやうに一人の作家を研究して譯してる人も澤山あるやうです。曾て新しき文士

の一人我國に於て演ぜられし大陸の劇の表題をヅラリと並べ又アメリカに於て演ぜられたる大陸の劇の名前を並べて我が國の方アメリカよりも數多き事を證明し且つ吾は彼よりも進んでゐると云ふお説を時事新報紙上に發表された事がありました。果してアメリカよりも日本の方が澤山近代劇を演じたかどうかは別として、どんぐりを拾ふ子供が「お前はタツタ三ツきりかい、あたいなんか十ひろつたぜ」とゐばるに似たる此のお説がいかにも代表的であるやうで未だに忘れる事が出來ません。フランス、ロシア、ドイツ、ベルギイ、イタリイ、とあちらの方の話月々の雜誌におびたゞしけれど眞に日本の文壇を支配せるものはベルグソンにあらずメーテルリンクにあらず、浦賀に來りしペルリ以來のアメリカの水兵及び商人の根性にあらざるや否や。

○

前便に申上候女のきもの丶極端に挑發的なるに對して或地にては禁令を出し候。

襟。咽喉の下四インチ以上露出すべからず。

袖。少なくとも肱に達する迄長からざるべからず。

裾。少なくとも靴に達する迄長からざるべからず。裾を故意に裂くこと六インチ以上に及ぶべか

らず。

布地。日光の下にて四肢の透視さるべきものを禁ず。

下着。充分肉體をおほふものならざるべからず。

腰圍。あまりにキツチリしたるものを禁ず。且つ電車等へ乘る時下ばきを露出するが如き狹きはかまを禁ず。

右禁令を發したるチーフ・オブ・ポリスは一日市内の四辻に於て若き女の電車へ乘らんとするも裾狹くして足をあぐる事能はず膝の上迄まくりあげ漸くにして乘車せるを附近に於て眺めゐたる若者(文學書生なりや否やを知らず)が「ナンテ間がいゝんでせう」(How beautiful the scenery)とつぶやきしを聞きて禁令の必要に感付きたるなりとぞ。因に目下流行の女の風俗を Back-to-Eve Movement と稱す。その風教に害ありや否やは別問題として近代の繪畫文學と同一精神に立つものの如く思はるれどいかに……

——井川滋宛。「三田文學」大正二年十一月號

○

両新議所會の建築物の重要なる事は[illegible]發展に發揮[illegible]盛なる[illegible]先生の

御手紙にて詳細[illegible]、誠に[illegible]新式[illegible]

[illegible]致され候。[illegible]頼み上げ、[illegible]通[illegible]事の

[illegible]思ひ出でらるゝ故に御座候。[illegible]新しき圖書[illegible]

[illegible]、再び[illegible]事を[illegible]御座候。

吉田新太郎宛[illegible]三日[illegible]

來る十月二十三日(或は三十日)[illegible]

井川[illegible]宛[illegible]三日[illegible]

形式の研究に[illegible]先生の作品[illegible]御自身[illegible]

兼而御願致居候。[illegible]先生を由緒ある所謂二三の[illegible]

骨以外に言葉なし。生瓜とか南瓜とか云ふ踊りを踊る人の不健全を祈る。

――倫敦より井川滋宛。澤木四方吉、松本泰との寄せ書。「三田文學」大正四年二月號

○

「たとへば紅葉先生は江戸の人で、鏡花先生は江戸趣味の人だと云ふやうな風に違ひます。」

――北米より井川滋宛消息の一節。「三田文學」大正四年三月號

○

「三田文學」永井先生の「日和下駄」、殊に觀潮樓の一節、實に天下の珍品と存候。澤木氏と共に感激して語り合ひ候。大正四年三月十二日。

――倫敦より籾山庭後宛。「籾山時報」大正四年七月號

○

小生儀來る十二月中旬渡佛暫く、巴里に滯在の豫定に御座候間十二月以後日本發の郵便は巴里大

使館宛に願上候、

たぶん來年の今頃歸朝すること丶可相成その前に歐洲諸國を一廻りし度く存居候。十月十三日

――倫敦より井川滋宛。「三田文學」大正四年十二月號

附記

○

本編の作者北村初雄氏は久しく病氣靜養中なりし處十二月二日遂に永眠せられたり。この詩人が短命の最後の日迄靜に熱愛したるものは樹木なりしといふ。「樹」は其の絶筆なり。平生「三田文學」を愛誦し病篤かりし時此の一編を本誌に揭ぐる事を希望せられたりと聞く。しかも不幸にして、本號の出るに先だち薄倖の人は齡二十六にして長逝せり。

謹而哀悼の意を表す。

——「三田文學」大正十二年一月號

○

この無題の小説は、泉先生逝去後、机邊の篋底に、夫人の見出されしものにして、いつ頃書か

れしものか、これにて完結のものか、はたまた未完結のものか、今はあきらかにする術なきものなり。昭和十四年七月號中央公論掲載の「縷紅新草」は、先生の生前發表せられし最後のものにして、その完成に盡されし努力は既に疾を內に潛めゐたる先生の肉體をいたむる事深く、其後再び机に對はれしこと無かりしといふ。果して然らばこの無題の小說は「縷紅新草」以前のものと見るを至當とすべし。原稿は稍古びたる半紙に筆と墨をもつて書かれたり。紙の古きは大正六年はじめて萬年筆を使用されし以前に購はれしものを偶々引出して用ひられしものと覺しく、墨色は未だ新しくして此の作の近き頃のものたる事を證す。主人公の名の糸七は「縷紅新草」のそれとひとしく點景に赤蜻蛉のあらはるゝことも亦相似たり。

「どうもかう怠けてゐてはしかたが無いから、春になつたら少し稼がうと思つてゐます」と先生の私に語られしは昨年の暮の事なりき。恐らく此の無題の小說は今年のはじめに起稿されしものにはあらざるか。

雜誌社としては無題を迷惑がる事察するにあまりあれど、さりとて他人がみだりに命題すべき筋合にあらざるを以て、強て其のまゝ揭出すべきことを希望せり。

——「文藝春秋」昭和十四年十一月號

課題葉書回答

【好きな挿繪畫家と裝幀者。其の理由。――水木京太出題】

一、挿繪を好みません。無い方がよし。どうしても名ざさなければいけないといふなら和田三造氏にお願ひし度いと思ひます。多分引受けては下さるまいが。

二、單行本の裝幀ならば小村雪岱氏に御願ひします。

三、理由は(一)和田氏の力ある才氣を好むため(二)今日迄の私の本は大概小村氏にお願ひしましたから今後も引つゞき面倒を見て頂き度いのです。

――三田文學昭和三年一月號

【現代の代表的文藝家と其の理由。――井汲清治出題】

出題者井汲清治氏の如き機智に富む人ならばおもしろをかしき回答をなし得る事と存候へども

小生には返事の致様無之候

――「三田文學」昭和三年二月號

【熱……なんでも自由にお書き下さい。――南部修太郎出題】

南部修太郎に熱あれ。

――「三田文學」昭和三年三月號

紹介

○

拜啓陳者友人名鹽武富君多少の慾氣と多分の洒落氣をもつて京橋區槇町二丁目七番地（鍛冶橋通）に於て「京や」と名のる蕎麥屋をはじめ候に付御贔負被下度候

蕎麥のうまいことは申すまでもなく酒は灘から取寄せ大自慢に候

尙あるじの申すにはおさだまりの小婢（ちび）も精々みつともないのをえらび諸事奇麗事で行く心得との事に候へども果して人選よろしきを得たりや否やこれだけは御實驗被下度候

昭和七年六月　阿部章藏

——葉書の挨拶狀

畫家仙波均平氏は慶應義塾出身者中の變種で、往年文部省美術展覽會其他諸會に屢々入選受賞し、後歐米に學ぶ事十年、歸來義塾普通部の先生として子弟の美術教育に盡して居られます。一子嚴君も亦變種といふべく、義塾商工學校卒業後寫眞術を習得し、今回銀座のまん中で開業しました。論より證據、そのうで前をためして下さい。

水上瀧太郎

――「三田文學」昭和十年十一月號廣告

○

明治以後の小説は、幾多の變遷を經て來たが、その主流は廣き意味に於ける寫實主義である。然るに、鏡花は別格の一枚看板で、處女作「冠彌左衞門」の昔から寫實を旨としない。有るがまゝを描いて眞實感を出す事は、この作者にとつて第一義の問題ではない。寧ろ有るべからざる事を描いて迫眞感を出さうとするのである。見たままを再現させようとはしないで、それよりも自分

の欲する世界をつくり上げる事に努める。客觀世界の散文的眞實には何等の興味がなく理想世界の美を讃美する事に忙しく、獨自の情熱世界を創造して其處に安住境を見出さうとする。從つてその審美的ものさしによつて拒否される他の一面が生じる。好きと嫌ひ、善と惡、憧憬と反抗、讃美と罵倒、すべて極端な對立を成して、鏡花世界を形成するのである。信仰するものは極端に尊く、然らざるものは亂離骨敗である。一言にして云へば、反抗と憧憬の作者である。寫實主義を主流とする明治・大正・昭和の文學史上浪漫主義の大道を打開樹立した功績は、偏にこの作者に負ふと云つてよい。

――昭和十五年三月、鏡花全集新聞廣告

追憶

黑澤利重君は學生時代から大人の風があつた。沈着で、念入りで、怒らず、あわてず、騒がぬ人であつた。みすゞかる信濃の國のうるさ型の例にもれて、極めて口數のすくない人であつた。此の頼母しい友人を持つことで、吾々は安心し、心丈夫だつた。

三田の寄宿舍では起居を共にした仲だが、學校を出ると、黑澤君は郷里に歸つたので、顏を合せる機會はすくなくなつた。しかし、心に忘れる事は無かつた。

黑澤君は私の母にもよくしてくれた。母もつきあひのこまやかな方だつたから、時には私よりも親しく往來し、文通もあつたやうである。たしか黑澤家には、私の母の名をとつて優子と呼ばれる令嬢がゐる筈だ。したがつて、母の住む本家の方には時々顏を見せたが、私をたづねてくれる時はいつも勤務先の方で、うちに來てくれたのは、たつた一度だ。黑澤君は早く結婚し、よき子持となつたが、私は晩婚で、しかも十年子供が無かつた。それを哀れんでの事だらう、家內へ

の土産に郷土人形を持つて來てくれた。その人形は私共の不注意で、忽ち鼠にかじられてしまつた。

　昭和十三年十月、私は勤務先の用務を帯びて信越地方へ出張した。忘れもしない十九日、黒澤君は戸倉の宿へわざわざ逢ひに來てくれた。その時、自分の娘もとしごろになつたが、誰かいゝ人があつたら世話をして貰ひ度いといはれ、私は輕率のそしりは覺悟の上で、不圖あたまに浮んだ人の事を話した。先方がうんといへば、これは滿點だといつた。第一には先方も長野縣の名家で、當主は黒澤君もかねて知る同窓の先輩であり、子息は私と勤務先をおなじくし人柄もよくわかつてゐる、但し誰が見てもすぐれた青年だから、もはやまとまつた話があるかもしれないとつけ加へた。

　年の暮に、黒澤君から手紙で、此の正月は熱海でくらすが、例の娘の縁談について頼み度い事もあるから、熱海のかへりに立寄ると知らせて來た。ところが、黒澤家の一門に不幸があり、利重君は東京に寄らずに歸國してしまつた。間もなく、黒澤利重君自身の訃に接した。

　故人の心のこりとなつた令孃の縁談は、その後話が進み、長野地方の風習にしたがひ、酒入れの式も行はれ、結婚の日も遠くない運びとなつたので、私としては、わづかに故人生前の友情に

酬ゆる事が出來るやうな氣がする。黑澤利重君の靈よ安らかなれ、きよ子さんは滿點の良人を得て、よき妻となり、よき母となるであらう。(昭和十五年一月二十四日)

――昭和十五年四月十日刊行「黑澤利重君を憶ふ」所載

慶應義塾應援歌

一、丈夫がたばさむ征矢の　雄風に草木も靡く
　雲亂れ山動搖して　中原に雄鹿を爭ふ

二、紫の旗行く所　月の夜の桂を折らむ
　そゝり立つ芙蓉の嶺の　雄々し我れ野邊のすめらぎ

——明治四十年頃作。慶應義塾體育會手帳所載

年譜

泉鏡花年譜

明治六年十一月四日、金澤市下新町二十三番地に生る。名は鏡太郎、父は清次、政光とて金屬の彫工なり。母は鈴、江戸下谷の出生、葛野流の鼓打、中田氏の女にして、能樂師松本金太郎の小妹なり。

幼時繪を好み透寫をよろこぶ。母の藏書、文久年間版「江戸大節用」の挿繪は殊に心をひきし手本なりき。天文、地理、暦日、名將、美媛、年代記、故實、年中行事等を記せるものなり。

又、母に草雙紙の繪解を、町內のうつくしき娘たちに、口碑、傳說を聞く。

明治十三年四月、東馬場、養成小學校に入學。

小學時代常に成績優等にて、教場の列最も奥に在り。教師單語篇を掲げて講義をなすも、強度

の近視眼のため文字判明せず、すべて聽取諳記す。

金澤高等小學校に入學。一年ならずして、亞米利加人經營、一致教會派に屬する北陸英和學校に轉ず。入學試驗の採點すべて滿點なりしも、肥大なる外國教師の掌上に乘る程の小柄なりしため問題となり、特に許可さる。同級生は何れも二十才前後、旣に一家を構へし者もありたり。校長ポートル、丈高く髯紅し。夫人、令孃も教鞭を執る。令孃年十八九、風姿極めて淸楚。教師ウィン、中肥にして髮黑し。漢學教師、中村眞氏。淸節、篤學にして又好謔を能くし、世情に通じ、經典、史籍を說くに近俗俚事を以てして、よく諸生を敎ふ。

教科書は、ウイルソン讀本、パアレイ萬國史、カツケンブス米國史、ミツチエル地理書、井上蘇吉またインブリイの英和會話篇等。

明治二十年北陸英和學校を退く。金澤專門學校の學生制服、金釦、緋色裏地の頭巾つきの黑き外套姿にひきつけられ、入學を志願す。英語は滿點なりしが、數學の試驗に際し、同町內、年長の友人、同校の學生なるが、情によりて試驗場外より答案を投入れたれども手に入らず、……落第。

素志を飜し、井波氏經營の英漢數の私塾に通ふ。直に英語の代稽古を依賴さる。

明治二十一年富山に赴き友人の許にあり、國文英語補習の講座を開き、又出稽古を試む。半歳ならずして歸郷。家にありて、あまたの小說を耽讀す。

明治二十二年、友人の素人下宿にて紅葉先生の「色懺悔」を讀む。春晝閑にして、窓に桃李の色、隣家に機織る梭の音をきく。記憶忘れ難しといふ。

夏、辰の口溫泉、叔母の家にて手にしたる一枚の讀賣新聞に、紅葉先生の「夏痩」一枚を見出す。次第に、小說創作の念強くなり、「八文字」とか題する試作をなす。引つゞき二三の作を試む。

紅葉先生に手紙を出したれど返事に接せず。

明治二十二年十一月二十八日、紅葉先生の門に入らん事を志し、偶々、父と同識者の妻職人とゝもに、業を開かむとして先づ東京に住める其の夫のもとに行くに伴はれて上京の途に着く。敦賀までは人力車、途中丸岡と、敦賀とに二泊。はじめて汽車を見、汽車に乘る。靜岡に一泊。三十日午後四時頃新橋着。都會の廣大なるに驚き、先生を訪問するの勇氣を挫かる。鐵道馬車にて神田區山元町なる同行の人の家に隨伴す。一夜の宿を借りたるのみ。

十二月一日、湯島一丁目女坂下の下宿に在りし濟生學舍の學生福山某をたづね同宿す。此の先輩によりて、おでんの立喰ひ、麥とろ、牛鍋の味を覺え、花合、寄席通ひの指導をうけ、質屋の

便利を知る。
年の暮、酉の日には、吉原を見物す。
下宿の娘十六七なりしが、日常用うる東京の言葉の美しさに驚く。九つの頃まで聞き習ひし母の聲を思ひ出づ。一夜、忽ち火事あり、「ちよいと、何處でせうね」と問ひかけられ、その「ちよいと」と云ふにさへ感激すくなからざりしと言へり。
大晦日近く、宿料滞りし醫學生逃亡し、人質の如く殘さる。膳も洋燈も催促せざれば運ばれず、轉宿せんとするも肯かれず。福山の友、參謀本部の飜譯官三竹氏、同僚井口氏に此の窮狀を語り、玄關に書生たらしめむことを求む。井口氏一諾を與へたりと雖も、借財のために下宿を遁ぐること難し。三竹は風流多才の人、而して亦錢なきなり。下宿に來り、白木綿三尺を購ひ、女中を呼びて褌に縫へと言ふ、女中笑つて肯かず、此を強ふ、女中尙ほ笑つて遁ぐ。其の遁ぐるを追うて帳場に行きて更に求む。居合はせたる娘の笑みつゝ頷きて、針を運ぶを傍にしつゝ長火鉢に相對せる、おかみさんに向つて、乃ち少年のために說く。褌を縫ふといふこと旣に少なからぬ一種の親しみなり。借金の談判輕く解けて、人質は卽日に下宿を出で、麻布區今井町の寺院なる井口氏の寓に伴はる。

明治二十三年、寺に在る事三月にして、福山の従兄森川某に引取らる。政治狂にして當時淺草區田原町に住す。玆に居る事一箇月半。

五月、福山、神田區五軒町に居を構へたるを以て其處に移る。煙草を買ふ錢も無く、とろゝ昆布を代用する有様にて、男世帶忽ち沒落す。

六月、本郷四丁目の下宿に移る。始終宿料の催促をさるゝ爲、いひわけを一の興味と感ずるに至る。間も無く、醫學生某、鎌倉に赴くに伴はれ、同行、みだれ橋(今もありや)妙長寺の一室を借り、七八兩月を過す。醫學生と住職に誘はれて附近の小料理屋にて酒を味ふ。生來初めての經驗なり。酒にがかりきとか。

妙長寺の支拂に窮し、醫學生又もや逃亡、再び居のこりの形となる。散歩に出る時も、寺僧逼がすまじき爲に後よりしたがひ來る。嚢中一錢も無く、枯葉を火にくべて煙を喫き、煙草の代用とす。餓は忍ぶべし、喫煙は堪ふべからざるなり。

九月上旬、醫學生より送金あり。上京、本郷龍岡町の下宿に同宿す。

月末、湯島新花町の下宿に移り、他の醫學生と同宿す。此の男、小説を耽讀し、屢々娘義太夫を聽きにつれ行く。

九月中旬、年長落第の醫學生たち、いづれも妻帶せると、妻戀坂下の長屋に入る。同居。夏以來の白地の單衣一枚を身につくるのみ。鄉里の從姉にねだり、五圓の小爲替券一枚を送らる。從姉の其の珊瑚の簪を賣りたるなり。それ然り、しかも諸方の借財、その他使途あまりに多きため、衆議決せず、面倒になりて之を裂く。

恰も鄉里なる信友の勸告するあり。意を、歸鄉に決したる折柄、醫學生の一人偶々紅葉先生の緣家に宿するに會す。わづかにそのゆかりにて、唯一たび先生に見ゆるを得むことを希ふ。

十月十九日、牛込區橫寺町にはじめて紅葉先生を訪ひ、志を述ぶるや、たゞちに門下たることを許され、翌日より玄關番を承る。其の中春三月は、紅葉先生、令夫人と新婚の當年なりといふ。

「泉鏡花著作細表略」

――鏡花全集　卷一　昭和二年四月十五日發行

年譜

水上瀧太郎

明治二十年十二月六日東京麻布區飯倉に生る。本名阿部章藏。父は泰藏母は優。兄三人姉一人

第三人あり。現に十二人健在。
明治四十四年處女作「山の手の子」を「三田文學」にて發表す。
明治四十五年慶應義塾大學部理財科卒業。亞米利加に赴きハアバアード大學に學ぶ。
大正三年英吉利に渡る。
大正四年佛蘭西に移る。
大正五年秋歸朝。明治生命保險株式會社に入社す。
大正六年大阪支店詰を命ぜらる。
大正八年東京本店に復歸し、今日もなほ其の社の使用人なり。
大正十年母方の親戚の女俣野都と結婚す。

〔著作目錄略〕

——明治大正文學全集　第三十八卷。昭和四年九月十五日發行

遺稿

ポオに關するノオト

○

Poe の家系

Poe の家は De la Poe と云ふ最も古い family で Poe と云ふ名は River Po から來たと傳へられる。Italy から France に移住し Le Poer と改め更に年を經て英吉利 Wales 愛蘭土と移住して來た。英吉利に於ては十二世紀の終りに Sir Roger le Poer なる者 Prince John の下に Marshal として 1185 愛蘭土遠征に行つた。

其の後愛蘭土に落着き家運榮えたが 1649 Cromwell の爲めに愛蘭土が侵された時一族の多くは蹂躙されてしまつた。De la Poe, le Poer となり更に Power, Poe となる。

詩人の祖父 David Poe

十八世紀の中頃 John & Gane Poe 米國に移住し Pennsylvania に住む。其處で David Poe は Miss Carnes と結婚した。David Poe は詩人 Poe の祖父である。此の Carnes の

1776は獨立宣言

家は美人揃ひだつたと云はる。David Poe は車輛製造者になつた。1776 十二月十日附 Robert Christie なる sheriff の手紙によると David Poe は Lower class の leader であると云

はる。

1779 Assistant Deputy-quatermastter for Baltimore となる。非常なる愛國者で手元にある政府の金が無くなると自分の金をつぎ足してゐた。Lafayette が Baltimore にゐた時に彼は五百弗支給して兵士の被服料を助けた。かくて彼は殆んど財産を蕩してしまつた。

戰後 Baltimore にて Dry goods をひさぐ。市民は彼を General Poe と呼んだ。而して City Council の議員にゑらんだ。1814 年英兵來り攻むるや再び立つて防戰に加はる、時に年七十一歳。彼は七十四で死んだ。

1824 Lafayette が再度の米國訪問の時將軍は Poe の墓土に接吻して Here lies a noble heart と云つた。David Poe は六人の子供を持つた。

Poe の父

長男の David Poe は美男子であつた。彼は良き教育を受け法律家の事務所にゐたが、芝居に對する嗜好が非常に強かつた。"The Spoiled Child" なる芝居を打つて廻つた一座に Miss Elizabeth Arnold がゐた。

Hopkins は役者(w)

Baltimore に來た時は Mrs. Hopkins と呼ばれた。David Poe, Jr. はその美に誘はれて家出をし一座に加つたが叔父 William Poe が馳けつけて連れ戻つた。しかし再び逃亡して遂に結婚した。Mr. Hopkins は前に死んでゐた。此の結婚は非常に親父を怒らした。

數年の後二人の間に子供が生れた(William Henry Poe)。此の子供の愛で父の怒りはとけたと云はれる。

詩人の出生

1809 Boston Theater に現はる。諸役の間に Mrs. Poe は Juliet, Ophelia をつとむ。

1809 一月又は二月十九日に Edgar 生る。數年の後 Rosalie 生る。

Mrs. Poe

1811 Mrs. Poe は貧困病弱の中に三人の子を殘して Richmond で死ぬ。此時 David Poe は既に妻を捨て、行衛不明になつてゐたと傳へる者もある。

William Henry Poe は Baltimore の商人 Henry Didier に拾はれ Rosalie は同 Richmond の商人 Mckenzie に、Edgar は Richmond の金持煙草商人 John Allan に貰はれた。

Poe の幼時

Edgar Allan の幼時は幸福なものであつた。養父母は子供を持つた事の無い人の常として無闇に可愛がり過ぎた。Edgar は美しい悧巧な子供であつた。彼は王子のやうな衣服を着せられてよき社會の集り奢侈な夏場を引廻された。彼の云ふ事をきかないのを改めやうとすると Edgar の氣元〔原〕が惡くなると云ふので Allan は之を他の者に禁じた。

Poe の通つてゐた學校には畑があり、その野菜畑に入る事は嚴禁で、罰としては立たせた上首に野菜をブラドげる事だつた。Poe も或時此の罰にあつた。さうして野菜を下げたまゝ歸宅

した。Allan は怒つて學校に怒鳴り込み、直ちに退學した。

歐洲滯在

1816 年父 Allan は商用の爲めと叔父から遺産をうけたので英吉利に渡つた。妻と Edgar も伴はれ Edgar は時に八歳であつた。Edgar は Stoke-Newington なる Manor House School に入れられた。

William Wilson の中の敍景

1818 年 Allan は再び妻子を伴つて歸米した。而して Richmond の學校に入れられた。そこには五年間ゐた。

此の時代に於て Poe は散文よりも詩を好み、又數學は非常に嫌ひだつた。彼は繼續的の勉強家ではなかつたが級中に拔んでる野心が頗る強かつた。彼の作詩法は最も秀でてゐた。父の Allan は非常に得意でその子の草稿を携へて學校にゆき、それを印刷しやうと思ふがどうたらうと相談した。此の時 Edgar の年は十歳であつた。教師は Allan に忠告して印刷出版はやめさせた。

Poe の第一草稿

Poe は Latin が得意であつた。又 French もよく出來た。上記の Poe 詩稿の中の詩の多くは Richmond の町の幼い女の子供に Adress したもので、それを友人の前でよむのが彼の最大の樂しみであつた。又多少皮肉の調子もまじつた。少年時の Poe はきれいな、輝いた眼を持ち柔い毛の、表情の活々した子供であつた。彼の姿は slight であつたがしつかりした筋

骨の強い子であつた。遊泳が非常に上手で、幅飛の選手で又拳闘もうまかつた。

彼は話をする事が好きで殊に沙翁のシイザアの中の Brutus と Cassius の問答が得意だつた。

初戀：To Helen

學校友たちが彼を始めて其家に作つた時母親 Mrs. Helen Stannard は Poe の手を取り非常に物優しく話をした。Poe は會話の力を失ふ程感動した。而して夢見ながら家路に歸つた。もう一度あの美しい優しい聲が聞き度いと云ふ希望にのみ耽つた。彼の寂しい心に新しいよろこびであつた。

Helen Stannard は間もなく病死した。Poe の悲歎は深くして彼は夜毎墓地に通ふ事數ヶ月に及んだ。

學生々活

1826 Virginia 大學に入る。十七歳。専攻は語學。Poe はよく出來、殊に羅典佛語に秀でた。乍然此の時代に Poe はカルタと飲酒を覺えて負債二千弗に上つた。父と子の間に激しい爭ひがあつたとも云ひ、なかつたとも云ふ。學校もやめさせられたと云ふ説と卒業したと云ふ説がある。乍然 Allan が子の愛に引かされて許したのは結局事實であらう。

1827 Boston にて "Tamerlane & other Poems" 出版。四十頁の册子。Tamerlane に盛られた思想は Ambition の爲めに最もよき感情を危險にさらすのは愚であると云ふ事に

ある。之等の詩は Poe の云ふところを信じ得るならば 1821—2 即ち十二三歳の時に作られたものである。

(Byron) 1788–1824

Byron を愛讀し之を摸倣した。鬱憂と Misanthropic (人間嫌)は既に此時から現ばれてゐた。

Miss Royster

Allan の家の向ふ側に住んだ Miss Royster を Poe は戀した。女は Poe よりも一二歳年下だつた。Poe は Virginia 大學にゐる時屢々此の女の友たちに手紙を送つた。女の父は手紙を横領した。男も女もあまり若いからと云ふのであつた。Miss Elmia Sarah Royster は十七歳で Mrs. Shelton となつた。

Baltimore

1828 Poe は Baltimore にゐた。其處で彼は實父 David Poe の妹 Maria に逢つた。

此の時 Poe は Allan に見放されたのだとも云ひ、叔母を尋ねて行つたのだとも云ふ。

Maria は Mrs. Chemm と云つたが夫に別れて學校を教へながら一人娘 Virginia (當時六七歳)を育ててゐた。又 Poe は自分の兄 William Henry にもあつた。此の男は美男子で氣の利いた男であつたがだらしがなかつたので Engage した女に捨て逃げられてしまつた。Henry も詩を作つて雜誌にのせたりした。此の Baltimore 時代に Mrs. Allan が死んだ。

第二集

1829 Baltimore で第二集を出した。

West Point

1830 West Point の士官學校に入る。此の時代の Poe は軍則を守らぬ怠け者であつた。見廻り士官は常に上官に報告する種を探す事が出來た。士官の氣に入らうとする者は Poe の

部屋には遊びに行かなかつた。

Poe の諷刺詩

"John Locke was a very great name;
Joe Locke was a greater in short;
The former was well known to Fame,
The latter well known to Report."

此の時代の Poe は二十二歳であつたがもつと年とつて見えた。Poe の部屋には三顆の瓶があつた。

1831 Poe は軍法會議に引出された。あらゆる義務を怠つたからである。そうして退校された。

Writer

此の時から Poe は自分で働いて喰ふ身になつた。Poe は West Point 時代に詩人として仲間に目されてゐたので士官候補生連を說いて豫約出版をした。一人が二弗半出した。出版の後諷刺詩でなかつたので出金者は何れも失望した。

1831

1831 第三集 New York にて出づ。"Poems, by Edgar A. Poe" は "To the U. S. Corps of Cadets" に捧げられた。集中に To Helen あり Mrs. Helen Stanard からうけた感情であると傳へる。

To Helen

Helen, thy beauty is to me
Like those Nicean barks of yore,
That gently, o'er a perfumed sea,
The weary, way-worn wanderer bore
To his own native shore.

On desperate seas long wont to roam,
Thy hyacinth hair, thy classic face,
Thy Naiad airs have brought me home
To the glory that was Greece
And the grandeur that was Rome.

Lo ! in your brilliant window-niche
How statue-like I see thee stand !
The agate lamp within thy hand,

Ah! Psyche, from the regions which
Are Holy-Land!

Allan の家

Mrs. Allan の死が Poe をヤケに導いたとも云はれてゐる。恰も Poe が West Point にやられる前に Allan には二度目の妻が來た。一説には後だとも云ふ。美しき二度目の妻は Poe よりも若かつた。そうして三人の男の子が生れた。

Allan の死

1834 Allan は死去し、遺産はすべて三人の子供にゆき Poe は何物をもうけつがなかつた。

Boltimore

Poe は第三集出版の後 Baltimore に行つた。彼は叔母 Mrs. Clemm の家に宿つた。Clemm は極めて貧しく Poe は些の蓄も無かつた。

"Saturday Visitor"

1832 Baltimore に於て週間雜誌 "Saturday Visitor" 出つ。此の雜誌が五十弗懸賞小説と詩を募集した。選者は町の紳士で Dr. James Miller と云ふ醫者、法律家 Latrobe 及び文學者 John Kennedy であつた。三人は Latrobe の家に集つて原稿を讀み始めた。いくら讀んでも讀んでも面白いのが無いので疲れたる三人は懸賞當選作無しと決めやうとした。時に Latrobe が今迄誰の目にも入らなかつた原稿を見出した。それは他の原稿とちがつて四つ折だつた。そうしてそれは他の原稿とちがつて Roma 字で書いてあつた。"Tales of the Folio Club." と題してあつた。内容を爲すすべての話が三人を感嘆せしめた。そうして何の一編に賞

を與へんかゞ又論じられたが、結局 "A descent into the Maelstrom" と "A MS. found in a Bottle" の中から後者が擇ばれた。

詩の方でも Poe の "Coliseum" が一番よかつた。しかし同一人に百弗やるよりはと云ふ理由で他の者に與へられた。

Latrobe を尋ねた Poe を前者は左の如くに見た。小男と云ふ程ではないが中脊の姿勢のいい男であつた。すつかりボタンをかけたフロックコオトを着て黑いネクタイをし、シヤツの白い部分は現はれてゐなかつた。身なりの惡いにもかゝはらずおかし難いところがあつた、それは Gentleman と云ふ字が最もよく示す。彼の額は高くこめかみが發達してゐた。全體の顏面の表情は grave であり sad であつた。但し會話を初めて調子がつくといきいきして來た。彼の聲は心地よく、言葉は適切ないゝ言葉が擇ばれしかも滑らかに淀みが無かつた。

"Joarney to the Moon"

會話中に Poe は目下書いてゐる月世界旅行の話を初めた。その會話に自分から醉つてゐる面白さに Letrobe も月世界迄旅行したと云ふ。Poe は此の時二十五歳であつた。

雜誌寄稿及び記者生活

Kennedy は Poe を晩餐に呼んだ。之は Poe を喜ばしたが又屈辱であつた。彼はその古いフロックの他何も持つてゐなかつたのである。Kennedy は Poe の爲め衣服を與へた。Poe は寄稿で多少の金を得てゐたが Messenger と云ふ雜誌に一週十弗でやとはれる事になつた。

結婚
Virginia
は十四歳

Poe は 1835 Baltimore に於て Mrs. Clemm の娘 Virginia と結婚した。九月二日。翌日彼は Richmond に行つた。Messenger の記者としてである。約一週間の後 Poe は記者となる時職を得てくれた Kennedy 宛に Richmond には住めないと云つて來た。それは彼が立派に暮した Allan の家があり、その偉大なる家があり、その偉大なる家には Mrs. Allan とその子等が Poe に來る可かりし財産で暮してゐる。彼には又舊知に今の窮狀を見られる事が非常な苦痛であつた。

Poe は辛棒してゐたが Messenger の持主から屢々飲酒に對する注意をうけた。之は Poe が所持する手紙によつて傳記者のめにふれた。Poe は人から來た一切の手紙及び彼についての新聞雜誌のめにふるゝ一切の記事を保存した。

New york
Review と
紐育生活

1837 の冬から 1838 の夏迄 Poe は New York に Clemm 及び Virginia と共に住んだ。俸給の乏しさに Mrs. Clemm は下宿屋を始めた。Poe は Mrs. Clemm 及び Virginia に對しては非常に忠實であつた。一の下宿人の話によると Poe は酒の香をさせた事もなかつたと云ふ。而して禮儀正しく紳士風であつた。

"Gordon
Pym"

"The Narrative of Arthur Gordon Pym" がロンドンの雜誌に出た時或者はそれを科學の書と思ひ眞に新發見があつたのだと思つた。そうして地方新聞は爭つて新發見の記事を掲

げた。

Philadelphia.

1898 Poe は Philadelphia に移つた。

" Gentleman's Magagine."

Poe の小説集出づ。"Tales of Grotesque and Arabesque"

此の雜誌の主幹とは Poe の他の詩人に對する批評の激しさから爭ひになつた。

家族

Virginia の Delicate な美しさは人々をしてあやぶませたが果して肺をわづらつた。

Clemm は貧しい家を心をつくして處理し又 Poe の原稿を携へて雜誌社を廻り歩いた。

Poe は 1840 Grahnis Magazine の記者となつた。此の時代に Poe は友人 Thomas に書いてゐる。Thomas は一千弗でワシントン政府の役人になつた。Poe は五百弗でいゝから陸軍大人「原」の下に使はれ度いと云つた。時の大統領は Tyler であつた。

"To coin one's brain into silver at the nod of a Master is the hardest task in the world.

Poe は間もなく Grahm's Magazine をやめた。彼は金錢に就いて惡評をうけたが、自分は金の考への乏しい人であつた。俸給はすべて Clemm の手に渡した。自分の好む雜誌を作り度いと云ふ以外に Poe は家庭を樂にし度いと云ふ事の他何もなかつた。

Virginia に對する愛は不可思議であつた。彼の目の前に褪せゆく美の讚拜に似た感情であ

つた。彼は妻の病牀の邊りを不安に包まれながら歩いた。何時死ぬか何時死ぬかと云ふ怖れがPoe の鬱憂を一層深くした。

"The Stylus"

"The Stylus" は Poe の計畫であつた。彼は此の雜誌の爲めに Washington に赴き大統領 Tyler 及びその內閣員を訪問した。

New York

1844 Poe は家族と共に紐育に轉じた。

彼は New Mirror の記者になつた。

彼の傑作 "The Raven" は匿名で出た後 Willis によつて New Mirror に轉載された。今迄短編小說作家として聞え詩人として聞え、手きびしき批評家として聞えた Poe が一層しつかりした地盤の上に認められた。彼は New York 中の文士の間に紹介された。その中に女

Mrs. Osgood

詩人 Mrs. Frances Sargent Osgood もゐた。Osgood は記す。"初めて Poe に會つたのは Astor House であつた。その二三日前 Willis が The Raven を示して作者が Osgood の批評を聞き度いと云つてゐると告げた。Osgood には The Raven の思想はあまりに dreadful であつたがしかもそれを拒む事は出來なかつた。又 Poe は之より先 Osgood をほめた事があつた。"Poe" は美しい額をあげ、Dark な目は感情と思想に輝いてゐたが、彼は冷靜に壯重に殆んど冷酷に接見した。けれどもその態度に自分は深く印象された" 二人はそれから

Poe の死迄友人であつた。

Mrs. Browning

"The Raven" は英吉利に於て又好評を得た。殊に女詩人 Miss Elizabeth Barrett Browning は左の如く記す。"The Raven" は英吉利に深甚なる Sensation を惹起した。或人は恐怖に襲はれ或は韻律の美しい音樂に醉はされた。或人は Nevermore と云ふ語に驅られ或人は不幸にして Pallas の像を持つてゐたが薄明にそれを見る事が出來なくなつた。"

"The Raven" は確に強い力を持つ。

The Broadway Journal

Poe は更に New Mirror をやめて The Broadway Journal の記者となつた。

Poe の貧困は次第にはげしく Virginia の病氣は次第に重體に赴いた。Mrs. Nichols と云ふ人の記述によれば"病妻の臥床は藁床で白い敷布が掛けてある他に夜具が無かつた。恰も寒い頃の事であつたが Virginia の上には Poe の外套が掛けてあり、胸の上にはベッ甲色の大きな猫が寢てゐた。猫は病める女を溫める爲めであつた。Poe は妻の手を握つてあたゝめ Clemm はその足をあたゝめた" Mrs. Nickols は知人間を廻つて六十弗を集めて Poe に送つた。中に Mrs. Maria Louise Shew がゐた。此の人はそれから Poe の家を見舞ひ常に補助を惜まなかつた。

Virginia の死と Mrs. Shew

Virginia は 1847 一月三十日に死んだ。死ぬ前に彼女は Mrs. Shew に Poe の寫眞、寶

石入れ、及び Mrs. Allan から Poe に送つた手紙二通を與へた。Virginia は二十五であつた。

Virginia の死後 Poe 自身の健康が愈々惡くなつた。Mrs. Clemm は Poe の爲めに諸雜誌社を廻り歩いた。

Mrs. Shew

Mrs. Shew は Virginia の死後も精神的に物質的に Poe を助けたが Poe は物を書く力も無くなつてゐたので Shew は Poe に再婚をすゝめた。健康で一切の世話の出來る人。

Poe の日常

Poe は益々沈鬱になつた。朝は早起きであつたが彼は草の道を夜晝歩き馴染んだ。最も好んだのは自分の家から遠くない岩山で、彼は松の根方に腰かけて自然の美と宇宙の不可思議に思ひ耽つた。Mrs. Clemm は常に Poe の身邊を離れなかつた。Poe は Clemm の理解し得ないにも拘らず Eureka を説いて倦きなかつた。

Poe と Shew

Virginia の死んだ年の秋の事、Poe は Shew を尋ねて云ふのに "自分は詩を書かなければならないが感興が少しも起らない。" Shew は Poe に茶をすゝめた。部屋のあけ放した窓から教會の鐘の音が聞えて來た。Shew はお茶の後で紙と Pen を Poe の前に置いた。Poe はその夜鐘の音さへも忌はしいものに聞えると云つた。何も歌ふ可きものがない、感情らしい感情もない、たゞ疲弊してしまつたのである。Shew は自ら Pen をとつて

The Bells, by E. A. Poe

"The bells, the little silver bells"

と書いた。Poe は漸く力を得て第一の Stanza を完成した。第二の Stanza の爲めに Shew は又

"The heavy iron bells"

と云ふ數句を與へた。Poe は又之を完成した。而して Poe は詩を淸書して "By Mrs. Shew" と記した。

Shew の弟が來て Poe を自分の部屋につれて行つて寢かした。彼は十二時間覺めなかつた。而して前夜の事は何も覺えてゐなかつた。之は彼の病狀を示してゐる。絶望と食物の不足から彼は死に近づいてゐたのだ。Poe の熟睡中 Shew は隣家の醫師を呼んだ。醫師は Poe の命はも早や長くないと語つた。

Poe はかゝる狀體の中にもなほ詩作をつゞけた。而して Stylus の計畫を捨てなかつた。

"Universe" Eureka

彼は Lecture をして金を集めやうとしたが嵐の爲めか聽衆は少なかつた。彼は Lecture の骨子を印刷しやうとして出版者を訪ふた。彼は曰く、Newton の發見も此の書の中に示さるゝ事の重大さに比すれば殆んどお話にならない。世界の視聽を直ちに集める丈重大なものだから

出版者は他の出版全部をやめても一生の事業として引きあふ。五萬部初版であるがそれは單に今後出版となる者の一少部に過ぎない。いかなる科學的發見も此の書の內容には及ばない。

出版者は五百部出したがそれさへ充分には賣れなかつた。

戀語り

1848 の夏 Poe は Mass. で講演會を開いた。彼は此の時 Virginia の後に迎へる女を熱心に求めてゐた。New England の女詩人 Mrs. Sarah Helen Whitman が Poe の目に深く殘つた。Poe は此の女の詩を最も refine された熱情あり想像豐富なる天才的のものとして公言した。

女は Poe よりも六才上即ち四十五六であつた。廿五歲の時 Boston の法律家と結婚したが三十歲にして死別した。此の Poe と Whitman の間柄は當時の文壇に非常に誤解されて喧傳された。之に就いて Whitman 自ら書いた。

Mrs. whitman

1848 の夏 Whitman は友人 Miss Anne Blackwell から聞いた。Poe が Whitman に會ひたがつてゐる事を。間もなく Whitman は無名の詩 "Line to Helen" をうけとつた。

PoeがMrs. Sheltonに結婚を申込んだ時は考へるから時

Whitman からも "A night in August" と云ふ詩を返へした。その時 Poe は雜誌の金を得やうとして Richmond に行き昔の戀人にてその人の父に妨げられ人妻となつた Miss Royster (Mrs. Shelton) にあひ此の女が夫に別れてゐたので結婚しやうとした。その時に

日を與へよと云つた。Poeは曰く“A love that that hesiteted was not a love for me.”

“八月の夜”が出たのでPoeは思ひかへしてNew Yorkに引かへした。Poeは九月二十一日ProvidenceなるWhitmanを訪れた。PoeはWhitmanの力が必ずPoeの上に落ちかゝつた失望から彼を救ひ彼に生活力を與へる事を力說した。Whitmanは手紙で返事をすると云つた。Poeは斷はられたにも拘らず再び女を訪れた。而して又繰返へして結婚をしてくれと云つた。

Whitmanは再び手紙で返事をすると約したが詩人を絕望させる事を恐れて返事をしなかつた。その爲めにPoeは三度やつて來た。そうしてWhitmanは斷つた。Poeは非常に落膽し失望して立去りその夜別れの手紙を送つてよこしたが翌朝Whitmanの母の家にやつて來て、非常にExeiteされた風でWhitmanの返事一つが彼の生死に關すると云つた。醫者をよんで見せたら腦充血であると云つた。

遂にWhitmanはConditional engagementをした。條件はPoeが眞に無氣力になつた事がわかつたら破約すると云ふのである。Poeはその後二度女を尋ねた。そうして直ちに結婚してくれと迫つた。そうしてPoeは女の同意を得ないうちに教會の牧師とClemmに通知狀を出した。

女の友人達は極力之に反對し殊にPoeが堅い約束を守らず酒をのんだ事を報じて來た者も

To Helen の短い方は幼兒の戀、長い方は whitman に對するものなり

あつた。Poe は絶望して友人に助けられて紐育に歸つた。

Whitman の八月の夜の詩

Tell him I lingered alone on the shore
where we parted in sorrow to meet nevermore;
The night wind blew cold on my desolate heart,
But colder these wild words of doom—"Ye must part."

Over the dark heaving waters I sent forth a cry!
Save the wail of those waters these came no reply.
I longed, like a bird, over the billows to flee,
From my lone Island home, & the moan of the sea.

Away, far away from the dream-haunted shore,
Where the waves ever murmur, "no more, nevermore",
Where I wake in the wild hour of midnight to hear

That tone ong sof the surges so mournful & drear.

When the clouds that now veil from us heave's fair light,
Their soft, silver lining turn forth on the night,
When time shall the vapors of falsehood dispel,
He shall know if I loved him, but never how well.

Lowell, Mass. の姉妹

1848 の夏 Lowell, Mass. にて講演をした時 Poe は若き姉妹を知つた。妹の Annie に Poe は殊に打込んだ。

"For Annie" は此の女に與へられた詩である。

病

1849 六月 Poe は Richmond 差して紐育郊外の家を去つた。何故に Richmond に向つたかは不明である。Poe は出發前に原稿を整理し若し自分が死んだならいかに處理せよと云ふ事を Mrs. Clemm に云ひつけた。Poe は途中華府に立寄つた。舊友は彼を引廻して酒にくらした。Poe は前後を亡却してしまつた。一日 Poe は雜誌出版者の家に來て"自分を追ひ掛けて來る者があるから髯を剃り落して呉れ"と賴んだ。Mr. Sartain は彼を剃つた。そうして床中に横へた。Poe は昏睡に落ちたが翌日は此の家を逃げ出した。主人は後をつけたが Poe

はとうとう行衞をくらまし路上に寢込んでしまつた。十日經つた。Poe が Richmond にゐる事がわかつた。

Poe は Richmond で酒屋に數日を暮した。それを探し出した友人は馬車をもつて迎ひに行つたが Poe は又逃げてしまつた。tavern-keeper の談によると誰も彼を知らなかつた。Poe は唯自分は Poe だと云つてゐたが數日を Bar の土間に寢てゐた。

Poe は突然雜誌發行者 Mr. Thompson を訪れて職を求めた。ぼろぼろの身なりをしてはゐたが彼の樣子には異狀がなかつたので Thompson は喜んで彼を迎へた。Poe は勤勉に働いたが再び姿をかくしてしまつた。更に數日の後彼は眼に繃帶をして歸つて來た。酒場で人間ちがひの爲め醉拂ひに打ち倒されたのである。Poe は編輯局に歸つたが又逃げた。探し人が Poe を或酒場で見出した時彼は其處に群る醉拂ひを集めて Eureka の說明をしてゐた。

Poe の死

十月三四日に Poe は Richmond を去つた。Baltimore に到着した。恰もその夜は選擧の前夜であつたがさまよひ步く Poe は選擧屋の手に捕へられた。一夜は穴藏に閉じ込められ翌日は十一の異る區に於て投票させられた。Poe は疲弊して溝の中に橫はつてゐたとも云ひ、波止場の共同ベンチに寢てゐたとも云はれる。1849 十月七日の朝 Baltimore の病院につれて來られた。

そうしてその夜死んだ。

——R. H. stoddard, George E. Woodberry——

The Philosophy of Composition

Effect

自分は先づ Effect を念頭に置く。即ち如何なる Impression を與へるかを先考へそうしてその筋、調子 (event, tone) が Effect の構成に如何に力を與へるかを考へる。

多くの Writer 殊に詩人は興によつて筆を運ぶと云ふ。自分は寧ろ反對である。例を Raven に取つて見るもその Composition の一部分たりとも Accident や Intuition から來たものは無い。之に反して數學的に經過をしてその完成に到達した。

Intension
Extent

第一に考ふ可きは作品の長さである。若しも作品が餘り長いならば印象の統一 (Unity) から生ずる重大なる效果を犧牲にしなければならない。即ち印象の統一を失ふ代りに之を償ふ效果があるかどうかゞ問題である。自分は速座に No と答へる。吾人が Long Poem と呼ぶものは單に短詩 (Brief Poem) の繼續に過ぎない。換言すれば Brief Poetical Effects の繼續である。詳言すれば詩とは Soul を Elevate するものである。その力強き刺戟は肉體の

必然性から短い筈である。此の理由から失樂園物語の如きは少なくともその半分は詩でなくProse である。

すべての著作殊に詩にはその長さに關して制限がある。換言すれば簡單は力強いとも云ひ得る。即ち効果を成すに必用なる長さは描かんと欲する効果の intensity に比例しなければならない。自分は Raven を描くのに此の制限は百行位ときめた。そうして事實百八行で完成した。

Choice of Impression

第二に Impression は一般の認識を得るものでなければならない。即ち美は詩の唯一の領域である。最も力強く最 Elevat する快樂は美の Contemplation (靜思靜觀)である。人が美に就て語る時それは Quality を云ふのではなく Effect を指すのである。即ち Soul の Elevation を云ふのである。

Tone Sadness

然らば此の美の最も強いものはなんであるかと云ふにそれは Sadness である。如何なる種類の美もその窮極迄發展さるゝ時は涙を誘ふものである。而して Melancholy は詩の調子の最も適當なものである。既に長さ、領域(province 即ち美) tone が定つた上は一編の詩を構成する Key-note となるものを求めなければならない。自分は之を Refrain であると思ふ。

Refrain

Refrain の印象は單音調 (monotone)—— 思想に於ても響き(sound)に於ても——の快感である。即ち Identity から來る快感である。繰かへしから來る快感である。

自分は思想の絶えざる變化を心掛けながら Sound の單音調によつて效果を高め且つ各樣にしやうと決めた。卽ち Refrain を用ゐ、Refrain は主として不變化に殘しながら新しい效果を出す事につとめやうと思つた。(Refrain は殘るがその各自は異る意)。

Nature of Refrain

次に Refrain の性質を考へねばならぬ。Refrain は繰かへさるるものである以上は短くなければならない。若し長ければ繰かへしは堪えがたきものになる。茲に自分は Single words が最もよき Refrain であると考へた。

Character of the word

扨て Refrain の言葉の性質に就て疑問が起る。自分が各 Stanza の終りに Refrain を用ゐる時は言葉は響の高いものでなくてはならない。而して長く引いて語氣を強め得るものでなくてはならない。此の資格を最もよく備へるものは O と云ふ文字である。而して最も自由に使用出來る子音 (Consonant) R と結び付ける事を決めた。

Nevermore

Refrain の Sound が決定した以上は此の Sound を持つ言葉を擇ばなければならない。而して上記の敍述からその言葉は Melancholy でなければならない。此の目的で自分は直ちに Nevermore を求め得た。

此の點に於て Poe はぬけめがな

乍併此の Nevermore を繰返して用ゐる事は困難だと考へられた。けれども熟考して見ると自分は此の繰返へしの單調を人間によつて云はれるものと云ふ先入觀念があつたからいけな

る、nevermore は會話にしなくても用ゐられるのである。

いので若し單調な言葉を繰返へすものに云はせれば不都合はない。自分の頭には直ちに鸚鵡(Parrot)が浮んだ。けれども同じく人語を語り且つ力強い tone を持つ Raven の方が一層適切であると思ひ決めた。

惡の兆(凶兆)の鳥と云はれる Raven が單音の Nevermore を各 Stanza の終りに繰返へし、その詩は百行で且つ Melancholic な調子のものと決定した。では何が人類共通に最も悲しい事であるかと云へば言下に Death と答へる事が出來る。そうしてその悲哀は美しくなければならない。美しい女の死と云ふ思想は續いて起つた。殊に愛人の死でなければならない。玆に自分は二つの對立する思想を得た。一は愛人の死を悲しむ男、一は Nevermore を繰返へす Raven である。之を自分は結合しなければならない。

Nevermore を繰返へさせるにはどうしても愛人(love)の間に鳥が答へる他に詮方無い。

自分は初めに Refrain をそのまゝ殘しながら思想の變化を求めなくてはならないと云つた。此の目的の爲めに第一の Lover の問は無意味に近いもの、第二は少なく無意味、第三は一層有意味にする。遂に Lover は Nevermore なる言葉の繰返へしによつて、その言葉の Melancholic なる本來の性質によつて、迷信に驅られる。次第に質問は性質を變へて彼が心中解決を求めてゐる問ひになつてゆく。しかし之は惡の兆なる鳥を恐るゝ心からばかりではない、

半分は Nevermore から受ける凍りの如き快感が最も樂しいものに思はれて來たからである。

Climax

自分はかゝる階梯を經てから直ちに Climax を考へた。即ち最も悲痛なる問ひとそれに對する最も力強き Nevermore の答へらるゝ一聯を最初に考へたのである。此場合には詩はその始まりに終りを持つと云ふ議論が是認される。そうして自分は左の如く先づ書下した。

"Prophet," said I, "thing of evil! prophet still, if bird or devil!
By that Heaven that bends above us—by that God we both adore— 云々、

climax を初めに書下した理由

自分は何故に Climax を最初に書下したかと云ふのに Climax を最初に書く事によつて第一には Lover の間(Climax 以前の)をより自由に變化させる事が出來ると信じ又第二には Rhythmical Effect に於て此の一聯を越えるものはないと斷定的に決意しやうとしたのである。若し自分が他の Stanza をもつと力強く書ける場合にも自分は Climax の效果の爲めに彼らを弱めるだらう。

場所

次に Lover と Raven を結合する場所方法を考へなければならなかつた。第一に自然なのは森林或は原野である。乍併場所を決定する事は繪畫に對する額ぶちの關係で重大なものである。故に單に自然と云ふやうな事で決定し去る事は出來ない。自分は Lover を彼の部屋に置く事にした。その部屋は亡き人が屢々訪れた追想の爲めに彼にとつては神聖なものになつてゐ

るのである。部屋は立派に裝飾されてゐる事にした。それは美でなければならず Poetical でなければならないと云ふ理由から來た。

鳥の出現

場所が定つた上は鳥の出現を考へなければならない。自分は直ちに窓を考へた。そうして翼で窓を打たせる事は讀者の好奇心を引く爲めに考へられた。そうして Lover は窓を開くと戸外は闇である。彼には亡き人の魂のおとづれかとも思はれたのだ。

嵐の夜

自分はその夜を嵐にした。第一には鳥をして戸を叩かせるため第二には室內の嚴肅な沈鬱と對象させるためであつた。自分は鳥を Pallas の胸像の上に棲らせた。大理石と黑い鳥との對象の爲めである。Pallas を擇んだのは Lover の學者である事を示す爲めと Pallas なる Sound の響きよき爲めである。又詩の中程に於て自分は終局の印象を深める爲めに Contrast を用ゐた。例へば鳥の出現を fantastic にして又直ちに最も serious にした如きである。即ち

But the Raven, sitting lonely on that placid bust, spoke only etc.

此の時には Lover は最早や諧謔の氣持を失つてゐる。彼は鳥を怖ろしい惡の兆として見る。彼は鳥の眼光の胸の奧底に燃えつく心地を感じる。

Eureka

Dedication　余を愛し余も亦其人を愛する數人に——思索するよりも寧ろ感ずる人に——夢みる人、現實に於ける如く夢に信仰を置く人に——余は此の眞理の書を捧ぐ。然しながら眞理を語らんが爲めに非ず、眞理に結び付ける美の爲めに。之は藝術の作品なり。余をして Romance と呼ばしめよ、或は又詩と呼ばしめよ。

茲に余の述ぶるは眞理なり、故に朽る時なし。或は萬一朽ちんとする事あらんも再び永久の中に蘇生らん。さもあらばあれ余の死後に於て此の書を詩として見られん事を余は希望す。

The Poetical Principle

The Genius of Poe: by Richard Henry Stoddard.

或作家を完全に了解するには其の Life と作品と兩方を研究しなければならない。此の研究をすゝめるには二つの異れる方面からされる。即ち一は傳記者として作者が語らんとしたのは何であるかを研究し、他は批評家としてその作品の價値を評價する事である。Poe の天才は三つの方面にそれ〴〵發揮された。即ち詩、小說、批評である。彼は少年時に先づ詩を作つた。それは年少詩人の何れもと同じく彼の崇拜した詩人の摸倣であつた。此の崇拜せられた詩人は Byron である。Poe は Byron の精神的 gloom に捕はれ、Byron の人間嫌ひをうけつぎ Byron の絕望を身に感じた。彼の處女出版の詩は全然 Byron 調であつた。(Tamerlane) 第二集も殆んど少數の注意を引いたばかりであるがその中には Helen, Israfel, The Sleeper, The City in the Sea の如き完成されたる小詩編が含まれてゐた。而して此の集は彼の天才、獨創及び如何なる方面に秀でゝゐるかを確證した。彼の範圍は寧ろ狹いがその狹き範圍內に於て豐富なる想像を逞くした。之等の詩には後年のものに見られぬ美しさを含み Romantic 派に屬し吾らの心に與ふる印銘は鬱憂の感情であつた。

此の感情は詩作の目的の爲めに作爲されたものか彼が自然の感情であるかを爭ふ者もあるだらうが、之は完全に結合されたものと見る可きである。彼は最初から詩はかゝる要素から成立ちかゝる出來榮えを持出す可きものと心に定めてゐた。而して彼の理論は彼の作品と一致したものであつた。Wordsworth の詩に見え又 Arnold が詩は人生の批評なりと定義した如き教訓的要素は Poe の目には罪惡であつた。彼は此の誤

謬を看過する事なく又永久に宥さなかつた。Poe の定義に從へば詩は "The Rhythmical Creation of Beauty" である。而してその價値を決定するものは "趣味の他にない" "Intellect 又は Conscience と詩の關係は單に傍系的のものに過ぎない" "義務眞理の如きものとも偶然關係する丈で本來並立す可きものではない" 最も純なる最も崇高なる最も強き快樂は美の靜觀瞑想にある。而して美の靜觀瞑想によつてのみ吾人は吾人が詩的感情(Poetic Sentiment)と稱する精心(Soul)的快樂刺戟(excitement)をうくる事が出來る。此の特殊の感情は Reason の滿足なる眞理の探究によつて引起さるゝ感情と異なり又單純なる Heart の刺戟興奮なる Passion とも異なる。乍然 Passion, Duty の認識 Truth の Lesson も時に偶然の效果を持來す事は否まぬ、唯眞の藝術家は詩を構成する Atmosphere であり眞の要素である美を目的としなければならぬ。

乍然 Poe の美は Tennyson, Keats の美とは全く違ふ。卽ち此の世界の日常目に觸るゝ美でなく幻の世界の美である。しかもそれが影暗き恐怖を伴ふ美である。或は Poe の描く世界は破壞されたる世界であり地獄にゆく他に道なき世界である。

Poe の詩は Heart から描かれたものではない。又 Emotion と稱する可き要素をも殆んど含まない。例之 Poe の女主人公は女ではなく、Abstraction である、想像の目をさへ逃れる程假空な女である。彼等は其の肉體的形式と壓力を缺く。自然描寫に於ても Poe の自然は地上の自然でなく寧ろ雲上の世界である。

Poe の詩の特質は Gloomy な事である。Byron の詩の Gloomy と異る點は彼に於ては言葉として現はれてゐるが Poe のは Atmosphere が Gloomy なのである。Byron によつて得た Gloomy は嘲罵し熱狂すれば癒さるゝが Poe のは癒し難き Gloomy である。乍然苦しめるものは彼の Heart ではない、彼の Soul である。而して解き難き悲しみに覆はるゝ彼の Soul は暗黒と死に色どらる。Byron に見る Bitterness は彼の健康である。然るに Poe は鬱憂を以て貫いてゐる。Byron は Artist でないとも云ひ得る。即ち彼は強く感じた時に直ちに突進んだ。Composition などは眼中になくたゞ Inspiration によつたのである。Poe は暗鬱なる彼の匠意を注意深く描き出した。

Poe の散文の初期のものは Defoe（最初の英國寫實家）の摸倣であつた。彼の正確を尊ぶ癖は時に冗長の嫌ひがある。彼の想像も文體も頗る Mathematical である。Shakespeare の狂人は悲しむ可き運命に弄ばるゝ人であるが Poe の狂人は狂人なる前に罪人である。

Poe と悪魔主義

○Poe の作品の恐ろしさは内容から發したものである。Poe は自分の家以外に安住を見出さなかつた。彼は常に何物か他界のものに襲はれる氣持を抱いてゐた。一人で黒闇の夜に出る事が出來なかつた。

○一夜 Virginia は歌をうたひつゝあつた時 blood-vessel を破つた。

Poe が Virginia を愛した事は殆んど狂的であつた。彼は妻の病氣の烈しい時は絶望に陷り、稍々快方に向ふと希望をつなぎ得た。亂飮によつて此の苦痛を免れたのもあながちとがむ可きではないであらう。

○Poe が Philadelphia から New York に移つた時の狀體は彼が Mrs. Clemm (一人後に殘つた) に寄せた手紙が物語る。

愛する母よ。New York Sunday Morning 七月七日朝食後、

吾々は今朝の食事を終つた。(略)

Sissy (Virginia) は一寸も咳をしない。波止場に着いた時はひどい雨であつた。私は彼女をボオトに殘して上陸した。傘を買ふのと、下宿を探す爲めである。自分は一人の男が傘を賣つてゐるのを認め一本二十五仙で買つた。自分は Greenwich St. で下宿を目付けた。その家は石の階段があり Brown に塗られた柱を持つポオチがある。數分で約定をして自分は馬車をやとつて Sis とのころに歸つた。自分は三十分も彼女を一人殘して置かなかつた。彼女は自分の早く歸つて來たのに驚いた。キット一時間はかゝると思つてゐた。ボオトには他に二人の婦人がゐたから彼女は少しも寂しくはなかつた。二人は部屋の整ふ迄一時間ばかり下

宿の一間で待つた。家は古く南京蟲が多さうである。(手紙破れてゐる)食事は非常に安い。こんな安いところは見た事がない。若し Kate (Catterina, the cat)が見たなら faint するであらう。昨晩は強くて熱い非常にいゝ茶を飲んだ。wheat bread, rye bread, cheese, tea-cakes (elegant), a great dish (two dishs) of elegant ham, two cold veal それは山のやうにうづたかかつた。三皿の菓子。此處にはもう飢え死の恐れはない。おかみさんは心切で吾々は直ぐ家庭の氣持がした。亭主は肥つたいゝ老人である。八九人の下宿人がゐて中の二三は婦人である。servants は二人ゐる。朝食には excellent flavored coffee, 強く熱いのを持つた。veal cutlets, elegant ham & eggs & nice bread & butter.

自分は曾てこれ程豐富な朝食の卓についた事がない。私は貴方に此の玉子と肉の皿々を見せてあげ度い。Sis は非常なよろこびである。咳も出ず寢汗もかゝなかつた。彼女は今私が釘裂きにしたズボンを直してゐる。(略)

自分は今四弗五十仙手許に持つてゐる。明日私は三弗借りにゆくつもりだ。だから二週間は大丈夫くらせる。私も非常に元氣だ。而して一滴も飲まない。間もなく難澁からも逃れる事が出來るでせう。貴方には吾々が貴方との別れをどんなに悲しんだか想像出來まい。

昨日 Sissy は泣いた。貴方と Kate に別れたゝめだ。

○Poe は婦人に對して一種理想化した崇拜を持つてゐた。女も亦 Poe の容貌に聲に魅せられた。

ノオブリイにゐた三邊氏、ノッテイングヒルゲートにゐた澤木氏が圖書館通ひの便宜のため大英博物館に近いタビストック・スクエア角の下宿に引越した頃恰も自分は六ヶ月辛棒したウエスト・ケンシントンの英國陸軍士官の家にゐたゝまれない程の不愉快を感じながら　何時何處に引越さうかと考へてゐた。

去年の秋大西洋を横切つて來た時自分は氣樂な下宿住ゐを希望してゐたが　ロンドンに自分を待つてゐた從兄は此の地にゐる多くの日本人と同じく頭から素人家の下宿にまさる事を說いて、自分には相談もしずに自分が友人の案内で市中を歩き廻つてゐる間にそのウエスト・ケンシントンの家を見て來てくれた。その頃は澤木氏も小泉氏もストレタムの素人家にゐたし　從兄のみならず他の數氏もしきりに素人家をすゝめるので　ツイその氣になつて從兄の後に隨つて右の軍人の家を見に行つた。

場所は閑靜で且つ地下鐵道（アンダア・グラウンド）の停車場にも近く至極く氣に入つたが　かんじんの貸間は間取りには申分がなかつたが家具の粗末な事　殊に古び切つたカアペットの以前の色彩（いろどり）もわからない迄褪せたのみならず　何の

汚點か汚點だらけでそれに滲み込んだ土埃が室内をあばらやの心地にしてゐた。扨て階下の應接間で夫人の云ふのを聞くと　此の家の主人は陸軍機關大佐で今は田舍の陣營にゐる、自分の家は曾て人を置いた事はないが此度の戰爭で物價は高くなり、主人は何時かへつて來るかもわからないので右の空間を貸す事になつた、家族は娘三人　二十三歲、十九歲、十六歲、その下に中學に通ふ男の子が一人他に女中が一人犬と猫が一疋づゝゐるといふ事であつた。犬はいゝけれど猫は大嫌ひだと云ふと、幸ひにもその猫は地下室にばかりゐて階上(うへ)には決して來ないと夫人は答へて笑つた。背も高く肉づきもいゝ夫人は極めて快活らしく見え、食事付の間代がひどく不廉に思はれたので二の足を踏んだが　從兄の話によるとその位は當然だと云ひ且つこんないゝうちはあまりないとしきりにすゝめるので、とうとうその家にきめてしまつた。あまり自分を信用しない從兄は自分の下宿住ゐを心もとなく思つたのであらう。とは云へ自分に於ても三人の娘がゐるといふ事は少なからぬ興味であつた。

觀劇雜感

坪内博士と幸四郎

一名　幸四郎を憎むの記

誰が何と云つても坪內逍遙博士は明治文壇の大立者である。「妹背鏡」「書生氣質」は明治文學史の小說の部に於て、「桐一葉」「沓手鳥孤城落月」「牧の方」はその戲曲の部に於て、「文學その折々」その他はその論說の部に於て何れも重要なる一章を占むるものであると云つても誰も否むまい。しかし逍遙博士は勝れたる小說家である、偉大なる戲曲家である、拔群の評論家であるといふと、そんな事があるものかと人々は四方から自分を取卷いて反對するに違ひない。否實際幾人の人々が前の場合に贊同し、後の場合に反對した事實から自分は出立するのである。

暫時先輩後輩に對する世間の偏見を恐れず我が尊敬する明治文壇の先覺坪內逍遙博士に就いて十數行を費さう。

逍遙博士は勿論藝術家としても偉大であるに違ひないが文學上の新運動の提唱者としてはより多く偉大である。此の藝術家としての博士と新運動の提唱者としての博士との間の劃然たる區別を意識すれば同じ人が彼を偉大なりと讃し、同時に彼を偉大ならずとする表面の矛盾は氷解するであらう。

殘念ながら吾々の明治の文學は政治經濟道德その他のあらゆる社會の制度現象と共に外國から輸入するのに日も足りなかつた時代の產物である。吾々の今日の藝術がよりよき道に進みつゝあるのは繁忙なる海外思潮の紹介者、即ち吾々の先覺の賜である。

文壇の大頭の中で、殊に幾十年一日の如く海外新思潮をいち早く移入する事業につとめてあきないのは森鷗外博士である。今日藝術の野に於て誰か博士の賜物をうけなかつたものがあるかと大音聲に呼ばはつても大丈夫誰一人肩を聳やかして突かゝつて來る者はない。しかし多くは大音聲に呼ばはられた時、初めてかへりみて鷗外博士の偉大なる事業の跡を偲び、自分達がそれに深く感化された事を意識して、扨ては自分も矢張り森先生の影響をうけた一人だつたかと氣がつくのであらう。手から手に渡された黍團子ではなくて空氣の如くそのありがたさをしらずにうけ入れてゐるのである。

反對に逍遙博士の場合には同じく吾等の先覺でありながら大に趣が違ふ。鷗外博士がよき意味に於けるヂレツタントである時に逍遙博士はよき意味に於けるヂンゴイストである。その論文を發表し戲曲を公けにする時は必ず旗さし物を押立て白馬を陣頭にすゝめて名乘りをあげるのである。從つて旗色が鮮明である丈影

響さるゝ者とされない者とも、亦截然と區別される。鷗外博士にお弟子らしいお弟子が一人もないのに逍遙博士の旗下にもてあます程の大衆が常にひしめいてゐるのは、決して後者が學校に教鞭を取つてゐた爲ばかりではないのである。

沒理想論で堂々と論戰した鷗外逍遙兩博士を思ふ時、自分は何時も明治政治史に於ける伊藤山縣兩公の對比を思ふ。勿論無責任なる言論を弄して俗衆を驚かすところは大隈侯に似通ふのは自然だが、その子分の沒分曉を思ふ時一層痛切に逍遙博士を山縣公に比べ度くなるのである。

兎にも角にも逍遙博士の明治文壇に於ける功績を疑ふ者は無い。若しあればその人は偏見者であるにちがひない。

しかし藝術家としては、博士の偉大を誇張する傾向を持つ自分さへ直ちにうなづきかねる。

此處にはその戲曲家としての博士丈に就いて簡短に自分の思ふ事を述べ度い。

自分の友人なる若い戲曲作家が曾て云つた。少なくとも明治の生んだ唯一の戲曲家は坪内博士であつて他には誰もゐない。さう云はれた時一寸首をひねつて、考へてさうしてうなづいた。

その友だちは曾て年少の日に發表した戲曲數編によつて詞藻の詩人であると稱され、自も許してゐたが、一度偉大なる歐羅巴の藝術に親しく接してから彼は戲曲の彫刻的、建築的要素を重んじ單に舞臺面の繪畫的、舒情詩的要素ばかりでは滿足出來なくなつたのであらうと自分は推察して而してこの點から逍遙博士を明治

唯一の戯曲家であるといふ彼の言葉に賛成したのだ。

誰だつたか忘れたが外國の或批評家が戯曲の國民性を論じて歐米以外には詩はあつても戯曲らしい戯曲はないと云ひ、その理由をこれら國民の夢想家であるといふ事に歸し、Lotus Eater には戯曲を構成する能力は無いと彼は論じたのである。

吾々もその Lotus Eater なのだかどうだかしらないが少くとも今日吾々が戯曲らしい戯曲を構成する作家を所有してゐるかどうかは頗る疑はしい。數に於て戯曲を發表した人は澤山ある。氣の利いた、小じんまりした、ていさいのいゝ戯曲はたしかにある。けれどもそれらの戯曲は所謂 paper drama に屬するものが多く、之を上演する時はその貧弱さに驚くの外はないのである。讀んで面白くて演じてつまらない理由はその戯曲が所謂「趣」に富んでゐながら戯曲の確實性を缺いてゐる爲である。歌俳諧に養はれた傳統の趣味が淡い舒情詩を紙面に漂はしても、之を舞臺に浮べる丈の力を持つてゐないのだ。たま／＼成功したと辛うじて許される戯曲は舞臺の上に巧妙なる畫面を見せたものに過ぎない。活人畫の趣きを去る事遠からぬものである。自分も三つの戯曲を書いて何れも失敗した。

甲も乙も巧妙なる箱庭的戯曲の作者である。丙も丁も美しい繪艸紙的戯曲の作者である。うるさい／＼、その悧巧ぶつた技巧がたまらない。

その中に一人、確かに唯一人坪内博士は戯曲らしい戯曲の構成者であると云つても大した差支へはないら

しい。或は戯曲らしき戯曲を構成しやうとして失敗した人だと云つた方が適當かもしれないが、それでも小技巧に納まつてゐる小悧巧な作者に比べる時今の自分は尊敬する。正直の所一切の人間の小悧巧、殊に自分の小悧巧を忌々しく思ふ時無理にも誰かを見附け出して尊敬しやうとする傾向がなくもないのである。

博士の戯曲は多少なりとも他の人々のに比して立體的である事、背景の大きい事などが此の自分の傾向に迎合するところなのである。

自分だつて博士の戯曲を完成品だとは思つてゐない。しかし自分は時に小器用な完成品よりも不器用な未成品に感心する。常々何事か大なる事業を夢みていら〳〵してゐるらしい逍遙博士が、ちいさく納まつてゐる人間よりもありが度いやうに思はれる。博士のもつてゐるがむしやらなところがいゝ、そのヴアルガリズムがいいのだとさへ思ふ時がある。ドン・キヨオテの戀しい時も吾々にはあるのである。

無題一

狭い庭にも秋の姿がいちじるしくなつた。子供にせがまれて作つた瓢箪池に、縁日で買つて來た金魚の生殘つたのが力無く泳いでゐる。以前に住んでゐた人の丹精した草花も、手入れが悪いので荒れてしまつた。不規律に莖の延びた日向葵もひからびてしまつた。垣根の際にはびこる毒たみや鐵道草の上に、やぶからしや烏瓜の蔓が執念深く絡みついてゐるのにも枯色が目立つて來た。土の肌がしめつぽくなつた。

壯吉は椎の木の下で手紙を燒いてゐた。いろいろの手紙の中には、見も知らない女の讀者から來たものもあつた。今の事では無く、ひとむかし前の事だけれど、若い女に特有の思慕の情を託したものが多かつた。作品に感激して夜どほし泣いたとか、我身の上の事としか思はれないとか、無批判に感動した訓練の無い心をそのまゝ記したものもあつた。寫眞をくれとか、半巾をくれとか、交際してくれとか、内弟子にしてくれとか、お側で御世話をし度いとかいふものもあつた。名前の下に血判をしたものさへあつた。壯吉は、それ程感傷的な戀愛小說家として世に出たのであつた。

槻子も愛讀者の一人たつた。突然手紙を寄越した一人たつた。はじめて訪問をうけた時、壯吉は相手の容姿の美しさに打たれてしまつた。槻子の兩親の手ごわい拒否にあつたが、壯吉の異常な熱情は之に勝つた。その妻は今も美しい。壯吉はほんとに美しいと思ふ。美し過ると思ふ事がある。肉躰の美しさに、心が匹敵しない不滿があるのだ。からだに比して顏の大きくない、上半身よりも下半身の長い、すらりとしてゐて肉づきのいゝ、きめのこまかい、生際の烟つたやうな、瞳の色の潮に濡れたやうな表情のいきいきした美しさは、寧ろ年をかさねてかへつて深さを増したやうに思はれる。永久の若さを失はないといふ奇蹟が妻によつてはじめて此の世界に示されるのでは無いかといふ妄想さへあつた。

そのかはりに、妻は隨分熱情をもつてゐたらしい文學にはまるつきり無關心になつた。芝居や音樂會には行くけれども、本を讀む事はない。壯吉の書く小説さへかへりみなくなつた。作家がひとつの作品をしとげる間の苦悶、勞力、不機嫌——すべてがはで好の妻の喜ぶ世界では無かつた。おどむさい姿をして机に嚙りついてゐる壯吉と、着飾つて人中へ出て、人の視線を身に浴び度い妻とは、年中方向の違ふ心をもつてゐた。違ふ丈、それがはげしくぶつかる事があつた。妻は自分といつしよになつた事を悔てゐる——その考が壯吉の頭を去らなかつた。彼は妻の美しさを憎む事があつた。美しい妻を持つ自分を忌々しく思つた。

「そんなに澤山の手紙の中には女の人のもあるんでせう。」

茶の間から出て來た妻が、緣側に立つて聲をかけた。妻は珍しく機嫌よく目で笑つてゐた。

「ある。」

答へて苦笑した。

「あたしのも燒いちやつた？」

壯吉は一寸羞しさうに首を振つた。

「ほんと？　見せて頂戴。」

默つて懷からとり出した一束の手紙を妻の手に渡した。

「まあ、みんなとつてあつたの。」

妻は若々しい聲を出して、緣側にぺたりと坐つた。いろいろの封筒の中には、わざと男名前で出したのもあつた。その名前は、壯吉の作品の主人公の名前だつた。

あれこれとより出して讀み出した。どうしてこんな手紙を書いたのだらうと不思議に思はれる程、遠いむかしの心持が目の前にひらけて來た。

壯吉はステッキの尖で燃え殘る文殼をつつきながら、まだ懷に殘つてゐる手紙に氣をつかつてゐた。一心に、少女時代の手紙を讀んでゐる妻は、むかしの心持をよみがへらせ、新鮮な果物の水々しさを姿體に描き出してゐた。姙婦のなまめかしさが、肩や腰の邊に異樣にまるみのある線を見せてゐた。その妻にかくして、どうしても燒捨る氣になれなかつた手紙なのた。別段外に戀人があつたわけでは無く、逢つた事も無い。

寫眞を見た事も無い。それでも、その人の姿から聲迄、壯吉は自分の想像ではつきりと作りあげてゐた。えにし――人間には見えない何かによつて繋がれてゐる心と心とがある。それだと思ふ事があつた。

風が、梢から來て最後の火炎をあげた。燃殼がひとしきり土の上を生きもの丶姿で、かけ廻つて、ひたと靜まつた。細い烟丈が、ゆらゆらと立つばかりになつた。壯吉は、晴れた秋の空を仰いで深呼吸をした。

これで一仕事終つた。一仕事終つたといふ心の變目を力にして、制作をつゞけよう。彼は自分の部屋に戻つて、机にむかつた。

雜誌へ約束した日は迫つてゐる。出産の爲になくてならない金を、今から少しづゝでも用意して置かなければならない。一層嵩む月々のもの入りに壓迫られるのを思ふと、自分の疲れてゐる事を知つた。いつたん手にした洋筆を置いて、烟草に火をつけた。いつぱい口にふくんだ烟を、原稿紙の上に吹きつけると、吸ひつくやうに這つて、やがて思ひ切り惡く天井に上つて行つた。

「あゝ面白かつた。」

はしやいだ足音で妻が來た。上氣した、うるんだ顏をしてゐる。新婚當時に見た、挑むやうな美しさがあつた。

「ほんとに熱烈だわ。まるであなたを神樣のやうに思つてゐたのね。あなたがゐなくては生きてゐられないやうな事が書いてあるわね。」

ぴつたりと體を接して坐つて、妻は手紙の束を壯吉の膝の上に置いた。
「そりやあさうさ。お互樣だよ。」
「さういへばさうねえ。あなたもあの時分は熱情があつたわ。毎日手紙を下すつたわねえ。」
妻の言葉には嘆息の響もまじつてゐた。
「とつてあるかい。」
「何？　手紙？」
反問しながら、妻は首を横に振つた。
「僕の方が感心だなあ。ちやあんとしまつて置いたんだから。」
「あなたは無精で、机でも本箱でも整理なさらないから殘つてゐたんだわ。あたしは、ひまさへあれば古いものはどうにか片づけてしまふからなのよ。」
「だつてたゞの反古紙とは違ふぢやあないか。」
「ですけれどねえ、みや子が大きくなつてから讀んだりしたら變でしよ。だから破いて捨てゝしまつたの。」
壯吉が自分の手紙を殘らず取つて置いてくれたのに對して少し申譯は無かつたが、破いて捨てた事を肯定させるやうに、相手の膝に兩手をかけて、全身の重みをもたせかけた。無精髯の横顔に、生あつたかい呼吸が感じられた。壯吉は自分の身の處置に窮して、疊の上に仰向に倒れた。

「あなた、銀座へ行かない？」

しばらくして、突然妻は壯吉の胸に伏せてゐた顏をあげていつた。何の脈絡も無かつたので、壯吉は眼をつぶつたまゝ返事をしなかつた。

「ねえ、銀ぶらしない。」

甘つたれて、壯吉のからだを搖つた。

「今日は駄目だ。原稿の〆切が迫つてゐるから。」

「一時間でいゝのよ。あたしみや子の外套を見に行き度いの。」

いやだといふのを無理にもおしふせて、自分の心に從がはせるのが、妻の大好な手だつた。壯吉は常々それを面白くなく思つてゐるので、返事をする氣にならなかつた。

「又だんまりね。よくない癖だわ。癖つていふよりも根性ね。」

これには壯吉も一言も無かつた。年中創作の事ばかりに頭を惱ましてゐて、はたから餘計な事をいはれるのは、他人には想像のつかないうるさゝだつた。妻の饒舌に對して、ふだんから默つて答へない事が多くあつた。

「外套を買ふのなら一人でいゝぢやあないか。何も御ともをつれて行くにはあたるまい。」

「だつて此前洋服を買つて來た時だつて、あとでいやな柄だとか、玉乘の女の子みたいだとか、惡口ばかり

云つてたゞやありませんか。だから今度はあなたに見て貰ふんだわ。
「駄目だよ。原稿を稼がなければ月末に困るからね。」
「たつた一時間か二時間出たつてもよさゝうなものですがねえ。感興が無い感興が無いといつてゐて、うちにばかり引込んでゐるからいけないのよ。だから作品迄だゞむさくつて、常識的だ常識的だつて非難されるんですよ。ちつとはなやかな景色でも見るといゝんだわ。」
先刻から、一時のなごやかな感情に醉つてゐたのはすつかりさめてゐたのだが、惰性で壯吉に體をもたせかけてゐた。輕く舌うちすると身を起して、亂れた襟を合せて立上つた。
茶の間の方へ行つたと思ふと、
「みや子、みや子。」
と甲高い聲で、裏の空地で遊んでゐる子供を呼ぶのであつた。
妻はさんざん當りちらしてから、子供を連れて出て行つた。
壯吉は手ひどく叱られた犬のやうに、ぴつたりと机に胸をつけて原稿紙にむかつたが、心は洋筆の尖に集中されなかつた。妻の殘して行つた言葉が、彼の頭腦を一層亂した。
感興が無い、感興が無いといひながら、朝から晩迄机に噛りついて原稿を書く自分の姿も長い年月のものとなつた。人生の倦怠を主題として描く自然派の流行に反抗した新羅漫派の新進作家として打つて出たのも、

一昔の事となつた。戀愛至上主義に根ざす精神から、盛切れない熱情をそのまゝ紙の上にさらけ出した作品を、評壇の或者は讃し、或者は罵つた。若い愛讀者は、殊に女性が多かつた。

それが何時の間にか、むかしは自分があきたりなく思つた平凡な日常生活や、作家の身邊の雜事を描く作風に移つて行つた。意識的に努めて變つたのでは無い。戀愛に勝つて結婚し、家を持ち、子供が生れ、原稿を書くそばから金に替へなければならない生計が先になつた。曾ては、其の爲には飢ゑてもいゝと覺悟してゐた文學がおのづから從になつた。そのかはりに、永い間の文筆生活が、どんな些細な事でも、小說に描き上る習練をもたらした。はで好な妻の無算當な家政に追はれながらも、どうにか筆一本で飯を喰つて來た。常識的だ、熱情が無い、型にはまつてゐると極り文句で片づけられるか、或は全く默殺されてしまふのが、彼の文壇の存在だつた。讀者も批評家も、何の喜びを感じない。否、作家自身、制作に對する熱情も感興ももつてゐなかつた。

壯吉は久しく寂しい心境に惱んでゐた。藝術制作に夢中になれた時代の事を、小學校で敎はつた唱歌の如くきれぎれに、且なつかしく思ふのであつた。あの頃は、確かに手法は幼稚だつたが、心の奧底には尊い藝術の芽生があつた。順調に育たなかつたのだ。しかし、もう一度親切に培ふ心になつたら、恐らくは……

壯吉は、はつきりと自分の將來をきめてかかる丈の勇氣が無かつた。それよりも、過去の自分をかへりみてなつかしむ心の方が深かつた。懷にかくしてあつた手紙は、殊にその感慨を深めた。

突然見も知らぬわたくし風情より御手紙を差上ますはしたなさを御咎なきやうくれぐれも御願ひ申上ます　わたくしは近き頃迄相模の海近き町に住んで居りましたので御座いますが永々わづらつて居りました兄も遂になくなりましたのでわたくしども兄妹が生れました時から世話をしてくれました婆やとともども久々で郷里へ歸りました　わたくしから申してはをかしう御座いますがわたくしの家はこの地方では昔から知られた家柄で御座いますが父も母も若死致しましたのでわたくし共兄妹は乳母の丹精で育てられました　兄が中學を出ましてから學校の關係で東京に參りわたくしも女學校へ通つて居りましたが先年兄が病氣のために中途で學校をしりぞきましたのでわたくしも退學致し婆やと共に看護に盡して居りました　なさけない事には兩親とも肺をわづらつて死に兄も同じ運命を免れませんでした　生きて甲斐なきわたくしのやうなものが一人壯健であとに殘りました　郷里の家の管理は叔父が致してくれて居りましたのですが如何いふ風になりましたのか山林なども大方は人手に渡つた事を近頃やうやく知りました　祖先から傳はつたものゝ失はれるのは如何にも心細く又申譯なく思はれますけれども時世なれば致方なき事とあきらめて居ります　たゞわたくしが只今困つて居りますのはわたくしに養子を迎へねば家の血統の絶る事で御座います　實は叔父からさる人を迎へよと強ゐられて居りますのですがわたくしはもう一度東京へ出て勉學致し度いと思つて居ります　このやうなつまらぬ身の上話を申上て御羞しい次第で御座いますが是非とも先生に御きゝずみ願ひ度い事が御座いますのです

なくなりました兄は幼少の折から詩歌小說を愛誦致しましたが何時からか先生の御作に深く心を動かし一册の本に纒まりましたものは申す迄も無く雜誌新聞に御載せになりましたものも殘りなく拜見して居りました　ひと頃は每日古本屋をあさり每晩夜店を探して居りました　わたくしも兄のおかげで先生の御作をもれなく拜見する事の出來ましたのを一生のしあはせと思つて居ります　わたくしには批評がましい事は申されませんが先生の御作を拜見して居りますと心が美しくなるやうに存ぜられます　先生の御作の中の主人公はなんといふ純情の持主なので御座いませう　それは先生の人格の反影なのだと兄は常々申して居りました　兄がどの位深く先生を御慕ひ申上て居りましたかわたくしの拙ない筆では盡せません　御作の中には殆んどはじめからをはり迄暗誦してゐたものも御座いました　只今でもその聲はわたくしの耳に聞えるやうに思はれます　兄はどのやうに一心に先生に御目にかゝり度がつて居りましたでせう　そのくせ自分の病氣と不才を恥じて手紙を差上る事さへ出來ませんでした　最後の日の近づいた事を知りました時は殊に先生を尊敬する人間のありし事を御知らせする事なく逝く事を歎きました

臨終の日迄枕もとには先生の御著書が御座いました　もつたいないとは存じましたが先生の御著作を兄の棺の中へ納めました　おろかしきしわざと御考へ遊ばしませうがわたくしどものはかないなぐさめを哀れと思召下さいまし……

壯吉は讀んでゐるうちに胸が迫つて來た。

その人からはじめて手紙を貰つたのは、恰度妻との戀愛の滿月のやうにはり切つた頃であつた。彼は心を動かされながら、たゞ叮嚀に、相手が示す尊敬を楯にして師の敎子に對し、兄の妹に對する態度で答へてゐた。

無題二

江戸兼
女　房
娘
その夫
客　伊勢本
　　西　田
　　濱　野　聲色
多勢

露地の奥。小料理屋江戸兼の店。江戸兼と女房とちやぶ台を中にして江戸兼は茶碗で酒を呑んでゐる。

客の來ないうちにしまふ早い夕餉。近所の人、土間の椽台に腰かけて團扇をつかつてゐる。話のつゞき、

近所の人「へえ、さうかねえ。さういつちやあなんだけれど、兼さんのやうな人が御說敎を聽く氣になるんだから年はとり度くないねえ。」

江戸兼「まつたくだ。だがね、その先生のは御說敎つていふんでもないんですよ。もと〳〵坊さんぢやあないんで、以前は海軍のいゝとこ迄いつた士官だつていふから、つまり素人さ。素人は素人だが、なまじの坊主なんかより學がありまさあ。だから難有い御話をあつしたちにも會得の行くやうに西洋の事だの日本の事だの、いろ〳〵引合に出して理合を說いて下さるんですよ。」

近「へえ、それで何かその方のお宗旨の御本尊樣があるのかい。神樣たか佛樣たか知らないが。」

兼「なあにそんなものはありませんや。あつしにはうまく口にはいへねえんだが、自力でいくんですよ。なんでも此の世の中には天にも地にもいゝ事、難有い事がいつぱいなんだ。ところが人間の方が根性がよくないもんだからそのいゝ事、難有い事を呑込む事が出來ねえ。呑込むつていつては違ふなあ。つまり、そのひとつにとけあつてしまふ事が出來ねえつていふんですねえ。そこでどうすればいゝかつていふと、(坐り直す)かういふあんばい式に坐つて息を深く吸つて下腹にううんと力を入れる。ようがすか。こいつがつまり丹田に力を入れるつてやつなんですよ。さうして頭の中をからつぽにするんだ。無念無想の姿といふ

のになるんです。」(暫時その姿を示す)

近「なる程無念無想の姿か。」

兼「かうするてえと、ふだんいろんなきたならしい事を考へてる頭が、一時にきれいになつちまふ。その無念無想の時は、天地にいつぱいになつてゐる結構な事があつしのからだとひとつになつて自分てものは無くなつてしまふんですよ。」

近「へえ、自分てものがなくなつてしまつちやあ大變だ。どうも一寸腑に落ちないなあ。」

兼「なあに、あつしだつて初手は呑込めませんでしたがね。二度三度と先生の御話をうかゞつて居るうちに段々わかつて來た。さうするとふだんうちで商賣をしてゐる間にも、忙しくて忙しくて爲方のねえやうな時でも、不意と無念無想になる事があるやうになつた。こいつが大先生になると、坐り直したりなんかしねえで、立つてゐても往來を歩いてゐても無念無想の姿になれるつていふんだから大したもんでさ。」

近「だがね兼さん。頭の中が空つぽになつてしまふんぢやあつまらねえぢやあないか。いゝ智惠でも湧いて來るなら結構だが。」

兼「それがさ。無念無想になつた後ではきつといゝ智惠が出るんだから不思議さ。今迄俺にわからなかつた事がちやあんとわかつて來るんだ。他人の腹の中もわかるし、自分のやつてる事もわかる。何十年てもの氣がつかなかつたが、人間てものは自分てものを知らねえで暮らしてゐるのが多いんだ。そいつが此の御

道に入るてえと、急ち目があくんですよ。あつしやあ昨日迄の自分の根性がすつかりけがらはしくなつちまひましたよ。」

近「へえ、そんなもんですかねえ。どうもあたしにはわからないが、おかみさんはどうなんです。」

女房「(さつさと飯をすませて茶をのんでゐる)あたしなんかにはさつぱりわかりませんよ。うちは妙に凝性で、かうだとなると夢中なんですからねえ。」

近「それが兼さんの偉いところさ。人間が正直に出來てるんだから。」

兼「さうぢやあねえんだ。あつしなんか、つい此間迄やつてた事がみんな不正直な事だつたとやうやくわかりましたよ。みんなけれんだつたのさ。」

近「さういつたものぢやあないだらう。何もお前さんのやつてた事がけれんだなんて誰もいやあしないぢやあないか。」

兼「それが皆さんにはわからねえんですよ。」

女「ほんとにあんな事ばかり云つてゝ困つてしまふんですよ。商賣なんかやめてしまはうかなんていひ出すんですから。」

近「兼さんそいつあいけないよ。物事あんまり凝るといけないね。程つて事が大切だよ。」

女「なんですかねえ。お道の方の方におだてられて、先生の代理がつとまる位になり度いなんて云つてるん

ですから。」

洋服の客二人來る。

客甲「今日は」

女房「いらつしやいまし。只今直ぐやります。さ、お前さんも御飯にしなくつちやあ、お客様が見えたんだから。」

客甲「いゝよく。別に急ぐんでもないから。」

兼「濟みません。一寸頂いてしまひます。」

女房の渡す茶碗をうけとつて飯をかき込む。女房は土間に下りて客に盃と箸を出す。

女「お銚子ですね。」

客うなつく。

近所の人「(湯吞の底の茶をのみ干して)どうもとんだ御邪魔を致しました。」

と立上る。

女「まあよろしいぢやあ御座いませんか。」

近「いゝえ。さうしちやあゐられない。これから飯を喰つて一寸廻らなければならないところがある。」

出てゆく。

江戸兼「(飯をすませて)御馳走さま。」

誰にともなく叮嚀に頭を下げる。立上つて板場に立つ。

江戸兼「何に致しませう。」

客乙「(いたを見てゐたが)何かうまいものを貰はうぢやあないか。」

客甲「おい〱、そんな事をいふと叱られるぞ。俺んとこにやあまづいものはねえよと來るんだからね」

客乙「へえ、おつかないんだなあ。」

客甲「なあ大將。こゝのうちにやあまづいものはないんだなあ。」

兼「つまらねえ事をいふなあよして下さい。」

江戸兼不愉快な顏をしてゐる。

客甲「又叱られた。うまいものを喰はしてくれつていふと、まづいものはないといやあがるし、こゝのおやぢにあつちやあかなはないよ。」

客乙「(又板をとりあげて)ねえ、刺身と水貝と潮を貰はうぢやあないか。」

女房「おさしと水貝とうしほ」

兼だまつて庖丁をとる。酒のおかはりと料理が出る。

又一人伊セ本さん來る。

女房「いらつしやい。昨晩は無事に御かへりでしたか。」

伊セ本「ところがあんまり無事でないんですよ。久しぶりで飲んだもんだから馬鹿にいゝ氣持になつちやつて……」

笑ひながら頭をかく。

女房「又はしごですか。いけませんよ伊セ本さん。折角からだがよくなつたと思ふとすぐそれなんですもの。(客甲の方に)こちらは爲様がないんですよ。あんまり御酒をあがるもんだから病氣になつて、お醫者様に禁酒させられたんでしよ。ところがちつとよくなつたつていふんで昨晩うちであがつたんですが、あたしが三本ときめて、それつきりあげなかつたんです。それなのに又他所でべろべろになつちまつたんでしよ。」

伊セ本頭をかいてゐる。

客甲と乙「笑ふ。

甲「ね此調子だ。かみさん迄がみく怒りやあがるんだから」

女房「えゝうちではお世辭は嫌なんですからね。」

兼「(不愉快さうに)おい」

女房「なんです。何かいるんですか」

兼「刺身があがつた。」

　又一人濱野はいつて來る。

女房「いらつしやい。濱野さん、近頃ちつとも來て下さらないんですねえ。」

濱「あゝ、どうも忙しくて」

女房「うそばつかり、通のカフヱに入りびたつてゐるくせに」

濱「知つてるのか。もろにやられたなあ」

伊「おかみさん、濱野さんはすうちやんがゐなくなつたもんだから來ないんだよ。若い方は正直なものさ。」

濱「いけませんよ伊セ本さん。そんなんぢやあないんですから」

伊「なんていひながら染めてゐますぜ。」

濱「そりやあ一寸ビイルの下地があるもんだから」

女「御らんなさい。カフヱでのんだんでせう。」

　めい〳〵しきりに盃をあげる。

客甲「おかみさん娘さんはどうかしたのかい。」

女「えゝ、いつ迄うちに置いとくわけにもいかないもんですから」

伊セ本「すうちやんもお嫁に行つたんですよ。」

甲「そりやあいかん。あの娘さんを失つては江戸兼に來る氣はない。實は今晩もよそに行くといふ此の人を、素敵な別ぴんがお酌をしてくれて、酒がよくて庖丁のきくうちにつれて行つてやると無理に引張つて來たんだが。」

女房「いやな人。すうちやんなんかゐなくたつて江戸兼のお刺身さへありやあいゝぢやありませんか。」

甲「矢張さびしいよ。」

女房「あなたもカフヱの組たね。」

みんな笑ふ。

甲「いつたい何處にお嫁に行つたんだい。」

かみさんがお酣を見てゐるので兼の方にいふ。

兼「麴町です。」

甲「いゝえ、どういふ果報者んとこへ行つたかつていふんだよ。」

伊セ本「御存じありませんかなあ。よく此のうちに來てゐた、頭の毛を長くして、ロシヤ人みたいな服を着て……」

甲「あゝあの酒をのまず、誰とも口をきかない……」

伊「さうですよ。その爲めに此の方なんぞは失望落膽の極……」

甲「カフヱに入りびたりですか」

みんな笑ふ。

伊「此の方ばかりでない、すうちやんの顔を見ないと御飯がうまくないといふ連中は大分ありました。それがね、さういつてはなんだけれど、近頃はとんと顔を見せませんよ。それつてのが、あんまり意外な先生にうばひ去られたもんだから」

女房「よして下さいよ。あたし達だつて何もあんな人のとこへやり度くはなかつたんですけれどね。あんまり眞劍なもんだから恐くなつちやつたんですよ。」

伊セ本「だけど、あの人はいゝ身分の人たつていふぢやあないか。」

女房「そりやなくなつた親ごさんは相當のお役人だつたさうですけれどね。あの息子さんと來ちやあ次男坊だし、新劇とかの、それも役者ならまだしもいゝんだけれど、舞台なんとかいつて、電氣を赤くしたり青くしたりする役廻りだつていふんですからねえ。」

伊セ本「いゝやね、うちにはふんだんにお金があるんだつていふから。お前さん達も左うちわだ。」

女房「はゞかりながら江戸兼です。そんなさもしい根性は持つてゐないんだから」

兼「おい、うしほはいくつだつけ」

女房「えゝとこちらとこちらと、都合三つ。」

すぐに又しやべる

女房「ほんとなんですよ。あちらの御後室つていふんですか、切髪で被布を着てゐようつて方なんですからね、あたし共とは口をきいてやる丈でも難有いだらうつて顔をしてゐるんですから癪にさわるつたらありやあしない。それに親類だつて髯をはやした人ばかりで、女つていやあみんな耳かくしで、いゝ年をして頬紅をさしたり、眉毛をかいたり、中には頬ぺたにわざとほくろをこしらへてゐる人なんかあるんだから、とてもつきあへやあしませんよ。」

兼「うしほあがつた。」

女房それをめいめいにくばる。

伊「なる程ねヽ山の手の野暮なハイカラさんと生一本の江戸つ子ぢやあ、毛唐人と親類になつたやうなもんだ。すうちやんも苦勞が多いだらう。」

女房「もつとも親御さんや兄さんとは同じうちには住んでゐないんです。家作があつて、その一軒をかりてゐるんださうですから。いつたいあの息子さんてのが學校をなまけて芝居なんかしてゐるもんだから勘當同様になつてゐたんですが、それが又うちの娘なんかといつしよになつたんだから一層お覺え不目出度なのさ」

客甲「おかみさん、一寸うかゞひ度いが、あの長髪がすうちやんに惚れてゐたのはわかつてゐるが、すうち

やんの方でもにくからずといふわけだつたのかね。」

女房「さうでもないんですがねえ。」

都會悲劇

會社の移轉がきまつたのを、誰よりも嘆いたのは田阪藤吉だつた。丸の內の原にたつた一軒、煉瓦造の洋館の建つたのは、凡四十年のむかしになつた。冬、一めんに雪の原になると、たつたその一軒の家に通勤する人間と、餌をあさる烏の群だけが、黑い斑點を落す風景だつた。寒い北風が粉雪をまいて吹く中を、頭から外套の頭巾をかぶつた人間が、朝の寒氣の中をとぼ〳〵步いて來て、その洋館の中に姿をかくす。間もなく、洋館の窓々のカアテンがあき、やがてストオブの石炭の煙が、ほそぼそと立ちのぼる、一時間か二時間たつと東からも西からも洋服姿の社員が、頰を赤くし、白いいきを吹きながら集つて來る。たつた一臺、人力車に乘つて來るのが社長だつた。

春は雜草の原になり、かげろふが立ち、子供がばつたを追かけた。小鳥の聲の草ならに朗かな曉、今は外套は着てゐないが、洋服下駄ばきの姿が、原の中のうね〳〵した道を辿つて來て、洋館の中に消え、やがて窓々のカアテンがあき、社員は原中の自然の人の足がふみかためた道を、おもひ〳〵に集つて來、社長の人

力車は、わたちをから〳〵鳴らしながら山の手からいつさんにかけて來た。

夏が來ても秋が來てもその原の道を、いちばん早く通つて來るのは少し猫背の、洋服に下駄ばきの人物だつた。そして又、夕方、社長の人力車がお堀にそつてまつしぐらに遠ざかり、社員が、おもひ〳〵に四散した後、二時間か三時間かたつて、最後のその姿は洋館からあらはれ、原中の道を遠く〳〵ちいさく消えて行つた。

彼は創業以來會社の小使をつとめる、田阪藤吉だつた。藤吉は以前、社長が官員をしてゐた頃、その自用車を曳いてゐた。臺所働の女中といふ仲になり、奥さんのはからひで夫婦になり、場末の町で飯屋を開業したが、商賣はうまくゆかず、間もなく、社長が會社を創立すると、賴み込んで小使につかつて貰つた。會社といつても、普通の家の造作を一寸改造したばかりで、社長は店の帳場格子の中で、大福帳をくりひろげ、手代と小僧と小使とで一切をきり盛した。機械類を外國から輸入するのが會社の目的だつた。

いく度かつまづきつまづきしながら、時勢の進歩は次第に事業の隆盛を見、日淸戰爭後の變動も切拔けて、十萬圓の資本の會社が、百萬圓の會社となり、丸の內のまつたゞ中に、洋館の建築をする迄に發達し、社員の數も百人を越えたが田阪藤吉は矢張會社の小使だつた。

雜草の原にも、段々家が立つた。お堀端には電車が通り、社長の人力車が馬車になり、間もなく自動車に變つた頃は、煉瓦と石とアスファルトの近代都市の心臟が、素晴しい財力を包藏して出現した。あれ程廣か

つた野原にあれ程はひこつた雜草は、今は探しても一本もなく、綠の色は人工的に植えた街路樹だけになつた。たつた一軒、原の一角に聳えた洋風建築は、今では大ビルディングの立並ぶ中に、片身狹くくすぶりかへつてゐた。

田阪藤吉の一生は、此の野原の著しい變革とは無關係に、何の變化もなく、年をとつた。詰襟の洋服の內かくしに、會社の表扉と裏扉の鍵をしつかりとしまひ、時々手を胸にやつて鍵の存在に觸れて見る事が、彼の何よりのほこりだつた。彼は曾て病氣をした事がない。いや、病氣をした事はあつても、缺勤した事はないのだ。從而會社の扉は、數十年間彼によつて開かれ、彼によつて閉された。

「何しろ、あつしがゐなけりやあ、會社の仕事は始まらないんたから」

藤吉はやにのつまつたきせるで大好物の烟草を樂みつゝ、朋輩や、若い社員に冗談めかしていふのだつた。たがそれは冗談ではない。彼が鍵をあづけられてゐるといふ事のほこりを意味するには違ひ無いが、それよりも眞實自分は會社にとつて、誰にも劣らず必要な人間だと信じてゐるのだ。もうひとつ彼の口をついて出る言葉で、若い者を苦笑させるのは、

「うちの會社で創立以來ゐるのは社長さんとあつし丈ですぜ」

といふのだ。每年學校の卒業期に採用される新參の社員は、入社早々きかされるのだ。

「よく辛抱したもんだなあ、社長さんは一年に十萬圓もとらうといふ身分だからいゝけれど、田阪さんはど

うたい、そいつを考へてつまらないと思ふ事はないのかい」
意地の惡い質問をする奴もある。
「そりやあ爲方がないやね。人間の器量が違ふんだからしかたがないさ」
田阪藤吉は彼自身をよく知つてゐた。
「あつしは一生小使さ。さういふ人間に生れついて來たんだから爲方がない。あつしなんぞを社長にして見ろ、會社は一ヶ月と持ちやあしないや。さうかといつて社長さんにあつしの眞似をしてごらんなさいといつたつて一日だつてつとまりやあしない。社長さんは社長さんだから押も押されもしない方なんだが、失禮な話だけれど、小使になつたとしたら、一人前の小使さんぢやあないとまあかういつた理くつださ」
彼は滿足し、ほこりをもつてゐた。
「田阪さんなんかいゝ身分だからそんな事いつてゐられるんだ。息子さんは學士だし、娘さんは一人前のうでがあるつていふし」
仲間の中からは、羨しがられる自分でもあつた。烟草を吸ふ外には道樂もなく、息子は小學校きりで、やめさせ、社長の關係してゐる他の會社の給仕に採つて貰ひ、傍夜學に通つて卒業證書を貰ふと、社員の列に加へられた。娘は娘で、百貨店の賣場につとめてゐた。
「あつしはかうやつて、一生會社に御奉公させて貰へりやあ、外に慾はないよ」

といふ彼の言葉には微塵も嘘が無かつた。
その田阪藤吉にとつて、數十年朝は彼の手で扉を開き、夜は彼の手で扉を閉ざす會社の社屋が狹隘になり、取こわして建直しになるといふのは意外に大きい衝動たつた。
「ほんとにとりこわしになるんですか。うちの會社が」
最初に、小使部屋に茶を呑みに來た社員の一人から噂をきかされた時、田阪は半分は信じなかつたが、みるみる顏の色を變る迄感動してしまつた。誰にも彼にも訊いて見た。最後に彼は多年自分が信頼し切つてゐる社長の前に額を下げてまかり出た。彼は何年にも、天氣氣候の挨拶の外社長と口をきいた事が無かつた。いく度もおじぎをし、暑い頃でもないのに、額の汗を拭いた。
「御用の多いところを恐入ります。いつも御壯健で御目出度う御座います。御屋しきの方でも皆樣御變ございませんさうで……」
重役室の扉の中にはひると彼はほんとに自分のいはうとする事をいひ兼て、室の向ふの隅に大きい机をひかへ、書類に見入つてゐる社長の思惑を氣にしながら、一步も足が進まなかつた。
「てまへどもがおき〳〵うかゞふべき事ではございませんのですが……」
彼はこの室に入つて來た事を後悔してゐた。社長の銳い眼が、眼鏡の上からまつすぐに彼を射た。
「何か用か。」

ふだんから口數の少ない社長の言葉は、咎めるやうに重く響いた。
「はい、別段てまへどもに用などゝ申す程の事はございませんのですが……」
「今一寸忙しいのだ。話があるなら早くいつてくれ」
「はい、まことにあいすみません事で、御忙しいのでございましたら、又別の時にうかゞひますでございます」
「そんならそれでもいゝが、かんたんな事なら遠慮なくいふがいゝ」
「はい、いゝえ、別に申上る事などゝ申す程の事ではございませんので……」
彼はひたすらおじぎをして扉口迄引下つた。
「又御ひまの節にうかゞひます」
どうした事か、萬感こもごも至るといつた感じが、涙になつて咽喉に來た。彼はもう一度ていねいにおじぎをして重役室を出た。
明かに社長は不きげんだつた。一文字を引いた特徴のある唇は、自分の姿が廊下へ消えると同時にきつと舌打をしたであらう。彼は自分の一生をまかせた社長につつぱなされたやうな淋しさで、地下室の小使部屋へ戻つた。
數日後、朝、社長が出社した玄關先で、藤吉は逢つた。彼は玄關の扉の引手に、白い粉をつけてせつせと

磨いてゐた。社長の自動車がとまつたのを本能的に感じて、働く手をやすめてまちうけた。御早う御座います」と口の中でいつて、膝の下迄手を下げておじぎをしてゐる前を、社長は太い杖をかゝへ、リヨウマチのある足を引摺るやうにして通つたが、ふと立どまつて、ふりかへつて、

「田阪」

と呼んだ。

「お前この間何か用のありさうな様子だつたが何た。今ならひまだから」

來るがいゝといつてくれた。藤吉は社長が自分風情に言葉をかけてくれた事ですつかり感激し、ふだんの遠慮に隙も與へず、そのまゝ社長のうしろからかいだんを上つて二階の重役室へ従つた。外套をぬがせ、社長が椅子にかけるのを待つてゐる間も、彼は社長と自分との間に何の障壁もない心持で満悦した。

「さあ、こつちへ來て、話があるなら話してごらん」

社長の聲迄がやさしく聞えた。

「恐れ入ります」

「お前はていねい過ぎていかんよ。禮儀は禮儀で結構たが、用事は早いがいゝ、迅速第一だ。」

社長はきげんよく笑顔を見せた。

「はい、ありが度う御座います。」

彼は心中から感謝の頭を下げた。

「かやうな事をてまへどもがうかゞひますのは全く申譯のない事で御座いますが、實は社員の方達がしきりに話していらつしやるもので御座いますから……」

ふんふんとうなづくやうに社長は上半身を机の上に乘出してきいて居た。

「こん度此の會社をとりこわして、別にふしんをなさるさうで御座いますが、それはほんとの事で御座いませうか」

「ふうん、もうそんな事が噂になつてゐるのか」

社長にとつては意外な事を意外な人間からきいた事だつた。

「實はこの家も古くなつたし、第一手狹でしかたがないからこわして新しく建てるつもりだよ。」

社長はポケットから葉卷を出して火をすつた。紫のけむりが無髯の口からゆら〳〵と流れ出た。

「それがどうしたといふのだ」

「はい、ほんとの事で御座いましたか」

田阪老人は一時に身の老を感じてうなだれた。

「むかしはこんな建物でも廣過る位廣かつたし、立派なものだと思つてゐたがもういかん。今度はひとつ新式のビルデイングといふ奴をたてる。世の中も變つたよ」

社長は殊のほか上機嫌だつたが、田阪は一層沈んでしまつた。

「さういたしますと、とりこわしの間は會社はどうなりますので……」

「一時借家だ。まあ二三年もかゝるだらうからね」

「てまへどもがとやかく申す筈の事ではございませんですが、會社はまだびくともしないのではございませんでせうか。地震の時だつて、方々のビルデイングと申しますのは壁が落ちたり、柱が曲つたりしたさうでございますが、こちらはガラス一枚破れはしなかつた位で、矢張昔の職人の仕事には手をぬいた所はないからだと方々で自まんしてやりましたが、それをむざ〳〵こわしてしまふのは、隨分惜いやうに存じますけれど……」

「いかんねえ、第一これ丈の地面に二階建なんぞは不經濟だ。何事も日進月歩だ、お互にそろ〳〵隱居しなくてはならなくなるぞ」

社長は新築の計劃にすつかり陶醉して、勢よく紫烟を吹くのであつた。

貝殼追放

一

「中央公論」に連載されてゐる谷崎潤一郎氏の随筆「若き日のことども」は筆者が花々しく文壇へうつて出た頃の思ひ出を何の誇張もなく、何のへりくだりもなく、極めて淡々と舒してゐる中におのづから懐古のなつかしさを湛へた奥床しい文章である。作家としての素質、勉強、業績、何を比べても遥かに及ばない私の如きものさへ、やゝ遅れたりとはいへ殆んど同時に呼吸したといふ事で、殊更深い興味を感じるのである。谷崎氏は昭和六年度には「吉野葛」「三日月物語」の如き傑作を發表し、七年度には「葦刈」の傑作を發表して、現在最も力量のゆたかな作家である事を現實に證明した。尤も「三日月物語」は一齊に六年度の代表的傑作たとうたひはやされたが、「吉野葛」と「葦刈」の方は新聞雜誌の批評では寧ろけなされたものゝやうであつた。しかし新聞雜誌に求められて往ふく葉書などに回答するその年度の傑作などといふのは大體誰かゞ聲を大きくして叫ぶと後は引ずられてついて來るのが多いので、「三日月物語」と並稱された永井荷風先生の「つゆのあとさき」の如きは發表當時はさんざん惡くいはれたのが、その年の最後の決算になるといつの間にか稱讃の辭

に埋もるゝ不思議な現象を呈した。それは前にほめた人が×變したのではなくて、前にはいゝと思つてもうつかりほめて間違つては大變だと思つてゐたのが、誰かゞ勇敢大膽にほめたので安心して實は俺も感心したよと名告つて出たのである。「吉野葛」も「葦刈」も、私のやうな文壇圏外の人間でなく、ヂヤアナリズムの波に乘つてゐる人が聲を大きくしてほめたら忽ち雷同するものがあらはれるであらう。

私は各紙が競つて行ふ昭和七年度の創作總決算をやるならば谷崎氏の「葦刈」と横光利一氏の「文藝春秋」に連載した「寢園」を第一位に置く。

「若き日のことども」を讀んで先づ思ひ出すのは、谷崎氏が「少年」や「刺靑」のやうなすぐれた作品を書いた時代だ。私は雜誌「新思潮」で「刺靑」を發見し、非常に感服した。私はまだ小說を書く事など夢にも思つてゐなかつた時たと思ふが、その作品に感激した心持を誰かに傳へ度く、そいつをふところにして當時矢の倉に住んでゐた友人高見澤遠治君をたづねた事を記憶してゐる。高見澤は私の中學時代の友達で、しばらく寄宿舍の同室に起居した事もあり、彼が中學丈で學校をやめ、間もなく家が傾いて好きで集めた浮世繪の直しをはじめ、後には版畫の複製に素晴しい天分を見せて古今無類の名工とうたはれたが若くして死んでしまつた。その高見澤はその頃やうやくぐれ出して、あそびに夢中になつてゐたが、繪畫丈でなく、文學にもいゝ觀賞力をもつてゐた。彼も亦「刺靑」に感心し、はじめ知つた作家の名前をその日以來深く記憶したのである。私は頗るいゝ氣になつて、今度はその雜誌を學校へ持つてゆき、誰彼にすゝめて讀ませた。恰も慶應義塾に永

井荷風先生が教鞭をとられ、「三田文學」が創刊された頃で、私は理財科の學生であつたが、始終文科の教室へ傍聽に行つたり、學生の溜りで文科の學生といつしよになつてゐた。永井先生も最初は私を文科の學生だと思つて居られたやうだつた。その文科の教室へ「新思潮」をもつて行つて勸めたのだが、當時は自然派の運動が文壇を席卷した後で、未だ「三田文學」の存在も認められず、三田の學生も多くは自然派の文學理論に心醉してゐたやうだ。したがつて私の持込んだ「新思潮」も肝心の「刺靑」よりも稍島崎藤村風の自然派に屬する大貫晶川や、下町物の後藤末雄の方がいゝといふものゝ方が多かつた。今にして思へば、谷崎氏の企てた作品のありのまゝの自然らしからず、平面描寫でない事が、自然派にあらざれば人にあらずといはれた時代の文學靑年には不自然なつくりものとしてたやすく認容しがたかつたのであらう。

歌稿

梅

囚はれて朝な夕なに倚る壁のつめたさをもて白梅の咲く

東の海より月の光さす山ふところの梅の林に

紫の肱つきにちる鉢の梅紅なるもなまめかしけれ

川上の氷の中に三月をまちて流るゝ白梅の花

思ひ出はうつろの胸をいろどりぬ老木の梅に花の咲く如

散り初むる梅の香りが畜生の傷もつ足に冷え〳〵としむ

海

うつくしき霧の底よりあらはるゝ海見はるかす富士の頂き

しく〳〵と海嘯のあとの砂原にわく水の如涙乾かず

廻廊の紅茶の卓のたそがれは海のはてより月光のさす

梨子を切る君が小刀の刄にも海の香のする樓に月見る

大海の眞中に身をば投ぐる如子のすがりたる母のふところ

砂原に投げ出したるあなうらに二月の海の銀のしみ入る

荒海を帆かけてはしる海賊の船を思ひぬ落第の子は

蓮の花ひらくが如く窓かけをしぼれば青き海を見る家

たぐひなき不孝の後は大海に勇魚(いさな)つく子のなげきをぞする

――「明治四十四年二月詠草」

櫻

かりそめに櫻の散るをかなしめる若人なればみづからを泣く

汗ばみて春の風吸ふ馬の背のちさき眞(まこと)に花ふゞきする

春さりて櫻の花のちるごとにうつくしかりし母も衰ふ

裾を打つ浪のくづれに切岸(きりぎし)の櫻の花のちりそめしかな

切岸をとかげ走りてくづれたる砂のあとより山櫻ちる

口のはた紫にして櫻のみあらそひし日をおぼえ給ふや

白瀬等が南の嶋につきし日にこの故鄕の櫻花咲く

雨

音も無く時雨のすぎし森林に囚徒の入りし後のさびしさ

すぎし日の罪と悔とをうちかこつ物乞(ものごひ)の如軒に泣く雨

そのかみの祖母が添寢の夜語(よがたり)のなつかしさもて春雨を聽く

しめやかに破三味線の音もこめて下町の灯に春雨の降る

祭の日降りくらしたるはかなさかたま〱逢へば涙流せる

あなをかし狐嫁入りする日かとはやせばまたも泣笑ひする

——「明治四十四年三月詠草」

誕生

祝はまし二なき母より二なき子をこの日の本が得たる喜び

新しき領土を得たる國民の喜びをして誕生を待つ

千人の中の一人の稀人(まれびと)を櫻とこそは呼び玉へかし

竹取の翁のしたる驚きを千歳(せんさい)の後さくら子に知る

いかめしき里の父より喜びの電報來るつばくらの如

春の夜にけむり出しより忍び入る星の宿りし瞳はらまし

若人が孔雀と呼びしたをやめを母とし生る春のなかばに

美しき母に似たるを第一の幸とする少女子となれ

天地に春は來りぬこの家の生家（うぶや）の窓をもれし聲より

母に似て美しき子がたぐひなききらびやかさよ花を名とする

千人の姫の眞中にはやさるゝ王の冠の玉の如き子

百花も櫻にしかず千人も此幼子にしかずと云ふ父

なれぬ手に父も子を抱くゆく春に又櫻咲くよろこびをしる

いとうすき父となる日の恐怖（おそれ）をば氷の如く碎くうぶ聲

母の手がそとふれし時くれなゐの牡丹の花を出て來し子か

さくら咲く春はうれしやうぶ湯する盥（たらひ）に白き花を散らせば

獅子王の威もてをのこにひれふせとやがては云はん高きうぶ聲

爭ひて若人づれが靴の紐結ぶ少女とならん君かな

大空の雲の絶間を落て來て曉の星を持たりその眼に

はたとせの後のこの子に花の木の一時に咲くと相するは誰

たくらべて姉が産後のおとろへを美しとしぬ雨後の櫻に

はしきやし玉枝夫人が黒髪のすこし落るも櫻子のため

一しきり雨にうたれし花に似て産後は更に美しき君

心地よき初夏の風思はしむますらをの子が高きうぶ聲

つばくらの來るより早くうぶ聲を聞くと賭（かけ）たる本郷の叔母

燕

つばくらの羽よりも濃（こ）き君が髪落ちてなびきぬ朝の日の樣

夕されば問屋の軒にかへり來る母をば待ちぬ子らの燕

美しき少女の群に賄（まひな）ふとつばくら放つ青き空より

ある家の窓より投げし簪（かんざし）が風に流れて初燕かな

一列（ひとつら）に燕の並ぶ電線にそよ風吹けば朝露の散る

燕の子生るあやめの花咲くと五月（さつき）朔日記す日記かな

長雨の降れば今年は七日程おくれて來る軒のつばくら

ふためきて燕の群は渡り來ぬ海の光に目やくらみけん

三越のメッセンジヤアを思はしむ都に來るつばくらの群

自動車のすぎし大路の輕塵の中を燕の持て來る夏

夏の風安南國やつばくらの群にまぢりて海越えて來ぬ

うらゝかに大どぶの香の漂(たゞよ)へる都大路をつばくらめとぶ

出帆旗風にはためく黒船の帆桁(ほた)に並ぶつばくらめ哉

心中の噂と共に春去れば緣を持ちて來るつばくら

むつかりて馬の背鞍に泣き叫ぶ眞(まこと)をかすめ去りし燕

長病の日毎日毎の衰へのうれひの中に燕（つばくらめ）來ぬ

いまはしきすだれする日に軒さきの燕來（こ）しとて泣きかこつ母

たそがれは露臺に立ちて物思ふ少女の家のつばくらめ哉

數知ずつばくらとびぬねたまるゝ黒髪風にとき放つ時

やうやくに巣立てば親にわかれゆくつばくらの子の入りし白雲

はぐくみて巣立てば親はゆくまゝに子をゆかしむる燕かな

一しきり女工の群がそゝ走る燕も疲れ巣にかへる時

何處より春の燕が持て來しや海邊に落し金のかんざし

十字路の角の柳にたゆたひし燕も去りぬ自動車の後

姉の子は前に後にとりすがり叔父よと呼びぬ燕子の如

——「明治四十四年四月詠草」

百人のうた人ありて百人がたゝふる薔薇を吾はけとばす

いつ迄も北國訛消えがたきことばの詩人ありてはかなし

山々に蜜柑黄ばみて空青き日のうちつゞく伊豆の十月

こと國のことばを讀めばそれ丈で滿足すなる國民われは

大臣になりそこねたる政治家の古手も遊ぶ敷島の道

フランスの言葉えよまずモオランは越後訛の消えぬ作者か

片かなのア行たゞしくよみ得ざる言葉の詩人ありてはかなし
父母の家に殘せし鳩の子のなつかしさのみくりかへす妻
盃のかけたるふちに脣のふれて心に苦き酒かな
おもしろし短き世をば醉ひしれて吾を葬むる墓を穿たん
醉ざめの寂しき心それよりも喧嘩の後の涙ぐましさ
故しらず犬に心のひかれけり霰のふりて踊る夕ぐれ
折あらば家を出んとねがひたる少年の日の夢もなつかし
かへりみて内にやましき心持人に抱きて秋もふけゆく
わが知らぬ吾の噂をきく時のうら寂しさは吾のみぞしる

月末の月給日をば指折りてまつ身やがては四十となるらん

金づかひいとゞ荒きもはかなかり夜どほし物をかくもそのため

十五年人によまれぬ小説をいくつか書きてなほかきつゞる

地震火事暴力沙汰の絶間なき國に生れていのちめでたし

人二人寄れば必ず喧嘩する此のしま國の春の賑はひ

よき人を探し求めていざやいざ春の野原に草をつまゝし

大らかにのぼりし月とたゞ吾と仲よくくらすこの世かと思ふ

みすゞかる信濃の國の赤なすのふくめる露は凉しかりけり

しなの路の初秋の風ふと想ふたゞうもろこしのあまきあぢはひ

家主が遠き故郷の山つとのわかたれし日は酒すごしけり

晩酌のなかばに友の來る時は心嬉しくおかはりをよぶ

一合の晩酌の量ものたらず食後の卓に蠅どもを打つ

——大正中期より昭和初頭

鬼薊待宵草のはかなげに咲く庭あれて住む人もなし

十年程住む人もなくあれはてし家のめぐりに月見草咲く

隣家は富限ときけば引越のそばもくばらずその日草摘む

素はだしの子がかけ廻る靑芝の外に木のなき庭のよろしも

東京のなかばをのぞむ高臺に貸家ありたる夏の喜び

見はるかす本郷神田日本橋日暮れて競ふ赤き燈火

鬼あざみうす紫の花をつけ小笹かくれに春を見送る

桐の花咲けば借家のうす暗き庭には虫の飛びて光るも

月あかり家々の屋根に置く露にうつりて靑き東京の町

廣告の風船あがる南の空の彼方に海見ゆらんか

春來れば土筆つばなの萌え出る樂みをかけて借りし家かも

夕されば椽の端ゐに音しるく遠くにあがる花火を見〔原〕ゆるも

崖下の家々の窓あけはなち女も肌に風を喜ぶ

東京の空はも悲し塵深く銀河も見えず秋は來ぬれど

廣き家に住めば我が兒は喜びてたつきもしらずかけてめぐるも

下町に夕立ふると崖に立ち見てあるうちに濡れもこそすれ

泣きわめき父の頰げたをたゝく迄兒はすこやかに生ひたちにけり

青蛙小籠に飼ひて朝な朝な寢起きに見んと子はむつかるも

母親のかほそきうでに抱きあまる子が湯上りの眞裸もよし

妻と子は潮浴びにゆき留守ゐする身をもてあまし草に寢てゐる

高臺にはじめて住みて月青き空近みかも雁なきわたる

かれ〴〵になりて尙咲く植木やが盆にくれたる朝顏の花

あきびとのあるじは人の世のうさにゆくえをしらぬ家を借りて住む

家々の瓦の上に夏の日のかゞやくを見て氷水のむ

風吹けば崖を覆へる名無し草葉ずれ〳〵に羽虫飛び立つ

古鼠夜な夜な騒ぐ枕上こちたくもれる酔ざめの水

芝よりも雑草多くはびこりし庭の月夜にしげき虫の音

深川か本所かしらず遠霞たなびく果てを飛行機の飛ぶ

寝て見れば芝生にまじる草あやめ風にゆるゝもあはれなるかな

蜻蛉とる吾子がふみたる草の花今朝は早くも萎れけるかな

湯上りの裸身をもて逃げ廻る子供の尻のうす青きあざ

兒にひかれ九段の坂の中途なる鳥屋の前に佇むわれは

犬と鷄鳩十姉妹鯉金魚蛙まで飼ふ吾子かなしみ

富限者の隣のはした窓あけて椎の葉越に隙見すらしも

――昭和五六年以降

すこやかに稻はのびつゝ高嶺にはなほ雪のこる母のふる里

――昭和十年山形への途上

いとけなき子等をおもへばよひよひの此身ながらも〔原〕

よひよひにならん此身か行雲をみつめてあれば涙しにけり
酒を絶ち肉食を絶ちひたすらにくだ物の汁ぞ吸ふべかりける
此の秋の葡萄はよろしよひよひの血を清めんとひたすらに食ふ

——昭和十五年秋發病後

創作覺書　一

懷劍

空の靑い五月の日は、今、人氣の少ない寄宿舍のガラス窓に中庭の楓樹の若葉の光を映してキラ〳〵と照渡るのである。三棟に分れた眞ン中の自治寮はあらゆる運動家を集めた一棟だつたから斯うした天氣の日の晝の間は一同（みんな）運動場に出拂つて了ふのであつた。

新次は二階の寢室の窓に近い寢臺の上に何もしたくないものうい肉體を投げてあけ放した窓からゆら〳〵と底深く光を含む初夏の空にうすく流れるともなく流れてゆく白雲の行方を見送つた。それもいつか限られた眼界の外に消えて了ふと眞靑な大空を、ちいさな鳥がたつた一羽西の方へ飛んでいつたがそれも亦たゞ靑い空に消えてしまつたのをヂツト見送つて新次は、フト自分をはかなむ此頃の心持に又陷つて行くのであつた。

彼は一寸頭を持ちあげて枕の下にかくして置いた先刻の封書を取出してあふむけに寢たまゝ再びそれを讀

んで見た。

…………

「誰がこんな手紙を寄越したんだらう」新次は陋劣な男の顔をいくつも〳〵思ひ出して見た。而してその小汚ない田舍者の小心な小ざかしい面つきのどれもがこの手紙の筆者として相應しく思はれた。

「馬鹿ッ勝手にしやァがれ」と心の中で叫んだが彼は口惜しい念ひに耐えられなかつた。これ迄にも既に幾度かかゝる手紙が人しれず彼の机の上にのせられてあつた。

けちな心から必要になる「世間のつきあひ」は無邪氣をてらひ快活をほこる學生の中にも其傾向の目ざましい運動家の間にも缺く可からざるものは世辭へつらひであつた。上方職人の群の間に於ては度胸がいゝとか腕ッ節が強いとか云ふ點で立てられる男がある。學生の間では野球選手とか黒帶だとはやされる男が最も恐怖を伴ふ尊敬にあたひするのであつた。

その人々の間に立つて新次は性來の無口に加へて彼が幼年時から受けた父母の家の教育が自かけひきのはげしい小商人の根性にならしめなかつたのであつた。

虚そいつはりを云ふ事は咎を受ける如く叱られた。恥を知る事、男らしくせざる可からざる事、あらゆる「正義」と稱せらるゝ觀念を父母は此の少年に注入する事に全力をつくしたのであつた。乍併彼が強いてへつらふ事をしない、已れを持する態度はやがて傲慢と目され追しようを知らざる口は冷嘲皮肉の源と見られる

に至つた。しかし單に人づきの惡いと云ふ事以外に彼が恨みを買つた重因は一校の模範と稱さるゝ運動家の間に行はれる同性愛を新次は性來の潔癖から厭惡したばかりではなくかゝる行爲を爲しつゝも口に學生の品性の淸からざる可からざるを說く輩が面にくかつたのであつた。

更にその獸のふるまひを受くる位地に立つ年下の少年の美しい瞳の色も曇るかと思ふ迄彼は弱き者が強き者に虐げられるありさまをまのあたり見るに忍びなかつた。

彼は年配から云つても學級から云つても學生としては當然威張る可き上級生に對してもこの哀れなるいけにえの爲に鬪ふ事を避けなかつた。自然と彼の周圍には野獸にねらはるゝ小羊のやうな少年が集つて來た。彼がうけたるはげしい憎しみの原因の重なるものとしてかゝる事も數へる事が出來るのであつた。徒黨を組む事を好まぬ性質は　殊にうしろゆびさゝれるのに都合がよかつたのである。

短い過去の學校生活はたゞ〳〵苦い思ひ出を深く彼の胸に刻んだのである。その古傷に彼は今、又はげしい痛みを增さねばならなかつた。

「汝の將來のため吾々は汝が反省を促さんとするものなりか」

何を云つてるのだかわけのわからない匿名の手紙の小癪な文句を彼は口の中でつぶやいたが、烈しく人を憎むの念に耐えかねて彼はふみのばした足を高くあげて寢臺の椽をいやと云ふ程蹶とばした。而して堅い木片にぶつつけた足からさかしまに上る熱い血潮に彼は湧かへる反抗心を止めかねた。

「汝が反省を促さんとするものなりか。馬鹿ッ。それでどうしやうと云ふのだ。忠告し度い事があるのなら何故面と向つて忠告しないんだ。外四人とは卑怯な腹の中が見え透いてゐる。徒黨を組んで來るなら來い。俺は一人で相手になつてやらう」

新次はあてもなく氣負つて立上つた。

ドシンと床に音高く飛下りると寢臺の下の行李を引ずり出して蓋物をあけた。衣服シャツ等を亂雜に押込んであるその底に手を突込むと彼の手は直ぐにつめたい物にふれたが取出したのはかつて人に見せた事の無い彼が守りの懷劍であつた。

---

(1)鎌倉長谷寺　女歌人　肺病　少年の悲哀　別れ　祖母

(2)祕密結社　ミルクホール　月夜　制裁　其後

(3)友　五人

(4)松永

(5)脚本　父(友人ヲ使フモヨシ)ト息子及小弟妹二人　ピアノ、オモチヤ箱、風船、家ヲ嫌ヒ學ヲ嫌フ、カンドー　父ノ怒　風船飛ブ　見上ル幕　一幕

信一はベッドの上に胡座をかいて海の浪の音を靜に聞いて居た　春の初めの海岸の靜けさは病人の弱い心には堪へられぬものであつた。一年も同じ病院の同じ病室に同じ容態で横たはつて居る身にも　聞き慣れた看護婦の讃美歌の細い聲のふるへさへ殊に身にしみて聞へた

"己は到底助からない" かう思つた時信一はつめたい枕に顔を押あてゝ泣いた　其日からもう幾日過ぎたらう　隣室の女が死んだと聞いたのも　もう二十日の前になつた　毎日毎日夕暮にはキット故鄉の空の歌を唄つた若い女は死んだのである　其細い末のふるへた美しい聲にしみじみと涙が流れてやまなかつた

けれどもとうとう其人の姿を見る機會は無かつた。

病院の門を出ると　カット赤い夕日の眩きに眼の前を通る電車の高い響を夢のやうに聞いた、其一瞬にも彼は院長の重い口からくりかへしくりかへし聞かされた恐ろしい言葉が頭の中をクルクル廻轉してるのを感じ得た、

"己は死んで行くからだだ" かうせつなさに口の際迄出して　彼は涙のにじみ出る眼をしばだたいた、"肺病" 院長の口からかう聞いた時激しいショックに全身が骨になると思つた

山雲の彼方。　芝ゐ一幕。

山の小や。猿や鹿が顔を出す。
青年。親に死なれた青年。
親の妻は若くして姦夫と走る。
巡禮になつて廻り來る。
山の向ふの國の話をする。
やがて出てゆく。
少年彼を追ふ。

草原　妙な學生の話(道德と宗教と眞理との不一致)
窓あかり　犬好きのぢいさん
命　潔癖の學生、キシユクの話
讃美歌　教會、宗教、幼時の追憶
葡萄酒　子供のない妻の心、日本學生、別墅　ヨツトクラブ員　ブドウ酒

石つぶて　ビタークライ オブ チルドレン　幸ふくとはなんぞや
火事　未亡人の話
ハラキリの國民　一幕　廻りぶたい
ケムブリッヂの春　日本學生
サイレン　一學生美術館のサイレンに恍れる　くちつけ　その極つめたいくちつけをほしくなる。女をころす。

「ひぐらし」は友情を求めんとする心と人を憎む心との相抗するを描かんとす。題は他に求めたし。
蜩（ひぐらし）

人
○阿部　高見澤遠治　黒澤利重　鈴木英二　その他、
○寄宿舍。
○逝く春の庭の既に緑に暗きしめつぽい土の上に牡丹のちるは何よりも哀れである。櫻あおさいその他のもろ／＼の花の多くは　むらがり咲く中に一人おのれの美しさをほこりがに咲いた牡丹のプラウドな面かげは

見る間もなく塵埃になつた。
○遠ちやんがモデルにして描かうとて買つて來たバナ、や林檎がその棚の上にあつた。暗い片隅に一筋通ふ光線になめらかな果物の肌は深味を帶びた紅に黄に動かず輝いてゐた。ヂット見つめてゐると彼の心は靜物の世界にはいつてゆくのであつた。
○小學の理科　そのちいさい花をとつて蕋がくと云ひつつ教師の手にむしられるのを見るとうす紅の花の命をいたむ心がすでにあつた。
○仙波さんの家は心の靜けさを求めてゆくところ。
○小幡の死。近づきがたき人。
○教會。五十錢銀貨きりないとしらずにがま口をあけた。恥かしいのでそのまゝ出した。どうぞ又いらつしやいと云ふ。
○上田に(一人でゆく)肺病の友のなつかしくて行つたが黑門の前で入りかねて別れた。その夜おばすて山のふもとの木賃宿の二階の手すりから夕ぐれを見てゐると夕ぐれそのものが自分と別ちがたきものに思はれた。山の端にあかりして登る月の光をかれは涙にぬれた目をあげて仰ぎ見た。(此の友とは別れていさかいしたとすべし。友の忠告に腹を立てゝ"親切は自己滿足だ"と罵る)
○ゐ酒や。醉拂ひに話かけられる。正服角帽の書生も來てゐて僕が醉拂ひに困じてゐる傍から口を出す。そ

うして醉拂ひ共になぐられる。その前に演說をする。「勞働者諸君」と云つたので忽ちポカ〳〵とやられた。
〇ミルクホールの女。ミルクホールが嫌ひなのである。或日女が泣いてゐるのを見た。
〇佐野五郎。
〇中庭の池、南瓜、花、金魚。
〇或時は自然が自己と切つても切れないものとして考へられる或時は自然は敵として考へられる。
〇南湖院。末公を利公にする。
神の示した奇蹟はすべて烈しき熱愛によつてなされた。

懷劍

俊雄が十八の春は心にも肉體にも重い壓力を殘して暮れた、

„彼は何時からか頭の中に朧氣ながら浮んで來た對象の定まらない欲求と、身内を流れる血の時々重たく淀んでは烈しい苦痛を與へる事を意識して來た“

むされるやうな五月の新綠は日に〳〵濃く輝きを增して行く日光の中に廣がつて何處を見ても限りなき力に滿ちた世界の何處におのれを置く可きかわからないたよりなさが身丈もはげしく延びてゆく少年の發育のはげしい血の中にまじり初めた。

目に迫る赤土の崖は日ざしが惡く茂るがまゝに任せた雜木林の根方には熊笹とさつきが一面に植込んであつたが僅かばかりの透き間〳〵に今朝の崩れの霜柱があさましく見えるけれども――

霜に荒れた庭の土も日に〳〵その色の深くなりゆく青空から一杯に漲り落ちる日光に乾いて柔らかに白けてゆけば春は先づ垣根の際の連翹の花に咲き初めた。

俊雄は椽の日あたりに座ぶとんを三四枚並べて敷いてその上に寢そべりながらぼんやりとその花の黃色くまばゆい迄鮮かなのを見て「春だ」と思つた。

ポカ〳〵と蒸されるやうな日なたぼつこは頭から足の先き迄ものうくて彼は讀みかけの本を再び手に取上げる力もなくぐつたりと心地よいものぐさの眼に空にも地にも昨日迄の冬とは變つて心の底から親しさを覺えるのであつた。

彼は庭下駄をつつかけてその連翹のほとりまで歩いて見たくなつた。

底の底からもく〳〵と高まつて來る春の土の柔かさに輕くあがるほこりはかすかに藁の匂ひがして眞新しい紺足袋の上に、ありとしもなく舞ひかゝる。

花壇の傍を通る時ツイ四六日前土を破つて出た水仙の雙葉の間にまだ固い蕾を見つけた。彼は心の中に漲り湧く快感に口笛を吹きながら地ずりに重く花に埋もれた連翹の枝を持ちあげて鼻を押つけて見たが、香りのうすい花はつれなくも冷く頬にふれたばかりだつた。彼はいきなりその枝を力任せに引張つて見た。たわゝな枝は眞直ぐに延びたが咲いたばかりの花はちりもしなかつた。手を放すと大きくゆれてはげしく地を擦つたから土けむりは俊雄の肩より高く舞ひ上つた。

それから間も〔原〕　梅が咲いた。椿が咲いた。そうして沈丁花の強烈な花の香は廣い庭の隅から隅迄春の光さす限りは風のまに〳〵流れた。

その香りも稍うすらいで二月三月の草の花、のびるがまゝにのびんとする緑の中に咲き揃ふその空には梢高き櫻がゆらいで落ちんとする青空に際立つて鮮かに咲いた。

逝く春の參考書

Carver: Sociology

Gieldings: Sociology

Cooley: Human Nature & Social Order

Holy Bible

Hymn

歳事記

見物　赤坂氷川神社　銀座の教會　居酒屋

唱歌をうたひたくなるのは色氣づく頃、鳥獸虫の例を見よ。Carver: Sociology

子供ハ生ケル遊ビ相手ノナイ時に土デ作ッタ人形抱イテ恰モ人ト人ト相抱ク如ク相抱き人と人と口つけする如く口つけする。(Cooley)

山麓

芝ゐ。時代の相違を示す。

淺間の麓。山鳴り。

兄、かつて東上せんとしてならず服從の觀念のために家にゐて百姓となる。

弟、その昔の兄と同年になると家を飛出す。

下婢の戀。

和田津海(浦嶋太郎)　二幕・

同朋　二幕

西暦一千九百十三年――十四年

第　幕

H大學校庭內寄宿舍の一室、

學生二人　一人は日本人一人は米人　二人とも上着をぬいで椅子にかけてゐる。日人は煙艸をふかしてゐる。米人新聞を讀んで聞かせてゐる心。みだしばかり讀む。

米「"Four killed in fire."

Paula Dana Puts on Act II.

日「What that?

米　Paula Dana Puts on Act II.

日　Who is Paula Dana?

米　I dont know I am sure. (急イデ目ヲ走ラセ) Well! She is an actress. Listen! (ヨミ始メル)

Mr. Charles B. George, a mining man from the West, was arrested on September 27 on the

complaint of Miss Gertrude Hancock who accused him of breaking a promise to marry her & send for $ 5.000. Miss Hancock is an actress & is known on the stage as Paula Dana.

創作覺書　二

二人の隱居と花合せ

大きい御隱居とちいさい御隱居は體格も性格も境遇も全く違つてゐた。はつきりいへば仲も惡かつた。

大きい御隱居は今年七十二になりちいさい御隱居は六十三だつた。大きい御隱居は主人有吉恭作の實母で中國の或藩の小身者の夫がのんだくれの上に稀代の好色者で、女といへばどんなのでも手を出し度がる癖がある、若い頃には泌々泣かされたものだつたが、維新になつて間も無く死別れて、たつた一人の息子を育てるのには一層苦しい思ひをした。子供の時から父には似ないで、學問好きで近隣のほめ者たる恭作は江戸に出て大學南校を卒業し、大藏省の役人になつて、とんとん拍子で出世したが、中途から實業界に入つて爾來二十餘年間、方々の會社の重役として押しも押されもしない一流の人物になつた。大きい御隱居の自慢の全部が此の一人息子を育てあげた事であつた。

ちいさい御隱居は恭作の妻の母親で、これは會津藩の身柄の高い武士の家柄だつた。若松落城の時夫は討

死して、三人の男の子と一人の女の子を抱へて、朝敵の身の哀れをかこちながら江戸に出て、昨日とはうつて變つて同じやうに貧困に惱まされてゐる親類同志扶けあひながら、かつかつ暮しを立て三人の男の子は何れも福澤の塾を優等で出たが、大酒の上に人がよすぎ長男は早世し、次男は友達の惡い奴にだまされて連帶の借金につまり、勤務先の金で株に手を出して失敗し、ぬきさしならぬはめになつたゝめ、短銃自殺してしまつた。三男は二人の兄にも增した酒豪の上に、男らしい美男子なので、あつちでもこつちでも、女に惚れられ、身が持てないで諸所方々をうろついては恭作にも散々迷惑をかけたが、最近漸く正氣に立ちかへつて此の數年は朝鮮の元山で運送屋を營んでゐる。たつた一人の女の子で、それが最後の子供だつた〇〇は會津落城の頃はまだ乳呑子だつたが、奇量よしで

間淵正一型？　優等　それがすべて運が惡く段々いけなくなる。それを本人のぐうたらの爲と思はれる。

從兄弟をたづねて救濟を求める。

不良――な奴らが意見をする。

保險會社の事務室に電話がかゝつて來る。多額の契約者死去の報知。扱外務員を呼んで來る。いろ〳〵話をしてゐる。美女來る。書類をもつてゆく。死亡保險金支拂係呆然として見送る。二幕

新聞記者がゆすりに來る。女事務員が夜カフェに働いてゐるといふ事で。

課長恐縮する。金をやる。係員の若い者は差支ないといふ。課長に叱られる。

課長、女事務員の家にたづねてゆく。母親腰巻一枚であいさつ。弟給仕かへつて來る。父は中風。

カフェの場。課長カフェにゆく。生活の爲――ときかされる。

東都保險株式會社の一室。

臨時保險金支拂係ト壁ニ貼ツテアル

主任――一人　世なれた人

主人公係員――一人　不健康な青年

係員　甲――一人　健康な人

給仕　一人

第一、さまぐ\の悲慘な人間が身上の事を訴へて保險金を請求する。

最後に二十四五の美人、

青年心をひきつけられる。他の係も來て親切を見せる。役場もやけ、證劵もやけた。場所本所、

主人が死んだといふ

實はその女の妹夫婦が死んだのである。しかし事實は妹丈は生きてゐる。

二幕目

青年調査を命ぜられてゆく。

郊外の或家の二階。間借。

女とその家の主婦と話をしてゐる。

女の内緣の亭主は惡者。

青年調査を進める。不快にてかい方される。

青年にウイスキイを勸める。

亭主歸る。

三幕目、第一に同じ

青年愈顏色が惡い。

死狀報告の結果支拂決定する。

女催促に來る。小切手を書く。

間——に眞の妹來る。

大正十二年九月一日の地震後間も無く。

生命保険會社の一室。

課長

事務員甲

事務員乙

契約者の遺族多勢

女

事務員甲、乙の机の前の椅子に遺族が腰かけて話をしてゐる。室の一隅には長椅子があつて、其處にも容がゐる。

課長「三十六番の方」

長椅子の連中、掌の木札を見、その中の一人の女立つて課長の前にゆく。背中に子供を結ひつけてゐる。一人の子の手を引張つてゐる。

課「さ、どうぞ御かけ下さい。御用は？」

なか／＼かけず、直ぐに兩手で顔をかくして泣き出す。

事務員甲、しきりに書類を調べてゐたが、
「すると、此の玉置金造さんは貴方の御舍弟さんですね。」
まだ地震の昂奮の去らないやうな男、
男「實の弟です。錦絲堀で洋食屋をやつてたんです。」
甲「おかみさんも死んでしまつて、子供さん丈が殘つてゐるんですか。」
男「え、六歳になる我鬼が一人、不思議に助かつたんです。私も焼出されて九段のバラックにゐるんだけれど、外に身よりもないんだから、引取つてやるんです。うちのかゝあの話ぢやあなんでも錦絲堀のうちぢやあ千圓の保險にはいつてゐるから亭主が死んだつてお末さん――弟のかみさんですがね、お末さんは心配がない、うちでもせめて五百圓位はいつて置けつて年中云つてやあがつたからそれでこちらに伺つて調べて頂いたんです。おかげさまで此のお金を頂いたらあつしが弟に代つて子供は立派に育てゝやります。今度の事ですつかり怖くなつたから、いづれあつしも少しばかりでもはいらして貰はうと思つてるんです。」

招かれざる客

仲人の紋切型の新郎新婦の紹介がすみ、來賓總代として、角菱商事專務德井總平氏の叮重なる祝辭と新夫婦に對する訓話が終つて、さかんなる拍手が起ると、メイン卓の新夫婦の後に立つてゐた食堂主任は、自分

の合圖を待兼てゐる數十人のボーイにむかつて、さつと右の手をあげたのであるが、とたんに、隅つ子の方から又新しく拍手が起つた。

「諸君」

といつていが栗頭が立上つたので、主任は一寸苦い顔をしてあわてゝ合圖をとり消す爲に、あげた手を横にふつた。

「私は新郎三田正太郎の親友を以て任ずる田原可吉であります。只今の御媒酌人の御言葉の中に、明かなる誤謬がありますので、一言訂正させて頂き、併而友人を代表して祝辭をのべたいのであります。御媒酌人は、新郎新婦共に某年某月某校を極めて優良なる成績で卒業云々と申されましたが、新婦の成績はいざしらず、新郎は決して優等生ではありませんでした。彼は他の人間が小、中、大學十六年の課程を以て終るべきことを、十八年を費した人間であります。即ち落第したのであります。しかも二度です。卒業の時も、たしかびりから六番だつたと記憶しますが、びりから六番の優等生といふものは、些かどうかと思ふのであります。尤もかく申す私も落第生でありまして、しかも三度落ちてゐるのであります。」

彼と卓を同じくした者は、一齊にわつといふ歡聲をあげて拍手した。

「しかしながら、彼が落第したといふ事は決して彼の人間價値を下落せしむる事ではない、彼は世に稀なる、――しむべき人間であります。彼は正直者である。しかもその頭に馬鹿といふ字をかぶせる程の正直者であ

る、彼は當節珍らしき人情にあつい人間であります。少し甘過るといふ非難をうけるに足る程の人情家であります。彼はあまり柔和な人相でない、彼はあまり愛嬌がない、彼は口が重くお世辭がいへない、綜合していへば、一寸つきの惡い人間であり升。しかしながら、いつたんつきあつた人間は彼の馬鹿正直と甘ちゃんの美點に醉はされて終生はなれぬ友情を持續するのであります。彼は三年間くすぶつてゐた大阪に於ても、吾々友人は申すに及ばず、會社の小使、下宿の女中、藝者、いづれも彼を友人として今も忘れず、折にふれ事につけ彼を思ひ出し、しのんでゐるのであります。かくの如き人物は當代極めて稀でありまして、かくの如き人物とかい老同穴友白髮の末迄も添ひとげられる新婦は、まことにおしあはせでありまして、羨望に堪へざるもの決して私のみではありません。諸君、もう一度乾杯して新夫婦の萬歳を叫ばうではありませんか。

「又彼は決して御媒酌人のおつしやるやうな文名赫々たる文士ではありません。彼の文學は有閑ブルジョアの餘技に過ぎず、常識的で、平俗で、詩がなくて、明日の文學にかゝはりのない……。これは私の如き素人の批評ではありません、文壇月評家の通說でありまして、極めて信頼すべき言說であり升。」

田原は小量の酒に醉ひ、又心から友人の結婚を祝して上機嫌だつた。少しも濁りのない、冴えたる音吐が、かゝる儀式の席のあたりまへからみて、甚しく脫線してゐる丈それ丈、不調和に響き流れた。客は、會の禮ぎを破壞するものとして最初の中こそ眉をひそめ舌うちし、

新郎新婦は、兩家の親戚たの、近しい人たの、美粧院のマダムたの助手だのに取圍まれて、エレベエタアで階下に下り、玄關へ出ると、レヴゥに出て來る男裝の女の子のやうな少年がうや／＼しくあけてくれた自動車の中へ納まつて、はじめてたつた二人きりになつた。まだ、がらすに顏をくつつけるやうにして何かいつてゐる人の顏が見えたが、車は滑に夜の街路へ走り出した。雨滴が、がらすに玉をちりばめた。運轉手はゐるにはゐるが、機械のやうに姿勢正しく、車の運轉に誠意を見せてゐた。二人の肩と肩とがぴつたりくつつき重たい島田に首筋をつかまれてゐる花嫁の横顏が、新婿の眼の前に眞白に据つてゐた。

たつた二人きりになつたと思ふと、わづらはしい儀式で……、かたくなつてゐたからだの筋肉が一時にゆるみ、ねむくなり、三田はうしろのくつしよんに全身を托して大きなあくびをした。何か馬鹿々々しい假面舞踏會から解放された氣のゆるみがあつた。ふいと誘はれたやうに、花嫁もあくびにおそはれたが、あわてゝ花束を持つたまゝの手をあげて、花の中に顏の半分をかくして、かみころしたが、かくしきれなかつたと思つて、三田の方に笑つて見せた。その動につれてバラや水仙やフリーヂヤの香よりも白粉か香水か、人工的な濃香な匂がむうつと鼻についた。三田は又あくびをして、輕く目をつぶつた。そのまゝ眠つてしまひさうな呑氣な氣持が、もろ／＼のぎしきにさいなまれたからだを占領してしまつた。

「田原さんて面白い方ですね」

それが花嫁から進んで口をきつた最初の言葉だつた。花婿にとつては三日前からの住居であり、花嫁にとつては今日がはじめての住居である安ふしんの和洋せつちうの家の前で自動車を下り、格子をあけ、女中に出迎へられて、茶の間へ入り、二人ともどこに坐つていゝかわからずに互に不適當な場所に坐つて、目のやり場に困つてゐたところだつた。

「あゝちつと面白過る位だけれど……」

どの程度の言葉使をなすべきか三田は迷つて、語尾を濁した。

田原は彼の古くからの

西村老人　その心境　息子に嫁が來る　息子死ぬ

同寄宿舍の者數人　十年後を期して一所に集まる約束をする。

阿部、高見澤、鈴木、後藤、久保田、

二人の現友が一人の女に戀し、互に相談の結果どちらを擇ぶかを女に一任する。甲を擇びて夫婦となる。乙いつ迄も結婚しない。その陰影が家庭にまとふ。

A、良家の息、
B、安藝妓、ぐみまる、岡ぼれ、口說けない、旦那が出來る、よくない、住みかへ、C男が出來る、田舍にゆく前にAに金をかりる、Cにくはれる。
B、Aのつとめ先にひん〴〵と手紙をよこす、
A、結婚する、無名の祝物來る、
B、田舍からたづねて來る、待合でAにあふ、遂に口說けないでかへる、

邪魔もの

佐伯恭太　主人
同みつ枝　妻
北原兵作　客
西村ふさ　女　二十歲
高久　修　男　二十八歲

主人と妻と客と話す。酒をのんでゐる。

主人　(話のつゞき)實際私共には子供がないものだから、財産て程のものはないけれど、若しもあの子がいやといはなければ、あとをついで貰ふ氣で居たんですよ。いゝ人間が見つかつたら養子にしようなんて、これで相當目を光らせてゐたつもりなんだが……(笑ふ)

妻　うちはをかしい程あの子を可愛がつてゐたんですからね。どうせあたしには子供はないし、こんなうちはつぶしたつて世間に響く事でもなし、一代限りだなんていつてたのが、ふうちやんが來てからつてものは、そりや變に慾が出ちまひましてね――

主人　慾つてやつあないだらう。

妻　さあ、慾つてつちやあをかしいかしれないけれど、まあ慾ですわ。先には、どうせ已は分家の身で、此家は已が先祖みたいなものなんだから、立てやうとつぶさうと勝手たなんていつてたのが、あの子が來てからつてものは、ほんとにをかしいんですけれど、御酒も半分にへらしましたし、いぜんのやうに夜ふかしもしなくなつたんですからねえ

主人　よせやい。いゝとしをして一升酒ものめないぢやあないか、

客　(これが一番醉つてゐる)いゝえ、それああたしが知つてゐる。佐伯さんはむかしは隨分偉かつたからなあ。

主人　よさうよ。今更むかしの話でもなからうぢやあないか。

客　いゝおやあないか、まだこれで茶のみ友たちといはれる程の年でもなし

主人　いゝや　茶のみともだちだよ、ふさ子なんざあこの叔父さんを舊弊どす可らざるものと思つてゐたんだからね、

客　無理はないさ、君の頑固には僕もてこずつた。

夫　妻

(一)夫丈夫なる時妻に自分の死後は誰とでも結婚しろといふ。妻も自分の死後夫は誰とでも結婚しろといふ。友達の誰彼を名ざす。(此の場に友人を出してもよし)

(二)夫、ほんとに病氣になる。しつとする。(此の場に友人を出してもよし)

慶應義塾々生のうたふうたのひとつ

うたへ　うたへ　うたへ
われらが若きよろこびを
われらが今日の嬉しさを
われらが集ふ樂しさを

慶應義塾はわれらが母校
獨立自尊は母校の教へ
そこに學べる幸ひを
うたへ　うたへ　うたへ
われらはほこる慶應義塾
祖國の文化を導きし
われらが母校の榮ある歴史
われらは愛す慶應義塾
進取確守を主義とする
その傳統の精神を
そこに學べる幸ひを
うたへ　うたへ　うたへ
われらがいだく純情を
われらがもてる健康を
われらが抱負の實現に

ひたすら進む今日の日を
正しく強くすこやかに
世界をわれらきづく日の
樂しき夢を
うたへ　うたへ　うたへ

慶應義塾の學生のうたふうたのひとつ

慶應義塾はわれらが母校
そこに我家をふるさとを
感ずるものはもろともに
正しく強くすこやかに
われらが世界をきづく日の
樂しき夢をはぐくまん
若き心と健康の
今日をこぞつて　歌へ歌へ歌へ

わかものゝ歌

蒼く澄たる大空を
仰ぎ見るだに血の燃ゆる
若き心と健康を
われらがもてるよろこびを
ともにうたはん聲高く

微風にゆらぐ草の葉の
さゝやきにさへ胸躍る
若き心と健康を
われらがもてるよろこびを
ともにうたはん　聲高く

たゝかふからはいざかたん

すめらみことのおほまへに
かちどきあげしわれらがほこり
今日又かちていやさらに
榮ある歴史の幾頁
若きこの日の感激の
樂しき記錄殘さん
たゝかふからはいざかたん
あく迄かたん　慶應　々々　々々

たゝかふからはいざ勝たん
わが大君にたまはりし
光榮の杯
いかでか敵にゆだぬべき
守りはかたくあくまでも　打棒をとらばあく迄も
頑張れ頑張れ　ＫＥＩＯ　打て打て打て打て　ＫＥＩＯ

創作覺書　三

甲乙丁戊と云つた連中共に旅行、旅舍にて誰が早く死ぬかといふ話をする、戊病氣の爲ひどく氣にする、突然丁チブスにて病死す、その後事の世話をする甲と丁の妻仲よくなる、心中する、甲のかきをきに後事を乙に託す、乙は曾て甲の妻に思はれこれを拒んだ事がある、それを甲はしつてゐて、惡魔的興味からかきをくのだ。乙その心持になやまされる。

初戀以來他の型の女には全然心が向かない
年上　その結婚をきゝ別れの宴に大にあばれる
その娘とめぐりあひ戀する。
その態度全く昔の母と同じ。

頭を撫で慰める、

田阪藤吉は怏々トシテ樂マナカツタ。場末ノ町デ荒物駄菓子を店に並べてゐる我家へ歸つても、息子と三人膳を並べて晩酌の一本を空にしても、彼の心は樂まなかつた。

「どうしたのさおとつさんは。せつかく今日は好きなものをこしらへといたのに、うまいともまづいともいつとくれないんだね」

もと〳〵女の方からもちかけた仲で、女房のおしげはむつつりの友吉をいつもじれつたく思ふたちだつた。

「どうしたつてのさ、まるで御通夜にでも行つたやうだよ、何か會社で面白くない事でもあつたのかい」

女房はしつつこく、いふのであつた。何かしら口を動かしてゐないと寂しいたちであつた。

「面白くない話といふわけではないがね」

藤吉は重苦しく飯を嚙みながら少しは話がわかつてくれるだらうと息子の方にぽつり〳〵話し出した。

「何しろお前、その頃はあの廣い原の眞中にたつた一軒しかなかつたもんだぜ。しかもそれが、異人の建てた西洋館でさ、東京名所の寫眞帖に大きく寫眞が出たものだ。それをお前、まだ壽命は七八十年もあるつていふのに、惜氣もなくたゝきこわしてしまふつていふんだから、もつたいないとも冥利につきた話で、

々イタニック沈沒。同船の夫婦、老夫、若婦、幼女兒。之を托されてボートに乘移り、漂ふ。日本につれ歸る。老ゆ。育つ。老夫、老婦たらんと思ふ。うちに若き男あらはれ、去る。
主人公は文學者、唯美的描寫崇拜論、プロレ、モラル派擡頭、とり殘さる。

能酒院呑與終光捨身居士

結婚、新婚旅行、ホテル、ホールの雜誌に新婚の記事あり、無暇ニテ歸ル、汁粉、盜難、指輪、喧嘩、嫉妬、姙娠、流産、子供なし、十年、子供生る

金持の子、母有閑マダム、姉妹同じ
反動的ピューリタン　職業婦人を妻に望む　看護婦、女中、賣子、オフィスガール

亭主藝術家グウタラ、理論ばかりいつてゐてうでがない。妻は最初夫に導かれたが市價を得る。段々へだたりが出來る。

父　老齡　母　若し　後妻でもよし　子供　幼稚園
父は死の遠からぬ年齡を意しきし溺愛す
母は將來の事を考へて嚴格、

幸福人

東北の農家の次三男　家出
家庭教師　訛が重厚に見せる　娘を貰ふ　娘は浮氣もの、娘は後に死ぬ、後妻若く美し、娘の爲に出世する、
實は無能、あまりに無能なる爲人は謙讓の美德と思ふ

女自ら死す
仲人の前でその良夫の不身持を後悔する、
女は仲人にほれてゐた。
仲人は良人の悲たんを救ふ意味でその事をいふ良夫の幸ふく何もなくなる。

男無賴放蕩にして、女を死なす

老齢となり女に×弄され死す

老詩人　女たちは、ことに若い女たちは、これから名を成さうとする男に心をひかれるかはりに、すでに名を成した男に心をひかれる。

その詩を愛する少女　詩を愛しやがてその人を愛しに來る。老人は最初子供扱ひにしてゐたが、ふと詩的情熱にかられてちぎる。老人は悔むけれど女は悔まない。老人うと〳〵しくなる。

若き男　そこに若い男あらはれてむすめといつしよになる。

社長　社内がムヤミに封建的官僚的に待遇するのが氣にくはない、

タイピスト　その空氣を破る　二人で野原にゆく

戸の隙からのぞく男　藤田式　小笠原×木　ムヤミにていねいなおじき　庶務主任

人生は氣樂にある　それは社長をやめる外にない

貝殻追放　風邪正月　萬年正月

明白に、昭和八年十二月二十四日から風邪を引き、正月二月、三月と完全には直り切らないで、今も時々寒

氣がし、うすい咳が咽喉にからみ、たまには咳も出て、氣持のよくない日がつゞく。今度の風邪は細く長く、直るかと思ふと又ぶりかへし、いつ迄もはつきりしないのが特徴だと、誰も彼もいふけれど、それにしても自分のは少々長過るやうだ。近年病氣らしい病氣をせず

東京にては文化を求め、新京にてはたゞ新知を求む　兩地かけ持ちの實業家

新婚、地方の女から手紙來る、　會社にも來る、妻にはその心持がわからない、

自由主義者　實業家　ヒユマニステイック

地歩を得た時は左翼旺トナル

之ニ倣ツタ施設ヲスルト官僚獨裁主義來ル

結局孤寂

母？・　姉？・

良家に嫁ス　身分違ヒニテ反對サル

妹？　兄弟？　息子？

職業婦人ト婚ス　身分違ト罵ラレシ者が今度ハ之ヲ卑ム

私は五十にして、既に人生に疲れて來た。今のまゝ勤めてゐれば、別段餘裕は無いけれども食ふ事には困らない。時々費ひ過ぎて家計費にも事缺く事もあるけれど、一時金を借りて、すませる途はある。しかし、いくら一生懸命に働いても、大金持になるあてはない。會社員の事だから、位階勳等には縁が無い。特に士農工商の順位ががはつきりしかけて來た現代に於ては、明治時代の如く町人で幅をきかせる事は望めない。うつかりすると斬捨御免に逢はないとも限らない。

後記

本卷は戲曲及短歌を收錄せるほか、最終回の配本たるに鑑み、之に雜纂及遺稿を加へて、一面補遺の役割を果さんことを期したものである。

戲曲に就いて――

明治四十五年慶應義塾大學理財科を卒業するに際し、提出論文が「劇場經營論」であつたやうに、作者は夙く演劇に志を寄せ、「貝殼追放」中にも之に關する論評鑑賞の多くを見出すことが出來る。而して戲曲の創作に至つても、處女作以來九篇の業績を殘してゐる。

「嵐」――明治四十四年十月號「スバル」所載。大正元年籾山書店刊「處女作」、大正十二年刊大阪毎日新聞社刊「明窓集」收錄。

校訂は最近の刊本を底本とし、掲載誌を原據として採つたが、その臺詞にカギをつけた體裁は、當時の發表樣式を偲ばせるものとして、復原を敢てしたものである。

「夢かたり評議員會」――明治四十五年一月號「スバル」所載。大正四年籾山書店刊「心つくし」收錄。

發表に當り作者が特に「對話」と註してはゐるが、假りにここに收めた。もとより架空的な諷刺作品ではあるが、當時永井荷風が主幹たりし「三田文學」が、谷崎潤一郎作「飈風」のため發賣禁止の厄に遭つた事實を、執筆の契機として擧げてよからう。なほ作者自身、後年に於ては、慶應義塾評議員の有力な一人であつた。

——校訂、體裁に就いての用意は「嵐」と同じ。

「いたづら」——明治四十五年七月號「三田文學」所載。大正元年籾山書店刊「處女作」、大正十二年大阪毎日新聞社刊「明窓集」收錄。

底本を「明窓集」に採り、「三田文學」を原據として體裁も之に從つた。

「良緣」——大正二年十一月號「三田文學」所載。大正四年籾山書店刊「心つくし」收錄。

刊本を以て底本とし、發表雜誌を原據としたが、第一幕を除いて二者には甚だしい異同がある。卽ち刊本に於ては、第二幕以後約二十餘個所の削除訂正があり、長きは二十四行に及ぶカットの外、第三幕終末の如きは全的な改竄が施されてゐる。これは藝術的效果を擧ぐるために、作者自身の手で行はれたことが明なので、特に刊本を尊重し、所載誌は從として照合するに止めた。なほこの作は、作者歸朝後の作でなくして、北米に留學中の所產であることを云ひ添へて置きたい。

「武士と町人と狼」——大正十五年六月號「三田文學」所載。昭和四年大岡山書店刊「月光集」收錄。

發表時には、題名の側に「お伽芝居」と註記されたもの。刊本を底本に揭載誌を原據として校訂。

この作は昭和十一年明治座一月興行で上場された。演出田島淳、舞臺裝置繁岡鑒一。武士を市川小太夫、町人を澤村田之助、茶店の亭主を梅田重朝が演じた。

「地下室」——大正十五年十一月號「三田文學」所載。昭和四年六岡山書店刊「月光集」收錄。

底本原據共に前例に依り校訂に從つた。

「律子と瑞枝」——昭和三年十月號「中央公論」所載。昭和四年大岡山書店刊「月光集」收錄。

刊本に據り、所載雜誌に訊した。この作品は發表間もなく昭和三年十一月廿七日夜、JOAKの愛宕山スタヂオから放送された。出演者、律子に喜多村緑郎、瑞枝が花柳章太郎。演出竝に解說水木京太。更に昭和九年十二月の創作座公演で上場。久保田万太郎演出、伊藤熹朔舞臺裝置。配役、律子は毛利菊枝、瑞枝は清川玉枝。

「隣同志」——昭和三年七月號、昭和四年一月號、昭和四年六月號「三田文學」所載。昭和四年大岡山書店刊「月光集」收錄。

一年に亙り一幕つつ分載された三幕物。第一幕の脫稿は昭和三年六月十日だが、作者は次の如き附記を加へて發表した。

此の戲曲は一幕以上の積りで書きはじめましたが、時間がないので一幕物のていさいにして發表しました。未練らしいが御斷りして置きます。

第二幕の脱稿は昭和三年十二月八日である。之にも左の附記を記した。

此の戯曲の第一幕は昭和三年七月の「三田文學」に出てゐます。第三幕目は遠からず發表の積りです。

昭和四年五月三日に完成した第三幕にも重ねて附記が添へられてある。

此の戯曲の序幕は昭和三年七月「三田文學」に、二幕目は昭和四年一月の同誌に出てゐます。

この作の校訂は底本を刊本に採り、第一幕は原稿に以降は掲載誌に原據を求めた。

「姉と妹」——昭和五年六、七、八、九、十月號「三田文學」所載。昭和十一年中央公論社刊「遺産」收錄。

五ケ月間連載を見た五幕物で、序幕は昭和五年五月七日に脱稿され、左の附記を添へて發表された。

この戯曲は一幕物ではないのですが、多忙の爲完成出來ませんでした。

爾後第二幕を六月八日、第三幕を七月七日第四幕を七月二十七日に終り、最後に第五幕を九月五日に完成したものである。

刊本を底本とし、全曲を原稿に據つて校合することが出來た。

短歌に就いて——

作者の文學的生涯はまづ詩歌に始り、年少にして短歌を詠み習つてゐたことは、その遺品の手帖等にも窺はれる。學生時代に新詩社の門に入り、與謝野寛、晶子に歌稿の批正を乞ひ作歌に精進してゐたのである。

「ひとりの歌」——明治四十五年渡米するに際し、明治三十五年以後四十三年までの作品を自選し、之を二冊の手帖に淸書して小泉信三に贈つたものである。未刊行とはいへ作者唯一の自選歌集たることと、更に作品が歌人として世に出た日に繫がる便宜上、獨立した一作品としてここに收めた。後日雜誌等に發表された作品も、重複を嫌はず其儘とし星印を附して示すことにした。

「歌」——刊行公表された作品を、年代順に輯錄した。「スバル」所載のもの最も多きは、作者が新詩社同人の俊英たりしことを語るものである。なほ「詠草」とあるは、阿部家近親の同好者達が、月次題詠を集めたもので、謄寫版に印刷して配布した分をここに採錄した。

「詠草」には終始本名の阿部章藏と署してあるが、その他の歌稿は大正以前はすべて阿部省三の名で發表された。うち「かへらぬこと」(五七三頁)及「ひとりの歌」(五八〇頁)には阿部省三とあるが、これは誤植に依るもので、遺藏の掲載誌を作者自らペンを以て訂正してゐる。

雜纂に就いて——

「海外消息」——本全集は作者平生の意見に從ひ、私生活を語る書簡を採錄せざることとしたので、ここには一度公表され、且作者の認容を經たと解すべきもののみを收めた。宛名の井川滋は當時の「三田文學」の編輯者である。

「紹介」――ここに收めた「鏡花全集」の廣告は、無署名で岩波版の內容見本に出たものであるが、さきの春陽堂版のための新聞廣告文は、「鏡花全集の記」(全集第十卷「貝殼追放」)に全文を錄してあるからここには省略した。

「慶應義塾應援歌」――明治末慶早野球仕合が紛擾のため中止された當時作られ、「戰はんかな時機到る」の歌と同じ曲節で唱はれたものである。

「年譜」――「鏡花年譜」は、春陽堂版の「鏡花全集」のために草されたもので、調査のメモ、鉛筆での下書、更にペンの下書を經て、愼重刻苦の末に成つた一文である。これは後「明治大正文學全集泉鏡花篇」に轉載されてゐる。

作者の「年譜」は同じ全集の「久保田万太郎・水上瀧太郎篇」のために自ら執筆したもの。

遺稿に就いて――

作者の歿後、その篋底に殘された手稿を整理してここに輯めた。年代的には明治末より三十餘年に亙り、手帖洋罫紙書簡箋原稿紙メモ用紙等に、ペン又は鉛筆を以て書かれた未完成の斷片である。

「ポオに關するノオト」――これは編者が假りに附した題名であるが、すべて中判のルウズ・リイフに橫書きされてゐる。初頭の傳記は R. H. Stoddard 及び George E. Woodberry が著述の輯錄と推定される。

“The Philosophy of Composition”は、Poe の同論文の摘要である。“The Poetical Principles”も Stoddard の要約であらう。“Eureka”はその序言の冒頭の飜譯である。――作者は倫敦滯在中、巽家での若い留學生達の集りでポオに就いての講演をした由傳へられるが、右の諸稿は明に外遊中のものである。

「春の旅」――その使用した中判罫紙に徴して、外遊中か又は歸朝直後のものと推定される。いづれにしても「英京雜記」(全集第六卷)以前の筆であらう。

「觀劇雜感」――歸朝直後、この題下に劇評を書き續くる意があり「久しぶりで芝居を見るの記」「無名會の『夜の潮』」(全集第六卷)を書かれた。本篇もその續稿と思はれる。帝國劇場で「桐一葉」を見ての起稿である。

「無題一」「無題二」――使用の原稿紙に依つて大正末期の執筆と推定される。

「都會悲劇」――昭和五六年頃の起稿ではないかと思はれる。由緒ある明治生命の舊社屋が、新館建築のため取毀されたのが、昭和五年だからである。なほこの篇の胚芽は本卷の「創作覺書三」中に見出される。

「貝殼追放」――昭和七年か八年の執筆で、「貝殼追放」とだけで別に、見出しはない。

「歌稿」――明治年間の「詠草」は、「短歌」の項に收むべきだつたかも知れない。或は逆に謄寫版印刷の「詠草」を、此處に入れるのが妥當かも知れないが、作者の手稿にして未刊行のものは遺稿として取扱ふ趣旨から、この序列を行つたものである。

爾余の歌稿は、殆んど全部小形のメモ用紙に記されたものの拾錄で、大約の年代を識別し得るに過ぎない。

――しかも發病後の悲壯な四首が、作者が殘した最後の作品たるを思ふとき、その短歌との深き因緣に感慨を禁じ得ない。

「創作覺書一」――「懷劒」は大學ノオト四頁に書かれ、裏面には講義筆記があつて、明かに明治四十四五年學生時代の起稿である。それを除いて最後の「同朋」まで、すべて Record と題した中判の手帖中に書かれたもので、留學中も座右にしてゐたものにちがひない。初期の小說作品の素材がノオトされてゐると同時に、外遊中に得たと覺しいメモをも收めてゐるからである。

「創作覺書二」――大正中期から昭和五六年までの落筆と推し得る斷片を收めた。次の「三」に於いても同樣に、メモ用紙や原稿用紙に、多くは鉛筆の走書なので、それが消えて判讀を不可能ならしめたものもある。慶應義塾の學生に與へんとして試みられた一聯の詩稿は、天覽野球の後として昭和五六年の作であらう。

「創作覺書三」――作者は身邊の多忙に阻まれて、晩年小說戲曲の筆を絕つてゐたが、しかもつねに創作衝動を感じてゐたことは、死後會社の事務卓の抽斗に見出した多くのメモに依つても明かである。ここには最近十年間の覺書と推し得るものを拾錄した。

なほ、短歌は作者の施した振假名のみに止めたが、この「遺稿」は指字假名遣ひを概ね原形の儘に殘した。更に手稿の取捨はもとより、判讀、筆寫、排列、校合等一切の責任は、擔當の編者一人が負ふべきものである。

本卷の校正には荻野忠治郎、大塚光幸兩君の助力を得たことを附記したい。（水木京太）

全集刊行後記

水上瀧太郎本名阿部章藏は、昭和十五年三月二十三日午後、その專務取締役として勤務してゐた明治生命保險會社本店の樓上に、腦溢血症を發して倒れ、深夜、死して青山南町五丁目の邸に還る。同二十六日葬儀を築地本願寺に營み、其夕落合火葬場に於て遺骸を荼毘に附し、遺骨は五月十日東京府下多摩墓地に埋葬せられた。

この通夜、葬儀、埋骨等の佛事の間に、水上瀧太郎全集刊行の事は、特に誰が發議するともなく、自然に友人後進の話題に上り、また自然に進行して、結局左記のものが其編纂委員として事に當ることになつた。

石坂洋次郎、西脇順三郎、鏑木清方、梶原可吉、久保田万太郎、小村雪岱、小島政二郎、星見薄、佐藤春夫、三宅正太郎、三宅周太郎、杉山平助

井汲清治、荻野忠治郎、和木清三郎、小泉信三、水木京太、平松幹夫(以上六名實行委員)

此等編纂委員は昭和十五年七月十五日銀座交詢社に會合して全集編纂の原則を議して定め、斯く定められた要項に基づいて實行委員が編纂校訂の實務に當ることになつた。

編纂上に最も重要な問題となつたのは、水上瀧太郎の作物を何の範圍まで此全集に收錄すべきかといふことであつた。

小說、戲曲、詩歌、評論、隨筆にして既に印刷公表せられたもの、或は作者自ら明に公表の意志を以て書いたものに就いては問題はない。問題は其以外のもの、即ち具體的にいへば、

(イ)日記、書簡その他公にする意志なき私記の類

(ロ)編纂者が假りに「會社物」と名づけた、明治生命保險會社社報への寄稿及び其他同社社員又は取締役の資格に於て起草した各種の文章

を如何にすべきかであつた。

評議の上(イ)は之を省き、(ロ)は集めて全集の一卷として採錄するに決定した。

日記、書簡の類を除いたのは、著者が此種の私記類の公表を好まぬ意志が明白であり、他人の全集の場合にでも、日記、書簡等の採錄に對して幾度か反對の意向を表示した事實が新しかつたからである。或は水上瀧太郎其人を知る上から言へば、此種の私記こそ却て貴重な資料であると謂へるかも知れない。委員中にも此意見を述べるものはあつたが、併し結局著者其人の意志を尊重することに歸着した。

「會社物」の採否に就いても議論があつた。「會社物」の中最も個人的特色の濃く現れてゐる「出張日記」だけを取つては如何との說も出たが、個人的特色の濃淡といつても程度の問題であり、差別は畢竟專斷に陷るからといふので、結局全部を一卷に收めることにした。著者を敬愛する明治生命の社員の間に、若しも「會社物」全部が全集に收められないといふ事なら、自分達の力で別に其丈けを單獨に刊行してでも之を保存して

置きたいといふ熱心な希望が表明されたことも、幾分は此決定を促す力となつた。

此外になほ問題となつたのは、著者のノォトに記された小說腹案の筋書若干である。其の中の或者は發展して後に發表作品として形を成し、或者は遂に成形に至らず、覺書の儘で終つてゐる。これをどう取扱ふかで少しく評議した。若しも著者が自ら公表する積りで書き、更に進んで印刷にまで至つたもののみを收錄し、其以外の私記一切を省くといふを原則とするならこの覺書も除かるべきであらう。しかし此の覺書は日記や書簡とは違つて、やがては人に示すべき作品の胚芽又は第一原形とも見られ得べきものである。此方角から見れば、人に示したくないと明言してゐた日記や書簡類と多少取扱ひを異にすべき理由があるやうに思はれる。結局、此覺書及び其に類する二三のものに對しては、原則の適用を寬かにして之を收錄することにした。

上記の如き順序を以て全集刊行の事業は進行した。卽ち六月五日、慶應義塾構內教職員クラブの一室を借りて設けた水上瀧太郎全集編纂所を開き、平松幹夫が此處に常勤して編纂校訂の外一切の庶務を掌り、十一月第一回配本として第四卷「大阪」及び「大阪の宿」を出して以來、時に遲速のあることを免れなかつたが、全體に於ては豫定の計畫の如く順次配本を續け、遂に今昭和十六年十一月本卷の刊行を以て其全部を完了することになつたのは、編纂委員一同の喜びに堪へない所である。

顧みれば、本全集の刊行は先づ岩波書店が時局による多大の困難にも拘らず之を引受けられたのを始め、王子製紙株式會社要路の人々が用紙の供給に、當時の事情の許す限りの便宜を圖られ、和田三造畫伯が特に

装幀を意匠せられ、多くの著者の友人が全集の普及紹介を援けられ、熱心なる多数の購讀者が絶えず編纂に就いて注意と激勵を與へられる等、遠近公私の人々からの好意に浴することは一方ならぬものであつた。今茲に刊行を了るに際し、編纂者としては此等の人々に對し、たゞ感謝の意を表するの充分ならぬことのみを惧れるのである。

昭和十六年十月

小　泉　信　三

東京府規格外許可　巳資紙規第一五四號

昭和十六年十一月二十五日印刷
昭和十六年十一月三十日發行

水上瀧太郎全集　八巻

會費参圓

著者　阿部章藏

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店
電話九段(33)一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

精興社印刷　長澤製本

落丁・亂丁等不完全な品がありましたら直接御申出願ひます　お取替致します





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03093 2065